

ISSN 0910-7282

大阪府立図書館紀要

第36号

2007年3月

Bulletin of Osaka Prefectural Library No. 36

大阪府立中之島図書館

大阪府立中央図書館

府立図書館紀要第 36 号の発刊にあたって

大阪府立中之島図書館長 鳴澤 成泰

昨年、実に 8 年ぶりに再刊されたが、今年も順調に発行することができた。これも関係者の努力と、執筆に当たった司書諸君、あるいは OB の皆さんの日頃の研鑽の賜物である。感謝をしたい。

図書館の業務については、図書館界の議論と一般的な感覚には相当にずれがあるように思う。一般の人はそれぞれの人が直接経験した図書館というものから得た実感により評価しているのではなかろうか。

幼い頃に図書館に親しんだ人はそこに自分の興味関心を満たしてくれる宝物のような存在を思い描いているかもしれない。学校の調べ物授業や仕事の調べ物など分からないことを調べにきて、分かった人と分からなかった人、というよりは十分な深みに到達できなかった人とでは図書館というものについての感覚は自ずと違う。

自分の持っている書籍や書店の書籍に比べはるかに大量で、探しやすいように整理されている様子を良く見れば、その価値は一目瞭然であるが、そのような状態は自ずと出来ているのが当然でそれが図書館であると思われている。

その陰で日頃から司書が努力して収集し、整理していること、さらに時代の流れや興味関心の移ろいをカウンター業務やレファレンスの相談を受けることにより肌身で感じ、より良いサービスを提供しようと日々研鑽し、学習していること、使いやすい情報シートを作成し提供していることを認識し評価する人はおそらくごく少数である。

以心伝心という言葉があるが、それは誤解を生むだけだ。積極的に説明し、理解を求めなければ正当な評価は得られない。時間空間を超えて情報を伝えるには言葉にしなければ伝わらない。そして文字という形で書きとめなければ知識の高度化は望み得ない。紀要はそういう意味では図書館としてまとめ公表する図書として重要な存在である。

今回掲載されている古文書の翻刻などは専門的分野ではあるが、所蔵する古文書を誰でも読めるようにする地道な努力の現れである。これらが文字となり出版物となることにより、積み重ねられ、時を経て大きな成果を生み出すこととなる。また新たな取り組みをまとめ評価したものもある。これらは同様の業務を進めようとする人々に参考になることだろう。

紀要は図書館司書が業務の傍ら、取得した知識や整理された資料を完成された形ではないかもしれないが、書留め広く公表しようとするものである。前号からインターネットで公表しており、一部の専門機関だけでなく広く閲覧できるようになった。図書館に関心を持つ方も持たない方もぜひ図書館の司書が行っている活動の一端をこの書物の中に見ていただきたい。そしてご意見をいただければ幸いである。

「大阪府立図書館紀要 36号」

府立図書館紀要第36号の発刊にあたって 鳴澤 成泰
(中之島図書館長)

目 次

曾侯乙墓を訪ねて	鳴澤 成泰	(3)
行政支援に関する文献の紹介	日置 将之	(16)
おもちゃ絵画家・人魚洞文庫主人川崎巨泉のおもちゃ絵展とその画業の 周辺について	森田 俊雄	(23)
「子どもの本を読む会」を中心とした大阪府立図書館児童サービス関連 年表	子どもの本を読む会 36年史記念誌編集委員会	(74)
中之島図書館蔵 一枚摺仮目録	佐藤 敏江	(110)
翻刻 [畿内巡り歌日記]	大北 智子 高萩 綾子 山田 瑞穂 小笠原弘之 佐藤 敏江	(143)
翻刻 『浪華奇談』怪異之部	田野 登	(156)

編集後記

曾侯乙墓を訪ねて

鳴澤 成泰(中之島図書館)

はじめに

大阪府立中之島図書館は1904年に開館以来今年で103年目を迎える。現在は総合図書館の地位は大阪府立中央図書館に譲り、大阪資料・古典籍とビジネス支援に資源を集中してサービスを行っている。大阪資料・古典籍については図書館を作り上げてきた諸先輩あるいは様々な貴重な書籍類を寄贈・寄託いただいた多くの方々の力で築き上げられてきたコレクションをベースとし、ビジネス支援については所在地の立地とこれまで積み上げてきたサービスを磨き上げて進化させたものとなっている。草創期から多くの図書が寄贈されたこと、その分野も文学、歴史から科学技術、自然科学など幅広く収集され、利用されたことは創立100周年にあたり発行された『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』に詳しい。創立前後に購入した図書であってもすでに100年を経過するという貴重なストックを持っているが、中でも貴重書として指定し、保存している和漢書は8500点にのぼる。これらの図書については整理し、まとまっていたものについてはその名を冠した文庫の目録として、漢籍については漢籍目録といった形で整理し、他の図書館や大学に配布し、利用できるようにしているが、コンピュータで検索できるようにする遡及入力についてはこれからの段階である。できるだけいろいろな人にその存在を知ってもらいたいということから特定のテーマのもとで展示会を行っているが、その膨大な量からしてなかなか日暮れて道遠しの感がある。この膨大なストックに目を向けてもらいもっと多くの研究者や興味を持つ人に見てもらいたいというのは中之島図書館に勤務するものの共通の願いである。

今回曾侯乙墓^{そうこういっぼ}の編鐘について何か書きたいと内部で話をしていたところ、貴重書の中に漢籍で編鐘を記載したものがあるとのことであった。本論に入る前にその内容を若干紹介しておきたい。

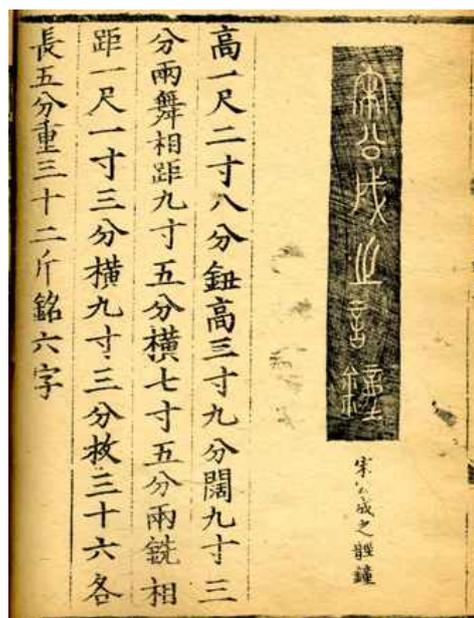
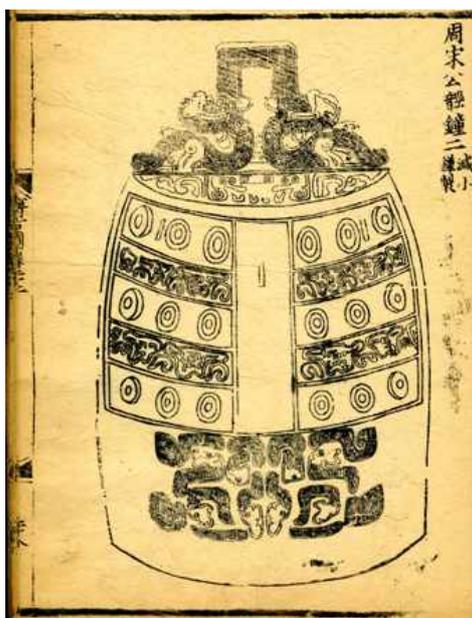
わが国においては青銅器として発掘されるのは古い時代のものとしては銅鐸、銅鏡、銅矛など種類に限られる。銅鐸はわが国で作られたもので楽器かとも言われているがその用途はあまりはっきりしていない。銅鏡、銅矛については邪馬台国論争で素材にとりあげられるが、良品は中国や朝鮮半島からもたらされたものであるとされており、古墳の副葬品

として出土する例が多いので、研究者の層も薄いと聞いている。これに対し、中国では膨大な量が発掘されているほか、伝世品として歴代朝廷の盛衰の中で政権の正当性を示す政治的なシンボルとして収集され、引き継がれて今日に残されているものも大量にある。中之島図書館は開館以来漢籍の収集に力を注いできたが、今回紹介する『至大重修宣和博古図録』は開館前の1904年1月10日受け入れで甲雑1 No.8654で登録されている全30巻の大判の漢籍である。木版刷りでその巻22から鐘の図とその解説の部分を示した。この本は田中治兵衛という人から150円で受け入れたという記録が残っている。現在中之島図書館所蔵の貴重本である『正平版論語』初刻本4冊が寄贈された際価格を問う館長の今井貫一に寄贈者の鹿田静七は言下に「金100円です」と答え、座中の人々の度肝を抜いたというエピソードが中之島百年の本の中に紹介されている。150円といえばそれをさらに上回るもので、金額的にも正に貴重なものであると言えよう。

『至大重修宣和博古図録』とは『図説中国印刷史』の記述によれば中国の元代の至大年間(1308~11)に杭州路で刊行された書物で、その元となったのは北宋時代に編纂された。

「宣和殿に収集されていた古銅器の図録。大観元年(1107)成り、宣和5年(1123)重修。『博古図』ともよばれる。宣和殿所蔵の銅器839件を20類に分け、類毎に、総説、銅器毎に、模写の図形・銘識・大小・容量・重さ等を考証記述する。金石学の古典的著述とされる。」

(『中国史籍解題辞典』)ものである。なお宣和殿は北宋時代の宮殿で北宋の首都開封にあ



『至大重修宣和博古図録』 第23編より

った。開封は現在では河南省東部の小さい都市となっている。黄河中流の南岸に位置し

ている。原本をご覧になりたい方についてはぜひ大阪資料・古典籍室に申し出ていただきたい。このへんで本題にもどることとする。

曾侯乙墓については、そこから出土したいくつもの音階の異なる鐘を何段にも並べ、宮廷での演奏に使われた編鐘が世界的に有名で、1992年には東京国立博物館で「曾侯乙墓出土文化財展」が開催され、1998年には東京国立博物館で「漆で描いた神秘の世界展」が開催されるなど、わが国にもその出土文物が紹介されている。インターネットで曾侯乙墓をグーグルにより検索すると648件。そのうち日本語の検索では552件であった（2007年3月16日検索）。今回、2006年12月全国埋蔵文化財法人連絡協議会の研修旅行に同行する機会を得、曾侯乙墓を訪れた。出土した文物を収蔵展示する湖北省博物館も訪れ、出土時の映像を記録したDVDや編鐘などの古楽器演奏を収録したCD、主な出土物の図録を購入した。現地で墓の跡を目の当たりにし、現物を博物館で見て、強い感動を覚えた。せっかくの資料なので、少し整理して紹介をしておきたくなった。軽い読み物として一読願えれば幸いである。なお資料については図書館に入れておいたので、興味ある方についてはご覧いただきたい。

曾侯乙墓の発掘現場

湖北省随州市にその現場は存在する。湖北省の省都武漢市からひたすら車で走る。高速道路が発達をして中国も交通の便が飛躍的に良くなったが、走ること3時間余り、インターチェンジからおりて地方の幹線道路に入り、随州市の市街地から北西部にある遺跡にむけバスは横道へ入る。典型的な田舎道。舗装も無くでこぼこ。現地のガイドは乗っているが、どうやら道を間違えたいらしい。そこでもう一度大きな通りに出る。すると分かりにくいところに曾侯乙墓の行き先表示の看板があった。そこから入っていく。やはり道は狭く、車のすれ違いもむづかしい。中国人民解放軍の野戦部隊教育部隊の表示があり、若い男女が教練の練習をしている。ちょっと場違いではと思っていると、門を開けて入れてくれた。実は曾侯乙墓はその基地の中にあるのである。その中に発掘現場があり、開けられた墓そのものを建物で覆い、遺物を建物の回廊などに展示をして博物館としている。しばらくするとたくさんの観光客がバスで来たので、これは観光地となっているのだと認識できた。写真撮影もOKということのでめずらしいところだと思ったが、よく聞いてみると遺物はすべてレプリカで本物は湖北省の博物館にあるという。

発見されたのは1977年の秋のことであった。その地に駐屯をしていた中国人民解放軍

が兵營の拡張工事をするときに葺き石に突き当たり遺跡であるらしいということがわかり、専門家の鑑定でそこには春秋戦国時代の君主の大型墓群があり、極めて重要なものである可能性が高いという結果が出た。そこで 1978 年 5 月、国家文物局の許可を得て、湖北省博物館が中心となり発掘調査を行った。DVD の字幕では次のように説明している。

「この墓は大型の岩坑竪穴木槨墓で深さは 13m あり、平面は不規則な多辺形を呈し方向は真南に向き東西の長さは 21m、南北の幅は 15.5m で総面積は 220 m²である。穴底には巨大な木槨が置かれ、槨の表面及び周りに木炭を充填して木炭層に青膏泥、黄褐土で覆われていた。そして槨の表面より厚さ 2.6m の固土層に石板が一面に敷かれていた。木槨は 171 本の巨大な長い角材で積み重ねた形で出来ている。槨室は東、中、西、北の 4 室に分かれ、規模の大きさはこれまでに発見されたわが国の同時代の墓の中でまれにしか見られないものである。東室には墓主の二重棺が置かれ、その側に陪葬棺が 8 基あり、殉犬棺 1 基並びに墓主が生前の武士の使った青銅戈も置かれ、その青銅戈には「曾侯乙之寢戈」という銘文が鑄こまれていた。西室には陪葬棺が 13 基置かれていた。鑑定によると主棺内の人物は 45 歳前後の男性で殉死者棺内人骨は 13 歳から 25 歳ぐらいの若い女子であった。中室には壮観な青銅の編鐘と石の編磬などの楽器が架上に架け並べられ九鼎八簋などの青銅礼器及び道具が南側に組を組んだ形か或いは層を成した形で配置されていた。ここは鳴鐘鼎食の正殿である。北室には、兵器、車馬具及び竹簡などが置かれていた。墓葬は「資厚き蔵多し器用いて人生が如き」であった。統計によるとこの墓から出土した文物は 10000 余点あり中に青銅礼器と道具など 134 点、車馬具兵器など 4700 余点、漆器 230 点、楽器 125 点、竹簡 240 枚、墨書篆字 6996 字あり、それに数多くの金器と玉器もある。著名な編鐘、尊盤及び九鼎八簋などが世界にも注目され、礼器、楽器、車馬兵器、生活道具、及び竹簡などあるべきものはすべてあると言える。青銅、金、玉、漆、木、麻、シルクなどありえないものはないと言える。これはわが国で東周考古における空前の大発見である。わが国では東周考古に関する発見された諸国のお墓は、数え切れないほど多いが、墓主の身分が判明し、年代も明確でクラスが高く、完璧に保存されたものが少ない。このお墓のような規模の大きい文物が多い、よく保存されて、そして科学的な発掘によって記録資料も完備されているのは実に有難いものである。わが国の東周考古特に諸侯墓葬制の研究に極めて典型的な実例を提供し、春秋戦国時代の墓葬の時代区分に新しい指標を出していたと言える。墓内から出土した器物の大多数は銘文が鑄こまれ、中に曾侯乙所用と記していた銘文は 208 箇所もある。この楚王罇鐘は楚の恵王が在位 56 年目に曾侯乙に贈った祭品

で、上に 31 字の銘文が鑄こまれ、紀元前 433 年に楚恵王が曾侯乙の逝去した訃報を得て、特別に作った罇鐘を曾国に送り曾侯乙を祭った事件を記載したのである。この罇鐘は墓主の身分判明及び墓の下葬年代を判明するために確実な依拠を提供した。この墓の下葬年代は戦国（紀元前 475～221 年）早期と鑑定され、今まで 2400 余年もある。

墓主の曾侯乙は戦国早期にある諸侯国の国君で、曾は国名、侯は爵位、乙は名字である。

曾国は随国である。周の時代にある諸侯国で姬という姓は王室と同姓である。一つの国はなぜ二つの名前があるのか、曾国は随国であるかと研究者達も疑問を持っていた。後の研究を経て文献の記載に随はあるが、曾は無い。ところが、出土した器物に鑄こまれた銘文に曾はあるが隋はない。そしてこの諸侯の領地は互いに一致していることが発見されたので曾国は随国であることを認められた。」

記述中東漢とは日本では前漢、西漢とは日本では後漢と称している。中国における表現は都が東から西への移動したことから名付けられている。

まるでタイムカプセルのよう

この遺跡のすごいところはまったく無傷で発掘されたところである。その理由はいくつか考えられる。普通古墳の例をみても墓の主体部に通じる羨道があるものだが、この場合は箱のように巨大な木材が穴の中に組み込まれ、そこに宮殿の様を移したような形で棺や器物が配置されている。そこに木を配置し、壁の木を組みその上で棺や器物を吊り下げて下ろしたらしい。それが証拠におろしたときにまっすぐに降りずに傾いたままになっている棺がある。巨大な二重棺であるため、修正はできなかったのであろう。そしてすべて入れてからふたのように巨大な木材が並べられ、その上に木炭層、青膏泥、黄褐土の層があり、塗りこめられたような形となっている。そしてその上に固い土の層を敷き、最後に進入を固く拒むかのように大きな石板が一面に敷き詰められていた。そして青銅器が錆びることなく美しく残されており、漆器や竹簡も良好な保存状態であったのは水で満たされていたためである。どうも築造してそう遠くない時期に地下水で満たされたようである。場所的にも丘の上にあるものの小山があるわけでもなく掘り込み式であるため墓泥棒の目にも留まらず、忘れ去られたものであろう。

墓には 13 基の陪葬棺が置かれていた。時代を遡ること殷の時代には生贄の時代があり、その残虐さに反発をして礼を重んじる周が出来たと言われている。その周も乱れ、世は戦国時代。礼は衣服、祭りのしきたりなどすべてにわたって厳しく規制されていたという。

この墓から最高の礼器として扱われている鼎が 9 基出てきている。9 基というのは天子のみが使える数であるとされ、身分的には数段落ちる侯でありながら 9 基埋納したということは戦国の世の乱れた秩序を如実に表すものであると言われる。そのような中で、経済力をつけた諸侯の王であるである曾侯乙は、この墓の中に自らの生前の生活があつてもそのまま続くことを願ったのであろう。墓内から出土した器物の大多数には銘文が鋳込まれ、中に「曾侯乙所用」と記していた銘文は 208 箇所もある。多くの金製品や玉製品に囲まれ、鼎などを使って食事し、編鐘などで音楽を聴いていたのであろう。その現実の姿がそのまま残されていた。現代的感覚からは無残などと思われる陪葬された女性達は楽器の演奏家や舞踊家であったと考えられている。棺や編鐘の架台に赤い漆で描かれた模様は楽器を演奏している人の姿が模式的に示されている。その人数と陪葬者の数が一致するようである。

編鐘の一部が土中から出土した例は多いが、最も発達した形のフルセットが無傷のきわめてよい状態で出土したのは初めてのことであるという。さらにそれぞれの鐘には音に関する記述があつたが、そこに他の国の音の表記に相当する記述があつた。中国は広い。それぞれの地域で独自に発展した文化が一つの帝国として統一されていく前段階で、違う国で使われている音の表記に関する文化の対照表のようなものが作られていたのである。当時の記録手段である竹を削って文字を墨で書いた竹簡も多く出てきている。この竹簡はあわせて 240 本、墓の北室から出土し、兵器、皮甲冑など同一の場所に置かれていた。もともと縄で一連のものとして編まれていたらしいが、出土時には朽ちていてばらばらになっていた。長さは 72~75cm、幅 1cm くらいで編み繫いだものに墨で字が書かれていた。篆字は全部で 6696 字。筆跡は殆ど明晰に判別することが出来、字体は先に発見された戦国の楚簡（楚の国の竹簡）と同様のものではあつたが、それまで発見されたものと比べると最も時代が早く、竹簡の数も文字の数も一番多かつた。内容は葬儀に関する車、馬、兵器と各種の贈り物の内容を記録したものであるという。

紙は中国の偉大な発明である。後漢の蔡倫が西暦 105 年に発明したとされているが、前漢時代の遺跡から紙が発見されていることから、紙を改良したものであると言われている。いずれにしても戦国時代に紙はない。

古代の楽器はどのような音楽を奏でていたのだろうか、常々思っていた。正倉院御物のように奈良時代からの楽器など伝来のものが伝承していく過程で楽譜も書かれて受け継がれていくのか、むしろ口伝で伝承していくのか、ともかくも西洋音楽とはかなり違う面があるのだろうかと思っていた。インターネットの検索で古楽器の楽譜を検索すると 1900

年に敦煌莫高窟から発掘された西暦 933 年以前の、唐代の音楽の楽譜が載っていた。ちょっとみたところ文章のようで、数字と記号が書かれている。どのように読むのかよくはわからないが、情報として紙に定着して残されたものが、古の音楽を再現させるのである。曾侯乙墓出土の楽器も、きつと綴られた竹簡に多くの楽曲が書かれていたに違いない。

現物の迫力はやはりすごい

翌日武漢市内の湖北省博物館で曾侯乙墓の出土品を一堂に集めた展示を見た。極めて精巧なつくりの青銅器や玉器を見つめていると、2400 年も前にどのようにしてそのようなものを作ることができたのか。不思議な思いにかられると同時に人間の力のすごさを思い知る。精巧に磨き上げられた玉器。穴も真円で硬い表面に精巧に彫刻されている。細い線がびっしりと掘り込まれているがそれがどのようにしてつくられたのか。多分石英砂を使って時間をかけて磨いたのだらうという説明があったが、現代でも容易なことでは出来ないようなすばらしいものだ。青銅器でも実に細かい彫りを蠟でかたどる失蠟法という方法で作られている。この方法は最近再現されたらしいが、現代の技術をもってしても非常に難しい高度な技術であるらしい。大きさも半端ではない。最大のものは青銅の酒器である大尊缶とよばれる甕のような入れ物で高さ 1.26m、胴の直径は 1m、重さ 327.5kg もある。ゆがみも無くすばらしいものだ。

私は 20 年ほど前、建て替え前の上海博物館で大きな青銅器をみて感銘を受けたことがある。それを上回るすばらしい青銅器が大量にフルセットで展示されているさまは、当時の繁栄を物語る。

各種の武器も同時に埋葬されていた。実用的な武器、その中には文献でのみ知られ、現物はわからなかったものがこの発掘結果から実物がわかったものがある。はらわたをえぐる笏という武器ということであったが、戦争に明け暮れるその様が思い浮かぶ。

たまたま同じ博物館の中に車馬坑（戦国時代の墓に付属して戦争に使われた馬車が埋葬されている穴）から切り取ってきた遺物群が展示されていた。高速道路を建設するに際していくつか存在した遺跡の中の一番外側で、つぶさなければならなくなった部分をもってきたということであった。現在も保存作業を継続中という話に驚くが、発掘途中の状態です。車馬が出ているものである。戦闘隊形になっていて中央に 6 頭立て、その両翼に 4 頭立て、さらにその外側に何列にもわたって 2 頭立ての馬車が並ぶ。同じく戦国時代のものでその当時に今の車輪と同じような構造の車輪が覗いている。人の乗る部分も出てきており、馬

車の両側にはきちんと横たわった馬の死骸。一体なぜそんな大軍団を死に行く王にささげたのか。国力の源である軍の勢力をそぐような行為をなぜ行ったのか。

王の死に際し、多くの家臣が殉死し、国力が現実落ちてしまったという話もある。それを反省して秦の兵馬俑坑のような形になったようだが、人間は権力の前に不思議な判断をするものである。

青銅器生産を支えた成熟社会

2400年前の日本はといえば、弥生時代の早期に相当する。その頃農業により富の蓄積が始まり、社会的な集団もできてきている。まだ土器を使用している時代で、青銅器が大陸から入ってくるのは弥生時代前期末の紀元前1～2世紀のこと。武器として導入されたと見られている。中国では稲作が始まったのは7000年前とされており、歴史の隔たりは大きい。

中国における青銅器の歴史はウィキペディアの青銅器の歴史の項によると紀元前2000年頃にはすでに使用されていたが、この曾侯乙墓の作られた戦国時代は質量ともに充実した時代である。当時原料となる銅や錫は採れる場所が限られているため、大規模に生産され流通していた。銅の採掘場としては同じ湖北省黄山市の南西25kmのところにある大冶県の銅緑山遺跡が有名である。大冶という名が示すように、現在も鉄鋼石や銅鉱石の採掘場として大規模な露天掘りの鉱山として運営されているが、そこに春秋時代、戦国時代から漢代までの坑道が発見されている。春秋時代の坑道は深さが20から30mで坑道の幅は60cm四方ぐらいと非常に狭い。まず縦坑を掘り、そこで鉱石を見つけると、その鉱脈を追って横に掘るという方法をとっていた。それが漢代の坑道になると深さが40から50mで坑道の幅は80cm四方となり、太い木で補強されるようになる。採掘場の近くには精錬をする窯の跡が多数残されている。木炭と鉱石を交互に入れ、ふいごで空気を入れ温度を上げて還元し、銅を引き出した。産物は粗銅として銅の塊の形として運搬したようである。実際に大冶湖という湖の水中から運搬時に落とされたものと見られる1.5gの丸い銅錠とよばれる銅塊が発見されている。船着場であったと推定される場所である。付近には鑄造された場所の形跡はなく、実際に作られる場所で合金作りと鑄造が行われたと考えられている。中国の広大な地に群雄が割拠し、争いを繰り返したが、その材料となる様々なものが大規模に流通した高度に発達した社会であったということだろう。

権威の象徴としての楽器

曾侯乙墓の価値は、何と云っても楽器であろう。権力の象徴であったとも言われるが、戦乱に明け暮れる戦国時代において、平和な時代の到来を希求したのであろうこの墓の主の思いを大切にしたい。最後に先に述べた部分との重複もあるが、曾侯乙墓文物珍賞の楽器の部分の解説文（程麗臻氏）から抜粋してその概要を説明しておこう。

「曾侯乙墓から出土した楽器には、鐘、磬、瑟、琴、笙、簫、篪の計八種、125 件があり、中国音楽史研究の上での貴重な資料となっている。

篪は、文献にもその記載がみられるもので、墓中から出土したのは 12 件、形は竹笛に似ている。篪の表面には五個の指穴と一つの吹口があり、音色は簫に比べ更に柔らかく、優雅である。此所より発見されたものは、これまで発見された最古のものである。

排簫は、墓中より 2 件出土し、ともに十三本の長さの不揃いな竹管を排列して出来ている。形は片翼形、出土時にもなお八種類の異なる音階を吹きならすことが出来た。

笙は、墓中より 6 件出土し、12 管、14 管、18 管の三種のものに分類出来る。笙笛内部の竹製の舌は大小様々であるが、精細に作られ、舌と本体との間には、間髪程の隙間しか無い。

五弦琴は、棒状の形態で、先秦の墓葬中には殆ど見られないものであり、琴身には人物、動物等の美しい模様が描かれている。学者の研究によって、これは編鐘を調律する音階標準器「均鐘」であることが分かった。

琴は、墓中から 12 件出土し、共に二十五弦のものである。瑟碼は 1358 枚、瑟身にはそれぞれ漆によって絵が描かれ。瑟尾には、透かし彫りの龍蛇の附飾がなされ、きわめて精美なものとなっている。

又、出土品には他に、建鼓、懸鼓、柄鼓があり、その中でも建鼓は現在まで発見された同種のものうち、最古のものであり、高さ 3.2 メートルの丸太に鼓腔があげられ、青銅製の鼓座の上に垂直に置かれている。

編磬は、あわせて 32 件の磬塊から成り、二段に分けて掛けられ、音域は三オクターブ、清明な音質である。磬架は二つの青銅製の首の長い怪獣を台座としている。」

ここで編磬とは石で出来ており、形はへの字型できれいに磨かれている。澄んだ音がする鉄琴のような感じの楽器である。

「曾侯乙墓の編鐘はあわせて 65 件、その内には、楚王の罇鐘一件が含まれる。出土時には、三層八組に分けられ、曲尺型の銅と木を組み合わせて作られた鐘架上に掛けられてい

た。上層の鈕鐘は 19 件、高澄な音質。中層の甬鐘は 33 件、主旋律を演奏するのに用いられ、下層の甬鐘は 12 件、伴奏に用いられる。出土された演奏用具は、装飾の施された 6 件の T 字形の木槌と、2 件の木棒である。鐘本体、鐘架掛け鉤には、象眼によって銘文 3755 字が書かれ、古代音楽研究の重要な資料となっている。編鐘の音域は広く、低音から高音まで編くカバーし、古今東西の楽曲を演奏することが出来る。曾侯乙墓の編鐘の突出した特徴は、「一鐘双音（一つの鐘から二つの音が出ること）」である。各鐘の正面部と側面部では、それぞれ三度音階が異なる音が出る。この双音は瓦を合わせた形の鐘体によって生み出されるもの、この「一鐘双音」は古代技術者の非常に大きな発明であると言える。

曾侯乙墓編鐘の工芸技術は極めて高く、先秦青銅鑄造技術の集大成である、渾鑄、分鑄等の技術、又装飾上では円彫（立体彫り）、浮彫（透かし彫り）、陰刻（掘り込み）等の技術が用いられている。

曾侯乙墓から出土した楽器は、その種類の広範さ、数量の多く、製作の精微さ、保存状態の良さから見て、中国考古史上、極めて稀なものであると言える。」

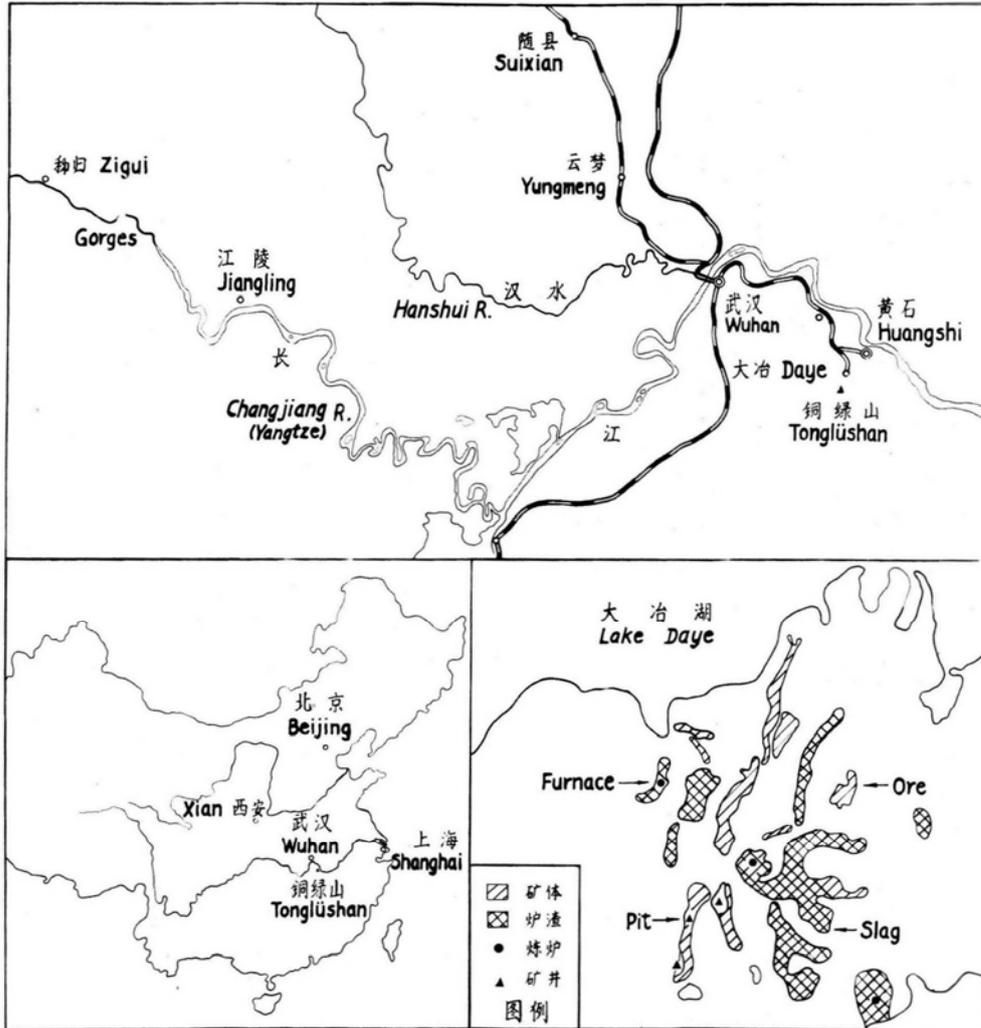
多くの墓の中から編鐘などは多く発見されているが、副葬品として埋葬されているため、朽ちてばらばらになっている場合が殆どで保存状態が良くない。この曾侯乙墓のように本の少し前まで演奏されていたように完全な形で見つかったものはない。復元された楽器の演奏を聴いていると現代の中国の騒々しい音楽とは正に隔世の感があるゆったりとした音楽で心休まる感じがする。はるか昔の人間が作り出した文字と音楽、そのすばらしい遺産に驚きを禁じえない。

参考資料

- 『至大重修宣和博古図録』 至大年間(1308～11)刊
- 『図説中国印刷史』 米山寅太郎著 汲古選書 40 汲古書院 2005
- 『中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ』中之島百年—大阪府立図書館のあゆみ編集委員会編集 大阪府立中之島図書館百周年記念事業実行委員会 2004
- 『中国史籍解題辞典』神田信夫、山根幸夫共編 燎原書店 1989
- 『曾侯乙墓文物珍賞』 湖北省博物館編 湖北美術出版社 1995
- 『銅緑山—中國古礦冶遺址』 湖北省黄石市博物館、中国金属学会出版委員会、北京鋼鉄学院冶金史組 編 文物出版社 1980
- 『曾侯乙墓』(DVD) 湖北省博物館監制 九通電子音像出版社

『千古絶響』（CD） 湖北省博物館、中國唱片總公司録制 中國唱片總公司出版 1989
中華芸能部ホームページ <http://www.chugei.com/>

銅緑山遺跡の地理的位置図（出展：銅緑山－中國古礦冶遺



曾侯乙墓出土の編鐘（湖北省博物館）



車馬坑の切り取り展示・二頭立ての馬
車と馬（湖北省博物館）



敦煌楽譜（中華芸能部ホームページから転載）



行政支援に関する文献の紹介

日置 将之（中央図書館）

1. はじめに

大阪府立図書館では、2006（平成 18）年 4 月より政策立案支援サービス（愛称：P^{ビ・サポート}-support）⁽¹⁾をスタートさせた。このサービスは、府職員や府議会議員の政策決定や行政事務の遂行に必要な資料・情報を提供するもので、一般的には行政支援（サービス）と呼ばれているものである⁽²⁾。サービスがスタートしてから間もなく 1 年となるが、この間、複数の図書館から取り組み内容に関する問い合わせを受けた。これは、本格的に行政支援を開始しようと考えている図書館が増えていることの証左であろう。

実際に行政支援を開始するにあたっては、サービス構築のためのモデルとなる先行実施館の情報が重要となってくる。大阪府立図書館の場合も、準備段階には参考となる先行実施館の情報を集めるため、関係文献の収集を行っている。しかし、日野市の市政図書室や横浜市立中央図書館といった、先駆的な取り組みを紹介した文献は多数あるものの、その他の図書館に関するものは思いのほか少なく、幅広い文献の収集にはそれなりの労力が必要であった。

そこで本稿では、行政支援の準備を進めている図書館の参考となるよう、これまでに収集した文献を紹介する。なお、本稿では、行政支援やそれに類する名称を明示していない場合でも、自治体の職員や議員にサービスを提供している取り組みすべてを行政支援とみなし、それらに言及している文献を取り上げている。

2. 行政支援に言及している報告書等の文書

2.1 文部科学省関係の文書

文部科学省による文書では、図書館法第 18 条に基づく文部科学大臣の告示である、『公立図書館の設置および運営上の望ましい基準』（2001 年 7 月）で行政支援に言及している。この基準では、総則の「(4) 資料及び情報の収集、提供等」の部分で、「地方公共団体の政策決定や行政事務に必要な資料及び情報を積極的に収集し、的確に提供するよう努めるものとする。」と規定しており、行政支援を公立図書館の業務として明確に位置づけている⁽³⁾。

また、文部科学省生涯学習政策局参事官（学習情報政策担当）付の委託により設置された「図

書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会」による報告書、『地域の情報ハブとしての図書館』（2005年1月）でも、行政支援に言及している⁽⁴⁾。この報告書では、地域課題の解決支援として「②行政情報提供」が挙げられており、「地方の行政や議会の政策立案支援と住民の政策立案過程への参加、及び、住民の生活課題にかかる行政情報の総合的提供への需要が高まっている。」（p.6）としている。また、公共図書館に期待される取組課題の一つとしても行政情報提供が挙げられている（p.36-37）。

最近のものでは、文部科学省生涯学習政策局長により設置された「これからの図書館の在り方検討協力者会議」による報告書、『これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして－』（2006年3月）でも行政支援を取り上げている⁽⁵⁾。この報告書では、「2. これからの図書館サービスに求められる新たな視点」の中で、鳥取県立図書館の実例をあげてサービスの積極的な実施を提案しているほか（p.24-25）、各所で行政支援に言及している。

なお、これらの文書は、文部科学省ホームページ内にある「図書館の振興」のページで全文を閲覧することが可能である⁽⁶⁾。

2.2 図書館関係団体の文書

図書館関係団体の文書としては、日本図書館協会による町村図書館振興のための政策提言である『図書館による町村ルネサンスLプラン21』（2001年7月）が挙げられる。具体的には、「3. 地域の課題解決能力・政策立案能力を高める」（p.12-13）のなかで、「図書館は、首長、役場職員、議員等の政策立案のための支援を資料や情報の面からバックアップすべきである。」としている⁽⁷⁾。

また、全国公共図書館協議会による「公立図書館におけるレファレンスサービス」に関する調査・研究の報告書でも、行政支援に言及している。この報告書は2003年度から2005年度まで毎年発行されていたもので、年度ごとに異なる視点から公立図書館のレファレンスサービスについて報告したものである。行政支援については、2004年度と2005年度の報告書で言及している。2004年度の報告書『公立図書館におけるレファレンスサービスの実態に関する研究報告書』では、神奈川県立図書館の「行政情報サービス」（p.77）が紹介されているほか、県職員に対するサービス提供の準備をすすめている福岡県立図書館の情報（p.113）も提供されている⁽⁸⁾。

2005年度の報告書『公立図書館におけるレファレンスサービスに関する報告書』では、「特色のあるレファレンスサービスの事例」（p.48-52）のなかで、行政支援に関する事例として伊奈町立図書館、日野市立図書館市政図書室、鳥取県立図書館、丸亀市立中央図書館、豊後大野市中央図書館の取り組みを紹介している⁽⁹⁾。

なお、全国公共図書館協議会の報告書は、東京都立図書館ホームページ内にある「全国公共図

書館協議会からのお知らせ」で全文を閲覧することが可能である⁽¹⁰⁾。

3. 個別の図書館を紹介した文献

3.1 市立図書館

市立図書館における行政支援の嚆矢は、日野市の市政図書室であろう。同図書室では、1977（昭和 52）年の開室以来、市庁舎内という地の利を生かして行政資料・郷土資料を収集し、市職員や一般利用者にサービスを提供し続けている。同図書室の取り組みについては、日野市立図書館の職員らによる報告が繰り返しなされている⁽¹¹⁾。『図書館雑誌』や『みんなの図書館』等の図書館関係雑誌だけではなく、『住民と自治』といった地方自治関係の雑誌でも紹介されており、個別の図書館を紹介した文献の中では突出した数となっている。また、根本氏によって利用内容の調査も行われていることから、詳細な利用内容を知ることが可能である⁽¹²⁾。なお、市政図書室の文献情報は、日野市立図書館のホームページにある「日野市立図書館文献リスト（市政・レファレンス）」でも紹介されている⁽¹³⁾。

市政図書室と同タイプの市庁舎内にある図書館としては、静岡市立追手町図書館と高槻市立中央図書館が挙げられる。これらの図書館は、『みんなの図書館』1994（平成 6）年 11 月号の特集、「自治体の中の図書館」で紹介されている⁽¹⁴⁾。なお、追手町図書館については、市庁舎から数百メートル離れた場所に御幸町図書館が開館したことに伴い、2004（平成 16）年に閉室されている⁽¹⁵⁾。このため、市庁舎内という利点は現在失われている。市職員へのサービスが継続されているかは不明である。

この他、『みんなの図書館』2006（平成 18）年 1 月号では、市川市立図書館の「庁内レファレンス」が紹介されているほか⁽¹⁶⁾、前章で紹介した、全国公共図書館協議会による報告書（2005 年度）では、丸亀市立中央図書館や豊後大野市中央図書館等の取り組みが紹介されている⁽¹⁷⁾。

政令指定都市では、横浜市立図書館が早い時期から行政支援に取り組んでいる。同館では、1999（平成 11）年に市職員向けの対応窓口を一本化し、「庁内情報拠点化事業」として、貸出やレファレンス等にとどまらず、行政部局と連携した資料展示やブックリストの作成といった多様な取り組みを展開している。これらの取り組みを紹介した文献は、『図書館雑誌』や『現代の図書館』等に掲載されており、文献数は市政図書室に次ぐ多さとなっている⁽¹⁸⁾。

また、大阪市立図書館でも、2004（平成 16）年 3 月より「庁内向け調査相談サービス（庁内レファレンス）」を実施しており、『図書館雑誌』2005（平成 17）年 12 月号でレファレンス事例等が紹介されている⁽¹⁹⁾。大阪市立図書館の場合はレファレンスサービスが中心となっており、横浜市のような多様な取り組みはなされていないようである。

3.2 都道府県立図書館

都道府県立図書館の中では、東京都立図書館の政策立案支援サービスが早期に始められた行政支援であると考えられる。同サービスは2001（平成13）年4月にスタートしたもので⁽²⁰⁾、レファレンス、貸出、複写、情報リテラシー支援等を実施している。貸出については、都庁内に貸出・返却専用のサービスポイントを設けており、図書館に直接来館しなくても資料が提供できるようになっている。これらのサービスについては、『図書館雑誌』や『都立図書館報』等で紹介されている⁽²¹⁾。

前章で紹介した『公立図書館におけるレファレンスサービスの実態に関する研究報告書』では、神奈川県立図書館や福岡県立図書館の情報が掲載されている⁽²²⁾。神奈川県立図書館については、レファレンスのほかにも、地方自治関連文献の資料ガイド『地方自治の現在』を作成し、各部局に配布していることが紹介されている。福岡県立図書館については、「職員に図書館サービスを利用してもらうため、県庁レファレンスや県庁配本車運行等の実施を準備中である」と述べられている。また、『地域再生拠点としての公共図書館』では、福岡県立図書館と同じく、埼玉県立浦和図書館の行政支援開始に向けた構想について言及している⁽²³⁾。

県立図書館の中で最近特に注目を集めているのが、鳥取県立図書館の県庁内図書室である。2005（平成17）年10月にオープンした同図書室は、広さ約50㎡と小規模ではあるが、レファレンス、貸出、複写のほか、企画展示や情報活用研修会等といった、様々な取り組みを展開している。同図書室の取り組みについては、『これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして－』⁽²⁴⁾の中で取り上げられているほか、『みんなの図書館』⁽²⁵⁾や『ビジネス支援図書館の展開と課題』⁽²⁶⁾でも報告されている。

なお、大阪府立図書館の政策立案サービスについては、拙論「大阪府立図書館の政策立案支援サービスについて」において、準備過程やサービス内容に関する報告を行っている⁽²⁷⁾。

4. その他の文献

これまでに紹介してきた文献のほかに、行政支援そのものについて論じた文献もいくつか存在している。行政支援について最も包括的に論じたものとしては、砂川氏の「行政に対する資料・情報サービス」が挙げられる⁽²⁸⁾。この論文は1982（昭和57）年に発表されたもので、内容的に少し古い部分もあるが、当時の行政支援を取り巻く社会的背景のほかに、サービスを提供する際の条件や具体的方策についても述べられており、現在でも十分参考になる内容である。

このほか、自治体職員の図書館利用に関する調査結果を報告した珍しい文献として、鬼倉氏の「自治体職員の図書館利用実態－『自治体職員の図書館利用調査』中間報告－」がある⁽²⁹⁾。この報告は、『みんなの図書館』1994（平成6）年11月号の特集、「自治体の中の図書館」に収録され

ているもので、貸出冊数（住民一人当たり）の多い図書館を有する 56 自治体の、企画課職員を対象とした調査の結果が報告されている。また鬼倉氏は、『みんなの図書館』の同じ号で、「図書館による行政資料提供の現状と課題－『公立図書館の行政資料および自治体への図書館サービス実態調査』中間報告－」も発表している⁽³⁰⁾。こちらの報告は、公立図書館側が調査対象となっているもので、上の報告と同様、興味深い内容となっている。

行政支援について包括的に論じた文献には古い年代のものが多く、2000 年以降の文献は今のところ発見できていない。近年の動向を踏まえた論考の発表が待たれるところである。

5. おわりに

行政支援は、ビジネス支援や患者支援（健康・医療情報の提供）と同じく、地域における課題解決型の図書館サービスとして位置づけられている⁽³¹⁾。ただ、ビジネス支援や患者支援等に比べると地味な取り組みであるためか、取り組み内容を報告した文献数は少ないように思われる⁽³²⁾。

とはいえ、行政支援に取り組んでいる図書館は確実に増えているはずである。今回取り上げた文献で紹介されていた取り組み以外にも、様々な図書館で、独自の行政支援が実施されているであろう。今よりもさらに多くの取り組みが報告され、情報を共有することができれば、これから行政支援を始めようとしている図書館はもちろん、すでに実施している図書館でも、サービス改善に役立てることができるはずである。行政支援を行っている図書館では、積極的に自館の取り組みを報告してもらいたい。

注・引用

- (1) 政策立案支援サービスの英訳である **Policy Planning support service** を略して、「P-support」とした。
- (2) 『図書館ハンドブック』では、この種のサービスを「行政支援」と表現し、「図書館は当該自治体の政策立案・決定や行政事務に必要な情報・資料を収集し、それを自治体の組織やその人々（首長、役場職員、議員等）、あるいは住民に提供する役割をもつ。」としている。
日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員『図書館ハンドブック第6版』日本図書館協会、2005年、107頁
- (3) 文部科学省スポーツ・青少年局青少年課、「公立図書館の設置および運営上の望ましい基準（平成十三年七月十八日文部科学省告示第百三十二号）」、子どもの読書活動推進ホームページ、（オンライン）
入手先〈http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/dokusyo/hourei/index.htm〉、（参照 2007 - 02 - 13）
- (4) 図書館をハブとしたネットワークの在り方に関する研究会、「地域の情報ハブとしての図書館－課題解決型の図書館を目指して－」、（2005年1月）文部科学省ホームページ、（オンライン）入手先
〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05091401.htm〉、（参照 2007 - 02 - 13）
- (5) これからの図書館の在り方検討協力者会議、「これからの図書館像－地域を支える情報拠点をめざして－（報告）」、文部科学省ホームページ、（オンライン）
入手先〈http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06032701.htm〉、（参照 2007 - 02 - 13）、
- (6) 文部科学省生涯学習政策局社会教育課、「図書館の振興」、文部科学省ホームページ、（オンライン）入手先
〈http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/index.htm〉、（参照 2007 - 02 - 13）
- (7) 日本図書館協会町村図書館活動推進委員会『図書館による町村ルネサンス Lプラン 21－21 世紀の町村図書館振興をめざす政策提言』日本図書館協会、2001年、12頁～13頁
- (8) 全国公共図書館協議会『公立図書館におけるレファレンスサービスの実態に関する研究報告書（2004年度 全国公共図書館協議会調査研究事業報告書）』全国公共図書館協議会、2005年
- (9) 全国公共図書館協議会『公立図書館におけるレファレンスサービスに関する報告書（2005年度 全国公共図書館協議会調査研究事業報告書）』全国公共図書館協議会、2006年
- (10) 全国公共図書館協議会事務局、「全国公共図書館協議会からのお知らせ」、東京都立図書館ホームページ、（オンライン）入手先〈<http://www.library.metro.tokyo.jp/15/15800.html>〉、（参照 2007 - 02 - 13）
- (11) 主要な文献としては、以下のものが挙げられるが、この他にも、「日野市立図書館文献リスト」（日野市立図書館 HP 内）では多数の文献が紹介されている。
 - ・池谷岩夫「日野市立図書館市政図書室の活動」114頁～116頁、『図書館雑誌』74 - 3、日本図書館協会、1980年
 - ・池谷岩夫「行政に役立つ図書館をめざして」89頁～98頁、『図書館学教育資料集成 ⑤参考業務』白石書店、1980年所収
 - ・若林康子「公共図書館における行政資料の収集と提供」24頁～34頁、『情報公開と図書館－官庁・行政資料の収集と利用』図書館フォーラム、1989年所収
 - ・藤沢和夫「日野市立図書館 市政図書室の行政情報サービス」5頁～11頁、『みんなの図書館』211、教育史料出版会、1994年
 - ・藤沢和男「市立図書館における行政情報サービス」15頁～18頁、『住民と自治』379、1994年
 - ・是枝英子「行政資料提供と図書館の役割」16頁～20頁、『みんなの図書館』248、教育史料出版会、1997年
 - ・清水ゆかり「行政資料の収集と提供－日野市立図書館市政図書室の実践から」945頁～947頁、『図書館雑誌』96 - 12、日本図書館協会、2002年
 - ・清水ゆかり・波多野幸・金子有希『「市役所の図書室」のレファレンス（れふあれんす三題噺・114）」738頁～739頁、『図書館雑誌』98 - 10、日本図書館協会、2004年
- (12) 根本彰『続・情報基盤としての図書館』勁草書房、2004年、99頁～123頁
なお、この調査報告は、根本氏のホームページでも公開されている。
根本彰、「公共図書館における行政レファレンスサービスの可能性」、図書館情報法学根本研究室、（オンライン）入手先〈<http://plng.p.u-tokyo.ac.jp/text/PLNG/hino/hino.pdf>〉、（参照 2007 - 02 - 13）
- (13) “日野市立図書館文献リスト（市政・レファレンス）」、日野市立図書館ホームページ、（オンライン）入手先
〈http://www.lib.city.hino.tokyo.jp/hnolib_doc/bunken/listbox/sisei-bunken.htm〉、（参照 2007 - 02 - 13）
- (14) ・北岸達夫「市役所の中の図書館その1－静岡市立追手町図書館の場合」12頁～15頁、『みんなの図書館』211、教育史料出版会、1994年
・米田智子「市役所の中の図書館その2－高槻市立中央図書館の場合」16頁～18頁、『みんなの図書館』211、教育史料出版会、1994年
- (15) 豊田高広「ビジネス支援における図書館と産業支援施設の連携について～静岡市立御幸町図書館の場合～」96頁～100頁、『ビジネス支援図書館の展開と課題』財団法人高度映像情報センター、2006年所収
- (16) 齊藤誠一「図書館による行政支援サービスの積極的な展開を！」21頁～27頁、『みんなの図書館』345、教育史料出版会、2006年

-
- (17) 前掲 9、48 頁～52 頁
- (18) 主要な文献としては、以下のものが挙げられる。
- ・桐原真哉「横浜市立図書館における庁内協力事業」30 頁～40 頁、『図書館評論』41、図書館問題研究会、2000 年
 - ・桑原芳哉「庁内への資料提供・事業協力ー横浜市立図書館『庁内情報拠点化事業』についてー」914 頁～916 頁、『図書館雑誌』94-11、日本図書館協会、2000 年
 - ・桑原芳哉「横浜市立図書館『庁内情報拠点化事業』における事業の経過と資料提供・レファレンスの現状について」198 頁～204 頁、『現代の図書館』39-4、日本図書館協会、2001 年
 - ・桑原芳哉「横浜市立図書館ー庁内情報拠点化事業ーについて」4 頁～6 頁、『平成 12 年度関東地区公共図書館協議会研究集会報告書』 関東地区公共図書館協議会事務局、2001 年所収
- (19) 島上智司・戸倉信昭「庁内レファレンスの事例から（れふぁれんす三題噺・125）」850 頁～851 頁、『日本図書館雑誌』99-12、日本図書館協会、2005 年
- (20) 教育庁のみを対象とした試行は、1999 年 9 月から開始されている。
- 高橋美矢子「東京都立中央図書館の行政支援サービス（れふぁれんす三題噺・85）」182 頁、『図書館雑誌』96-3、日本図書館協会 2002 年
- (21) 主要な文献としては、以下のものが挙げられる。
- ・高橋美矢子「東京都立中央図書館の行政支援サービス（れふぁれんす三題噺・85）」182 頁～183 頁、『図書館雑誌』96-3、日本図書館協会、2002 年
 - ・情報サービス課「政策立案支援サービスの展開と広報」10 頁、『都立図書館報』152、東京都立中央図書館、2003 年
 - ・情報サービス課「政策立案支援サービスの現状」5 頁、『都立図書館報』153、東京都立中央図書館、2004 年
- (22) 前掲 8、77 頁および 113 頁
- (23) 飯村はるか『招待状』としてのメールマガジンの活用～情報発信手段の一つとして～」70 頁～72 頁、『地域再生拠点としての公共図書館』財団法人高度映像情報センター、2005 年所収
- (24) 前掲 5、24 頁～25 頁
- (25) 網浜聖子『『知の拠点』づくりへー鳥取県・県庁内図書室館の誕生とその後』2 頁～6 頁、『みんなの図書館』354、教育史料出版会、2006 年
- (26) 小林隆志・網浜聖子「ビジネス支援事業『鳥取モデル』の構築～知のネットワークの形成と地域の総合力～」62 頁～69 頁、『ビジネス支援図書館の展開と課題』財団法人高度映像情報センター、2006 年所収
- (27) 日置将之「大阪府立図書館の政策立案支援サービスについて」21 頁～29 頁、『みんなの図書館』352、教育史料出版会、2006 年
- (28) 砂川雄一「行政に対する資料・情報サービス」115 頁～120 頁、『図書館界』34-1、日本図書館研究会、1982 年
- (29) この文献では、タイトルに「中間報告」と記されていたため、最終報告にあたる文献を探索したが、現在のところ発見できていない。
- 鬼倉正敏「自治体職員の図書館利用実態ー『自治体職員の図書館利用調査』中間報告ー」41 頁～52 頁、『みんなの図書館』211、教育史料出版会 1994 年
- (30) この文献でも、タイトルに「中間報告」と記されていたため、最終報告にあたる文献を探索したが、現在のところ発見できていない。
- 鬼倉正敏「図書館による行政資料提供の現状と課題ー『公立図書館の行政資料および自治体への図書館サービス実態調査』中間報告ー」19 頁～40 頁、『みんなの図書館』211、教育史料出版会 1994 年
- (31) 糸賀雅児「課題解決型図書館へ脱皮するための糸口をつかむ」8 頁～12 頁、『ビジネス支援図書館の展開と課題』財団法人高度映像情報センター、2006 年所収
- (32) 患者支援については、病院図書室等に関する文献が中心となっており、公共図書館の取り組みに限定した場合の文献数は、まだそれほど多くはない。

おもちゃ絵画家・人魚洞文庫主人川崎巨泉のおもちゃ絵展 とその画業の周辺について一附・川崎巨泉年譜(稿)・「これがおもちゃ 絵だ！」関連講演会レジュメー

森田俊雄（中之島図書館）

〔1〕人魚洞文庫とおもちゃ絵

1-1. 人魚洞文庫の展示について

当館では2006(平成18)年10月11日から10月26日まで、3階文芸ホールにおいて「これがおもちゃ絵だ！ー巨泉玩具帖に見る大正・昭和初期の郷土玩具ー」展を開催した。

今回の川崎巨泉のおもちゃ絵の展示は、本年5月に巨泉の肉筆画帖『巨泉玩具帖』『玩具帖』に描かれた全てのおもちゃ絵を「人魚洞文庫データベース」としてデジタル化し、当館ホームページで一般公開したことを記念する意味があった。人魚洞文庫とは『巨泉玩具帖』『玩具帖』そして『索引』の116冊を指すもので現在は貴重書に指定している。人魚洞文庫のデジタルアーカイブ化の経緯は2002(平成14)年度、TAO事業(1)で全画像をデジタル化したことから始まった。2003(平成15)年度は玩具帖に記載された巨泉の解説を翻刻し、玩具の製作県の特典などを調査するために費やされた。その際、節句と人形・玩具(以下「玩具」は「郷土玩具」を指す。)の研究家としても知られる石沢誠司氏(現京都文化財団京都府立文化芸術会館館長)に玩具製作県の特典などでご協力を得、人魚洞文庫データベースが完成した。

人魚洞文庫が当館に寄贈されたのは1942(昭和17)年11月、巨泉没後2ヶ月ほどあとのことである。寄贈された玩具帖が展示されたのは1943(昭和18)年9月のことであったので今回は63年ぶりの一般公開となった。因みに1943(昭和18)年の展示記録としては『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録』(昭和18年9月12日発行)A5サイズ、33頁の小冊子を大阪府立図書館(現大阪府立中之島図書館)が編集発行したものが残る。展示内容は巨泉が生前制作頒布した『巨泉おもちゃ絵集』『巨泉漫筆おもちゃ箱』などを始めとする主要な画譜の全て、そして寄贈された人魚洞文庫、また巨泉の愛用の東京犬張子、八戸木馬などの郷土玩具(以下「玩具」)8点、他に玩具を神祇、武器、武者人形、鬼退治、軍用動物、猛獣、不倒、経済力、増産、海上輸送、人形総動員、大東亜共栄圏及同盟国の12の主題に別け、戦争遂行に見立てて展示している。展示期間は巨泉の一周忌を記念し9月12日から14日の3日間開催された。

さて今回のおもちゃ絵の展示であるが、巨泉と同時代人で彦根の玩具コレクター高橋狗佛のコレクションのうちから『巨泉玩具帖』『玩具帖』に描かれたものと同じ玩具や貯金玉（貯金箱）等 38 点を、所蔵する彦根市立図書館から借用し、あわせて国宝・彦根城築城 400 年祭実行委員会の後援をえて開催の運びとなった。

高橋狗佛について研究家藤野滋氏の論考によりながら紹介したい。高橋狗佛は本名敬吉。1874(明治 7)年、井伊家彦根別邸の家職高橋要の次男として現在の彦根市に生まれた。滋賀県立尋常中学校(現滋賀県立彦根東高等学校)卒業後、滋賀県立蚕糸業組合立簡易蚕業学校(現滋賀県立長浜農業高等学校)の教員を経て、1907(明治 40)年、33 歳で私立日本済美学校の中学の理科教師となる。1916(大正 5)年ころ井伊家当主直忠に懇望され当時 7 歳の双子の兄弟直愛、直弘の家庭教師兼訓育係となり東京麹町の井伊家に入る。環境の変化により神経衰弱となりかけた狗佛を救ったのが玩具(おもちゃ)だった。1922(大正 11)年三田平凡児が始めた我楽他宗に参加し、犬の玩具蒐集家として知られた。



狗佛の蒐集品：「鯛車」(図 1)



巨泉画：「大阪製鯛車」(図 3)



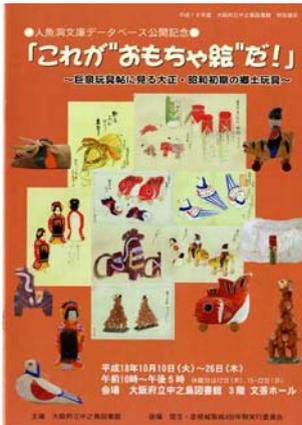
狗佛の蒐集品：「虎乗り加藤」(図 2)



巨泉画：「虎乗り加藤」(図 4)

1944(昭和 19)年蒐集した玩具を彦根市立図書館に寄贈した。その数 2376 点。玩具の大半は 1924(大正 13)年から 1936(昭和 11)年の間に蒐集されたものである。1953(昭和 28)年

に亡くなるまで井伊家の教育係りとしての職責を全うした(2)。



図録(図5)

展示会場の3階文芸ホールの中央に置かれた8面の可動式展示ケースを東北、関東、中部、近畿、大阪、中国・四国、九州の7つの地域の分け、それぞれに巨泉玩具帖や玩具帖と狗佛の玩具を並べた。壁面の展示ケースには“巨泉を知る”として錦絵集『大阪名所』『大阪名勝十六景』、引札、絵図、印譜、個人誌『人魚』、『おもちゃ画譜』『おもちゃ十二月』などを配した。師であり義父でもあった浮世絵師中井芳瀧の画業の紹介として『浪花百景』や役者絵を中心に並べ、

おもちゃ絵の系譜としては江戸時代の玩具絵本『江都二色』、明治・大正の玩具絵本『うなみの友』、おもちゃ絵関連として淡島寒月の『おもちゃ百種』、有坂与太郎の『日本玩具集 おしゃぶり』、玩具研究誌『片言』、『鳩笛』などを展示した。また国宝・彦根城築城400年祭実行委員会関係として2007(平成19)年度彦根市で開催予定の国宝・彦根城築城400年祭の案内パンフや高橋狗佛の紹介と狗佛コレクションの貯金玉も併せて紹介した。

展示図録(A4版12ページ、表紙はカラー、中の写真は白黒)は巨泉、芳瀧の説明に始まり展示された地域の主要なおもちゃの解説、巨泉の略年譜等を掲載した。3000部を作成し会場で頒布するとともに都道府県立図書館等に寄贈した。

1-2. 人魚洞主人川崎巨泉について



巨泉肖像(図6)

人魚洞文庫の主であった川崎巨泉は本名を末吉と言い、1877(明治10)年川崎源平の三男として泉州堺の神明町坊ノ前で6月2日呱呱の声を上げた。兄は『住吉・堺名所并ニ豪商案内記』を自ら書き出版した川崎源太郎。13歳(16歳という説もある)で大阪の浮世絵師中井芳瀧の門に入り、浮世絵を修行し摺物画、引札、風俗錦絵などを手がけ、1897(明治30)年代には商業広告、新聞広告の下絵などを制作し民間の図案家としても活躍した(3)。浮世絵師、おもちゃ絵画家、デザイナーでもあった。雅号は巨泉、別号とし

て人魚洞、芳齋、碧水居、碧水軒、虚僊、碧水があり、別に人魚生や巨の字、碧、碧水坊なども使った。巨泉の雅号は和泉の堺に生まれたことから付けたもの。1899(明治32)年芳瀧の息女ハマ子と結婚し、1903(明治36)年頃におもちゃ(郷土玩

具)に興味を持ち始め、その後玩具のデザイン・製作、おもちゃ絵の製作・販売などで明治末期から大正、昭和前期にかけて活躍した。主なおもちゃ絵集に『巨泉おもちゃ絵集』『おもちゃ百種』『巨泉漫筆おもちゃ絵集』『おもちゃ画譜』などがある。また個人誌『人魚』を1921(大正10)年2月に創刊した。同時に郷土玩具を研究し『郷土趣味』『旅と伝説』『郷土研究・上方』『鯛車』などに文章を発表した。俳諧、川柳、詩を好んで作り、落語好きでもあった。

趣味・遊びの世界では高橋好劇が1919(大正8)年に創始した浪華趣味道楽宗の第11番札所・碧水山虚僊寺でご本尊は人魚とおしゃぶりとした。また浪華趣味道楽宗から分派した娯美会、また^{おもちゃかい}面茶会、おもちゃ十二支会など皆それぞれに趣向を凝らした遊びの会に積極的に参加した。娯美会での呼び名はハマ子婦人の亭主で“ハマの亭主”と呼ばれた。漢字で書くと“浜野禎州”、別に“種野禎州”とも号した(4)。

1942(昭和17)年9月15日逝去。法号は「幽谷院芳雲巨泉居士」。墓は堺市の大安寺にある(5)。なお雅号の人魚洞の人魚は人形のこと、で、“にんぎょう”を“にんぎょ”と地口で洒落たものである。人魚洞と名乗るだけあって、人魚の人形、錦絵、ポスター、レッテル、封筒、絵葉書、燐寸、外国雑誌、絵画など人魚のものなら何でも集めた。“魔の海や人魚の肌のうつくしき”(巨泉)。この他にも巨泉は、お守り、御影、縁喜物^{マフ}の由来書き、一枚摺り、小冊子。各地名所の名所図・案内図、神社仏閣の古図(木版、石版、銅版)などを蒐集した(6)。

生前巨泉が日本民族玩具協会の雑誌『鯛車』6巻5号の記事「愛玩拾遺(一)」の設問に答えたものを引用する。出版年は巨泉が亡くなった年の1942(昭和17)年5月1日発行である。

川崎巨泉

(一)職業：日本画家。

(二)生年月日：明治十年六月二日。

(三)出生地：和泉 堺。

(四)玩具研究の動機：絵に書けそうな郷土玩具を集めてスケッチして置いたのが動機となり、明治末期より其蒐集に全力をあげて進む。

(五)秘蔵の民玩：何回も何回整理せし故に今手元に残せしものは自分の好きなものだけ、其多くはスケッチ帖百四五十冊に納めたり。(筆者注：このスケッチ帖が人魚洞文庫

の巨泉玩具帖と玩具帖である)

(六)編著書：自販としては、巨泉おもちゃ絵集、おもちゃ箱、郷土の光、おもちゃ画譜、肉筆おもちゃ千種、又、京都木戸氏蔵版の起上り小法師画集の図画。其他頼まれたものには、おもちゃ十二支、おもちゃ十二月、郷土紋様集、おもちゃ博覧会等其他種々あり。

(七)関係団体：之迄は種々の趣味の会に加入せしも、時局下、何れも休会のもの多く、至って淋し。

(八)趣味：人形や玩具を集めることが酒や甘いものより先にたつ。

1929(昭和 14)年に出版された島屋政一の著書『日本版画変遷史』(7)に巨泉の紹介がある。「巨泉氏は姓川崎、名は末吉、師芳瀧の長女濱子を娶りて、大阪南区鰻谷に住し漁人洞と号し、後ち西成区有楽町に移住した、明治大正より昭和の今日に至るまで版画に精進し、特に明治大正時代に於ける石版々画家として第一流の名があった、殊におもちゃ絵に秀で、その作品少なからず、又昭和六年には『芳瀧画集』を自家版として発行せしが如きは、その美挙真に推称すべきである。」

『芳瀧画集』の出版年月日は1931(昭和6)年6月10日。印刷所は株式会社大阪国文社。個人誌『人魚』もここから出した。大和綴。寸法はタテ約22cm×ヨコ約15cm。内容は巻頭に芳瀧の肖像写真・賞印・画印があり、中の図版は白黒で21枚挿入され、それぞれについて巨泉が巻末に解説をしている。この解説が芳瀧を知る好材料となっている。

巻末の「小冊子について」で巨泉はこの本の出版意図を語っている。なによりもまず師父芳瀧への報恩である。芳瀧の作品については借用する暇もなく自分の所蔵品によったこと。また門人たちが物故したことで逸話や記録がないので十分な内容とはいえないが小冊子として250部を作った。「又此時代の絵師の作品の片影とも見て頂く事が出来れば幸いと存じます。」と結んでいる。

なお巨泉の業績や思い出を綴った本に下記の3冊がある。

(1)『郷土玩具界の先覚 川崎巨泉翁を偲ぶ』川崎巨泉翁供養会編発行 村田書店製作 昭和54年

内容：小谷方明「川崎巨泉翁の思い出」、川口栄三「著作解題」、「川崎巨泉画伯略伝」、「略年譜」、「川崎巨泉翁供養会々則」

(2)『第一回巨泉忌』奥村寛純編 川崎巨泉翁供養会発行 村田書店製作 昭和54年

内容：「巨泉生誕百年と三十三回忌法要」を1979(昭和54)年9月15日に川崎巨泉翁供養会々長小谷方明、郷土玩具文化研究会代表舩健之助、全国郷土玩具友の会近畿支部長浜口新次が呼びかけたもの。堺の大安寺と海会寺で行われたその報告書。

(3)『おもちゃ画譜』復刻版 川崎巨泉著 奥村寛純校補・解題 村田書店 昭和54年

内容は巨泉のおもちゃ画譜10巻と小谷方明「おもちゃ画譜を出された頃」、中山香橘「おもちゃ画譜」復刻を祝して、「川崎巨泉先生の思い出」、小宝・太田健次郎「川崎巨泉先生を偲んで」、奥村寛純「解題：“おもちゃ絵と川崎巨泉画伯”」、「川崎巨泉画伯略伝」、「略年譜」がある。

なお(1)(3)の巨泉略年譜の内容は同一で、その元資料は1943(昭和18)年の大阪府立図書館作成の『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録』所収の略年譜であり、それを若干追加訂正したものである。

さらに民俗玩具研究家奥村寛純氏の『浪花おもちゃ風土記』(村田書店発行 昭和62年)は大阪の近世から現代に渡る「大阪の町に息づいて来た」玩具の歴史などについて、巨泉をはじめ大阪の玩具に関係した人たちの思い出を交えて詳述されている。巨泉作の「楠公子別れ土人形」など珍しい写真も掲載され、「湊土人形と津塩政太郎翁」の項では、巨泉考案の土鈴の名前が挙げられている。巨泉に関しても貴重な文献である。

1-3. おもちゃ絵とは何か

今回の展示のタイトルとして掲げたのは「これがおもちゃ絵だ!」であった。サブタイトルに「巨泉玩具帖に見る大正・昭和初期の郷土玩具」としたので、ご覧になった方たちは郷土玩具絵の展示と理解してくださったと思うものの、これが「これがおもちゃ絵だ」だけであれば、日本近世以来のおもちゃ絵についてご存知の方は全く別なものを想像されたと思う。

そのおもちゃ絵であるが、前川久太郎氏はおもちゃ絵とは「一枚刷りの子供用錦絵」と定義している(8)。前川氏によれば、大阪ではお馴染みの立版古もおもちゃ絵で、寛政年間(1789—1801)に“組上げ”とよばれるおもちゃ絵が出現したが、それが立版古に当たるといふ。立版古について元関西大学教授肥田皓三氏の詳細な説明があるのでその一部を紹介する。

「たてはんこ」〔立版古、立版行などと表記する。「は」を濁音にして「たてばんこ」ともいう。〕は、浮世絵版画〔錦絵〕のおもちゃ絵の一種で、切り抜いて組み立てることが出

来るように、あらかじめ、人物や家屋などを描いた錦絵を、ハサミで裁ち、糊で張り合わせて、台紙の上に芝居の舞台面のように組み立てる。出来上がったその作品を、夕涼みの床机の上、または揚げ店の上に蠟燭の火をともしとして飾る。江戸時代から大正の中ごろまで、子どもの夏の遊びとして大いに流行した遊戯玩具であった。」「たてはんこ」は、正しくは「切組灯籠」または「組み上げ灯籠」といい、もともとお盆の供養に作られる灯籠が、江戸時代の中ごろに玩具化したのが起源で、以後、浮世絵師の手で多くの作品が作り出された。」(9)

一方上野晴朗氏は「子供向け手摺り版画の、決してすべてをおもちゃ絵と言わせたものとは思わない」としながら、おもちゃ絵は美しい言葉であり「わが国独自に発達した純日本式の産物」であると紹介し、「おもちゃというのはモテアソビで」「モテアソビは、手あそびものともいわれていた。江戸の絵草紙の引き札などには、おもちゃを現わすものは手遊物という表現が多く、その多くは季節の祭りや年中行事などに結びついたもので、たまには万翫物類がんぶつなどという言葉も見かける。」と述べ、吉田暎二氏の定義「おもちゃ絵は、子供の手遊び用に描かれた版画を指している。その種類は千差万別であるが、いずれも子供の享楽のために、題材が選ばれていることに変わりはない。」を紹介し、おもちゃ絵の発生は相当に古いが、「いわゆるおもちゃ絵として、版画史に位置をしめるのほどに一群をなしたのは、安政前後から明治にかけてのことであった。」としている(10)。

権田保之助は「玩具絵の話」で、世の中には玩具おもちゃを描いたものは何でも玩具絵おもちゃえと考え、「其為めに往々玩具を描いた刷り物例えば是真や椿山の如きものまでも、之を玩具絵おもちゃえとして見て居るので」あるが、それは「玩具の絵おもちゃえ」であるとし、玩具絵は鑑賞の主体が子供であり版画で作られたものと言う。更に玩具絵の第1義は「子供の享楽の目的に協かなうもの」でそれは「武者絵、姉さん絵」などである。第2義は「他に主要目的が有って、夫れが又享楽の対照物となるもの」で「疱瘡絵、教訓絵、名馬尽し、虫尽し」などであると言う(11)。玩具絵は安政(1854)前後から盛んになり、明治維新まで発達し、維新以後他の版画は凋落し、玩具絵の天才芳藤がいて玩具絵は生き残ったが、印刷物の変遷と絵具の粗悪が原因で1877(明治10)年辺りを最後として滅亡し、それ以降のものは芸術的価値がないものとなった説明している。

また有坂与太郎(明治29年生。本名正輔。大正から昭和期の郷土玩具研究家。)は『おしゃぶり』古代編の解説で、「おもちゃ絵とは好事者間で勝手に呼ばれてゐる名称であつて、事実上おもちゃ絵といふ名目のあつた訳ではなく、畢竟は児童向きの錦絵にほかなりませ

ん。」と解説している(12)。

次に巨泉の立版古の思い出を紹介する。

「又立版古、(大阪では組絵とも言う)劇の一場面を錦絵摺りにしたもので、是れに裏打ちをなし、人物、背景等何れも合印が附してあるので、此合印に合わせて板の上に貼りつけられれば其場面が出来上る仕組みになっている。是れは、カナリ古いもので、一枚もの、二枚もの、三枚ものから、五枚位いの大物も出来ていた。組み上がったものは、夕涼みの縁台に持ち出し、商家などでは店先きに出して置いたもので、近所の子供等は集って来てワイワイと騒ぐのである。是れにも、前記のヒョーソク(筆者注:以下巨泉の説明、「土製のヒョーソクは灯心幾筋か、又は糸を幾筋か束ねて中央に差し込み、種油を注いで点ずる土器」)に灯火を点じ、中にも雨は銀線を幾筋も斜に引っ張ったものもあり、大がかりのものには、廻り道具、即ち芝居の廻り舞台を其儘模して場面を時々変えて見せたものもあった。」(13)



「小摺りのおもちゃ絵」(図7)



「切小絵」(図8)

巨泉が小さいころ遊んだ「小摺りのおもちゃ絵」について『人魚』6号で紹介している。ページに小摺りのおもちゃ絵の一片が貼り付けてある。左図の猫の小摺りのおもちゃ絵はタテ3.7cm×ヨコ2.7cmの小さなものである。

小摺りを切り抜いて小箱に貼ったり、中には立版行式のものがあってそれは裏打ちをして切り抜き、それぞれの合印にあわせて薄板にはる。団扇屋や小間物店があつて、小さな屋台を作って並べ軒先に持ち出して小砂利をお金に見立てて「商い遊び」をしたと言う。大阪でも明治14、5年ころまでは毎月新しいものが出版された。東京では歌川芳藤が、大阪では長谷川貞信、長谷川小信、歌川芳信、笹木芳光が流行期に描いたと書いている。ここにいう貞信は初代の長男、二代貞信、小信は二代小信で二代貞信の長男であろう。また笹木芳光は巨泉の師中井芳瀧の実弟で嘉造のことである(14)。「我が大阪のものには柩四つ

切りで立絵又は横絵、二つ割、三つ割、六つ、十二、二十四、三十二、四十八割や或は九十六に区分した細かいものもできていた、模様はのぞきからくり、猫芝居、犬芝居、化物づくし」（筆者注：以下は注記に譲る）などと様々な模様を列記している(15)。

雑誌『此花』が切小絵(図8)を紹介している。「天明の末頃より盛んに行われたものらしい、今現存して居る古絵中にも、其頃の川勝派歌川派絵師の筆に成ったものと認むべきものが多くある、もとより子供の玩弄たる千代紙に過ぎないが、大阪の浮世絵師が発明したという立版古、即ち切組灯籠絵などは、此切小絵の進化したものと見てよ可ろう。」この記事は特に大きさなどには触れていないが、巨泉が遊んだ小摺りのおもちゃ絵の原型となったものだろうか(16)。

おもちゃ絵は維新後に流行したと上野氏は説明しているが、芸術的価値はさて置くとして、1877(明治10)年生まれの巨泉にはお馴染みの遊び道具であった。

巨泉の著作に“おもちゃ絵”と付くのは『巨泉おもちゃ絵集』のみで、『おもちゃ百種』『おもちゃ国絵図』『おもちゃ十二支』などあとは全て“おもちゃ”である。巨泉は近世以来のおもちゃ絵を知っていたのでおもちゃ絵とタイトルを付けたのは1冊に止めたのかも知れない。巨泉自身玩具の絵をおもちゃ絵と書いている場合もあるが、1926(大正15)年5月に大阪三越呉服店で開催したおもちゃ絵の展覧会名は「巨泉玩具絵展覧会」としている。

我々が使った意味のおもちゃ絵について、民俗玩具研究家奥村寛純氏は巨泉の復刻版『おもちゃ画譜』の解題「おもちゃ絵と川崎巨泉画伯」で次のような説明をされている。

「こゝに言う「おもちゃ絵」というのは(中略)古くから日本各地に伝わってきた郷土玩具の銜いのない淳僕な味にひかれて、それ等を描いたもので、いわばおもちゃの写生画である。肉筆画もあるが、版画にして何枚も作られたものもあり、それが更にきり絵、はり絵などの新しい試みも見られ、時には収録され冊子にしたりもする。」(17)

今回我々は敢えてその“おもちゃ絵”を使ってタイトルにインパクトを持たせたつもりであったが、その意味は「玩具の絵」、「おもちゃの写生画」であって、「一枚刷りの子供用錦絵」という意味での“おもちゃ絵”ではなかった。

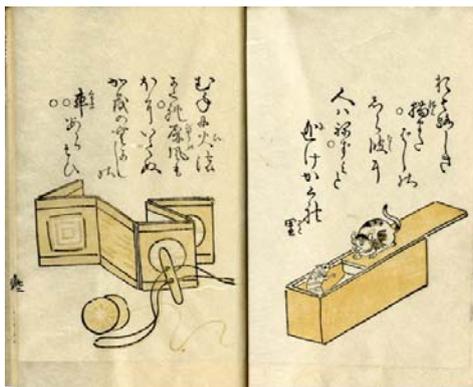
ここでも「玩具の絵」「おもちゃの写生画」という意味で“おもちゃ絵”という言葉を使用する。

1-4. おもちゃ絵(玩具の絵)の始まり

巨泉のおもちゃ絵は玩具の絵であったとしても、それは子供に向って描かれたものかと

いえばそうではなく大人たち、巨泉も使った大供^{おおども}かもしれない。(大供は1909(明治42)年、清水晴風、林若樹、久留島武彦らが「人形玩具に関する知識」の交換会として作った大供会に由来する。その機関誌が「大供」だった(18)。人形玩具を愛する大供(おとな)に向け出版され、あるいは自筆のおもちゃ絵を販売した。

巨泉が自画のおもちゃ絵展を最初に開いたのは1916(大正5)年である。それを『日本印刷界』大正5年3月号の記事は「巨泉氏道楽的なる」と表現していて、世間はまだ図案家巨泉の余技と見ていたのである(19)。2日間だけの展示会であったが好評で、おもちゃ絵に対する世間の関心の高さを確認する形になった。そして2年後の1918(大正7)年に最初のおもちゃ絵集『巨泉おもちゃ絵集』を版行したのである。



『江都二色』 (図9)

ここでおもちゃ絵と言っているいわゆる「玩具の絵」、それを集めた玩具絵本が世に出た始めは、江戸期の1773(安永2)年に出版された『江都二色』^{えどにしき}であると言う。木村仙秀(明治18年生。明治から昭和期の江戸文学・風俗研究家。)によれば編者は卯雲で、おもちゃ絵は北尾重政が描いた。卯雲は本名木室七左衛門という武士で、白鯉館卯雲と名乗る。江戸の狂歌の先覚者

・天明狂歌壇の長老であった。蜀山人が随筆『奴師^{やっこだこ}芳之』で卯雲の狂歌を賞賛したという。出版年から重政は江戸の小伝馬町の書肆・須原屋三郎兵衛の長男で、号を碧水、紅翠軒などと称した浮世絵師・初代重政である(20)。山東京伝(政演)や鋏形蕙斎(政美)は重政の弟子である。なお『江都二色』^{えどにしき}の解説には、仙秀の稀書複製会刊行『稀書解説第七編上』や「『江戸二色』の編者」がある(21)。書名の『江都二色』^{えどにしき}とはどのような意味なのか。仙秀が引用した柳亭種彦の考証随筆『還魂紙料』にそれがある。「古き新しきを分かつたず、それとかれと二色^{ふたいろ}つつあつめて江都二色^{えどにしき}と題^{よべり}り」(22)。掲載のおもちゃは「編者卯雲が幼時目撃したものばかりで」あり、当時のおもちゃ集めた書物として大切なものだ、とは仙秀の言葉である。

この『江戸二色』^{えどにしき}はいわゆる江戸の文人たちの趣味・遊びの中から生まれたものである。白鯉館卯雲こと木室七左衛門は大田南畝や朱楽菅江同様典型的な文人である。大沼宜

規氏によれば「安永・天明年間には、狂歌の会から発展するかたちで「宝合会」も開かれるようになっていく。」とされ(23)、狂歌集団が文人趣味の会をリードしていたから、恐らく卯雲周辺にもおもちゃを趣味とする仲間があり、絵師重政もその一人であったのではないだろうか。安永の「宝合会」は塙保己一、大田南畝、唐衣橋洲らが「宝に似て非なる物を持ち寄り、その由来をもっともらしくこじつけた文を披露」したものであり、その成立が1773(安永2)年とも1774(安永3)年ともいわれ、それが『江戸二色』の版行年代と一緒であるのは偶然ではなく、当時に様々な趣味の会が盛んであったと考える材料となるのではないか(24)。また1783(天明3)年4月25日の「宝合会」には、『江戸二色』の浮世絵師北尾重政の弟子たち、北尾政演(山東京伝)や北尾政美(鋏形蕙斎)が展示物を持ち寄り、『狂文宝合記』の挿絵も描いている。浮世絵師としては他に喜多川歌麿、弟子の行麿がいた(25)。狂歌集団と浮世絵師の交流も注目される。

因みにこの『江戸二色』を当館は3冊所蔵している。米山堂が出版した稀書複製会復刻版2冊と有坂与太郎が狂歌の翻刻と解説を付し、郷土玩具研究会が発行した1冊である。

1924(大正13)年1月28日発行の稀書複製会版は和紙・和装。寸法タテ16.4cm×ヨコ11.5cm。第3期第15回配本。印行300部の内第103号は本文が15丁から始まり27丁の丁付けで終わるもので奥付も欠けている。仙秀の解説にもこの復刻版(武蔵屋本)は15丁から始まり27丁に終わるとしている。次に1931(昭和6)年11月28日発行の稀書複製会版は和紙・和装。寸法タテ16.4cm×ヨコ11.5cm。第7期第13回配本。印行500部の内第166号は、序文の前に「円圏内に一老人が若き画家に口伝するさまを画いてゐる」図が挿入され、奥付もある。全27丁。これが「昭和6年に至って、稀書複製会がその完本を大阪の某氏から得た。」本であろう(26)。

有坂与太郎が解説・翻刻した有坂版ともいべき『江戸二色』は1930(昭和5)年4月18日発行された。この本について仙秀は「墨線だけを木版とし手彩色で行ってゐるので、原本の趣きが少しも見出されない。」という(27)。有坂版は手彩色で色付けをしたから原本の趣を失ったのだろうが、多色であることもその要因で、さらには玩具の顔つきも原本に比べて下手である。本文は13丁(丁付けなし)、解説9丁。寸法タテ18.5cm×ヨコ13cm。解説で有坂は「二色づゝ取り合わせて描かれた玩具の種々相こそ、実に本書の貴重視せられる所以である。享保時より安永までの児童生活を知るに唯一は無二の好資料であり、而もその内の数種が、なほ今日まで残存される事を知れば、何人も覚えぬ微笑を禁ぜられぬであろう。」と記している(28)。



『うなゐの友』絵：清水晴風（図 10）

維新後の 1891(明治 24)年玩具絵本『うなゐの友』の初編が刊行された。『うなゐの友』の初編のあとがきによれば、清水晴風(嘉永 4 年生。“玩具博士”と呼ばれた玩具研究家。)が 1880(明治 13)年の春、竹内久遠(本名九一、号九遠。安政 4 年生。明治の彫刻家。東京美術学校教授。)の向島の竹馬会に出席しそこで「手遊乃品」(筆者注：おもちゃ)を見て美術に目覚め、友を通じあるいは自ら日本各地の手遊品を集め始めた。蒐集を始めてから 12 年、数は 300 点を超え、種類は 100 余種になった。それを眺め暮らしていたが、「木村ぬし」(筆者注：木村仙秀か)に勧められ 1 人で楽しむよりも広く人々に知って欲しいと出版をしたのである。

『うなゐの友』は清水晴風の死後、西沢笛畝(明治 22 年生。旧姓石川、本名昂一。日本画家。大正昭和期の人形玩具の蒐集・研究家。)が引継ぎ、1914(大正 13)年に全 10 編をもって完成した。『うなゐの友』は日本各地の郷土玩具を絵に描いて残そうとした仕事であり、玩具絵の販売が目的ではない。なお『うなゐの友』の「うなゐ」とは、「古語で子どもの髪形(髻髪)をいう、ひいては子どもの意となり、「うなゐの友」とは、幼い子供の友、つまり「おもちゃ」を指す言葉である。」(29)

1-5. おもちゃ絵を描いた人たち

巨泉は 1925(大正 14)年、郷土玩具雑誌『鳩笛』創刊号に「玩具の絵について」(30)を書きおもちゃ絵を描いた人たちに言及した。晴風の『うなゐの友』を評して世間が玩具の絵に注目し始めたのはなんとといっても『うなゐの友』が広がったことによること。『うなゐの友』には「写生にもものたりない処や、名称の間違っている処はあるとしても」晴風翁は「土俗玩具の趣味を一般に紹介した第一人者」であるとしている。

写生がものたりないと書かれた晴風であるが、久保田米所(明治 7 年生。本名満明。画家、号米斎。米僊の長男。)によれば、晴風は自分の絵こそ「真の玩具の絵」と自負し、自分は

画家ではないから技術は劣るが、玩具作者も絵を描く自分も素人だからお互い会い通じ合
って本物のおもちゃ絵ができる、玩具の絵に技術は反って邪魔をすると語ったという(31)。

その後名前が挙がるのは淡島寒月である。寒月のおもちゃ絵は「翁一流の俳書風の玩
具絵」と紹介している。次に西沢笛畝の『雛百種』の書名を掲出し、その作品の価値を高
く評価している。ところが笛畝が引き継いだ『うなゐの友』の続編には名称の間違いが多
く作品考証に問題ありとし、出版社の意向では仕方がないが、晴風の『うなゐの友』とは
別個の物として出版したほうが良かったとした。この言葉は笛畝が晴風の折角の名著『う
なゐの友』を貶めたと言うことであろう。この巨泉の反感を深読みすると、晴風が画材に
した玩具の多くは晴風自ら多年に亘り蒐集・研究したものであるが、笛畝(笛畝は西沢家の
入婿)が描いた『うなゐの友』の玩具は養父西沢仙湖が蒐集した玩具を素材にしたものであ
り、笛畝自身が蒐集し研究したものではないから結局貴方は付け焼刃だね、とこうい
たいのだろう。

晴風と笛畝とでは解説にも違いがある。晴風の『うなゐの友』を晴風版といおう。晴風
版はおもちゃ絵に簡単な解説が付してある。一方笛畝版は、おもちゃ絵とは別に巻頭に解
説ページを設け本格的なおもちゃ画譜を志向している。体裁を整えた笛畝版であったが巨
泉は気に入らなかった。

そして寒月の『おもちゃ百種』、『おもちゃ千種』、巨泉自身のおもちゃ版画集、『おも
ちゃ千種』、「おもちゃ箱」、田中緑紅の「ステンシル版のおもちゃ絵」、山内神斧『壽壽』な
どは全て『うなゐの友』にヒントを得たもので、それは一般好事家の周知のことである
という。『うなゐの友』以降のおもちゃ絵集はすべて『うなゐの友』を親として生まれた子供
ということのようである。

先の久保田米所はおもちゃ絵の作者として、晴風の他に人形を好んで描いたが世間であ
まり知られていないからと、京都の森寛齋と土佐派の画家名古屋の大石真虎の名を挙げて
いる。寛齋は御所人形を描き、真虎には名古屋地方の玩具を写した玩具絵巻があるという
(32)。また奥村寛純氏は復刻版『おもちゃ画譜』の解題「おもちゃ絵と川崎巨泉画伯」で
おもちゃ絵を描いた人として、清水晴風、淡島寒月、巖谷小波、川崎巨泉、清水桂月、西
沢笛畝、宮尾しげお、武井武雄の名前を挙げている。そして版画の中に郷土玩具を取り上
げた画家として棟方志功、徳力富吉郎、榊岡良といった人たちいると記している(33)。

淡島寒月は巨泉のおもちゃ絵版行に対する東京における最大の理解者であり協力者であ

った。巨泉にとってはおもちゃ絵の先達として、またその人柄と共に敬愛すべき人物であっただろう。寒月の著書『梵雲庵雑記』に内田魯庵の「淡島寒月翁のこと」がある。それによれば寒月は晩年になって玩具を蒐集し始め、その数は3000点ほどあった、『オモチャ千種』描いて頒布した、また、その蒐集範囲は外国のものが多く意外なものを所蔵したなどと書かれている。「父親は、力の画家椿岳で、浅草絵と言ふのを描いて居たが、それを真似て、天性の器用さから、翁も色々絵を描いて矢張バサラ絵と呼んで居た。元来落書が好きで、家の中には、所きはらず落書したり紙を貼りつけていた。」と生前の様子を伝えている(34)。

『梵雲庵雑記』の「編纂を終へて」で斉藤昌三が「大正末期に『椿岳漫画』の上梓があった筈に記憶している。」と書いた、その『椿岳漫画』は大阪市南区にあった木村旦水（旦水は巨泉のおもちゃ絵の同好の士）の出版社兼書店“だるまや”が1919(大正8)年4月28日付けで発行したものである。その絵の奔放な筆致には鳥羽絵風に手足の長いものもあり、描線の長短、連続と断絶の複雑な直線と円弧の筆跡は、おもちゃ絵として整った描線を見慣れた目には絵が画面から飛び出すようであり、椿岳の絵を見た後で寒月のおもちゃ絵を見ると整い過ぎているという印象さえ受けるのである。

淡島寒月が日本と外国の犬のおもちゃを描いたおもちゃ絵集に『十二支画帖 犬乃巻』（伊勢辰商店 大正10年12月11日発行）がある。この本には寒月と親交があったシカゴ大学の人類学者で日本では御札博士で通っていたフレデリック・スタールや、斉藤昌三がインドの王族と呼んだ Gureharn Singh の寄せ書きがある。以下はスタールの文章である。

“Kangetsu shows constant versatility, industry and skill in his dogs as in his earlier interesting works. May he long keep at his art. Taisho 10. 5. 20. Frederick Starr”

1926(大正15)年2月23日に寒月が没した後、同じ年の9月19日大阪の天下茶屋・楽園で追悼会が行われた(35)。主催したのは蘆田止水。蘆田は本名安一。大正から昭和前期の大阪を代表する趣味家の1人。身辺雑記風の個人誌『和多久志』を発行した。

『和多久志』は1920(大正9)年11月創刊、創刊号は秋の巻。これには淡島寒月や三田平凡寺(趣味山平凡寺)が寄稿している。本名は安一と書いてヤスカズだと紹介し、「私の道楽」で四酔山温学寺(これは三田平凡寺が開祖の趣味人の会「我楽他宗」の山号と末寺名。1919(大正8)年に会員を募集。会員はそれぞれ止水のように山号と末寺名を自称した。止水の本尊は観世音菩薩。天下茶屋の蘆田別邸には「日本、支那、印度、その他各国に渉る

土俗玩具等の蒐集を以て堂内に充つ。」と書いている。当館はこの雑誌を 11 号夏の巻、1928(昭和 3)年 8 月発行まで 11 冊所蔵するが、このタテ 15cm×ヨコ 11cm の小型の雑誌には、カットや表紙絵を大阪の竹久夢二とも称される大正期の抒情画家宇崎純一(ウザキ・スミカズ)や大阪の女流日本画家木谷千種が描いている。これは止水の自慢かもしれない。そのスミカズについて、肥田皓三氏は「宇崎純一の画業」で「スミカズの画風は、従来の写実的な日本画風の挿絵のしきたりを破った、自由と呼ぶのがふさわしいスケッチ風の大胆な省筆に特色がある。」、またスミカズのエハガキは竹久夢二や加藤まさをの作品に「劣らぬ魅力に富む出来ばえのものである。」と紹介されている(36)。我楽他宗仲間では河村目呂二が止水の似顔絵や第 7 号のカット・表紙絵を描いている(37)。

止水の実姉の夫である永田好三郎(有翠)も大阪の著名な趣味家であった。止水は同じ趣味人として有翠に好意を寄せた。有翠は巨泉のおもちゃ絵の同好の士でもあった。有翠は巨泉の『おもちゃ千種』がまだ刊行中の 1921(大正 10)年 9 月に死去し、最大の理解者の 1 人を亡くした無念を巨泉は『人魚』2 号に吐露している。さて止水は寒月をあらゆる趣味家の最高峰の人物としてその全人間像を愛し尊敬した。それ故この追悼会を発案したのである。寒月追悼会の発起人は石割松太郎、濱忠次郎、友野祐三郎、渡辺虹衣、川崎巨泉、高安月郊、伊達南海、中井浩水、南木萍水、山田新月、蘆田止水、木村旦水、三宅吉之助、三好米吉である。ここに参加した虹衣・萍水・旦水・吉之助・米吉は皆巨泉のおもちゃ絵の愛好者である。止水の「翁がどんなに広い趣味を持っていたか、どんなに深い造詣があったか、どんなに高い人格者であったか」今更言うまでもないだろうと言う寒月を敬慕する言葉は、参加者全員の思いであろう。御札博士フレデリック・スタールも前橋通訳を伴い参加している。当日の写真を見ると 24 名が会したようだ(38)。

竹久夢二とおもちゃを結びつける人はそう多くはないだろう。児童文化史研究家アン・ヘリング氏は夢二が「郷土玩具、伝統玩具に対する一般の関心が最もうすかった時代に、夢二は古くから伝わるおもちゃの価値を、明治の末期にすでに見直していた文化人の一人であった。」とし、「巖谷小波、『うなゐの友』の清水晴風、西沢笛畝、有坂与太郎などと並んで、竹久夢二を郷土玩具の再発見運動の先駆者の一人とみなすことは、十分可能である。」と評価し、「夢二が子供のための挿絵などに伝統玩具を積極的に取り入れようとした点は、もう少し評価してよさそうである。」という(39)。

巨泉と夢二。夢二は巨泉より 7 歳下の 1884(明治 17)年生まれ。2 人の共通点を挙げると

すれば、共にデザインに関わりおもちゃに関心を持ち、方法は違うが玩具を図画化したということだろう。また共通の知人に大阪・柳屋書店三好米吉がいたこともそうである。柳屋は夢二の版画や絵封筒などを販売していた店であり、1921(大正10)年頃夢二は柳屋に出入りしていたというから、巨泉と相知る機会もあったかもしれない(40)。夢二が玩具に関心を寄せそれを描いた行為は、おもちゃ絵による玩具の保存ではないし、巨泉のように玩具を独立した作品として表現しようとしたものでもない。夢二が描こうとした世界に、愛らしい小物・むかし・郷愁などのコードとして取り込まれたのではないだろうか。アン・ヘリング氏が紹介している夢二の『夢二エデホン』に描かれた鳩や猿、雀はイラスト風で大変可愛らしいものである。夢二をその先駆者とするなら、巨泉は運動には関わらないが、結果として郷土玩具の再発見者の1人となったといつてよい。

児童文学者巖谷小波もまたおもちゃ絵を描いた。馬のおもちゃ絵集に『十二支画帖 午の巻』(伊勢辰商店、大正7年9月15日発行)があるが、これはビルマ、インド、ロシア、イギリス、フランス、ドイツ、東京、会津、京都など世界と日本各地の馬の玩具が描かれているものである。横版の彩色木版画である。何故馬なのか。小波の四男巖谷大四が書いた小波伝『波のあしおと菟音』によれば、小さい頃から蒐集癖があった小波は、自身が1870(明治3)年の午歳生まれのこともあり、1906(明治39)年から午歳に因んで古今東西の馬の玩具などを集め始め、1918(大正7)年には1000点を超えたという。蒐集品を展示する千里閣なる建物を寄付で建て、無料で一般公開するという徹底ぶりであった。なお、小波は『巨泉おもちゃ絵集』の第11巻から15巻の題僉を書いた人である(41)。

吉田永光、久保佐四郎、島尻是空のおもちゃ絵が掲載されているのが、広瀬菊雄編『十二支画帖 亥子丑之巻』(伊勢辰商店 大正11年12月8日発行)である。吉田永光は亥(いのしし)、久保佐四郎は子(ねずみ)、島尻是空は丑(うし)を描きそれを一帖にしたものである。これも横版・彩色木版摺りである。

永光については、田中緑紅(明治24年生まれ。郷土玩具研究家・郷土史家。)が1925(大正14)年6月発行『鳩笛』4号の「おもちゃの蒐集(4)」で「東都に於ける羽子板師として特に有名な方です。」「以前午年に百馬会を催し、小さい土俗玩具の馬を百種一ヶ年に渡って配布され大変精巧で、佐四郎人形と陳び賞せられましたものであります。」と紹介している。



“「小型達磨」と「小型夫婦達磨」”(図 11)



“佐四郎氏の描きしもの [起上り 三種]”(図 12)

久保佐四郎(明治5年生。明治から昭和期の人形作家。)が作った達磨が『巨泉玩具帖』第3巻8号15(インターネット「人魚洞文庫データベース」の巻・号・通し番号)に佐四郎作の「小型達磨」と「小型夫婦達磨」として描かれている。小型達磨は画面中央右下の目入りの達磨、夫婦達磨は画面左上のもの。また『玩具帖』第12号18(インターネット「人魚洞文庫データベース」の号・通し番号)には“佐四郎氏の描きしもの [起上り 三種]”として巨泉の模写がある。上図の姉様人形に挟まれた小さな3体の絵がそれである。

島尻是空は日本画家。有坂与太郎の著書、1926(大正15)年、郷土玩具普及会発行の日本玩具集『おしゃぶり』第一編の本の装幀者である。

1-6. 玩具と戦争

おもちゃ絵には古い玩具もあれば新しい玩具もある。その描き方も自由である。古玩を描いたにしても古さをリアルに描いたものではない。それは過去の時代に出来たということであって、おもちゃ絵を見て古玩と判断することは出来ないし、またすることもない。

晴風の絵は真面目な型崩れしない律儀な絵に見える。おもちゃ百種に見る寒月の絵は巨泉の言う俳画風という味わいと、上手とか下手とか分別臭く見ることを嗤うが如く、ただそこにある絵を楽しむ、味わう、良寛の書を見るような気持ちにさせる。巨泉の肉筆画のおもちゃ絵は丸みを帯びた柔らかな線、まるで網の上で焼かれている餅がふくつらと膨らんだ時のような味わいがある。版画になると、初摺のものだろうがその線はもっとしっかりしたものになる、それでも何処かはんなりした雰囲気がある。小波の絵になると、その雰囲気は寒月の父椿岳の漫画のように元気、元気で絵が踊っている。

各人各様のおもちゃ絵を楽しむこと、これは玩具の楽しみ方とはまた違ったものである

う。それは玩具とおもちゃ絵の用途の落差として現われてくる。その極端な例が太平洋戦争時に現れた玩具の戦争協力というアジテーションであった。太平洋戦争が勃発し玩具運動のリーダー有坂与太郎や日本民族玩具協会の有志たちは玩具も進んで戦争遂行に奉仕することを訴えた。大東亜共栄圏の班主として南方アジアに侵攻して行く日本。日本の玩具はもはや郷土玩具ではなく、日本民族の民族玩具となって戦争に奉仕する任務を進んで担おうとした。また一方で民族玩具を唱道した彼らが見た夢は、アジア南方圏の人々の意識を引き上げ、彼らに玩具を提供し、玩具を通じて相互交流を楽しむと言う観念的玩具ロマンチズムを抱き、日本とアジアの玩具楽土を夢みていたのである(42)。

1943(昭和18)年当館が行った巨泉のおもちゃ絵と玩具の展覧会は、玩具を民族芸術という名のもとに有坂の言う戦争遂行に奉仕する道具として展示したものであった。それが、「[1] 人魚洞文庫の展示」で紹介した玩具を神祇(=天皇・万世一系)、武器(=武器)、武者人形(=兵隊)、鬼退治(=鬼畜米英退治)、軍用動物(=忠誠心)、猛獣(=勇猛果敢)、不倒(=神国の負戦神話)、経済力(=経済力)、増産(=増産)、海上輸送(=兵站線・支援)、人形総動員(一億総動員)、大東亜共栄圏及同盟国の12の主題(カッコ内が見立て)に別けて展示したものである。太平洋戦争下における玩具の模範的展覧会である。

巨泉も玩具の南方進出を歓迎した。巨泉もまた南方進出が戦争によって生じていることの是非を問うことはない。玩具を与えることによって現地の子どもたちを未開から「文明の子ども」へと導きたいと願っていたのである(43)。ただし巨泉の共振を有坂と同じイデオロギー圏の響きと考える必要はないが、巨泉の根底には、日本固有の玩具への絶対的信頼があり、それが玩具を絶大化させ、玩具による人間の啓蒙という玩具精神主義的考えを呼び寄せたのであろう。戦争遂行を輔弼する玩具、一方おもちゃ絵は遊び心を映した遊び品としてひたすら平和な時を待っていたのだろうか。

1-7. おもちゃ絵の出版と販売

巨泉が描いたおもちゃ絵は次ぎのような形態で出された。(1)販売形態は一般に書店を通じて販売されたもの、事前に購入者を募り販売したもの、一種の会員制。(2)出版形態は自費出版と出版者による出版(3)書籍の形態は洋装、和装、折帖、軸物など。(4)印刷形態は機械印刷、木版摺り。それと肉筆があった。

会員を事前に募っておもちゃ絵を売るというやり方が何時から始まったのかわからない

が、大正時代には巨泉の他に人形師の久保佐四郎も同様のやり方で人形やおもちゃ絵を頒布していた。1925(大正 14)年 10 月発行の柳屋画廊のカタログ『柳屋』28 号に、巨泉の「十二月玩具絵の会」の案内記事と共に佐四郎の「御殿玩具」と「郷土玩具絵」の頒布会の記事が掲載されている。

巨泉については「現代玩具絵界の権威巨泉川崎氏の肉筆十二ヶ月の玩具絵は諸氏の熱望するところであります今回我々の乞を入れての御揮毫。」とある。佐四郎のおもちゃ絵は、色紙形絹地に原寸大で彩色もそのまま描いたもので、30 枚 1 組。毎月 3 枚宛頒布。入会費 5 円。10 回まで各 5 円で合計 55 円と記載されている。このように当時の玩具趣味家たちにおもちゃ絵や人形を頒布する方法の 1 つとして会員制があった。大正時代のおもちゃ絵の制作方法は木版又は肉筆が主であり、その形態は和紙の一枚ものや、佐四郎の色紙型絹地に描くなど手作りの風合いを味わうもので高度に趣味的であった。だからおもちゃ絵を描いた人たちには最初から石版や機械印刷で出版しようという考えは毛頭なかったと思われる。その意味からも一般書籍のように出版出来るものではなかったし、また趣味性が高く購入層もそう広くはないおもちゃ絵を仮に出版依頼しても、受注しようという出版社は多くはなかった筈である。巨泉のおもちゃ絵で自家版以外の出版は、1 冊を除いてすべて巨泉の強い支援者であった木村且水のだるまやが引き受けている。その形態は和紙和装本であった。

購入者が限定されていたおもちゃ絵であるが、巨泉は 1919(大正 8)年に大阪三越で最初のおもちゃ絵展(恐らくは即売もしたと思われる)を開催している。その後 1925(大正 14)年にも展示会をしている。大正中期から昭和初期にかけてデパートを使ったおもちゃ絵や人形、玩具の販売形態が定着して行き徐々におもちゃ絵が一般に浸透して行ったのであろう。

1-8. 巨泉の自家版

ともかく巨泉はおもちゃ絵を肉筆や木版摺りで出すことに拘っている。例えば毎年干支にちなんで制作したものに「土俗玩具の春懸け軸物会」があった。自筆であるだけに描ききれないと巨泉を嘆げかせた肉筆掛軸頒布会である。

考えてみれば、肉筆で 10 も 20 も同一のおもちゃ絵を描くという行為は写生の優れた技術は言うに及ばず、精神的にも相当な負担であったろう。巨泉は肉筆おもちゃ絵集『おもちゃ千種』を書くに当たり、20 作以上は首がちぎれても描きませんと悲壮な決意表明をし

ているからである(44)。

巨泉の自費出版物（自家版）は彩色、紙の選定など何れも凝った作りになっているが、それは購入者のためではなく、巨泉自身の謂わば自己満足のための作法であろう。自家版を制作する意図について、文章になった巨泉の言葉はないが、版画家武井武雄の次のような私刊本の哲学があったのだろうと想像する。「私刊本とは自分のために一冊を作るものだ。しかし版画と同じように自然に複数出来ざるを得ないものだから、最も印刷効果製作効果のいい部数だけを作って、自家一冊の外は同好の士に頒^{わか}つべきだ、というわけである。これが本当の私刊本というものの面目だと思っている。」「読者にうける必要のない、評判などを全く気にしない、自分に飽くまで忠実なもの」これが「私刊本の背骨」でなければならない言う。そして「私刊本は個性的であるべきだ。従って独善的だという非難は甘んじて受けるべきである。」というのである(45)。

巨泉が自家版『おもちゃ千種』（1921(大正 10)年)に書いた言葉がある。おもちゃ千種を描く発意は、日本伝来の土俗玩具が西洋かぶれの模造品によって駆逐されていくのは日本人として残念至極である、せめて土俗玩具、絵馬、縁起物を描いて残そうということにあった。

巨泉のこの企てに賛同してくれる同好の士を全国に募り自家製作を開始したのであったが、この企ては武井武雄が言う本来は「自分のための一冊」であり「自分に飽くまで忠実なもの」を作品化しそれを頒布する行為であろう。作品の購入者は同時に金銭的支援者という関係性も成立することになるのである。

次のような例があった。巨泉の代表的自家出版物に『郷土の光』がある。これの刊行開始が1916(大正 15)年9月、完成が1928(昭和 3)年5月で1年9ヶ月の間毎月刊行した。『おもちゃ千種』も2年、巨泉の自家版は容易く出来るものではない。作品完成まではその作業に心を砕くわけで、収入もままならないこともあったと思われる。『郷土の光』が第9集まで出たとき、巨泉は出版のための資金繰りに『巨泉漫筆おもちゃ箱』の購入依頼を会員に申し出ている。おもちゃ箱は200部限定で頒布し若干残部があったのだろう。「一時払い、分売ともに一方ならぬ御援助をお願いした事を厚く御礼申し上げます。」と個人誌『人魚』6号の「郷土の光について」に書いている(46)。このように各地に散在する巨泉の同好の士=会員は篤く巨泉の芸術活動を支えたのである。

自家版の1つに1919(大正8)年の『巨泉おもちゃ絵集』がある。毎月5枚ずつ発表し、20ヶ月で100枚の作品となった。最終的には5帖にまとめられた。解説帖は序文を渡辺虹衣が書き、残りの4帖の題簽は淡島寒月、巖谷小波、水落露石、中井浩水などが書いた。寒月・小波・浩水は無論玩具趣味の人であるが、露石はどうなのか。巨泉が露石の聴蛙亭を来訪したのが1907(明治40)年3月17日のこと。露石とは以前からの知人であった(47)。

巨泉がおもちゃ絵に用いた用紙は錦絵の寸法を基準にしている。顔料も錦絵に用いたものを使用したと考えられる。この本の寸法は奉書二ツ切りで縦絵。タテ約49cm×ヨコ約24cmの大きさである。「木版色摺の画面の一部を、群青、緑青、朱、丹、胡粉等で加筆し」「特に本金泥を用いて模様」などが描かれている(48)。これは木版印刷であったから印刷部数は限定300部であった。事情を明かしていないが、巨泉はこの版木を叩き割って絶版にした。巨泉の激しい性格の一端を物語る。絶版により古書の相場が上がったことを喜んでいもいる。版画の場合、版木の保存が大変で彫師の2階を占領しているのを気の毒がっているし、また自宅に持ち帰っても保管ができない、結局処分して絶版にすることとなる。

この絵本の頒布当初の価格は、おもちゃ絵5枚に解説付きで1部1円であった。合計100枚で総額20円である。当時の1円は現在の価格で5000円ほどになるのだろうか。すると合計10万円である。これはまさに豪華本である。昭和初期に巨泉は『巨泉おもちゃ絵集』の残部の3部の内2部を1部35円で手放しても良いとっている。手放すとは巨泉のいい方に従えばお嫁入りさせるである。これは恐らく和装にして5帖にまとめた物を指すのだろう。コーヒー一杯が10銭のころである。巨泉曰く「お安いか、お高いか、其れは望まれる方の思召し」であると(49)。

『巨泉漫筆おもちゃ箱』(以下『おもちゃ箱』とする)は関東大震災後の1914(大正13)年に刊行された。1913(大正12)年9月の関東大震災により東京の玩具界と貴重な玩具は壊滅的状态となった。しかもこの時代すでに外国製輸入玩具の日本への流入は時の勢いであった。外国製玩具の輸入の趨勢と失われ行く祖先が残した純日本の玩具。その危機意識が『おもちゃ箱』を刊行した最大の動機であった。

純日本の玩具と言うものは「我國民性を發揮したものであって、郷土風俗や、幾多の面白い口碑伝説を取材として其れがいろいろの形^ちのものに作りあげられて」いる。そして玩具や縁起物には小さいながらも豊かな芸術味があり、色彩の調和、紋様には「純日本の気分」が現れている。これら純日本の玩具が今後永続することは不可能であるし、復興す

るにしても「洋風を加味」したものになるだろう。だから巨泉は「多年日本玩具蒐集研究の傍ら漫筆と言った風に殆ど日課のように」描いていた「玩具絵」の中から面白そうなものを選んで木版画としたのであった(50)。

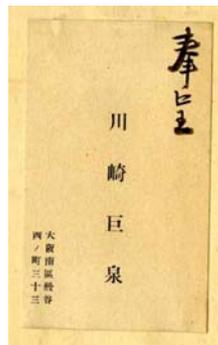
ここに述べられているのが巨泉の玩具観でありその立脚点であろう。巨泉にとって最も理想的な玩具とは近世期の日本が生み出した純国産玩具であった。それが玩具の評価基準の原点である。巨泉はこんなことを書いている。

「古い我国の郷土玩具も、どうやら滅亡の時期に達して来ました。近い内には、其れ等のものが、純骨董品になってしまって、目の前に見るものは何れも、西洋風のピカピカした、私等の嫌いなものゝみになってしまうだろうと思われてなりません。」(51)

西洋風のピカピカとは評価基準の原点から最もマイナスの地点にある玩具であり、西洋かぶれの模造品である。そのマイナス評価の範疇には、例えば上辺だけで内容のない文化主義や名前だけの文化住宅そしてモダンガールの醜態もそうであり、巨泉に倣って敷衍すれば、物質的欲望を求めるのに汲々として、趣味を忘れた人間たちと、物まねが横行し、創造性を失った玩具を作って恥じない人びとも当然含まれるのである。それはまた都会と田舎、キネマと玩具など前者を否定し後者を肯定する二つの対立軸として巨泉の中に意識化されたのである。そして巨泉は時代の趨勢から半ばあきらめと新しい玩具への期待という2つの極の間で揺れ動く自分を意識しながら、新旧の玩具を眺めていたのであった。



『巨泉漫筆おもちゃ箱』(図 13)



巨泉の名刺(図 14)

なお右上の写真は当館が所蔵する『おもちゃ箱』(一之二)のあそび紙に貼付された“奉呈 川崎巨泉 大阪南区鰻谷西ノ町三十三”の名刺である。巨泉は『人魚』5号の「玩具研究資料献本」で1915(大正14)年4月に『おもちゃ箱』絶版の記念に『おもちゃ箱』100枚箱入りを玩具資料として保存のため以下の施設に寄贈している。名刺はその時のものである。

東京帝室博物館、奈良帝室博物館、京都恩賜博物館、東京帝国大学附属図書館、東京帝国図書館、東京早稲田大学図書館、京都府立京都図書館、大阪府立図書館、東京美術学校、東京女子美術学校、京都高等工芸学校の 11ヶ所であった。ただし某地の図書館に送ったが何の便りもなくうやむやになって不明になってしまったのか物足りないが、「誰か玩具好きの館員の手に渡って、窃かに研究材料になってゐるのでしょうか。」とは巨泉の皮肉であろうか(52)。図書館司書として耳の痛い話しである。なお施設の固有名詞は巨泉が書いたママとした。

さてこの本は巨泉漫筆おもちゃ箱頒布会刊行の名前で頒布された。まず全国の趣味家に趣意書を出し会員となってもらい、また書店に取り扱いを以てする形で本を捌いていった。このおもちゃ絵の用紙は生漉厚口の大広奉書の四つ切型。生漉大奉書は「儀式用の包紙、目録用紙」として用い、「上品は純楮製」である(53)。無論巨泉は楮 100%を使用したであろう。大広奉書の四つ切りは錦絵に使われ、その肉厚の紙は永年の保存に相応しいものである。寸法はタテ約 22cm×ヨコ約 29cm である。木版着色摺り。「是は玩具を絵画化したので其物に応じた景物の花とか、又は器物」などを絵に配したものである(54)。またおもちゃ絵の落款には笛洲作の「人魚洞」、香迂作の「芳齋」・「碧水居主人」、「巨泉之印」、「碧」の 5つを使っている。限定 200 部のところ 130 部は捌けた。これも版木保管上の問題から絶版としたが、その際版木オモ版のみで小箱を作って希望者に分けたいと洒落た提案をしている。オモ版とは主版と書き墨線版のことで「木版画の基本をなす版のこと」である(55)。この『おもちゃ箱』のおもちゃ絵は羽二重友禅、封筒、ポチ袋などに使われたという。無論巨泉は使用料を取っていたと思われるがそこまでは明かしていない。これも昭和初期に 30 円で販売すると宣伝している。

『おもちゃ千種』は淡島寒月の『おもちゃ千種』に倣って巨泉が 1921(大正 10)年に企画したものである。限定 20 部、毎月 15 枚を描いて頒布した。用紙は別漉大形奉書二つ折り。タテ約 39cm×ヨコ約 26cm の大きさである。これは版画を用いず全てが手書きのおもちゃ絵で、完成に 2 年を費やしたのである。

1-10. 巨泉を支えた同好の士というネットワーク

結局『おもちゃ千種』を求めた同好の士は 18 名、巨泉は趣味家が多い東京から申し込みがないと嘆いたが最終的には東京からもあったという。巨泉は『人魚』1 号で申し込み順

に名前を列記したが、名古屋は早川、徳島は芝、長崎は松田、本山桂川、京都は山崎、六甲の小澤と言った人たちと、大阪では永田有翠、木村旦水、三宅吉之助らが顧客だった。この他にこの企てに協力したのは、淡島寒月、渡辺虹衣。販売に協力した店として柳屋書店(三好米吉)、吾八(山内神斧)、郷土趣味社(田中緑紅)、おもしろや(東京にあった郷土玩具店)などが挙げられる(56)。巨泉は協力者からは描くおもちゃの提供も受けた。だから巨泉のおもちゃ絵はおもちゃ絵を描いたのは巨泉1人であるが、実は対象となった玩具を巨泉に提供し、または寄贈した全国の玩具愛好家たちの協力なしには成立しなかったと見てよい。先に個人名を挙げた木村旦水、本山桂川は販売の方面でもだるまや、土の鈴会として協力している。

巨泉のおもちゃ絵の頒布には巨泉を囲むおもちゃ絵ネットワークともいべき同好の士が存在していた。それが上記の人と店であったが、他にも大阪には青賢肇、青山一步、南木萍水、村松百兎庵、西田静波、梅谷紫翠、肥田溪楓らがいたし、京都の木戸忠太郎らも巨泉のおもちゃ絵頒布を支援する核になった人たちであろう。ここに名前を挙げた人を簡単に紹介すれば、青賢肇は本名青山賢肇、大阪朝日新聞社の調査部に勤務した人。『苔瓦堂日録』という日記を残した。青山一步は本名冬樹、放送局に勤務した。南木萍水は本名芳太郎、郷土雑誌『上方』を主宰、南木コレクションが大坂城天守閣にある。村松百兎庵は本名茂、大阪国文社に勤務した。西田静波は本名清次郎、職業は棕櫚商。梅谷紫翠は本名秀文、歯科医。木村旦水は本名助次郎、書店兼出版社“だるまや”を経営。三宅吉之助は宇津保文庫主宰。書籍コレクター。本山桂川は長崎の民俗研究家。巨泉のおもちゃ絵展を長崎で開いた。三好米吉は柳屋書店(後に屋号を柳屋画廊に変える)を経営。大阪で竹久夢二の作品を販売した。山内神斧は本名金三郎、東京美術学校卒業、美術工芸品販売店吾八や梅田書房を経営。永田有翠は本名好三郎、趣味人として著名、蘆田止水は義理の弟。肥田溪楓は本名弥一郎。肥田家の宗家(本家)を継ぎ、虎屋銀行、虎屋信託の取締役、大阪聚文社の監査役などを務めた趣味人。掬水庵と号し「楓文庫」を建て、個人の趣味誌『あのな』を発行した。渡辺虹衣は本名源三、骨董研究家。

この人たちの他に小谷方明氏は巨泉を支えた「おもちゃ愛好家」として次の人たちの名前を挙げている。小谷方明氏は大阪の民俗学者で子どものいない巨泉に可愛がられた人であった。田中亀文洞、鷺見東一、西村庄、林家染丸、西田亀楽洞、高畑案山子、河本紫香、本田溪花坊、粕井豊誠、浪花贅六庵、山本芳夫、芳本倉多楼、大沢鯛六。そして「全国の同人の人達との連絡誌」として大正十年から昭和初年にかけて、「人魚」「人形筆」等の小雑

誌を発行していた。」と紹介している(57)。



『人魚』1号～3号(図15)



『人魚』4号～7号(図16)

ここで巨泉の個人誌『人魚』について少しだけ紹介すると、『人魚』の創刊は1921(大正10)年2月。きまぐれにはじめたものだから何時どうなるか分からないと煙幕を張りつつ始まった。この個人誌は巨泉の肉声を聞くことが出来る唯一のものであり大変貴重である。ここには巨泉の気持ちが包み隠さず率直に語られている。悩み、苛立ち、喜びなんでも綴っている。愛読者からの玩具に関する質問、巨泉の趣味家探訪記、玩具の民俗的説明、著書の解説、その他詩があり戯れ歌ありで巨泉の世界に引き込んでくれる。当館には1928(昭和3)年8月発行の7号まで所蔵している。注記に第1号から第7号までの出版年日と総ページ数を挙げておく(58)。

さて上記の人たちと巨泉が属した趣味の会が幾つかあり、最盛期には全国にどれほどの人が巨泉を支えたのだろうか。巨泉のおもちゃ絵は大正中期から昭和前期にかけて版行・頒布されたわけであるが、おりしもこの時代はおもちゃが流行した時期でもあった。巨泉のおもちゃ絵は一般には高額かもしれないが趣味家たちからすれば普通の買い物かもしれない。巨泉が『おもちゃ絵集』を版行し始めた1919(大正8)年にはまだ関心も薄かったが、大正末期から昭和前期はおもちゃの展示会がデパートで開催され人気で良く売れた時代でもあったから、おもちゃ絵にも次第に関心が集まり、会員への頒布と一般への販売とで巨泉夫婦が生活できた時代だったのであろう。

1-11. 『おもちゃ画譜』について

巨泉の『おもちゃ画譜』は1932(昭和7)年に第1集が出て、1935(昭和10)年第10集で完結した。大和綴、石州和紙を使った半紙本である。石州和紙とは山口県産、楮100%で漉かれ丈夫で記録用、重要書類用紙に用いられる(59)。そこに描かれた玩具や縁起物は口絵以外は単色で、1点1点巨泉の解説付きである。これは『巨泉おもちゃ絵集』『巨泉漫筆おもちゃ箱』『おもちゃ千種』とは明らかに違っている。おもちゃとタイトルにあるが、お

もちゃ絵が主ではなく解説と共に読む本である。

巨泉は1920(大正9)年辺りから郷土玩具について文章を書き始めた。それから15年ほどの玩具に関する知見の蓄積がこの本に集大成されている。しかしそれは郷土玩具の民俗学的な研究や詳論ではない。玩具を実地に見、調べた玩具論であり貴重な玩具文献の1つといえよう。だから「少なくとも郷土研究家としてその地の玩具を調べ風俗を述べ他地方の同類のものと比較対称せんとする士は一読すべきだ。」(60)と書かれたり、「玩具蒐集研究家は無論趣味家、郷土研究家の座右置くべきの書なり。」とする宣伝文句が和泉の民俗学者小谷方明氏が主催した郷土和泉刊行会の会誌『郷土和泉』に掲載されたのである(61)。

だが巨泉のおもちゃ絵が「郷土研究家の座右置くべき」と言われるところまで来てしまったことに異和を感じざるを得ない。巨泉のおもちゃ絵とはそもそも趣味の絵であって、比較研究用などではなかった筈である。それが「歴史・特長・材料・製作方法にまでわたり克明な解説を加えたもの」(62)となり、おもちゃ絵という自律した作品ではなく、それに付随した文字情報によって評価されたのであれば、それは“おもちゃの解説書”であって巨泉の本道のおもちゃ絵とは別のジャンルに属す作品なのではないか。それが異和の根拠である。したがって川口栄三氏がこの本を「清水晴風の“うなゐの友”に比すべき木版玩具絵本」(63)という評価にも異和を感じざるを得ないのである。

『うなゐの友』のおもちゃ絵は彩色が施されているが、『おもちゃ画譜』のおもちゃ絵は木版・単色で、しかも詳細な解説付きである。『うなゐの友』には『おもちゃ画譜』のような詳しい解説がない。そう見ると、『おもちゃ画譜』は『うなゐの友』の系列には属さないと考えてよいのではないか。『おもちゃ画譜』以前に玩具の写真と解説が掲載された本はあるが、おもちゃ絵と共に詳しい解説を付した玩具絵本は巨泉の『おもちゃ画譜』が最初のものではないだろうか。その意味では画期的なおもちゃ絵本の誕生であったといえよう。

ただし評価に関していえば石沢誠司氏は『おもちゃ画譜』よりも、寧ろ『うなゐの友』に比すべき玩具絵本は『巨泉玩具帖』『玩具帖』との評価をされた。それは「『おもちゃ画譜』とはまったく異なった精細な挿絵がここには展開されている。」ことを重視されたからであるが、何を評価するのかによって判断が分かれるところである(64)。

1-12. 浪花おもちゃ学の鼻祖にしておもちゃ研究家巨泉

我々は「これがおもちゃ絵だ！」展の図録に巨泉の年譜を掲載することにした。巨泉の年譜についての底本は、1943(昭和18)年当館作成の『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本

『展覧会目録』掲載の「巨泉略年譜」以外にはなく、この年譜に加筆することとした。そこで年譜にはなるべく沢山巨泉の著作を掲載したいと調査を始めた。すると大正から昭和前期に大阪の出版社が発行した郷土雑誌や大阪趣味の雑誌に巨泉の名前を続々と発見したのである。

これは我々の認識不足を露呈した格好になった。この時はまだ巨泉とは、おもちゃの絵を描いた人という程度の認識しかなく、しかも参考にした当館の目録はおもちゃ絵を描いた画伯巨泉を紹介するのが目的であったから、玩具研究家巨泉というもう一方の側面は全く省かれていた。従って年譜には主要なおもちゃ絵集や若干の趣味の会などは掲載されているが、雑誌等に発表した研究や随筆などは一切掲載されていなかった。

こうして認識を新たにした我々は『郷土雑誌・上方』『郷土趣味・大阪人』『趣味と名物』といった郷土大阪の雑誌から、更に『郷土研究』『旅と伝説』『鳩笛』『土の鈴』と郷土研究や玩具関係の雑誌へと巨泉の著述探しの範囲を広げて行った。

筆者などは恥ずかしい話であるが、民俗雑誌『旅と伝説』誌上で柳田国男や南方熊楠と並んで巨泉の名前を見た時、もしかしたら巨泉は民俗学の視点から玩具を研究した人で民俗学研究にも参加したのではないかと想像し、1913(大正 2)年に柳田国男が発行した雑誌『郷土研究』に目を通し、巨泉の名前を探したものであった。無論巨泉は民俗学に関係したわけではないから名前はなかったのであるが。

『旅と伝説』第 4 号、1928(昭和 3)年 4 月に玩具に関する記事が要求されていることを編集後記に萩原正徳が書いている。そして早くも 1928(昭和 3)年 6 月発行の 6 号には、郷土玩具の特集が組まれた。西沢笛畝「郷土玩具の種々相」、有坂与太郎「郷土玩具概説」が掲載された。巨泉も翌 1929(昭和 4)年にはここに登場することになる(65)。

斉藤良輔編『郷土玩具辞典』(東京堂出版 昭和 46 年)の「日本の郷土玩具—その歩みと系譜—」におもちゃの世界に関心を持った 2 つのグループとして学者派と趣味派があつて、学者派は坪井正五郎・柳田国男・折口信夫らで趣味派は清水晴風・淡島寒月らだとの記述がある。先の与太郎、笛畝、巨泉の 3 人は無論趣味派ではなく学者派であり、玩具研究家としても位置付けられるだろう(66)。

大正から昭和期にかけて、大阪の郷土趣味誌や郷土研究誌、あるいは大阪三越呉服店が大正から昭和期に出版した商業誌『大阪の三越』(67)に 3 年半に亘っておもちゃを紹介する文章を掲載するなど、巨泉の執筆は民俗や玩具の専門誌から一般誌までに亘り、大阪のおもちゃ博士としての地位を確立していった。大正中期から昭和戦中期におもちゃ

を研究した巨泉は浪花おもちゃ学の鼻祖とってよいであろう。

1-13. おもちゃ絵集の値段

1923(大正 12)年 5 月発行の三好米吉編発行・柳屋画廊のカタログ『柳屋』22 号の「おもちゃ絵本」のコーナーに『おもちゃ千種』『巨泉おもちゃ絵集』などが掲載されている。以下に巨泉のおもちゃ絵の書名と販売価格を挙げる。

『おもちゃ千種』「片面絵目録付、三百枚」350 円。

『巨泉おもちゃ絵集』「版画 百枚」35 円。

『巨泉おもちゃ絵集』全 5 冊帙入 42 円。

『巨泉おもちゃ十二支』1 冊 5 円 20 銭。

巨泉のおもちゃ絵集と比較するために掲載されている他のおもちゃ絵集の書名と販売価格を挙げておく。

『うなゐの友』全 8 冊 各 3 円 10 銭。(京都のちどりやでは大正 14 年に全 10 冊 35 円)

『雛百種』全 3 冊 8 円 40 銭。(京都のちどりやでは大正 14 年に全 3 冊 10 円)

外国玩具『壽々』全 5 冊 7 円 62 銭。(山内神斧の私家版)

淡島寒月筆『十二支画帳犬の巻』1 冊 2 円 90 銭。

これを見ると巨泉のおもちゃ絵の相場がかなり高額だったことが分かる。特に『おもちゃ千種』は 300 枚のセット価が 350 円である。これは相当の高額である。当時の公務員の給与を参考までに挙げると大阪商品陳列所の雇員は年俸 552 円、大阪府立図書館長が年俸 3100 円の時代である。おもちゃ千種には 18 名が購入したのだから、単純に 6300 円の売り上げであった。これは 1923(大正 12)年当時の大阪府知事井上孝哉・土岐嘉平・中川望らの年俸 6000 円を上回る額である(68)。

1-14. おもちゃ絵を楽しむ

巨泉が勧めるおもちゃ絵の遊び方、楽しみ方の例を『人魚』3 号の「巨泉漫筆おもちゃ箱」から拾ってみる。おもちゃ箱の版画は全て横絵で、一枚の大きさが縦七寸五分、横九寸五分。絵には干支の十二支、春夏秋冬の四季と 12 月の玩具があって、月々に関連する絵を選んで額面に入れる、正月は鶯に梅、日向の羽子板、2 月は伏見や今戸の土狐といった風に入れ替える。夏祭りや酉の市にはそれに関連する絵を入れて楽しむ。またこれを書帖に仕立てて応接間などに置き来客に見てもらおうのもよい。玩具絵巻に仕立てるのもよい。



何枚かを選んで枕屏風に貼ったり、二曲、六曲屏風に貼り混ぜにすれば玩具屏風が出来上がる。当時の好事家・趣味人もおもちゃ絵をこんな風に仕立てて楽しんだのかもしれない(69)。こういった楽しみ方は和本仕立てや洋装本では味わうことができない。一枚物の版画は応用がきき色々な楽しみ方が出来た、巨泉はおもちゃ絵を購入した趣味人た

ちと交歓し、自分のおもちゃ絵を何時までも飽かずに楽しんでもらいたい、しかも筐底に秘蔵するのではなく生活空間に掲げて趣味的生活の糧となることを願っていたのである。

自費出版などは全国の玩具蒐集家・趣味人に向けて販売され、巨泉の頭には一般家庭に向けて販売しようという気持ちは当初はなかったようだ。それが少しずつではあるが、一般家庭にも普及したいと思うようになった。それは巨泉の玩具教育観があったからだ。物質主義を排し、玩具の力で自己本位でない人間、もっと無邪気、もっとウブな人間に作り替えたい、それで初めて平和な世界、平和な家庭が作れる、と考えていた(70)。おもちゃ絵もそれに役立つと考えてのことであろう。

1-15. 巨泉のおもちゃ絵作法

「其れから人形や玩具を描くのに其人形や玩具の縁起や伝説も一と通り調べた上でなければ筆を執る事は出来ません、沢山のものの中には呪禁や凶事に用ひるものもあります。そんなものを祝ひ事の絵に描く事は出来ません。」「玩具其物が無邪気なものでありますから、是を写す際には自分の心も無邪気にして描いて行くのであります」(71)

「玩具の絵は蒐めて其れを研究しているものでなければ到底其真味を表現する事は不可能であります。土俗玩具のいろいろのものには各地方に依って異なった特徴があつて其れが色彩、紋様、形態等に顕れているのであります。是等のものが古き伝統を以て今日まで其幾分かが残されて来たのであつて其れが土俗玩具としての真の面白味のある貴き芸術品であります。」(72)

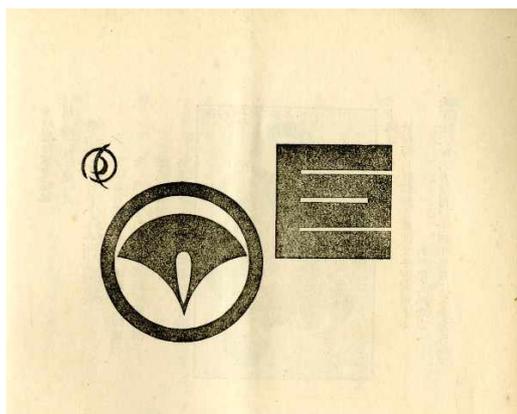
おもちゃを蒐集し、色彩、文様、形態を丹念に観察し邪念を棄て童心に戻つておもちゃ絵を描く。これが巨泉のおもちゃ絵作法であつた。おもちゃを愛した巨泉は玩具に厳しい目を向けた。巨泉の玩具の品定めは、新品だから悪いのではなく、古いものも一概に良いとは限らない、「古いものでありさえすれば、(中略)色彩が面白いとか、雅味があるとか、

世間なみに誉めて見る人もあるが、私はコンナのを好まない」といい、「拙作は何処までも拙作として、一文の価値すらないものである」と言い切っている(73)。

巨泉は犬張子とお伽犬を例に引き、「此二つのものは何れも写生より出でゝ図案化したものであって、到底一朝一夕に出来上がったものでは無いのである。」と書いている(74)。巨泉にとっておもちゃとは人、物、動植物を写生によって図案化する創作物なのであった。

巨泉がおもちゃに興味を持ち始めたのが1903(明治36)年28歳のころ、それから12年後40歳のとき、1916(大正5)年11月に“おもちゃ絵の会”を始めた。42歳の1918(大正7)年1月、おもちゃ絵の処女出版『巨泉おもちゃ絵集』の第1集が発行された。この辺りから本格的な巨泉のおもちゃ絵時代になって行くのである。

< 参考資料 ① >



巨泉の紋章とマーク・(『人魚』4号)

右の角型は、趣味に用いる紋章。中央は人魚洞のマーク。丸に鱗を描いたもので、「人魚の鱗の一片を図案にしたもの」。左は巨泉が平生用いているサインで、丸に巨の字。「納札又は略号として巨の字の変名」を用いた。

< 参考資料② >

巨泉の印譜 『川崎巨泉印譜』[発行者・発行年不明]より抜粋。

【1】 蝠亭作



【2】 椿所作



【3】 笛洲作



【4】香迂作



碧水居主人

【1】北川蝠亭 名は藤太郎。大阪の人。陶印家として著名。朱泥とも号す。1916(大正5)年2月没す。76歳。(出典：伊達俊光「北川蝠亭君」『大大阪の文化』金尾文淵堂 1942(昭和17)年)

【2】岡本椿所 名は義邦、あざ名は叔礼。津山の人。東京に住す。中井敬所門。昭和8年(1933)没す。(出展：水田紀久篇「続補日本印人伝」『日本の篆刻』1966 中田勇次郎編 二玄社)

【3】河西笛洲 名は由また義弘。甲斐山梨の人。正しくは「かさい」と読む。その号も笛吹川にちなむ。大阪谷町のち天満に住す。晩に奈良東大寺勸進所に疎開。昭和22年(1947)7月7日没す。帰去来印譜・酔翁亭印譜あり。(出典：水田紀久篇「続補日本印人伝」『日本の篆刻』1966 中田勇次郎編 二玄社)

【4】橋本香迂 名は愷。字は三生。香迂又は栗佛と号す。加州金沢の人。大西金陽に就て絵画及び篆刻の術を学ぶ。京都で園田湖城と平安印会を起す。晩年浪華に来て東区広小路に住し印刻を業とする。大正昭和年間の人。(出典：『続大阪人物誌』 下巻 石田誠齋著 石田文庫発行 柳原書店発売 昭和11年)

注記

原文の引用で、歴史的なか使いはそのままとし、漢字は新漢字とした。

略歴の典拠：有坂与太郎・清水晴風・西沢笛畝一『郷土玩具辞典』東京堂出版 1971年。竹内久遠一『国史大辞典』9 吉川弘文館 1988。久保田米所一『大日本書画名家大鑑・伝記上編』第一書房 1975。木村仙秀・久保佐四郎一『新訂増補人物レファレンス事典/明治・大正・昭和(戦前編)』日外アソシエーツ 2000年

図1 狗佛の蒐集品：「鯛車」藤野滋氏撮影 図2 狗佛の蒐集品：「虎乗り加藤」藤野滋氏撮影 図3 巨泉画：「大阪製鯛車」『巨泉玩具帖』1巻4号 図4 巨泉画：「大阪張子製加藤清正虎のり」『巨泉玩具帖』5巻2号 図5『これがおもちゃ絵だ!』展示図録 図6 巨泉肖像(『鯛車59』『故巨泉氏追悼號』) 図7「小摺りのおもちゃ絵」図8「切小絵」図9『江都二色』昭和6年版 稀書複製会 図10『うなみ

の友』 巻 図 11「小型達磨」と「小型夫婦達磨」図 12「佐四郎氏の描きしもの〔起上り 三種〕」図 13『巨泉漫筆おもちゃ箱』の 55 番 「小芥子這子」 図 14『巨泉漫筆おもちゃ箱』貼付の巨泉の名刺 図 15『人魚』1 号～3 号の表紙 図 16『人魚』4 号～7 号の表紙 図 17『巨泉漫筆おもちゃ箱』の 51 番「雉子車」

(1) T A O 「大阪府マルチメディア・モデル図書館展開事業」について

大阪府マルチメディア・モデル図書館展開事業は、通信・放送機構（T A O：総務省所管の特殊法人、平成 16 年 4 月から独立行政法人「情報通信研究機構（N I C T）」へ統合）による、通信放送分野の研究開発事業です。大阪府が平成 12 年 6 月、T A O の通信・放送研究成果展開事業「マルチメディア・パイロットタウン構想（マルチメディアモデル博物館（図書館）」）に協力申込をし、同年 9 月に採択されました。平成 12 年 10 月から平成 16 年 3 月まで T A O の直轄型事業として、通信・放送分野の基本的技術を組み合わせ、図書館サービスに有効な電気通信システムとして構築するための技術を開発し、実証実験を行なってデータを収集し、評価しました。大阪府は、中之島・中央の府立 2 館を核に、大阪府内の公共図書館、大学・専門図書館、学校等の協力のもとに、実験フィールドを提供し、事業運営に協力しました。なお、実証実験は平成 15 年度をもって終了し、平成 16 年度からは大阪府独自の成果継承事業としています。平成 18 年 5 月 25 日「人魚洞文庫データベース」をインターネットにて公開。大正から昭和にかけて全国各地の郷土玩具を描いたおもちゃ絵画家・川崎巨泉（1877-1942）が遺した自筆写生画帳をデジタル化し、一般公開した。（大阪府立図書館ホームページに掲載）

(2) 藤野滋『高橋コレクションについて』『我楽他宗第五番札所玩雪山狗佛寺一高橋敬吉とそのコレクションについて一』（未発表）

(3) 宮島久雄「大阪・「町の図案家」」 p 201<川崎巨泉>『大阪における近代商業デザインの調査研究』2000 年度サントリー文化財団研究報告書 2002. 10

(4) 呼び名の漢字と別号は肥田皓三氏のご教示による。

(5) 『川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録』昭和 18 年 大阪府立図書館編発行
芳瀧入門の時期は巨泉の回想では 13 歳。当館作成の目録では 16 歳となっている。

(6) 「人魚の蒐集」『人魚』3 号 大正 13 年。「人魚洞広告」『人魚』6 号 1927(昭和 2)年。

(7) 島屋政一『日本版画変遷史』大阪出版社 1929(昭和 14)年

島屋政一著の『本木昌造伝』を出版した東京の朗文堂のホームページが島屋政一を詳しく紹介している。<http://www.ops.dti.ne.jp/~robundo/Bmotogi.html>

(8) 上野晴郎、前川久太郎『江戸明治「おもちゃ絵」』 アドファイブ東京文庫 1976(昭和 51)年

(9) 肥田皓三「立版古つれづれ」、『立版古—江戸・浪花・透視立体紙景色』(INAX ギャラー、INAXBOOKLET)、株式会社 INAX 1993 年

(10) 『江戸明治「おもちゃ絵」』上野晴郎、前川久太郎著 1976(昭和 51)年 アドファイブ東京文庫

(11) 権田保之助「玩具絵の話」『書画骨董雑誌』96 号 書画骨董雑誌社 1916(大正 5)年

(12) 有坂与太郎『おしゃぶり 古代篇』1926(大正 15)年 10 月 郷土玩具普及会発行

(13) 川崎巨泉「夏のおもちゃ」『にんぎょ』7 号 川崎巨泉 1928(昭和 3)年

(14) 「1411 二代長谷川貞信 [渡辺本] 生・嘉永元年十月 画系・初代貞信の長男 作画期・明治 大阪の人、長谷川氏、俗称徳太郎、画を父に学び初め小信といひしが、明治九年父の隠居後貞信(二代)と改む、役者似顔絵をよくし、大阪にて江戸風の芝居絵番附を興せり、明治四十三年春、長男(二代小信)に家督をゆずりて隠居す。」(由良哲次『総校浮世絵類考』)

「嘉永元年 10 月 18 日生まれ、昭和 15 年 6 月 21 日に長逝、享年 93。」「因に翁の葬儀は六月二十三日天王寺六万休町天鷲寺に於て盛大なる告別式があり、本会より供花一対を贈った(南木生)」(「長谷川貞信翁逝く」『上方』上方郷土研究会 昭和 15 年 7 月、115 号)

芳瀧の実弟笹木嘉造(画号芳光)は巨泉の『芳瀧画集』(川崎末吉編発行 1931 年)によれば、1909(明治 42)年 42 歳で没したという。暫定的ではあるが、笹木嘉造(画号芳光)の生没年は 1867(慶応 3)年～1909(明治 42)年としておく。

(15) 「のぞきからくり、猫芝居、犬芝居、化物づくし、いろはかるた、単語図、植木鉢づくし、舞づくし、五十三次、辻占、魚づくし、馬づくし、善悪見立、変り絵、朝日奈一代記、西郷戦争、小間物づくし、団扇づくし、紋づくし、狐の嫁入り、狸金玉くらべ、芝居、毒婦梅次一代記、掛物天神づくし、猿芝居、動物づくし、相撲取づくし、其他百般のものが描かれている。又甘酒屋、西瓜店、人力車、切子灯籠、神輿、布団太鼓、地車、鉢、御神灯、宝船の類は裏打ちをして其形ちに糊づけして作り上げるのである、又相撲取は裏表合わせて弄ぶのである。」

(16) 宮武外骨編『此花』第 15 枝 雅俗文庫 1910(明治 44)年 5 月 5 日発行

(17) 奥村寛純「おもちゃ絵と川崎巨泉画伯」『おもちゃ画譜』 村田書店 1979(昭和 54)年

(18) 山口昌男『NHK 人間大学「知の自由人たち—近代日本・市井のアカデミー発掘—」』日本放送協会 1997(平成 9)年

「大供会 明治 42 年(1909)久留島武彦・西沢仙湖・林若樹・広瀬辰五郎らの人形愛好家たちによって結成された。毎年一回各人が所持する人形類を持ち寄って展覧会を開催。その年内に入手した逸品を競い合った。同四四年(1911)一二月東京神田の青柳亭で、西沢仙湖・清水晴風・林若樹を幹事に、人形を土製・木彫・型抜き・雛の四部に分けて第一回人形一品会を開いた。その後、坪井正五郎、宮沢朱明・巖

谷小波・淡島寒月・片岡平翁・栗島狭衣・松居松翁・市川三升・池田天鈞居・内田魯庵・バーナード・リーチ・平沼亮三・山村耕花・豊泉益三・水谷幻花・中村鷹次郎ら各界趣味家を加え、明治から大正期の人形愛好運動に活躍した。」「大供とは「子供」に対する「大供」、子どもっぽい大人の意味であろう。子供専用と考えられてきた玩具類・無邪気な遊び道具もおとながなお愛着と興味を持つテレくささと、ひそかな回顧趣味とが同居した言葉で、当時の玩具に対する考え方がよく現れている。」(齊藤良輔『郷土玩具辞典』東京堂出版 昭和46年)

(19) 「雑報」“巨泉玩具画会” 『日本印刷界』日本印刷界社 1916(大正5)年3月号

(20) 吉田漱『浮世絵の基礎知識』雄山閣出版 1974

(21) 『稀書複製会刊行 稀書解説 第七編上』米山堂 昭和7年 「江都二色」の解説。なお第3期の「江都二色」の解説は『稀書複製会刊行 稀書解説 第三編』大正13年発行にあり、これは樋口二葉が書いた。木村仙秀が書いたものは、木村捨三著『木村仙秀集』青裳堂書店 1984(昭和59)年 日本書誌学体系 31 の第4巻に『『江戸二色』の编者』として収載されている。

(22) 柳亭種彦『還魂紙料』木村三四吾編校 出版者不明 1982

(23) 大沼宜規「寛政の改革と文人―「好事」「好古」観をめぐって―」熊倉功編『遊芸文化と伝統』吉川弘文館 2003 所収

(24) 山本陽史「解題 宝合会と『狂文宝合会』」小林ふみ子[ほか]編著『『狂文宝合記』の研究』汲古書院 2000年 所収

(25) 「略註『たから合の記』」松田高之、山本陽史、和田博通『江戸の文事』延廣眞治編 ぺりかん社 2000年

(26) 木村仙秀『『江戸二色』の编者』『木村仙秀集』4 1984(昭和59)年

(27) 木村仙秀『『江戸二色』の编者』『木村仙秀集』4 1984(昭和59)年

(28) 有坂与太郎『江都二色』郷土玩具普及会 1930(昭和5)年

(29) 齊藤良輔編『郷土玩具辞典』東京堂出版 1971(昭和46)年 「うなみの友」の項目説明。

(30) 川崎巨泉「玩具の絵について」『鳩笛』郷土研究社 1925(大正14)年

(31) 久保田米所『玩具叢書』人形作者篇 雄山閣 1926(昭和11)年

(32) 久保田米所『玩具叢書』人形作者篇 雄山閣 1926(昭和11)年

(33) 奥村寛純「おもちゃ絵と川崎巨泉画伯」『おもちゃ画譜』村田書店 1979(昭和54)年

(34) 内田魯庵「淡島寒月翁のこと」淡島寒月著 齊藤昌三編纂『梵雲庵雜記』書物展望社 1933

(35) 蘆田止水「故淡島寒月翁追悼会記」『和多久志』第10号冬の巻 大正¹⁶年1月発行

(36) 肥田好三「宇崎純一の画業」『幻の画家・宇崎純一～大正ロマンの残影～』小野市立好古館

1992(平成4)年

(36) 岐阜県立図書館ホームページに「岐阜県ゆかりの先駆者たち 第25回 生誕120年 猫の芸術家 河村目呂二 (かわむら めろじ) 1886-1959 (明治19年-昭和34年)」がある。

(38) 蘆田止水「故淡島寒月翁追悼会記」『和多久志』 第10号冬の巻 大正16年1月発行

(39) アン・ヘリング「わらべうたの詩人」『夢二美術館』第3巻 学研 1985

(40) 熊田司「三好米吉と「柳屋」のことなどー平野町時代を中心にー」『たまや』第3号 山猫軒 2006年

(41) 巖谷大四『波のあしおと登音ー巖谷小波伝ー』新潮社 1974

(42) 「南方をさす民玩」『鯛車』53 6巻5号 日本民俗玩具協会 1942(昭和17)年

(43) 川崎巨泉「民玩の南方進出」『鯛車』53 6巻5号 日本民俗玩具協会 1942(昭和17)年

(44) 「おもちゃ千種画報告」『人魚』創刊号 1922(大正10)年

(45) 武井武雄「私刊本・限定本」『本とその周辺』中央公論社 (中公文庫) 1975(昭和50)年 この他に、今村喬「武井武雄・私刊本」『これくしょん』吾八書房 1989(平成元)年にも一部転載されている。

(46) 川崎巨泉「郷土の光について」人魚6号 1927(昭和2)年

(47) 『聴蛙亭来訪署名簿』中尾堅一郎氏蔵。露石を訪問した人たちの中には清水晴風もいた。晴風は1909(明治42)年4月3日に訪問した署名が残る。なお水田紀久氏が『混沌 大阪藝文研究』30号 混沌会編 中尾泉松堂書店 2006(平成18)年 に「水落露石聴蛙亭来訪者名簿」を解題され、名簿の影印も同時に掲載されている。

(48) 「巨泉おもちゃ絵集」『にんぎょ』7号 1928(昭和3)年

(49) 「巨泉おもちゃ絵集」『にんぎょ』7号 1928(昭和3)年

(50) 川崎巨泉『巨泉漫筆おもちゃ箱』自序 大正13年 「大日本大阪鰻谷人魚洞にて 筆者川崎巨泉識」とある。

(51) 「人魚第四号のはじめに」『人魚』4号 1925(大正14)年

(52) 「玩具研究資料献本」『人魚』5号 1926(大正15)年

(53) 浜田徳太郎著『紙ー種類と歴史ー』ダヴィッド社 1958(昭和33)年

(54) 「巨泉おもちゃ絵集」『人魚』7号 1928(昭和3)年

(55) 「墨線版のことである。つまり木版画の基本をなす版のことである。版下絵の最も貴重な、又最初に描かれるものは線画であり、これが彫刻されて墨版と呼ばれ、摺刷されると校合摺と呼ばれ、これに彩色が施されるか、指定されるのである。従って、この線画が最も版画の基本となるものであるから、

- これを「主版」と呼ぶのである。」吉田暎二『浮世絵辞典』上 北光書房 1944(昭和19)年
- (56) 「おもちゃ千種画会報告」『人魚』1号 1921(大正10)年。「吾八」は1912(明治45)年当時、大阪市西区新町一丁目にあり、美術工芸品販売店だった。(『此花』21枝 明治45年5月25日発行の宣伝より)
- (57) 「浪花おもちゃ風土記」の序 奥村寛純『浪花おもちゃ風土記』 村田書店 1987(昭和62)年
- (58) 『人魚』1号 1921(大正10)年2月1日、16頁・第2号 1922(大正11)年9月25日、34頁・第3号 1924(大正13)年2月5日、34頁・第4号 1925(大正14)年3月1日、34頁・第5号 1926(大正15)年5月1日、34頁・第6号 1927(昭和2)年6月2日、34頁・『にんぎょ』第7号 1928(昭和3)年8月15日、34頁。第7号は誌名がにんぎょに変わった。
- (59) 加藤春治『和紙』産業図書出版 1958(昭和33)年
- (60) 「郷土和泉」郷土和泉刊行会 小谷方明編集 14号 1934(昭和9)年7月発行
- (61) 「郷土和泉」郷土和泉刊行会 小谷方明編集 15号 1934(昭和9)年9月発行
- (62) 『おもちゃ画譜』の村田書店の宣伝。『郷土玩具界の先覚 川崎巨泉翁を偲ぶ』掲載広告
- (63) 川口栄三「著作解題」『郷土玩具界の先覚 川崎巨泉翁を偲ぶ』川崎巨泉翁供養会編発行 村田書店製作 1979(昭和54)年
- (64) 石沢誠司「玩具絵本の系譜～『江都二色』から『巨泉玩具帖』まで～」『これがおもちゃ絵だ!』展図録 大阪府立中之島図書館 2006
- (65) 『旅と伝説』の元本の発行は東京・三元社。複製は岩崎美術社。巨泉の初掲載は「浪華土俗漫談」(『旅と伝説』第2年第4号)であった。
- (66) 「日本の郷土玩具—その歩みと系譜—」の「二つの流れ」の解説。斉藤良輔編『郷土玩具辞典』東京堂出版 1971(昭和46)年
- (67) 『大阪の三越』の編者は白石民憲、発行は三越呉服店大阪支店、東区高麗橋3丁目63。大正モダニズムの香りと純和風も加味した大正の百貨店文化雑誌である。
- (68) 『大阪府統計書』大正12年 大阪府 1925(大正14)年
- (69) 「巨泉漫筆おもちゃ箱 版画・頒布画会」『人魚』3号 1924(大正13)年
- (70) 「大供と玩具」『人魚』3号 1924(大正13)年
- (71) 「玩具の絵について」『人魚3号』1924(大正13)年
- (72) 「巨泉漫筆おもちゃ箱 版画・頒布画会」『人魚』3号 1924(大正13)年
- (73) 「新品だから悪い」『にんぎょ』7号 1928(昭和3)年

川崎巨泉年譜（稿）

年	歳	備 考
明治10年(1877)	1歳	6月2日、川崎源平の三男として堺市神明町御坊ノ前で生まれる。兄は『住吉・堺名所并ニ豪商案内記』の著者兼出版者の川崎源太郎。(『堺の文化財』17号)
22年(1889)	13歳	堺市甲斐町西六軒筋 浮世絵師中井芳瀧に門に入る。(巨泉の回想による)
25年(1892)	16歳	堺市甲斐町西六軒筋 浮世絵師中井芳瀧の門に入る。(当館展示目録・巨泉略年譜)
27年(1894)	18歳	ポチ袋(祝儀袋)画を描く。
29年(1896)	20歳	この年上京。
30年(1897)	21歳	芳瀧住居を大阪市南区鰻谷に移す。 巨泉、東京より帰阪し芳瀧方に寓居する。
31年(1898)	22歳	芳瀧女ハマ子と結婚。(ハマという説もあるが、巨泉は自家版『芳瀧画集』のあとがきで濱子と書いている。)
36年(1903)	28歳	この頃より漸く「おもちゃ」に興味を持つ。
40年(1907)	31歳	3月17日、水落露石邸(聴蛙亭)を訪問した。(『聴蛙亭来訪署名簿』)
44年(1911)	35歳	3月、木彫着色「角雛」創作。 春、大阪十合呉服店で雛人形と古代人形の展覧があったとき角雛を出品。(「おもちゃ画譜」第5集) 11月、『図案小品集』第1集自費出版。(大正元年10月第3集完成) *この頃の住まいは大阪市南区鰻谷西之町33番地。
45年(1912)	36歳	3月、『図案小品集』第2集自費出版。
大正2年(1913)	37歳	2月、模範図案(其一)『大阪印刷界』2月号) 10月、『図案小品集』第3集自費出版。
3年(1914)	38歳	3月、半切百福会を書籍集会所に開く。
4年(1915)	39歳	1月、小品画会を書籍集会所に開く。
5年(1916)	40歳	1月、絵画研究会「葦社」結成。会員には行岡紫雲、粕井豊誠、川崎紫鳳、井上麗泉、山田墨泉、大森豚子、永井霞帆、峰崎米齊(『人魚』1号) 3月、玩具画会を大阪市西区南堀江の書籍商事事務所に開く。その折巨泉着色の伏見焼「笑い雛」を後援者に配る。(『おもちゃ画譜』第9集) 「巨泉玩具画会 川崎巨泉氏道楽的になる同画会は去る十二、十三両日大阪南堀江木綿屋橋西詰北書籍商事事務所にて開催、両日とも同好者の来会多数を極め盛会なりき」(『日本印刷界』3月号 3月10日発行) 11月、土焼着色「笑雛」創作。 同月、おもちゃ絵の会
6年(1917)	41歳	6月、玩具絵額画と小屏風の会
7年(1918)	42歳	1月、『巨泉おもちゃ絵集』第1集刊行。(大正8年8月、『巨泉おもちゃ絵集』完成) 5月、類聚おもちゃ絵の会 同月、3日～5日全国絵馬展覧会に出品(郷土趣味社主催 於京都府立図書館) 12月、『おもちゃ十二支』だるまや刊行。
8年(1919)	43歳	5月、百福画会 10月、おもちゃ絵と人形陳列会。おもちゃ絵集完成記念展を大阪三越で開催。
9年(1920)	44歳	6月、『土の鈴』創刊。「摂津住吉のおもちゃ」を寄稿。 8月、「土鈴三種木版」、「里山の紙鯉」、「祇園のおけら祭」(『土の鈴』2輯) 同月、「但馬城崎の麥稗絵馬」『郷土趣味』19号 9月、「大阪に無くなった絵馬」『郷土趣味』20号 10月、鶏の玩具絵軸物頒布会、爾後毎年10月、11月に十二支に因み軸物頒布会を催す。 同月、『肉筆おもちゃ千種』第1集頒布(大正10年9月完成) 同月、「和泉堺市白蔵主稻荷」『郷土趣味』21号

10年(1921)	45歳	2月、個人誌『人魚』第1号頒布(昭和3年8月第7号刊完結) 同月、“大阪七福会記念宝船”(コタイブ)、「大阪の七福会」(『土の鈴』5輯) 4月、「京都北野の子貴人形」『郷土趣味』23号 7月、「<絵馬と玩具>土人形に頼われたる模様と着色」『郷土趣味』25号 8月、“三宅島裃” (木版)、「三宅島裃」(『土の鈴』8輯) 同月、「<絵馬と玩具>和泉堺の玩具と縁起物」『郷土趣味』26号 10月、「<口絵>雷に関する玩具(木版)」、「雷に関する玩具」『郷土趣味』27号 11月5日～7日、本山桂川の幹旋で長崎商業会議所にて玩具絵300枚を展覧。玩具絵は桂川の所蔵品(『人魚』2号)
11年(1922)	46歳	2月、「お萬さんお嫁入り」(『土の鈴』11輯) 4月、「蛸地蔵の絵馬」、「大阪瀬戸物の造り物と地蔵祭」(『土の鈴』12輯) 5月11日、同行七人、紫丸で高松へ。金毘羅参詣で師父中井芳龍の師匠中島芳梅の絵馬を発見。(『人魚』2号) 7月、「堺の久の弁財天の祝い餅」『郷土趣味』31号 8月、「<資料短編>河内枚岡神社の晴雨占い」、「<資料短編>相馬妙見社のみだらし紙」『郷土趣味』32号 10月、「琴平詣り」(『土の鈴』15輯) 11月、「燈籠西瓜」『郷土趣味』35号
12年(1923)	47歳	1月、「大阪の子供の悪戯」『郷土趣味』37号 2月、“ふとまがり”(コタイブ)、「住吉ふとまがり」(『土の鈴』17輯) 3月、「大阪の節分」『郷土趣味』39号 4月、「堺のひろあみ売」、「紀伊比井崎村のキチハナ石」(『土の鈴』18輯) 5月、雑誌『柳屋』22号の表紙絵。この号は浪花「道楽宗の巻」。 6月、「大阪の売り声」、「大阪おでんやの売り声」(『土の鈴』19輯) 9月、「宇治名物の張り抜き茶摘人形」(『名物及特産』2巻9号) 10月、獅子頭の絵の会 12月、「昔の千日前」『郷土趣味』48号
13年(1924)	48歳	1月、『巨泉漫筆おもちゃ箱』刊。同月、「鼠の玩具」(『趣味と名物』3巻1号) 2月、「遠起物」、「会津辺りの宮参り奉納羽子板と弓矢」(『趣味と名物』3巻2号) 3月、「縁起もの」(『趣味と名物』3巻3号) 6月、『起上小法師画集』木戸氏版第1輯刊(大正14年5月完成) 7月、娛美会 11月、口絵“神農祭りの虎と奈良土産の鹿”(『難波津』10号) ?月 柳屋画廊15周年記念のポスターを描く。奥村政信筆「短冊色紙売り」を模写したもの。 12月、「奈良大阪名士の南都名物観」の回答者の一人(『趣味と名物』3巻12号)
14年(1925)	49歳	1月、「干支に因み丑の展覧会」(大阪三越開催)に協力。 同月、“木牛”表紙口絵、巨泉談「干支に因む土俗牛の玩具」(『趣味と名物』4巻1号) 2月、『土俗玩具展覧会』刊。 同月、「おもちゃ箱」版画と玩具絵色紙短冊展を大阪三越に開く。 3月、『鳩笛』(ちどりや刊・京都市堺町通三條入ル)創刊。表紙の鳩笛の版画は巨泉の画彫。「玩具の絵について」(『鳩笛』創刊号に掲載) 同月、“琉球の紙雛”表紙口絵(『趣味と名物』4巻3号) 3月15日～4月30日、大大阪記念博覧会(大阪毎日新聞社主催)開催。「大大阪人の信仰を語る七十種の縁起もの」コーナーに、巨泉は生国魂神社の“獅子頭”など4点を出品。他に西田静波、高橋好劇、村松百兔菴らが出品した。 4月、『土俗玩具展覧会』、『おもちゃ箱』(百枚入り)を東京帝室博物館、帝国図書館、東京美術学校、大阪府立図書館等11ヶ所へ寄贈。(『人魚』5号)

		<p>同月、「伏見人形に就いて」(『鳩笛』2号)</p> <p>5月、「信仰の大阪」(『鳩笛』3号)</p> <p>6月、蒐集趣味人魚の第1回展覧。おもちゃ画絵馬百趣展を大阪堀江の書林俱樂部に開く(14日)。巨泉着色の土焼人魚200個(伏見の大西氏作)を観覧者に贈呈。(『おもちゃ画譜』第4集)</p> <p>同月、「雉子車の話」、「浪華の娯美会と土俗会」(『鳩笛』4号)</p> <p>7月、「スリコミ型」、「人魚雑話」(『鳩笛』5号)</p> <p>同月、「人魚の会・人魚洞主催」(エス生)の記事が載る。(『遊覧と名物』4巻7号)</p> <p>8月、「風流の真似」(『あのみ』大正14年8月号)</p> <p>9月、十二月月玩具絵の会(各月々に因む玩具絵は甲種1組13幅、乙種1組12幅 何れも無表装 甲種絹本 会費一幅25円、乙種絹本 会費一幅15円)</p> <p>同月、「天神と天神」(『あのみ』大正14年10月号)</p> <p>10月、「日本土俗玩具と縁起物(35)」『大阪の三越』</p> <p>11月、「日本土俗玩具と縁起物(36)」『大阪の三越』</p> <p>12月、「日本土俗玩具と縁起物(37)」『大阪の三越』</p>
15年(1926)	50歳	<p>1月、「日本土俗玩具と縁起物(38)三都の虎(干支に因みて)」『大阪の三越』</p> <p>2月、「日本土俗玩具と縁起物(39)」『大阪の三越』</p> <p>3月、「日本土俗玩具と縁起物(40)」『大阪の三越』</p> <p>同月、夫婦で9日間の旅をする。道後、松山、別府、大分、宇佐耶馬溪、博多、宮崎、香椎、二日市、大宰府、岩国、宮島を巡った。(『人魚』5号)</p> <p>4月、「日本土俗玩具と縁起物(41)」『大阪の三越』</p> <p>5月、『おもちゃ十二月』だるまや刊行。</p> <p>同月、「日本土俗玩具と縁起物(42)」『大阪の三越』</p> <p>5月6日～9日、玩具絵展覧会を大阪三越呉服店8階会堂に開く。</p> <p>6月、「日本土俗玩具と縁起物(43)」『大阪の三越』</p> <p>7月、「日本土俗玩具と縁起物(44)番外 ちんわんの唄」最終回『大阪の三越』</p> <p>「此日本土俗玩具と縁起物の画と解説は、大正十一年十月三越カインダ第一号第一号より掲載し初めまして、茲に四十四回、三年半あまりの長いものになってしまいました。其間に解説を試みたものが百種あまり、今後は等ものを掲載して居りますと幾年かゝるか際限がありませんので一時此稿を打ち切り他日又後編を掲載する機会がある事と思ひます。永らく御愛読下さいました事を厚く感謝申し上げます。著者 川崎巨泉」</p> <p>9月、『郷土の光』第1輯刊(第20輯昭和3年5月完結)</p> <p>同月、『人魚の家』第1号(ちどりや刊)表紙は巨泉自画彫の人魚。「巨泉随筆(1)」掲載。</p> <p>同月、「幽霊の一軸について」(『あのみ』大正15年9月号)</p> <p>10月～12月、『郷土の光』第2、3、4集発行。</p> <p>12月、「巨泉随筆(2)」(『人魚の家』2号)</p> <p>*個人誌『人魚』5号に“後継者を貰い受けたし”と養子を迎えたい切実な訴えを書く。</p>
昭和2年(1927)	51歳	<p>1月、『絵本おもちゃ集』ちどりや刊。1月～5月、『郷土の光』第5～9集発行。</p> <p>4月、「巨泉随筆(3)」、「故淡島寒月翁追悼遺墨展覧」(『人魚の家』3号)</p> <p>6月、「人魚」6号の巻頭に「再生の日」を書く。50歳になり再生したと、新たな誓いの言葉を記す。</p> <p>8月16日、第57回「娯美会」に川崎はま参加。(『あのみ』昭和2年9月号)</p> <p>9月9日、「幽霊供養怪談会」三遊亭志ん蔵・芳本倉太郎主宰。於東区・洞泉寺。巨泉・旦水・好劇らが参加。(『あのみ』昭和2年10月号)</p> <p>10月、宝船の絵の会</p> <p>同月、「幽霊供養怪談会」(『あのみ』昭和2年10月号)</p>

		11月、『柳屋』（柳屋画廊）11月号に巨泉画「諸国羽子板絵四十趣」祝儀袋 四十種一袋 2円20銭の広告が掲載される。 同月、11月26日、「土曜会」発会。娯美会員有志に絵の手ほどきをする。（『あのな』昭和3年1月号）
3年（1928）	52歳	2月、玩具絵展覧会を名古屋松坂屋に開く。 3月、『十二支会・おもちゃ創作会』大阪大丸で開く。（『あのな』昭和3年11月号） 会員：染丸、円馬、円若、蔵の助、小春団治、吉之助、紫翠、一蝶、巨泉など。 4月、「変り雛について」（『あのな』昭和3年4月号） 8月、『人魚』7号に『郷土の光』の詳細な解説を載せる。 9月23日、『娯美会』久しぶりの会で盛り上がる。（『あのな』昭和3年11月号） *天下茶屋に転居・西成区有楽町21番地（昭和2年8月以降のこと）
4年（1929）	53歳	1月、『人形筆誌』第1号刊（4月2号完結）。 2月、浪華宝船会発起。巨泉、粕井豊誠、芳本倉多楼、梅谷紫翠、三宅吉之助、木村且水、高橋好劇ら。（『大阪人』昭和5年3号） 3月、「浪華土俗漫談」（『旅と伝説』第2年第4号） 5月、浪速玩具絵納札会を天王寺公園小宝亭に催す。 6月9日、「浪華趣味道楽宗開宗拾周年紀年 臨時併合大宝事」下寺町二丁目光明寺で開催。（『あのな』昭和4年7月号） 8月、「電車の中の滑稽」（『あのな』昭和4年8月号） 9月、大阪面茶会同人誌『面茶』発刊（7年1月まで5冊刊行） 「大阪のおもちゃと縁起物」（『大阪人』創刊号） 11月22日、大阪人社主催行事、「近松遺跡広濟寺の一日」に参加。（『大阪人』12月号）
5年（1930）	54歳	1月、大阪人主催、郷土趣味新町の会に参加。（『大阪人』2号） 2月、大阪人主催、郷土趣味大阪落語の会に参加。（『大阪人』3号） 3月、「続浪華土俗漫談」（『旅と伝説』第3年第3号） 同月、「続大阪のおもちゃと縁起物」（『大阪人』3号） 同月、大阪人社主催、文楽座鑑賞会に夫婦で参加（『大阪人』4号） 同月、「縁喜物馬の玩具」（『あのな』昭和5年3月号） 6月、「業平さん」（『大阪人』6月終刊号） 10月、「絵馬蒐集漫談」（『旅と伝説』第3年第10号）
6年（1931）	55歳	1月、「羊の玩具」（『旅と伝説』第4年第1号）、「大阪の郷土玩具」（『上方』創刊号） 2月、「絵馬と節分のボテ鬘」（『上方』2月号） 3月、「天王寺に因む玩具と縁起物」（『上方』3月号） 5月、『土俗紋様集』だるまや刊。 6月、自家版『芳瀧画集』（大阪国文社）刊。 9月、「街頭の呼び声」（『上方』9月号） 12月、「街頭の呼び声（追補）」（『上方』12月号）
7年（1932）	56歳	1月、「猿の玩具と縁起物」（『旅と伝説』第5年第1号） 8月、「堺の盆踊唄」（『上方』8月号） 9月、『おもちゃ画譜』第1輯刊（10年10月第10輯完結） 10月、「駅伝東海道玩具案内 - 米原～大阪 -」（『旅と伝説』第7年第11号） 12月、「繰り人形と郷土玩具の首人形」（『旅と伝説』第7年第12号）
8年（1933）	57歳	3月、「大阪の雑祭」（『郷土玩具』3月号：1巻3号 建設社：有坂与太郎編集） 9月、「堺の怪談」（『上方』9月号） 12月、「大阪の春のおもちゃ」（『旅と伝説』第6年第12号） * “三番叟の土鈴”を考案、伏見の大西氏が発売。（『おもちゃ絵画譜』第8集）
9年（1934）	58歳	1月、「大阪の春のおもちゃ」（『郷土玩具大全』一誠社 所収）、「上方の水を語る」（『上方』1月号）

		1月～6月、「人魚洞漫筆①～⑥」(『旅と伝説』) 4月、浪速面茶会主催観桜会 8月～11月、「人魚洞漫筆⑦～⑫」(『旅と伝説』) 12月、肉筆人形絵小品頒布会
10年(1935)	59歳	1月、百鈴会展観 3月、「大阪玩具の変遷」(『上方』3月号) 4月、浪速面茶会主催観桜会 7月、「大阪市内の神社に関する土俗信仰と縁起物その他」(『上方』7月号) 8月、「京阪車の玩具一束」(『旅と伝説』第8年第8号) 10月、「アサヒビールと情歌」(『上方』10月号) *この年、大阪市天王寺区逢坂上ノ町93番地に転居。
11年(1936)	60歳	1月、「凧の話」(『上方』1月号) 3月、「阿波の郷土人形」(『上方』3月号) 4月、「子供遊びの悪口」(『上方』4月号) 6月、「伏見人形の西行法師」(『上方』6月号) 7月、「大阪の目無し達磨」(『上方』7月号) 8月、「時鳥のおとしぶみ」(『上方』8月号) 9月、「上方自慢」(『上方』9月号) 11月、「滑稽は自然の中に」(『上方はなし』8集) 12月、『おもちゃ博覧会』(だるまや刊・大阪市南区南炭屋町25)
12年(1937)	61歳	1月、「牛の玩具、朝風呂譚」(『上方』1月号) 4月、人形玩具絵の会 5月、「魚じまと鯛」(『上方』5月号) 9月、「思い出すことゝも」(『上方はなし』18集)、 同月、「日清戦争のポンチ絵」(『上方』9月号)
13年(1938)		1月、「上方地方の虎の縁起物と玩具」(『上方』1月号) 2月、「瓢箪山稲荷の辻占」(『上方』2月号) 4月、「話の上手下手」(『上方はなし』25集) 同月、「桜と玩具」(『上方』4月号) 6月、「<随想>ゲテモノの流行」(『鯛車』6号) 8月、「昔にもどる」(『上方はなし』29集) 9月、「物には馴れる」(『上方はなし』30集) 10月、「名画の幽霊」(『上方はなし』31集) 同月、「<随想>貯金玉」(『鯛車』10号) 11月、「高松の嫁入人形」(『上方』11月号) 12月、「徳利帳」(『上方はなし』32集) 「影燈籠と友引人形(塚)」(『上方』12月号)
14年(1939)	63歳	1月、「公演会所感」(『上方はなし』33集) 同月、「兎の玩具」(『上方』1月号) 3月、吾八の「コレクション」誌上にて雛絵色紙展観。 4月、「百足と土瓶の手」(『上方』4月号) 7月、「太郎平さん」(『上方はなし』38集) 8月、「中井芳龍」(『上方』8月号) 8月、「南仙酔(なんせんす)」(『上方はなし』39集) 10月、「話題二ツ」(『上方はなし』40集)
15年(1940)	64歳	1月、「深草の駒女(『上方女性鑑』の諸相)」(『上方』1月号) 3月、「<郷土玩具再吟味>流し雛(有坂与太郎・吉村蕪生)」(『鯛車』27号) 4月、「<随想>大阪会談(有坂与太郎)」(『鯛車』28号)

		5月、「<随想>こけし模様」(『鯛車』29号) 6月、「上方郷土玩具、上方玩具(目次カット)」(『上方』2月号) 7月、「伏見人形の伝説、廻り燈籠(目次カット)」(『上方』7月号) 「<随想>幸右エ門型」(『鯛車』31号) 9月、「<郷土玩具再吟味>こけし(有坂与太郎・木戸忠太郎)」(『鯛車』33号)
16年(1941)	65歳	1月、「<論説>第二の国民」(『鯛車』37号) 2月、「住吉の土俗信仰」(『上方』2月号) 4月、「<随想>一銭九厘屋」(『鯛車』40号) 6月、「<随想>思い出す儘」「<随想>こけし十句」(『鯛車』42号) 9月、「<随想>人形玩具絵」(『鯛車』45号) 10月、「<随想>小物玩具」「<随想>静波の光り」(『鯛車』46号)
17年(1942)	66歳	1月、「上方地方の馬に因む玩具(目次カット)」(『上方』1月号) 同月、「<論説>玩具の出陣」「<随想>大阪と戦争玩具(梅谷紫翠)」(『鯛車』49号) 2月、「<扉絵>松阪版木」(『鯛車』50号) 3月、「虎岩の硯」(『上方』3月号) 4月、「<随筆>玩具異変」(『鯛車』52号) 5月、「<論説>民玩の南方進出」「<愛玩拾遺>川崎巨泉」(『鯛車』53号) 7月、「<随想>みなとこけし」「<こけし集覧>こけし楽可讃」(『鯛車』55号) 8月、「中井芳瀧の片影」(『上方』8月号) 9月15日、午前7時55分逝去。法号「幽谷院芳雲巨泉居士」。墓所は堺の大安寺。 9月17日、午後2時阿倍野斎場で葬儀が行われた。(『鯛車』59号) 10月1日、有坂与太郎宅で日本民族玩具協会の評議員有坂与太郎、田畑豊太郎、小山彰、田中野狐禅、秀島孔、平岩富士蔵、増永隆により、9月15日を巨泉忌と定める。(『鯛車』59号) 11月、「<随想>見当らぬ玩具」(『鯛車』59号)

参考文献：「柳屋」三好米吉編 柳屋画廊発行(728.2-319N)、「郷土玩具の先覚者 川崎巨泉翁を偲ぶ」川崎巨泉翁供養会 村田書店製作 昭和54年(759.9-27N)、「大正記念博覧会誌」大阪毎日新聞社編発行 大正14年(807-203)、「鳩笛」第1号～8号(完結)：5号欠 ちどりや発行 大正14～15年(949-22)、「旅と伝説」復刻版 岩崎美術社発行 1978(雑2619)、「第一回巨泉忌」奥村寛純編 村田書店製作 川崎巨泉翁供養会 昭和54年(759.9-26N)「おもちゃ画譜」1輯～10輯 川崎末吉発行 昭和7年～昭和10年(949-6)、「難波津」第1～第10集 だるま屋発行 大正13年～大正14年(雑687)、「大阪人」木谷正之助編 大阪人社発行 昭和4年～昭和5年(雑814)、「郷土玩具大全」萩原正徳編 一誠社発行 昭和9年(949-103)、「土の鈴」(復刻版)1輯～19輯(大正9年～大正12年)村田書店発行 1979(雑3423・中央図書館蔵)、「趣味と名物」大正12年～大正14年、名物及特産社発行(P60-18N)、「遊覧と名物」、「名物及特産」名物及特産社発行(雑3634)、「鯛車」日本民族玩具協会発行、「人魚の家」大正15年～昭和2年 ちどりや発行、「大阪印刷界」(雑354)、「大阪の三越」(1925～1928)三越呉服店発行(雑2617)

*年譜は大阪府立図書館作成の「川崎巨泉画伯遺墨 人魚洞文庫絵本展覧会目録」昭和18年9月発行をもとに、上記の参考図書から府立図書館作成の年譜にない項目を追加して作成した。また1部、文字の訂正も「郷土玩具の先覚者 川崎巨泉翁を偲ぶ」を基に行ったところがある。

凡例：9月、「宇治名物の張り抜き茶摘人形」(『名物及特産』2巻9号)は、発表月、「」は文章題、『』は掲載雑誌名、巻号

著作：「上方」誌：上方地方の馬に因む玩具(目次カット)(1)、虎岩の硯(3)、中井芳瀧の片影(6)、タイトルの後の()内の数字は雑誌の月号。

<参考>雑誌「郷土趣味」、「郷土雑誌 上方」、「鯛車」掲載の川崎巨泉の論考・随筆・カット等

「郷土趣味」郷土趣味社発行(雑2839)

大正	号	タイトル	大正	号	タイトル
9年	19	但馬城崎の麥得絵馬	10年	27	<口絵>雷に関する玩具(木版)、雷に関する玩

					具
"	20	大阪に無くなった絵馬	11年	31	堺の久の弁財天の祝い餅
"	21	和泉堺市白蔵主稲荷	"	32	<資料短編>河内枚岡神社の晴雨占い、相馬妙見社のみだらし紙
10年	23	京都北野の子貴い人形	"	35	燈籠西瓜
"	25	<絵馬と玩具>土人形に頼られたる模様と着色	12年	37	大阪の子供の悪戯
"	26	<絵馬と玩具>和泉堺の玩具と縁起物	"	39	大阪の節分

「郷土研究 上方」上方郷土研究会編 創元社発行 (雑 468)

昭和	号	タイトル	昭和	号	タイトル
6年	創刊	大阪の郷土玩具	12年	9	日清戦争のポンチ絵
"	3	天王寺に因む玩具と縁起物	13年	1	上方地方の虎の縁起物と玩具
"	9	街頭の呼び声	"	2	瓢箪山稲荷の辻占
"	12	街頭の呼び声(追補)	"	4	桜と玩具
7年	8	堺辺の盆踊唄	"	11	高松の嫁入人形
8年	9	堺の怪談	"	12	影燈籠と友引人形(堺)
9年	1	上方の水を語る	14年	1	兎の玩具
10年	3	大阪玩具の変遷	"	4	百足と土瓶の手
"	7	大阪市内の神社に関する土俗信仰と縁起物その他	"	8	中井芳瀧
"	10	アサヒビールと情歌	15年	1	深草の騎女(『上方女性鑑』の諸相)
11年	1	凧の話	"	6	上方郷土玩具、上方玩具(目次カット)
"	3	阿波の郷土人形	"	7	伏見人形の伝説、廻り燈籠(目次カット)
"	4	子供遊びの悪口	16年	2	住吉の土俗信仰
"	6	伏見人形の西行法師	"	7	水饅頭
"	7	大阪の目無し達磨	17年	1	上方地方の馬に因む玩具(目次カット)
"	8	時鳥のおとしぶみ	"	3	虎岩の硯
"	9	上方自慢	"	6	中井芳瀧の片影
12年	1	牛の玩具、朝風呂讃			
"	5	魚じまと鯛			

「鯛車」有坂与太郎編 日本民族玩具協会発行

昭和	通号	タイトル	昭和	通号	タイトル
13年	6	<随想>ゲテモノの流行	16年	46	<随想>小物玩具
"	10	<随想>貯金玉	"	46	<随想>福達磨
15年	27	<郷土玩具再吟味>流し雛(有坂与太郎・吉村蕪生)	"	"	<随想>静波の光り
"	28	<随想>大阪会談(有坂与太郎)	17年	49	<論説>玩具の出陣
"	29	<随想>こけし模様	"	"	<随想>大阪と戦争玩具(梅谷紫翠)
"	31	<随想>幸右エ門型	"	50	<扉絵>松阪版木
"	33	<郷土玩具再吟味>こけし(有坂与太郎・木戸忠太郎)	"	52	<随筆>玩具異変
16年	37	<論説>第二の国民	"	53	<論説>民玩の南方進出
"	40	<随想>一銭九厘屋	"	"	<愛玩拾遺>川崎巨泉
"	42	<随想>思い出す儘	"	55	<随想>みなとこけし
"	"	<随想>こけし十句	"	"	<こけし集覧>こけし楽可讃
"	45	<随想>人形玩具絵	"	59	<随想>見当らぬ玩具

「鯛車」59 は“故巨泉氏追悼号”(昭和17年11月1日発行)

(注) 随想等の分類名は、「鯛車」の索引に従った。

平成18年度中之島図書館

「これがおもちゃ絵だ！」展関連講演会レジュメ

演題『おもちゃ絵画家・川崎巨泉の仕事』

～郷土玩具をめぐって～

講師：北原直喜（日本郷土人形研究会・代表世話人）

◎ 川崎巨泉のプロフィール

明治10年泉州堺に生れる

本名は川崎末吉

明治25年当時堺に居た大阪最後の浮世絵師、中井芳瀧に入門、当時堺には造り酒屋も多く、引き札やラベルのデザイン等が主な仕事であった。

明治30年堺から鰻谷に芳瀧が転居、芝居絵の版下の仕事が多くなった為と思われる。

明治31年、芳瀧の娘ハマ子と結婚

郷土玩具に興味を抱く（明治36年頃から晩年まで）

商業美術や新聞の広告図案の執筆で一世を風靡する

金鶴香水、御園白粉、クラブ白粉、等当時新聞広告の花形であった化粧品、売薬の一流広告を手がける。

郷土玩具趣味家との交流

各種のおもちゃ絵集の出版

在阪各種の趣味会に参加

面茶会 美葉会 娛美会 浪華道楽宗 浪花須耽譜会

七笑会他宝船 納札天狗会 八手会 毛呂手毛羅緒会

大阪ヨタヨタ会 五十鈴会、百鈴会

雅号・・・巨泉、芳齋、虚僊、巨の字、季坊、白水、碧水居

碧水坊、碧水軒、魚水、人魚洞、人魚子など

昭和17年9月15日逝去、行年66歳

巨泉忌・・・昭和18年9月15日 第一回日本民俗玩具協会
主催

昭和19年9月15日 大阪の趣味家で偲ぶ会

昭和54年9月15日 川崎巨泉翁供養会として

「おもちゃ画譜」復刻を記念して開催された。

◎ 川崎巨泉の郷土玩具趣味とその業績

郷土玩具趣味を関西に根付かせた

後輩の育成

おもちゃ絵集の出版・・・巨泉おもちゃ絵集（大正七年）

おもちゃ千種（大正9～10年）

巨泉漫筆おもちゃ箱（大正13年）

郷土の光（大正15年～昭和3年）

おもちゃ画譜（昭和7～10年）

各地のおもちゃ誌に投稿・・・土の鈴、人魚、鯛車、

吾八コレクション

在阪各種趣味の会に参加

おもちゃ掛け軸の製作

木版はがき（年賀状、暑中見舞い）の作成

長谷川小信と双壁

創作玩具の提案（各地の名所旧跡、伝説を材料にした新しい玩具のデザイン提案、「鯛車」59号巨泉追悼号の中に氏の遺稿として「見当らぬ玩具」として43点の自案の洒落玩具を披露しています。

◎ 郷土玩具趣味の歴史・・・郷土玩具とは

江戸時代の郷土玩具趣味・・・耽奇会と耽奇漫録

文政7～8年

谷文晁 西原一甫 滝沢馬琴

江戸時代の郷土玩具文献

江戸二色（安永2年1773年）北尾重政

江戸時代の随筆

骨董集 山東京伝

嬉遊笑覧 喜多村信節

守貞漫稿 喜田川守貞

明治時代の大供玩具

うなみの友 清水晴風

大正時代から戦前まで・・・土俗玩具地方玩具から郷土玩具

東京、名古屋、大阪での郷土玩具趣味発展

東京 有坂与太郎 宮尾しげお 鈴木凡太郎
名古屋 浜島静波 伊藤蝠堂 稲垣豆人
大阪 川崎巨泉 青山一步人 岸本彩星

◎ 大阪の郷土玩具趣味・・・大正から戦前まで、当時の趣味家の顔ぶれ

川崎巨泉、岸本彩星、三宅吉之助、芳本倉多楼、中西竹山
粕井豊誠、木村旦水、梅谷紫翠、井崎一蝶、太田小宝、
福井貫進、松川美都里、高橋好劇、西田静波、青山一步人
藤里好古、木下夢人、河本紫香、村松百兔庵、大沢鯛六
横田聡明、小谷方明、駒井虚峰、瀬川俊峰、塩山可圭、
鷺見桃逸、佐野三壺、宮地留之、岡本三男他
桂小春団治、橘家蔵之助、林家染丸、三遊亭円馬、三遊亭
志ん蔵、

◎ 村松百兔庵資料に見る大阪趣味界

各種趣味の会

浪花我楽多宗・・・

元々は東京で大正から昭和のはじめに

かけて東京中心の蒐集趣味家の交友会名で、自らを「がらくた集め」と称して洒落で「我楽多宗」という仏教の一派に見立てて、寺号を雅号にして楽しんだもので、三田林蔵と云う人が始めたもの。

大阪でも別派を作ろうと云う事になり「浪花我楽多宗」を結成した。川崎巨泉は西国33箇所の内、10番札所で寺号は、「碧水山、虚僊寺」、寺印は美江寺の蚕鈴に達磨と鳩笛でした。

娛美会

旦那衆の道楽、写真から伺う当時の集まり

やつで会

河本紫香など当初8名で順番に当番制で各地のおもちゃを集めて頒布した。最後は20名強になっていた

面茶会

おもちゃを面茶と当て字した戦前大阪の郷土玩具愛好家の親睦団体、桂小春男治や三遊亭園馬などの落語家も参加

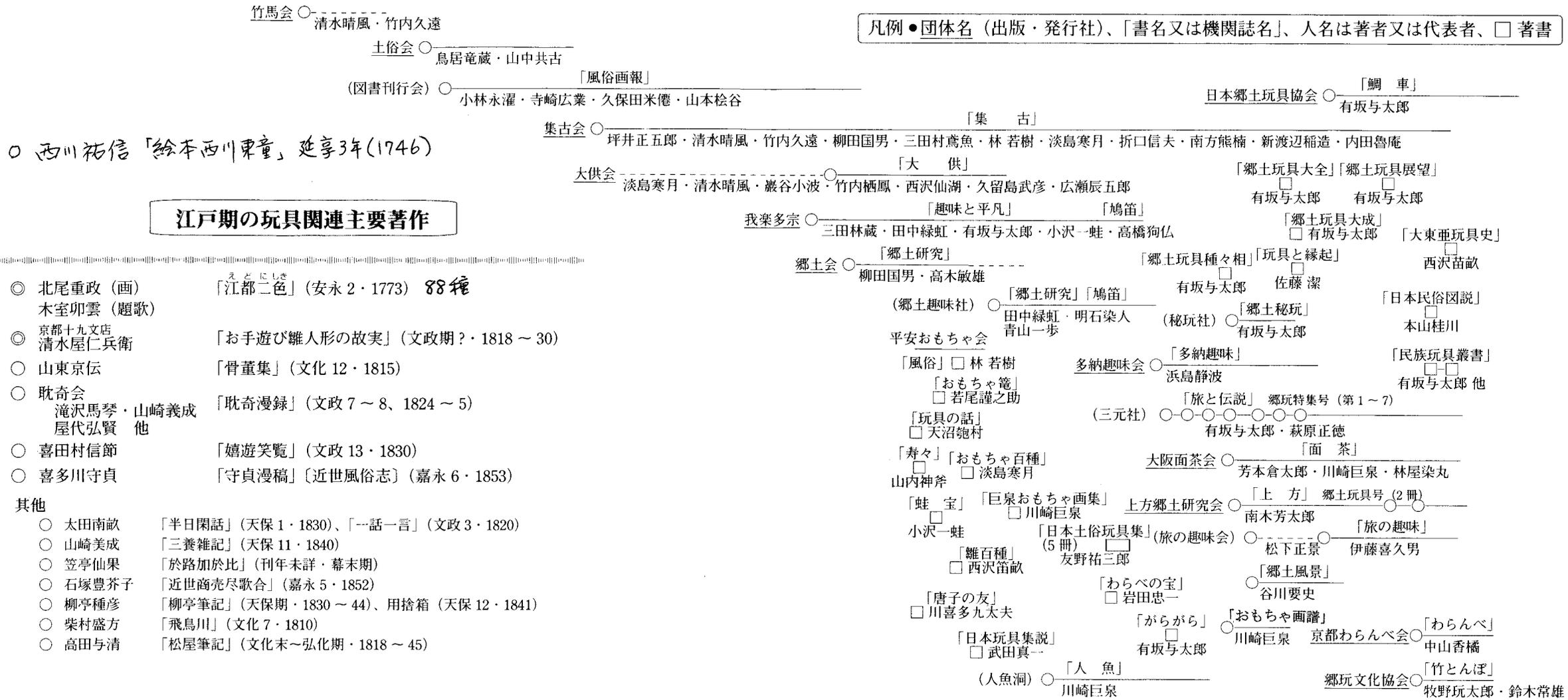
◎ 川崎巨泉のおもちゃ絵と実物との対比

大阪のおもちゃ・・・大阪張子、大阪練り物、住吉の土人形、生玉人形その他

明治以後～第二次大戦間の郷土玩具界概観

(浅見 素石 作成)

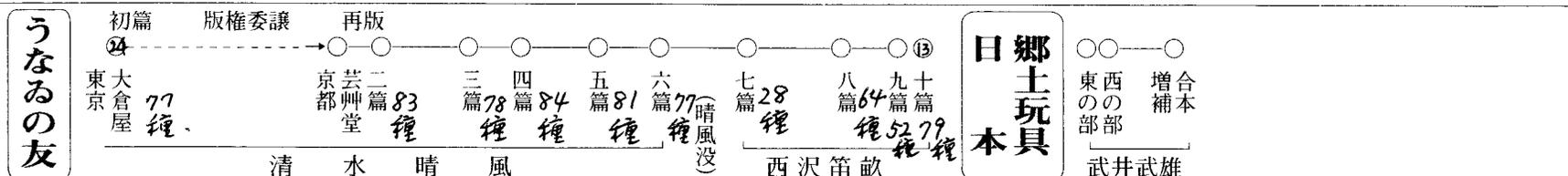
凡例●団体名(出版・発行者)、「書名又は機関誌名」、人名は著者又は代表者、□著書



江戸期の玩具関連主要著作

- 北尾重政(画) 木室卯雲(題歌) 「江都二色」(安永2・1773) 88種
- 京都十九文店 清水屋仁兵衛 「お手遊び雛人形の故実」(文政期?・1818～30)
- 山東京伝 「骨董集」(文化12・1815)
- 耽奇会 滝沢馬琴・山崎義成 屋代弘賢 他 「耽奇漫録」(文政7～8、1824～5)
- 喜田村信節 「嬉遊笑覧」(文政13・1830)
- 喜多川守貞 「守貞漫稿」〔近世風俗志〕(嘉永6・1853)
- 其他
 - 太田南畝 「半日閑話」(天保1・1830)、「一話一言」(文政3・1820)
 - 山崎美成 「三養雜記」(天保11・1840)
 - 笠亭仙果 「於路加於比」(刊年未詳・幕末期)
 - 石塚豊芥子 「近世商売尽歌合」(嘉永5・1852)
 - 柳亭種彦 「柳亭筆記」(天保期・1830～44)、用捨箱(天保12・1841)
 - 柴村盛方 「飛鳥川」(文化7・1810)
 - 高田与清 「松屋筆記」(文化末～弘化期・1818～45)

戦前二大玩書



一般世情	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
年号	明治										大正										昭和										和																																	
西暦	1870										1900										20										30										40																							
明治維新	東京遷都	廢藩置県	太陽暦施行	西南の役	鹿鳴館開設	国会開設	帝国憲法公布	日清戦争	台湾領有	北清事変出兵	日露戦争	韓国併合	清朝滅亡	中華民国成立	第一次世界大戦	米騒動	関東大震災	ラジオ放送開始	世界大恐慌	満州事変	第一室戸台風	第二次世界大戦	二・二六事件	太平洋戦争	東京大阪空襲敗戦																																							



清水晴風

「明治一三年の春、余が友竹内久遠ぬしの向島言問が岡にて竹馬会てふことをもよほし、友かきむすぶたれかれ打つどひたる席に、国々のいにしへより伝はりし手遊之品あつめつらね人々に示されぬ、予も其席にありて此しなを見、美術とはかかるものをいふなるべしと深くおもひをおこし、今世の中美術と称するは絵画刻物をはじめ数々ありといへども皆これ高尚に過ぎて予が如きもの愛しえられべきにあらねば、此手遊品に至りておのづから天然の古雅をそなへ土もて造れるあり、木にて刻めるあり、其国々の風土情体を見るにたるべしと感ずるあまり諸国の手あそび品を集めむことをおもひたちて、自ら京坂又は奈良地方其他の国々へ遊歴せしをりく或はしたしき友の旅行をききてはこれにこつてなどして集めしに、はじめ思ひおこししよりはや十あまり二とせをすこし、数は三百点を超え類は百余種に及びしものから、朝夕此品々を側に置いて愛撫し、聊か美術心をやしなふものとあはなしぬ。今春たまたま木むらぬし来り、予が手遊を愛するを見ておなじころを生し、今かく遠きちかき種々のしなを集め一人乃楽みに過さんよりこれを広くひとびとに知らしめなば、美術をめづる今日にありては世に益すること多からめ、よろしく上梓して一の冊子となすべしといふ、予も常に其心あればそがいふにまかせ、みづから拙き筆にものでこれを与へぬ、時に明治二十余り四とせといふ九月すゑの日本業の余暇、清水晴風しるす」

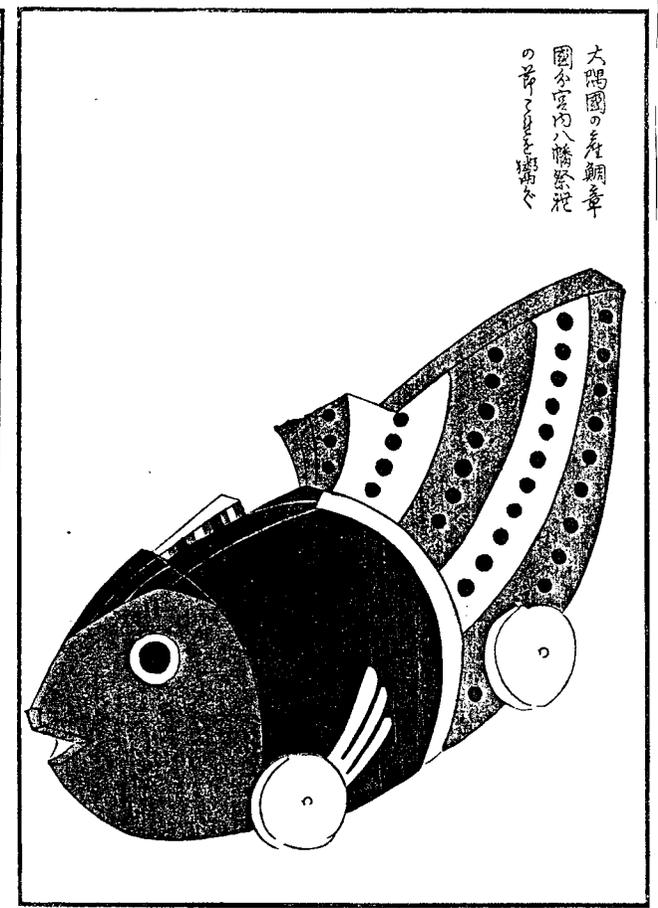


狂後國の
ベント人形

流後柳川の町
よまき
籠車

長崎の産
土製人形

45



大隅國の産鯛章
國分宮内八幡宮花
の節くしを瑞々



大坂今宮電燈渡
社より正月十ヨコ
瑞々十日東江渡り
奏物といふ

大坂よき人形といふ
種類多あり
は土製あり

大坂よかの
社に造りませぬ
怪しき人形といふ

25



奥州の関の
手遊
女将女留といふ

招前の紙製
かんざし人形

出羽坂田より
瑞々人形苗

出羽の國
手遊

32

「子どもの本を読む会」を中心とした 大阪府立図書館児童サービス関連年表

子どもの本を読む会 36 年史記念誌編集委員会

編集責任 稲垣 房子

大阪府立図書館の「子どもの本を読む会」は 2004(平成 16)年 3 月に解散し 36 年間の活動の幕を閉じた。この 36 年間の活動の記録として、2006 年 3 月発行の「大阪府立図書館紀要第 35 号」に「『子どもの本を読む会』の果たした役割」(前田千慧・大西登貴子・前野貞子・脇谷邦子共著)を掲載した。この小稿では、前稿を補足するものとして児童サービスの関連年表をまとめた。併せてお読みいただきたい。

大阪府立図書館の児童サービスが本格的に動き出したのは大阪府立夕陽丘図書館で 1975(昭和 50)年に開室した児童室からといえる。大阪府立図書館本館に、第二次大戦後に設けられた家庭室(児童閲覧室)はわずか数年で閉室され、児童へのサービスは中断されてしまっていた。1960 年代後半に入り日本の公共図書館では、児童サービスの重要性が認識され始めていたが、その動きに呼応するように、府広域へのサービス展開をしていた巡回文庫(自動車文庫)においても児童書の利用が増えていった。

そうした中で 1968(昭和 43)年 2 月に「子どもの本を読む会」が発足した。児童書の合評会や紹介リスト作成等の活動が続ける中で、大阪府内の児童サービスに関わる図書館員、保育者、文庫の人たちとの繋がりも生まれた。会員を中心とする地道な活動は府立図書館における児童サービスの必要性を確認することになり、夕陽丘図書館児童室、府立中央図書館子ども資料室へと発展していく上で、それなりの役割を果たしたと考えている。今回「子どもの本を読む会」の歴史をたどるうちに、おのずと大阪府立図書館と大阪府内の児童サービスの関連年表となったのはそのためであろう。

この小稿が戦後の大阪府立図書館児童サービス史を記録する一助となれば幸いである。

なお、子どもの本を読む会 36 年史記念誌編集委員会では 2007 年 1 月に『子どもの本を読む会 36 年の記録—大阪府立図書館児童サービスの歩みとともに』を発行した。「子どもの本を読む会」の活動を物語る多くの資料を収録した。あわせてご覧いただきたい。

凡例

☆収録年は1947(昭和22)年に大阪府立図書館(現在の中之島図書館)に家庭室を開設し、天王寺別館で児童サービスを開始した時期から2006(平成18)年までとした。

☆大阪府内の児童サービスにかかわる補足資料として、「大阪府内児童サービスの高まりー図書館員・文庫関係者・保育士達の自主勉強会が発足ー児童図書館研究会会報や図書館問題研究会支部報や紹介ビラ等に見る足跡」も掲載した。

☆年表の構成と注記

★「子どもの本を読む会」について

(1) 会の発足から、解散を経て、当編集委員会を立ち上げるまでを記録した。

★「大阪府立図書館児童奉仕を中心に」について

(1) 大阪府立図書館の状況を児童サービスの変遷を中心に記録した。

(2) 大阪府図書館職員研修・大阪府図書館司書セミナーは児童奉仕に関連あるもののみを掲載した。

(3) 子どもゆめ基金事業は「わんぱく文庫」等、関連民間団体との共同事業である。

★「大阪府内の動き」について

(1) 府内の図書館網が充実していく状況を記録することを目的とした。

(2) 府内自治体の図書館建設に関しては、新館建設を中心とし、中央図書館の建て替えは記載し、分館・分室および大阪市の地域館建て替えは省略した。

(3) 府内家庭文庫・地域文庫については、「子どもの本を読む会」に直接関わりのある文庫の記述に限った。

★「関連事項」

(1) 全国の児童サービスの関連事項を記録した。

☆追記

(1) 子どもの本を読む会36年史記念誌編集委員：稲垣房子 榎倉執子 大塚直代 大西登貴子 前田千慧 前野貞子 松岡澄子 門前房子 脇谷邦子(五十音順)

(2) 「子どもの本を読む会36年の記録ー大阪府立図書館児童サービスの歩みとともに」についての

問い合わせ先 脇谷邦子方 〒591-8032 堺市北区百舌鳥梅町 1-17-10-102 Tel & Fax : 072-250-0933

子どもの本を読む会関係年表(1947年～2006年)

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
昭和22 1947	4				長野町立図書館開館	
	10			家庭室(現在の中之島図書館内)を開設、天王寺別館で児童サービス開始		
	11				布施市立図書館開館	
昭和24 1949	5	6			大阪市立図書館児童室開設(4月に図書館条例・同施行細則を制定施行)	
	9				泉大津市立図書館開館	
昭和25 1950	4	30		天王寺別館を天王寺分館と改称		図書館法 公布
	6				大阪市立育英図書館が桜宮公会堂へ移転、大阪市立図書館と改称	
昭和26 1951	10			家庭室を児童閲覧室に改変		
	12			自動車文庫開設 一従来の貸出文庫・巡回文庫を拡充		
昭和27 1952	12				大阪市立天王寺図書館(天王寺区茶白山町)開館 (桜宮は分館に)	
				茨木市・枚方市にブックステーション開設		「図書館ハンドブック」 日図協
昭和28 1953	1				大阪公共図書館協会 発足	
	3					日本児童図書出版協会 設立
	4			中学生の特別閲覧室を児童室に付加		
	5				狭山町立図書館開館	
	8					学校図書館法 公布
	10					児童図書館研究会(児図研) 発足
	12					「岩波の子どもの本」 岩波書店 刊行開始
				古市町・泉佐野市にブックステーション開設		
昭和29 1954	5			自動車文庫事務室、天王寺分館に移転		第40回全国図書館大会 (東京) 戦後初めて児童図書館問題が討議される

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
昭和30 1955	5					図書館問題研究会(図問研) 発足
	8					「日本児童文学」 日本児童文学者協会 創刊
	11					全国公共図書館研究集会 児童に対する図書館奉仕(神戸) 参加者から都道府県立図書館児童奉仕不要論発言がでる
昭和31 1956	3					「こどものとも」 福音館書店 刊行開始
	10			自動車文庫広報誌「図書あんない」創刊 ⇒昭和35.12以降「わたち」と改題		
	11					日本図書館協会(日図協) 公共図書館部に児童図書館分科会を設置
						「年鑑こどもの図書館1956年版」 児図研 ⇒1969年版から「年報こどもの図書館」 日図協
昭和32 1957	2			大阪府自動車文庫友の会 創立		
	8					家庭文庫研究会 発足 ⇒昭和40に児図研に合流
	10					「本・子ども・大人」ポール・アザール 紀伊国屋書店
昭和33 1958						「日本の児童図書館 1957—その貧しさの現状」 日図協
	10			児童閲覧室閉鎖		児童図書日本センター 発足 ⇒昭和49にJBBYに引き継ぐ
昭和34 1959	6					「こども図書館の手引き」 日図協
	11					日図協児童図書館分科会主催第1回児童に対する図書館奉仕全国研究集会(岡山)
					府内市町村立図書館数:13市町 15館	
昭和35 1960	4					「子どもと文学」石井桃子他 中央公論社
	5					鹿児島県立図書館「母と子の20分間読書運動」開始
昭和36 1961	6				大阪市立中央図書館新規設置。従来の本館を「天王寺図書館」分館を「桜宮図書館」と改称。	
	11	1			大阪市立中央図書館開館 小中学生室・児童読物相談室設置。	

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
昭和37 1962	1				大阪市立図書館、図書選定委員会組織、こどもの本の選定事業開始	
	2			主題別開架閲覧制度実施 中・高校生を対象に、学習参考室設置		
	8				池田市立図書館開館	
昭和38 1963	3					「中小都市における公共図書館の運営」 日図協
	6				茨木市立図書館開館	
	10			天王寺分館改築計画委員会 発足		
	11					「児童図書館ハンドブック」 日図協
昭和39 1964	4					「児童文学論」L.H.スミス 岩波書店
	6	2			大阪市立中央図書館小中学生室・児童読物相談室に松岡享子着任(1966年7月末まで)	
	11				貝塚市立図書館開館	
昭和40 1965	5					「子どもの図書館」石井桃子 岩波書店
	9					日野市立図書館 BMひまわり号 貸出業務開始
昭和41 1966	1					「絵本とこども」瀬田貞二 福音館書店
	5			職員研修制度始まる		
	8					多摩平児童図書館 開館(日野) 都電の廃車を利用
	10					「児童図書館への道」ハリエット・G・ロング 日図協
					「あなたの読書のために」第1集刊行	
昭和42 1967	2				吹田市立図書館開館	
	4					日本親子読書センター 設立
	6				河内長野市立図書館開館	「シリーズ図書館の仕事 児童図書館」小河内芳子編 日図協
	10					日本子どもの本研究会 発足
昭和43 1968	2	10	子どもの本を読む会 発足			

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	5					国立国会図書館の児童図書の開館を要請する会 発足 「子どもと本の世界に生きて」E・コルウェル 福音館書店
	6				高槻市立図書館開館	
	7		「わだち」no.123に”子ども達に楽しい読書を！”掲載			
	9					科学読物を読む会(⇒科学読物研究会) 発足
	10	19	鴨の子文庫(神戸・代表大月ルリ子)見学			
	10	26	各自の役割分担と会費徴収を決定			
			合評会・児童書紹介文のストックづくり・児童文学(史)についての学習・府立の児童室の変遷調査・巡回文庫課の状況把握・府内図書館等の見学・子どもと接する機会を持つ・関連資料の収集保存 等々をおこなう。		府内市町村立図書館数:14市町18館	
昭和44 1969	4					「子どもの本の世界」B・ヒューリマン 福音館書店
	6					ねりま地域文庫読書サークル連絡会(東京) 発足
	7		「児童読みもの案内」発行			
	8					第1回全国子どもの本と児童文化講座 日本子どもの本研究会 (熱海)
	9					児童図書館員研修セミナー 第1回 開催 日図協
	9	29			府立図書館職員池長執子、府内図書館員によびかけ児童サービスについて話合う 於:箕面市立図書館	
	10	20			児童書を読む会 第1回 会合(補足資料参照) 同時期にストーリーテリングの会わらべも発足	
				茨木市・枚方市のブックステーション廃止 寝屋川市・能勢町にブックステーション開設		
昭和45 1970	1					「子どもの本棚」(月刊) 日本子どもの本研究会 創刊
	4	17	読む会 司書部長に挨拶 OLAや図研との関わりなど将来の希望を話す。			
	4					親子読書・地域文庫全国連絡会 発足

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
		4				子どもの読書の自由協議会 発足
		5	2 松原市・中川徳子さん宅訪問 家庭文庫開設の相談を受ける			
		5			寝屋川市立図書館(後の東図書館)開館	「市民の図書館」 日図協
		6				渡辺茂男著「ふたごのでんしゃ」を全国の市長に送る会 発足
		7			雨の日文庫 開設 (代表:中川徳子・松原市)	
		7	「児童読みもの案内」 発行			
		8	10		第1回「本と子ども」の研究集会 本と子どもの会(大阪)	
		8	17 第2回全国子どもの本と児童文化講座(熱海) 参加 (~19日)			
		8	24 高槻千種の子ども会で読み聞かせ			
		10	11 くすのき文庫(富田林市) 開設			
		10			「図書館をみんなのものにする会」(大阪市)発足 11月 BM増車等を大阪市議会に請願(採択)	
		12		「大阪府立図書館基本構想に関する報告書」まとまる		
		12	9	館内研修「児童図書について及び公共図書館における児童奉仕について」 講師西田博志氏ほか		
			6月に、司書部長から、会議室を使用してよい、読む会の規約をつくり館長決裁を受けておいてはどうか、という2点が、また9月には研修委員会にこみこみ話がでる⇒会の目的を再確認、自主サークルとして現状どおりでやることとする。 この年から、読み聞かせの練習に積極的に取り組む		オルコット会 発足(補足資料参照)	
昭和46 1971		4			大阪府立図書館「こどものほんだな」発行開始	社会教育審議会、「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」 答申
		5			豊中子ども文庫連絡会 発足	

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	6				ももやまぶんど開設(阿倍野区昭和町の桃山学院の一室 出資は桃山学院)代表:根岸伴子 ⇒2004年3月末閉室	「国立国会図書館所蔵児童図書目録 上巻」
	7		「児童読みもの案内」発行		堺市立(現中央)図書館(新館)開館	「季刊子どもの本棚」 日本子どもの本研究会 創刊
	8					「親子読書」 親子読書・地域文庫全国連絡会 創刊
	9	7		館内研修「日本児童文学史」講師三宅興子氏		
	11	9		館内研修「英米児童文学史」講師三宅興子氏		
	11				吹田市立(現中央)図書館(新館)開館	
	12	13			「図書館をみんなのものにする会」と図問研大阪支部会員が話し合い	
				泉佐野市・羽曳野市(旧古市)のブックステーション廃止 門真市・藤井寺市にブックステーション開設	この頃から府内各地で文庫連絡会が結成される。7月に第1回家庭文庫連絡会がひらかれ、9月の2回目の会合で「大阪府家庭文庫・地域文庫を育てる会準備会」が発足。府立図書館の図書費増額等の請願運動をおこなうことを決定	
					この頃、ストーリーテリング勉強会「あまんじゃく」発足。(補足資料参照)	
昭和47 1972	1	14		館内研修「絵本について」講師中川雅裕氏		
	1			「大阪府立図書館紀要」8号(『大阪府立図書館の子ども本を読む会と児童書を読む会のこと』西沢千慧)		
	1	18			図問研大阪支部例会(吹田)で「[大阪府立図書館天王寺]分館改築問題対策委員会」発足	
	1	24			図問研大阪支部 住民交流会開催 大阪府立図書館天王寺分館改築問題にむけての請願運動開始決定 「大阪の図書館をよくする会」(よくする会)発足	
	2					「地域家庭文庫の現状と課題—文庫づくり運動調査委員会報告」 日図協
	4					日本図書館協会が4月30日を「図書館記念日」、5月中を「図書館振興の月」と決定
	4			天王寺分館改築のため阿倍野区昭和町に臨時館を設ける		「みんなに本を 図書館白書 1972」 日図協

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	6				「よくする会」知事に要望書	
	7				枚方子どもの本をひろめる会 発足	
	7				大阪市立中央図書館、小中学生室を児童図書室に改称。大阪市立東住吉(現平野)図書館、西淀川図書館開館	
	8		リスト作成が職員研修事業として位置づけられる。		寝屋川子ども文庫連絡会 発足	
	9				松原子ども文庫連絡会 発足	
	10		「としょかんで借りて読むどうぶつの本」発行	天王寺分館改築工事 着工		
	12				図問研大阪支部 大阪府内の図書館政策作成をめざして「政策委員会準備会」発足	
	12	11			児童図書館研究会(児図研)大阪支部発会式(大阪外の会員から近畿支部結成の要望があり拡大することに決定)	
			この年、分館での児童奉仕について、会員間で、具体的な話し合いを開始		この頃より府内各図書館で自動車文庫巡回開始。	
				寝屋川市・能勢町のブックステーション廃止	近畿子どもの本連絡会(近子連) 発足 (昭和52年解散)	国際図書年 スローガン Books for All 7月東京で記念大会開催
昭和48 1973	1			天王寺分館運営計画 明らかになる	茨木市立図書館(新館)開館	
昭和48 1973	1	13	くすのき文庫 地域文庫に移管			
	1	23			児童図書館研究会(児図研)近畿支部発足	
	2		このころから分館での児童奉仕について、副館長や分館長との話し合いを何回かもつ			
	2	17	「日刊ペチカ」に「新分館で直接児童奉仕を」連載(全5回) (～22日)			
	3	2			図問研大阪支部 「政策委員会」第1回会議開かれる 委員には住民も参加	
	3	8			図書館問題研究会大阪支部が問題別集会開催 一府立図書館児童室問題について	

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	4			南河内府民センター図書室開室(職員出向)	枚方市立枚方図書館開館	
	5			館内研修のひとつとして、児童書リスト編集委員会 ができ、リスト作成が巡回文庫課の業務となる。		
	7	7	六甲保養所で秋のリスト作成のための 合宿・会議(～8日)			
	7	12			「大阪府家庭文庫・地域文庫を育てる会準備 会」要望書提出 府教委等と交渉	
	7		くすのき文庫のお母さんとの話し合い		大阪市立城東図書館開館	公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準 (案)発表 社会教育審議会施設分科会 公示せ ず
	8		交野市立図書館の児童書購入リスト作 りのお手伝い			
	8		秋のリスト作成について、巡回文庫課 長や分館長と話し合い(8月末～9月 初)		府教育委員会「自動車文庫設置補助金」交付 開始	
	9				「大阪府家庭文庫・地域文庫を育てる会」(育て る会)発足 要望書提出。 府立図書館副館長 や知事との話し合いを重ねる。	
	10			「こどものための100冊の本 1973」発行		
	11	16	大阪府立砂川厚生福祉センターの職 員から、団体貸出や寮生への読み聞 かせ等について相談を受ける			ふきのとう文庫第1号 北海道小樽の病院に開設 ⇒昭和57. 6に札幌市に(財)ふきのとう子ども図書 館開館
	11		南海保育専門学院(高石市)で 子ど もの本について講義(～12月)			
						「児童のための図書館奉仕」L・マッコルビン 日図 協
			松原市やくすのき文庫などのお話会に 参加。四條畷でお母さんに向けた本の 紹介をしたりもする。ストーリーテリング の練習も本格的に開始			「民話の手帖」日本民話の会、「詩とメルヘン」サンリ オ出版、「月刊絵本」盛光社、「子どもの館」福音館 書店、「月刊絵本の世界」らくだ出版デザイン、「詩 と童謡」すばる書房盛光社 創刊 児童書専門店「メルヘンハウス」(名古屋)開店
昭和49 1974	1					東京子ども図書館 財団法人に
	1	20	大阪府立砂川厚生福祉センター こん ごう寮見学			
	2	26	大阪府立砂川厚生福祉センター職員 との話し合い			

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
昭和49 1974	3				松原市自動車図書館発足	
	3	22			「育てる会」要望書提出 夕陽丘図書館に児童室を	
	4	1		夕陽丘図書館一部開館 巡回文庫課が読書振興課に課名変更。中之島との機能分担開始		
	4					品川区立図書館 さわる絵本貸出開始
	4					「図書館白書 1974 子どもは本がだいすき」日図協
	4		読む会会員の大半が夕陽丘図書館へ異動となる。 府立の児童奉仕のあり方について討議を重ねる			
	5	13	「こっぺぱん」0号 発行			
	5	27	「こっぺぱん」創刊号 発行	夕陽丘図書館開館記念式典 29日より全面開館		
	6	1	館より「こっぺぱん」創刊号についてクレームがつく	「児童書資料コーナー」を読書振興課に設置 「読書振興課に置く児童書資料」の取り扱い方針制定 「児童書資料整理方法」制定		
	6	8	館長・副館長・司書部長・司書部各課長と読む会会員 9名が「こっぺぱん」創刊号をめぐって話し合い			
	6				「育てる会」要望書提出	
	6	11		分会ニュースNo. 10 『こっぺぱん』よその子には食べさせるな！		
	6	12			黒田了一大阪府知事発言“夕陽丘に主婦や児童のための部屋を設ける”	
	6	15	「こっぺぱん」1.5号 発行			
	7	1		「児童書資料コーナー」の設置、運営方針制定		
	7	9	大阪府議会議員を訪問、議会での様子を訊く			
	8			自動車文庫5台になる		
8	15	「こっぺぱん」2号 発行				
9	7	「こっぺぱん」3号 発行				

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	9	22	図問研全国大会 富山 第五分科会で事例発表(～24日)			
	9		「こっぺぱん」 4号 発行(9月末)			
	10			館報「ゆうひがおか」 創刊		
	10	4		夕陽丘図書館 部課長会議で、昭和50.4 から児童室設置 の予算要求をする旨決定		
	10	8		夕陽丘図書館 部課長会議で 児童奉仕構想決定		
	10	21	”イギリスの話を聞く会”(スライド付き) 講師三宅興子			
	10	28		箕面市の西河氏より児童書約6800冊(500万円相当)寄贈		「えほんのもくろく」児図研編 日図協
	10	30			「生涯教育の観点から見た社会教育施設のあり方——市町村立図書館の役割とその振興方策について(建議)」大阪府社会教育委員会議	
	10		「こっぺぱん」 5号 発行(10月末)			
	11	1			「府民のくらしに図書館を一大阪府の図書館政策を考える」 図書館問題研究会大阪支部	
	11	7	会と司書部長 話し合い			
	11	19	「こっぺぱん」 特別号 発行			
	11		南海保育専門学院(高石市)で 子どもの本について講義(～12月)	夕陽丘図書館館長、司書部長、庶務課長と職員の見意見交換会(～12月)		国際児童図書評議会日本支部(JBBY)発足←児童図書日本センターの事業をひきつぐ⇒昭和60.3に日本国際児童図書評議会となる
	12	23	「こっぺぱん」 6号 発行			
			児図研近畿支部の会員として「えほんのもくろく」の作成にかかわる	藤井寺市、門真市のブックステーション廃止	大阪市立中央図書館 「あつぷるコーナー」(⇒ヤング・コーナー) 開設 府内市町村立図書館数:19市町 28館	
昭和50 1975	3	18	「こっぺぱん」 7号 発行			
	4	16		「大阪府立夕陽丘図書館児童室用図書収集方針」 「児童室用図書整理方法」制定		
	4				大阪市立旭図書館開館	

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	5	9		児童室設置工事着手		
	5	24			町の子文庫 開設（昭和54.4末まで⇒以降地域文庫に移管）	
	5				岸和田市立図書館（新館）開館	
	6			大阪府自動車文庫友の会が、大阪府読書団体友の会と改称		
	7	14	「こっぺぱん」8号 発行			
	7	15		児童室設置工事完了 「児童書資料整理方法」一部改正		
	7			部課長会議で児童室運営方針決まる		
	7	18		夕陽丘図書館 児童室開設		
	7			児童書資料コーナー 第一閲覧室に移管 利用規則に基づき、児童室の利用について（貸出冊数等）定める	豊中市立庄内図書館開館	
	9	13	「こっぺぱん」9号 発行			
	9	14	図問研全国大会（神戸）に参加（～15日）			
	10		絵本の合評会を毎週1回昼休みに始める		大阪市立阿倍野図書館開館	
	11			大阪府立夕陽丘図書館館外貸出事務取扱規程（内規）制定		
	11			読書講演会「お母さんのための子どもの本の研究」 来栖良夫氏		
					「大阪府子ども文庫連絡会準備会」発足	
					児童文化講座「本・子ども・大人」を開講（全7回 府教委後援）	伊藤忠記念財団 子ども文庫助成事業 開始
昭和51 1976	1	7		映画とブックトークの会（第1回）		
	2				吹田子どもの本研究会（正置友子主宰）発足	
	3	15	「こっぺぱん」10号 発行			
	4	1		貸出図書延滞料徴収を廃止、貸出停止制度に変更		

＜夕陽丘図書館児童室＞
職員：2名（専任）
面積：90㎡ 開架冊数：4,000冊
開室時間：13:00～17:00
（春夏休みは10:00～17:00）

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	6	29			大阪府子ども文庫連絡会(大子連) 発足	
	6				大阪市立図書館、学習室を縮小し、ヤング・コーナーをよみもの部に移す	
	6				大阪市立東成図書館開館、富田林市立図書館開館	
	7	1		児童室の図書貸出冊数2冊を3冊に		
	7			児童室開室1周年記念展「世界の民話・昔話絵本」		
	8	24		紙芝居・お話会開催 (第1回)		
	9			児童書 見計らい制に移行		日図協 児童図書センター 開設
	9	30		「児童室用図書選択基準」制定		
	9			児童資料コーナーおよび児童室について話し合い(閲覧課)		
	11					「障害者」差別の出版物を許さない! まず「ビノキオ」を洗う会 全面回収をもとめるアピール発表
	12			「としょかんでかりてよむこどもの本 1976」発行	大阪市立鶴見図書館開館	
					秋ごろ、大阪で最初の児童書専門店「木馬館」開店	
昭和52 1977	1		あかちゃんえほんリスト作成			
	1	21		読者のつどい お母さんのための読書研修会「子どものための読書の普及と振興」間崎ルリ子氏		
	2	9		読者のつどい児童図書研修会「児童文学の今日的な展望」三宅興子氏		
	4		ストーリーテリング 第一回(月1回、後に月2回)		府教委が家庭(地域)文庫、読書友の会の活動費補助事業を開始	
	4				門真市立図書館開館、松原市民図書館開館	
	5			赤ちゃんから楽しめる絵本展(5/11~30)	狭山町立図書館(新館)開館	

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	5		絵本について研究会 講師前田章夫 絵本の歴史・形態・マンガとの違い(～9月)			
	7		「大阪新聞」 ”夏休み図書案内” 掲載(7月～8月)			
	8			復刻資料展「名著復刻日本児童文学館」(8/8～30)		「みんなの図書館」 図問研 創刊
	11				寝屋川市立中央図書館開館	
	11			クリスマスの絵本展(11/21～12/17)	大阪市立此花図書館、住之江図書館開館	
				児童資料コーナー・児童室・読書振興課の資料の 収集整理について集書業務検討会(整理課)	さわる絵本の会 つみき 発足	
昭和53 1978	1				八尾市立図書館開館	
	2			児童資料コーナー・児童室・読書振興課の資料の 収集整理について 整理課と閲覧課討議		
	3	31		南河内府民センター図書室閉鎖。図書備品は南河 内地域の各自治体に譲渡		
	4				豊中市立千里図書館、吹田市立千里図書館 開館	
	5				柏原市立図書館開館	衆・参両院議員 図書議員連盟 設立
	7			「府立図書館における将来構造と夕陽丘図書館の 事務事業」検討計画作成	大阪市立都島図書館開館	
	8			「パリで紹介された日本の絵本」展(8/14～30)		
	9				島本町立図書館開館	
	11			「大阪府立図書館将来構想(試案)」中之島図書館 将来構想委員会 まとまる 復刻資料展「復刻絵本絵ばなし集」(11/1～22)	和泉市立図書館開館	
昭和54 1979	1				大阪市立東住吉図書館開館	
	5			児童室資料展示「海外で受賞した日本の絵本」展 (5/1～30)	枚方市立香里ヶ丘図書館開館	JLA昭和54年度定期総会「図書館の自由に関する 宣言 1979年改訂案」承認
	7	11		「児童室用図書整理方法」一部変更		
	8	8	人形劇の勉強会開始(毎週水曜日昼 休み)			
	9		人形劇団 ”こっぺばん座”結成、以 降、昭和63年まで府内での活動が続く 本編参照		羽曳野市立古市図書館開館	

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	10	27			鳥越コレクション大阪府に寄贈決定	
	10	28		一日緑陰図書館開催 於:豊能町		
	11	10	図書館問題研究会から「会」の沿革史の原稿依頼 「みんなの図書館」に掲載のため			
	12	28	来年の年計画、運営方法について話し合い			
					「児童奉仕に関する調査報告書 大阪府下公共図書館における児童奉仕の現状」大阪公共図書館協会	国際児童年
昭和55 1980	1			「なつかしの少年読物」展(1/5～30)		「読書・公共図書館に関する世論調査報告」総理府
	2					日図協 児童図書館員養成講座(第1回)開催
	3				大阪市立桜宮図書館閉館	
	4				大阪市立東淀川図書館開館	「子どもと本」 子ども文庫の会 創刊
	5		日本児童文学史の勉強会開始(～12月)		池田市立図書館(新館)開館	
	6			児童室資料展示「復刻世界の絵本館オズボーン・コレクション」展(6/2～28)		
	7	1			財団法人大阪国際児童文学館設立 事務所を夕陽丘図書館に置く 大阪府事務職員と司書を財団法人に派遣	
	7				松原市民松原図書館開館	
	8				大阪国際児童文学館育てる会発足	
	11	1		夕陽丘図書館館外貸出事務取扱規程の一部改正 研究用児童書貸出可		
			「職員時報」"シリーズ"児童文学のすすめ" 昭和57まで21回掲載		府内市町村立図書館数:28市町 53館	
昭和56 1981	1				大阪市立中央図書館児童室別室へ移転	
	3		「大阪新聞」"この本読んでごらん"掲載(3月・4月)		高石市立図書館閉館	
	4	24		「児童室用図書選択基準」一部改正		

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	5				大阪市立生野図書館開館、松原市立天美図書館開館、四条畷市立図書館開館、視覚障害児のためのわんぱく文庫 盲人情報文化センターに開設⇒平成8年6月から府立中央図書館こども資料室に移設	
	6			児童室のリストづくりが年度計画に組み込まれ、定例化		
	7			児童室紙芝居会 開始(毎月第二水曜) 以降定例化	堺市立新金岡図書館開館	
	7	20		「なつのほんだな'81」発行 (以降1995年まで毎年発行)		
	8			和泉市立図書館主催「としよかんサマーキャラバン」にBM協力参加	藤井寺市立図書館開館	
	10			児童室「わたしのほんだなーあき」(次号より「あきのほんだな」に改題(～1993年)		
	10			児童室資料展示「子どもに空想とやさしさをおくる絵本作家」(10/1～30)		
						国際障害者年
昭和57 1982	4					さわる絵本連絡協議会 発足
	5				大阪市立港図書館開館、枚方市立楠葉図書館開館、松原市民恵我図書館開館	「図書館年鑑 1982」 刊行開始
	6			児童室資料展示「ラテン5ヶ国の絵本」(6/1～29) 児童室お話し会開始 定例化(毎月第一木曜)		(財)ふきのとう子ども図書館 開館(札幌)
	8			和泉市立図書館および茨木市立図書館主催「としよかんサマーキャラバン」にBM協力参加		
	8	18		夏休み行事開催(紙芝居・手袋人形劇等)以降「夏休みおたのしみ会」として毎年定例開催		
	9			児童室資料展示「復刻世界の絵本館ベルリン・コレクション」展(9/1～29)		
	10				大阪市立住吉図書館開館	
	10	21		読者のつどい「北欧圏の絵本の現状」木村由利子氏		
	12	8		「クリスマス会」開催。以後毎年定例開催		
				「職員時報」読書フリータイム” 昭和59まで24回 掲載		
				以降も、合評会は昼休憩時に定期的に開く(2交代制勤務のため、同一資料について会合を2回もつなど工夫)		

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
昭和58 1983	2					おもちゃの図書館全国連絡協議会 発足
	4				富田林市立金剛図書館開館	
	6			児童室資料展示「マザーグースの世界」(6/1～29)	泉大津市立図書館(新館)開館、羽曳野市立 陵南の森図書館開館	
	7				堺市立泉ヶ丘図書館開館	
	8			児童室資料展示「アルファベットの絵本」(8/1～30)	枚方市立菅原図書館開館	
	9	27	学習会「夕陽丘図書館における児童 資料奉仕の現状とあるべき姿及び大 阪国際児童文学館の構想とあるべき 姿」(出席11名)			
	10				大阪市立淀川図書館開館	
	12			図書館連絡車 試行開始 府内15市立図書館へ協 力貸出		
			第4回児童図書館員養成講座(大阪開催)に自費参 加:稲垣房子 児童書の選書会議はじまる	この頃、金金(ごんごん)の会(大阪市立図書館 員のおはなし勉強会)発足		
昭和59 1984	3	2		読者のつどい「現代に生きる子どもとおはなし」大月 ルリ子氏		
	3			児童室資料展示「絵本の可能性」展(3/1～30)		
	4				点訳絵本の会、岩田文庫 開設 ⇒平成3年4月にふれあい文庫と改称	
	4		金子幸子氏よりOHPの寄贈を受ける		大阪市立浪速図書館開館、泉南市立図書館 開館、	
	5		東京子ども図書館の十周年記念事業 に募金 こっぺばん座について話し合い	中之島一主題別閲覧室とサービス体制の再編成 学習参考室閉室	大阪国際児童文学館開館(大阪府事務職員と 司書の派遣継続 ⇒平成4年3月まで)、松原市 民三宅図書館開館	
	7	1		「大阪府立夕陽丘図書館館外貸出事務取扱規程」 一部改正 洋絵本の館外貸出可となる		
	7			児童室資料展示「こんな家に住みたいナ 絵本にみ る住宅と都市」展(7/2～30)	摂津市民図書館開館	
	8				大阪市立大淀(現北)図書館開館	「子どもの豊かさを求めて 全国子ども文庫連絡会 等調査報告書」 日図協
昭和60 1985	2	12		「はらっぱ」大阪府立夕陽丘図書館じどうしつだより 創刊		
	3			児童室資料展示「グリムメルヘンの世界」展(3/4～ 29)	大阪市立西成図書館開館	

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	3	29		「はらっぱNO.2」発行		
	4				大阪市立天王寺図書館 天王寺区上之宮町に移転開館	
	5				松原市民松原南図書館開館、忠岡町図書館開館、枚方市立山田図書館開館	
	7			児童室資料展示「復刻世界の絵本館オズボーン・コレクション II」展(7/1～30)		
	8					学校図書館問題研究会 発足
	11	25		「はらっぱ NO.3ー今、子どもの本を考えるー」発行		
	12				豊能町立図書館開館	
				第6回児童図書館員養成講座(東京開催)に児童室担当者自費参加:大西登貴子		
昭和61 1986	2	28		読者のつどい「幼年文学をめぐって」上田由美子氏		
	3			「図書館サービスのネットワークのあり方について 第4年次(最終)報告書」大阪府教育委員会・大阪府図書館ネットワーク検討委員会		
	3	31		「はらっぱ NO.4ー幼年文学をめぐってー」発行		
	4			新府立図書館建設プロジェクトチーム 発足		
	5				大阪市立大正図書館開館、箕面市立東図書館開館、枚方市立蹉だ図書館開館	
	7			児童室資料展示「しかけ絵本」展(7/21～8/29)		
	8	26			フリッパ・ピアス講演会「なぜ子どもを書くのか」主催:大阪国際児童文学館 後援:大阪府教育委員会	
	9				イトーヨーカ堂堺店こども図書室開館	
	10		サンケイ新聞社発行月刊誌「くらしの百科」に「最近児童書がおもしろい」を掲載			東京子ども図書館 児童室を開設
	12	10		「はらっぱ NO.5ー1986年子どもの本の世界大会ー」発行		
					府内市町村立図書館数:33市町 84館	
昭和62 1987	3	30		児童書整理規定全面改定 児童書読みものNDC8版3桁分類に		

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	3	31		「はらっぱ NO.6-今、考えよう、性の問題と生きることの意味-」発行		
	4				大東市立図書館開館、吹田市立山田図書館開館	
	5				大阪市立福島図書館開館、枚方市立御殿山図書館開館	
	8			児童室資料展示「子どもの絵本カレンダー」展(8/1～29)		
	9					「公立図書館の任務と目標」最終報告発表 日図協
	11	16		府内図書館へアンケート「児童奉仕における行事について」		
昭和63 1988	2	20		「はらっぱ NO.7-子どもと行事・おはなし会-」発行		
	2	25		読者のつどい シンポジウム「こどもの読書ばなれを考える」		
	3			児童室資料展示「子どもの世界をひろげる 布の絵本」展(3/1～30)		
	3	30		「はらっぱ N.8-子どもの読書ばなれを考える-」発行		
	3	31		児童書整理規定一部改定 カード配列		
	4			おはなし会毎週水曜日に変更	高槻市立小寺池図書館開館	
	5				枚方市立牧野図書館開館	
	6				松原市民天美西図書館開館、豊中市立野畑図書館開館	
	9			児童室資料展示「おいしいもの大好き！子どもの本いろいろ」展(9/1～29)		
	11	17		88'おおさか"図書館"フェスティバル 於:松坂屋府社会教育課、大阪21世紀協会等共催(～22日)	箕面市立中央図書館開館	
12					岩波書店 絵本「ちびくろさんぼ」絶版	
昭和64/ 平成1 1989	1	25		「はらっぱ NO.9-韓国・朝鮮の児童文学-」発行		
	2	16	学習会「新府立図書館での児童奉仕のあり方-府下公立図書館での児童奉仕部門におけるセンター的機能を果たすために」(出席8名)			

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	3	13		読者のつどい「児童奉仕の可能性を探る」		
	3	31		「はらっぱ NO.10ー子どもと本をつなぐ試みー」発行		
	3				ヤング・アダルト・サービス研究会発足(補足資料参照)	「公立図書館の任務と目標 解説」 日図協
	4	24	昼休みに職員向けお話し会開催		貝塚市民図書館開館、堺市立鳳図書館開館	
	6					「子どもの豊かさを求めて 2 全国子ども文庫連絡会等調査報告書」 日図協
	9				大阪市立島之内図書館開館	
	11		貝塚市民図書館の依頼により読書会用「冒険リスト」を作成		阪南町立(現市立)図書館開館	
	12			児童室資料展示「外国のクリスマス絵本」展(12/13～27)		
平成2 1990	1			児童室資料展示「カルタあれこれ」展(1/5～30)		
	2	28		「はらっぱ NO.11ーアジアを知ろう児童文学2・中国ー」発行		
	3	22		読者のつどい「私の中のアジアを語る」しかたしん氏		
	3	22		「おりがみの楽しみ」展(3/1～30)		
	3	31		夕陽丘図書館自動車文庫廃止 「はらっぱNO.12ーアジアを知ろう児童文学3ー」発行		
	4			読書振興課廃止 業務は閲覧課に引き継ぐ		
	5				枚方市立津田図書館開館	
	8			児童室資料展示「アジアの絵本」展(8/1～9/28)		
	12	11		読者のつどい「府立図書館における新しい児童奉仕のあり方を探る」シンポジウム		
				第10回児童図書館員養成講座(東京開催)前期・後期 児童室担当者公費出張で受講(脇谷邦子)	府内市町村立図書館数:35市町 93館	
平成3 1991	1					学校図書館を考える会・近畿 発足
	2				「クレヨンハウス 大阪店」吹田市に開店	
	3			児童室資料展示「絵本からとびだしたキャラクターたち」展(3/1～4/6)		

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	3	20		「はらっぱ NO.13・14合併号ー府立図書館児童奉仕を考えるー」発行		子どもの本の品切れ絶版を考える会 発足
	4	3		春休みおたのしみ会(人形劇等)以降毎年開催定例化。これにより、春夏・冬休みに子ども向けイベントの開催が定着し、現在に至る。		
	5				『ホビットの会十年誌』(会長:正置友子)発行	公立図書館の設置及び運営に関する基準(案) 発表 文部省
	5	21			新金岡子どもの本を読む会発足(補足資料参照)	
	6				箕面市立桜ヶ丘図書館開館	
					大子連 「新府立図書館建設についてのお願ひ」府へ提出	
平成4 1992	1	31		平成3年度近畿公共図書館協議会児童奉仕部門研究集会開催(夕陽丘図書館担当)		
	3			図書館ウォッチング「新中学生図書館利用ガイドンス」		
	3	31		「はらっぱ NO.15ー子どもの権利条約と図書館ー」発行		
	4			府教育委員会社会教育課内に新府立図書館準備室設置	茨木市立中央図書館開館	
	6				東大阪市立花園図書館開館	
	7				摂津市立鳥飼図書館センター開館	
	8			貸出冊数(3冊→4冊)、期間(2週間→3週間)に変更		
平成5 1993	2				箕面市立萱野南図書館開館	
	2	19		読者のつどい「科学の本っておもしろい！」西村寿雄氏講演		
	3	22		「はらっぱ N.16ー科学の本っておもしろい！ー」		
	3	31		「はらっぱ NO.17ーアジアを知ろう児童文学4ー」発行		
	3					「公立図書館におけるヤング・アダルトサービス実態調査報告」日図協
	4				四条畷市立田原図書館開館	
	6			新府立図書館子ども資料室の設計について、打ち合わせ開始。以降開館まで打ち合わせが続く	岸和田市立山直図書館開館	
	7				吹田市立さんくす図書館開館	

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	8				守口市生涯学習情報センター開館、羽曳野市立羽曳が丘図書館開館	
	9	17			MMの会発足(補足資料参照)	
	11				豊中市立庄内幸町図書館・豊中市立東豊中図書館開館、松原市民情報ライブラリー開館	
	12					子どもと本の議員連盟 結成
平成6 1994			東京子ども図書館の二十周年記念事業に募金			
	3			「はらっぱ N.18ー特集:レファレンスー」発行		
	4				高槻市立中央図書館開館	子どもの権利条約 日本が批准
	7				堺市立中図書館開館	
	10				岸和田市立春木図書館開館	
	11				熊取町立熊取図書館開館	
平成7 1995	1	17		阪神・淡路大震災により中之島図書館も被災		
	3	16		読者のつどい「子どもの心絵本の世界」佐々木宏子氏		
	3	31		「はらっぱ NO.19ー絵本と子どもー」発行		
	5				茨木市立水尾図書館開館	
	10			夕陽丘図書館は新府立への移転準備のため、中之島図書館はリニューアルのため休館		
	11	27			シンポジウム「府県立図書館のサービスを考えるー開館近い新・大阪府立図書館に望む」日図協、図問研大阪支部、図書館分会主催	
	11					「本はともだちー公立図書館の児童サービス実践例集」文部省
	12					「子どもの豊かさを求めて 3 全国子ども文庫調査報告」日図協
平成8 1996	3			夕陽丘図書館廃止		
	4				吹田市立江坂図書館 交野市立倉治図書館開館	
	5	10		大阪府立中央図書館開館 中之島図書館リニューアル開館		<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: fit-content;"> <p><中央図書館こども資料室> 職員:3名(専任) 1名(嘱託) 面積:627㎡(内おはなし室28.26㎡) 開架冊数:20,000冊 児童書蔵書冊数:75,000冊 開室時間:9:00~17:00</p> </div>

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	5	22		協力車運行開始 図書館未設置地域含む府内全44市町村に		
	6				八尾市立山本図書館開館、視覚障害児のためのわんぱく文庫 府立中央図書館へ移設	
	7			こども資料室 課題図書返却期限短縮	大阪市立中央図書館(新館)開館 島本町立図書館(新館)開館	
	7			子ども用AV資料の予約受付を当分の間中止		
	8				羽曳野市立丹比図書館開館	
	9			こども資料室 おはなし会(毎月1・3土)復活		
	9			こども資料室 わんぱく文庫おはなし会(毎月2・4土)		
	10			資料展示「絵本 is ワンダーランド」展(10/27～11/29)		
	11				八尾市立志紀図書館開館	
			中央図書館開館後は実質的な活動は休止		府内市町村立図書館数:35市町 105館	
平成9 1997	1				枚方市立菅原図書館開館、東大阪市立旭町図書館開館	
	3					学校図書館を考える全国連絡会 結成
	4				「地域社会教育活動振興費補助金(文庫援助金)」廃止と「家庭教育振興費補助金」の予算化決定(大阪府)	
	5	11		「みる・きく・うたう マザーグースの世界」開催(児童文学館等と共催)、資料展示「マザーグースの世界」(5/1～30)		
	6					学校図書館法 改正 司書教諭の配置
	11	21		大阪府図書館職員研修・講演会「国立国際子ども図書館のめざすもの」 パネルディスカッション「子どもへの図書館サービス—21世紀への可能性を探る」		
	12			資料展示「わくわくサンタクロース」展(12/16～27)		
平成10 1998	2				池田市立石橋プラザ開館	
	3	31		「はらっぱ NO.20—こどもの図書館サービス—21世紀への可能性をさぐる」発行		

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	4				茨木市立庄栄図書館開館	
	7			平成10年度文部省委嘱事業「子どもの心を育てる図書館活動推進事業」実施のための大阪府図書館活動推進実行委員会設置		
	10			こども資料室 絵本と紙芝居の会(毎日曜)		
				文部省委嘱事業「子どもの心を育てる図書館活動推進事業」 <ul style="list-style-type: none"> ・子ども科学遊び「音と振動のなぞ」(8月) ・モザイクの国カナダこどもと文化展 in Osaka (10～11月) ・0・1・2歳と楽しむ絵本の講座(10～11月) ・学校図書館セミナー「いきいきした学校は図書館から」(1999/2/16) ・多文化の国カナダを語る講演会(松居直氏・コピソン・珠子氏)(1999/2/18)、関連展示(1999/2日) ・春の親子コンサート「木管五重奏のひびき(1999/3/27) 		
平成11 1999	1				豊中市立服部図書館開館	
	7			「ブラジル絵本と原画」展(7/1～18)		
	9			こども資料室 乳幼児のためのおはなし会「おはなしゆりかご」開始(毎木曜、平成14からは毎月2回木曜)		
	11			資料展示「スペイン語ポルトガル語圏の子どもたち」展(11/2～14)		
	11			少子化対策臨時特例交付金事業「親と子のわくわく絵本講座(～1月)		
平成12 2000	2	4		大阪府図書館職員研修「公立図書館と学校図書館の連携ー羽曳野市の事例に学ぶー」		
	3			「よんで よんでー3・4・5歳と楽しむ絵本のリスト」発行		「公立図書館児童サービス実態調査報告」「子どもの読書振興に係わる図書館活動に関する調査報告書」日図協
	4				松原市民新町図書館開館、堺市立北図書館開館、美原町立図書館開館	
	5	13		講演会「子どもの本の100年の時間(とき)」(共催)三宅興子氏・向川幹雄氏、資料展示「子どもの本の100年」(共催)(5/9～21)		国立国会図書館国際子ども図書館開館(平成14.5全面開館)

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	6				豊中市立高川図書館開館	
	7				ストーリーテリング勉強会「あまんじゃく」解散	
	10	20		大阪府図書館職員研修「子どもと本をつなぐ」三宅興子氏講演		「ひらいてごらんひみつの扉ーいま、これからの子ども図書館」日図協
	11	5		シンポジウム「絵本で赤ちゃんをそだてよう イギリスのブックスタート ブックトラスト運動に学ぶ」(共催)		
	12			資料展示「イギリスの乳幼児絵本」展(共催)(12/15～24)		
	12	17		「講演会と子どものためのワークショップ」飛鳥童氏(カナダ領事館共催)		
						子ども読書年
平成13 2001	1				箕面市立西南図書館開館、羽曳野市立中央図書館開館	
	4	22		児童文学作家による国際シンポジウム「子どもの本から世界が見える」(共催) 資料展示		
	4				茨木市立穂積図書館開館	
	6				わんぱく文庫「20周年記念コンサート」	
	7					公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準 告示 文部科学省
	8			大阪府子ども読書活動支援事業実行委員会(こども夢基金応募のため)設立		ブックスタート支援センター 設立
	9	21		ボランティア養成連続講座「子どもと本をよむ」(共催 児童文学館)(～10/26)		
	9			こども資料室 就学前幼児のためのおはなし会「おはなしぶらんこ」開始(毎月2・4水)		
	10					
	12					子どもの読書活動の推進に関する法律 公布
				子どもゆめ基金事業 ・ようこそ絵本の世界へ「講演会と子どものためのワークショップと絵本原画展」みやざきひろかず氏(11/25) ・さわる絵本をつくりましょう(2002/2/6～3/6) ・おはなしボランティア養成講座(2002/2/15～3/15)		

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
平成14 2002	1	23		大阪府図書館司書セミナー「学校図書館と情報」		
	4	23		子どもの読書推進活動実践優秀図書館として文部科学大臣表彰	「大阪府子ども読書推進会議」(大阪府・市教育委員会、公共図書館、学校図書館関係者、民間読書活動団体関係者等)設置	
	4			資料展示「形 いろいろ絵本展」(4/20～5/12) こども資料室 親と子の広場 たんぼぼ 開始(毎月1・3金)、英語お話し会開始(毎3土)(～平成16)		
	7				河内長野市立図書館(新館)開館、羽曳野市立東部図書館開館	
	10	11		大阪府図書館司書セミナー「読書－朝の10分間読書のもたらしたもの－」		
	10			絵本原画展「田島征彦の世界」(10/27～11/20)		
				子どもゆめ基金事業 ・「大阪こどもの読書フェスティバル『本の世界へいざなうために』」人形劇上演と富安陽子氏講演会(9/1)、てづくり絵本展示(8/20～9/1) ・おはなしボランティア養成講座(9～2003/3月) ・ともに生きる ザ・ワールド・オブ・ストーリー(7・12・2月)		
平成15 2003	1		会費よりこども資料室のお話室用に冷風扇を寄贈		「大阪府子ども読書推進計画」策定	
	2	5		図書館地区別研修・演習「アニメーション」佐藤涼子氏		
	3				高石市立図書館(新館)開館 児童書専門店「木馬館」閉店(中央区上本町西5丁目3-13)	
	4				和泉シテイプラザ図書館開館 平成15年度子どもの読書活動優秀実践団体として「わんぱく文庫」が文部科学大臣表彰	
	5				豊中市立蛭池図書館開館	
	6			子ども用AV資料の予約点数 音響・映像の別なく1人2点まで		
	7				高槻市立芝生図書館開館	
	11	19		大阪府図書館司書セミナー「在住外国人の子どもたちの暮らしと図書館」小島祥美氏講演		
	12	12		大阪府図書館司書セミナー「有害情報と子どもたち」中村百合子氏講演		

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
				子どもゆめ基金事業 ・「おいでよおはなしの森へ」(7・12・2月) ・おはなしボランティア養成講座入門編(10～12月)、ステップアップ編(2004/1～2月) ・ようこそ絵本の世界へ 末崎茂樹氏講演会、ワークショップ、絵本原画展(10～11月) ・大阪こども読書フォーラム「本との豊かな出会いを育むために」朗読コンサート、記念講演(たつみや章氏)、子どもの読書フォーラム、青少年読書感想画展(2004/1/17)、YAブックメニュー「おもしろい本さ・が・そ！」作成(2004/1月)		
平成16 2004	3	31	解散 会費の残金で絵本を購入、中央図書館へ寄贈			
	3			大阪府子ども読書活動推進連絡協議会 協力事業「よんで よんで」(改訂版)「だっこでよんで」(改訂版) 編集:こども資料室 発行:大阪府教育委員会		
	5				吹田市立千里山・佐井寺図書館開館	
	10	8		OLA受託研修 児童奉仕実務研修 開始(～12/2)		
	11	14		JBBY(日本国際児童図書評議会)創立30周年記念行事「子どもの本は世界をむすぶ」(共催)		
	11	24		大阪府図書館司書セミナー「事例報告とワークショップ子どもの読書活動推進計画づくり・シンポジウム地域に根ざした図書館サービスを」		
	11				高槻市立阿武山図書館開館	
	12				柏原市立国分図書館開館	
				子どもゆめ基金事業 ・子どもの読書フェスティバル「本との豊かな出会いを育むために」絵本ライブトークショー 絵本原画展等(4月) ・おいでよおはなしの森へ(6・7・12月) ・おはなしボランティア養成講座入門編・ステップアップ編 ・マスター編(9～2005/2月) ・おはなしサークル支援事業(10～11月) ・中高生おはなしボランティア養成セミナー(8～2005/1月)		
平成17 2005	4				堺市立東図書館開館、枚方市立中央図書館開館	
	4	28		筒井悦子さんの豊かな世界を楽しむ(共催)		
	7					「文字・活字文化振興法」施行
	9	16		大阪府図書館司書セミナー「調べ学習徹底研究」赤木かん子氏講演		

年	月	日	子どもの本を読む会	大阪府立図書館 児童奉仕を中心に	大阪府内の動き	関連事項
	10	25		児童奉仕実務研修「選書」(3回講座)(~12/15) 特別講座「わらべうた・あそびうた」(1/25)		
	11			ピーターパン関連資料展示		
				子どもゆめ基金事業 ・子どもの読書フェスティバル「出会い、発見、絵本の魅力！」 作って、歌って、声に出して楽しむのはらうた版画展(4月) ・「おいでよお話の森へ」(12月・2006/3月) ・おはなしボランティア養成講座入門編・ステップアップ編・マスター編(9月~2006/3月) ・中高生おはなしボランティア入門セミナー(9月~12月)		
平成18 2006	1					
	3			大阪府立図書館紀要 35号(『「子どもの本を読む会」の果たした役割』 前田千慧、大西登貴子、前野貞子、脇谷邦子)		
	4		記念誌編集委員会発足(以後月1~2回のペースで編集会議開催)		大東市立西部図書館開館	
	7			こども資料室「なつのほんだな 2006」復刊		

「子どもの本を読む会」を中心とした大阪府立図書館児童サービス関連年表 補足資料

大阪府内児童サービスの高まりー一九六九年以降

図書館員・文庫関係者・保育士達の自主勉強会が発足

児童図書館研究会会報や図書館問題研究会支部報や紹介ピラ等に見る足跡

「子どもの図書館 十六巻七号 一九六九年十月」地方だより

九月末に大阪府下の児童室関係の人達と集まりを持つ予定です。(出来れば京都の方にも連絡します。)たとえ二人でも集まれば良いと思っています。大阪府下は月曜休館の所が多いので、月曜日の昼すぎから月曜日に開館している箕面市立図書館の児童室へ集合してもらう予定です。児童室のない私たちでも、皆さんの仲間入りをして、お話をしていきたいと考えています。府下でどういう形にするか、その時に話しあう予定です。

池長 執子(大阪府立図書館)

「子どもの図書館 十六巻八号 一九六九年十一月」地方だより

大阪での集会、一応成功でした。九月二九日の箕面市立図書館には、十八名も集まったのです。京都の木下さんもいらっしやいましたし、家庭文庫を開きたいという方も一人、もちろん大阪市立の人達も…。けれど、組織云々、児図研の支部云々…。これは、大阪にあつては時期尚早の感が多分にあります。それよりは、大方の関心は勉強の場を持ちたいということに集まり、結局、ストーリーテリングの会と、児童書を読む会が誕生しました。後者は、十月二〇日に第一回の会を持つ予定になっております。当日には、清水さんや森崎さんが来られるとか聞いております。

府立の子どもの本を読む会も、活動の充実を計るべく、合評会に力を入れること、府下の児童室の現状を知ること、子どもに接する機会を持つことなどに、目を向けはじめております。また、有志三人で「児童文学論」の読み合わせをはじめました。来春ぐらいには一日文庫ぐらい開きたいとも考えております。児童室を持たない知らないものの悩み?です。

西沢 千慧(大阪府立図書館)

「子どもの図書館 十七巻七号 一九七〇年十一月」地方だより

おはなし勉強会 「わらわらのおはなし会」

大阪では、ストーリーテリングの勉強をしている集りがあるのでお知らせします。

絵本を読むこと、お話を中心にして、図書館員やお母さんたちがあつまり、ささやか

ながら勉強しているのですが、メンバーは児図研会員に限っているわけではありません。ごく
こじんまりした気楽な会ですので、興味をおもちの方、ご一緒に勉強しませんか。

毎月一回 月曜日 午後一時～五時 場所は太融寺

会費は、今までのところ会場費を全員が分担している程度です。

くわしいお問い合わせは 大阪市立中央図書館 よみもの室栗本さんまで（電 大阪〇〇
〇・〇・〇）

「こどもの図書館 十八巻七号 一九七一年十二月」

児童書を読む会が出来て二年目

大阪に児童書を読む会が出来て、この十月で満二年目を迎えました。この会の始まりは、大阪府立図書館に勤務されていた池長さん（現在大阪市立中央図書館勤務）が大阪府下の公共図書館児童室担当の人達と児童書に興味ある人が数名集まりこれから毎月定期的に例会をもたないかと誘いがあつたのが一昨年十月でした。

最初の頃、低学年向き（主に絵本）・中・高学年向き図書にわけ、なるべく新刊書の中から話題作・問題作・利用度の高い図書、科学もの、フィクションなどをいくつかのジャンルにわけて毎月行っていました。

この会には、大谷女子大学講師三宅興子さんを招いて、いろいろな問題提起してもらい、それらについて会員の人達で意見を交換して、約二時間程批評しあうわけです。

この会も一年たつと、今までの児童司書・児童書に興味のあつた人達だけでなく、家庭文庫、地域文庫のお母さんたち、又幼稚園の保母さん又大学で児童文学専攻の人達もつきつき参加していただき今までのメンバーが少しずつかわりはじめました。これにともなつてこれまで行っていた形式もかえてみてはなどという意見も出始め、始めての総会を昨年十月にもち、各自それぞれの意見を出し合つてゆくことにしました。三ヶ月間民話をとりあげたらどうかということになり、民話といつても幅が広いので、ある主題をきめていくことにしました。

そこで日本の五大昔話の中で、誰にでも親しまれている桃太郎をとりあげることになりました。まず桃太郎に関してのあらゆる資料収集をし、各公共図書館所蔵の桃太郎、三宅さん個人で収集しているもの、又会員がもっている桃太郎図書・国定教科書から書店の前に並べてある一〇〇円絵本まで、ありとあらゆる桃太郎の本を手に入れることが出来、集まった点数（絵本のみ）三二点ありました。そのうち総合的な観点から五点選び、各それぞれの批評を行うことになりました。一応五点の桃太郎はあげておきますが批評は又の機会にします。

〈桃太郎絵本〉

松居直文 赤羽末吉絵 福音館書店

大川悦生文 箕田源二郎絵 ポプラ社

那須田稔文 福田庄助絵 盛光社

松谷みよ子文 瀬川康男絵 講談社

与田準一文 三好碩絵 偕成社

桃太郎については、一応三ヶ月にしておき、木下順二の民話、SF、なども取りあげていくことにしています。

以上で簡単にまとめてしまいましたが、今まで取りあげた作品をあげておきます。

第一回（昭和四四年十月二〇日）

松谷みよ子「龍の子太郎」読み比べ

第二回 安野光雅「さかさま」

古田足日「宿題ひきうけ株式会社」

第三回 ドクター・スース「ふしぎな500のぼうし」

第四回 バーキンス「ドリトル先生とかいぞく」

吉田とし「まがった時計」

第五回 チャーリップ「よかったねネッドくん」

ノートン「魔法のベッド過去の国へ」

第六回 ラシエル「ちびくろおじさん」、チムニク「クレーン」

第七回 古田足日「ぼんこつロボット」、来栖良夫「おぼけ雲」

第八回 若山けん「きつねやまのよめいり」

大石真「教室二〇五号」

第九回 斉藤隆介「花さき山」、寺村輝夫「消えた二ページ」

第十一回 浜田広介「むくどりの夢」

松田道雄「恋愛なんかやめておけ」

第十一回 松岡洋子「テントウムシはおまわりさん」

広島テレビ編「碑—いしづみ」

第十二回 ビショップ「シナの五人きょうだい」

湯浅厚作「生きている民話」

第十三回 今江祥智「あいつとぼくら」

横谷輝「やがて大人になる君達に」

第十四回 臨時総会—参加者二一名

今後の会の運営をどのようにすすめるかと

同時に一年間の反省

第十五回—第十八回 桃太郎学習会

第十九回—第二十回 木下順二の民話の学習会

第二一回 「三ねんねたろう」の絵本について

第二二回—第二三回 SFについて—

古典もののSF作品と比較的新しいSF作品の読み比べ

第二四回 こぐま社の佐藤英和氏を囲んで、絵本についての問題と、最近出た本で「ぐろう」
「きみほんとのわにかい」この2冊の絵本のできる裏話また合評会を行い、参加
人数も二五名程集まり盛会でした。

第二五回 十一月の例会は、小河内芳子氏を招いて会員との懇親会を持つ予定です。
以上がこれまでとりあげた作品ならびに今後の活動です。最後に、これからもこの会を永続
させ、一人でも多くの人達に児童書に興味をもってもらうことと同時に、我々が自信をもつ
てえらんだ図書をすべての子供にあたえることが出来るように一児童室担当者として今後課
せられた問題だと思えます。

又この会を基礎に児童図書館研究会の大阪支部を組織することを念願としています。

文責 町野 正彦（豊中市立図書館）

「こどもの図書館 二六巻七号 一九七九年十二月」

あまんじゃく

（連絡先 吹田市津雲台・・・ 大久保萬知子）

- ① おはなしの勉強会の指導者氏名 なし
- ② 勉強会を行う日時 毎月第一火曜日 六時三〇分から
- ③ 勉強会の参加者人数 約十名

他に観客として、一般の人の参加もあります。

- ④ 勉強会の内容をなるべく具体的に書いてください。
毎回十名前後、夏休みなどは三〇名を超えます。

こどもの本の専門店「木馬館」で会場を借りています。勉強会の案内をしてもらって、
観客としての参加も歓迎しています。おはなしをする人は、毎回三〜六名で約一時間あ
まり行きます。その後、観客も含め講評を行います。約一時間

- ⑤ 参加者への呼びかけをしていますか。

呼びかけています。④を参照ください。

- ⑥ 今後の抱負

新しい人（図書館員）の参加を募り、養成の助けになりたい。

むらさき

（連絡先 大阪府堺市新金岡町・・・ 矢野明子）

- ① なし
- ② 毎月第四月曜日 一時四五分から（八月は休会）
- ③ 構成人員は多数になると思いますが、毎月の実演者はほぼ十名余。
- ④ 七月と十二月は、文庫もちまわりの、「おはなし会」「子ども会」的なものになり、子供を
前にしての実演の場です。それ以外の月は、各自語ったのち、フリートークキングで各々の

感想・質問・意見交換 etc 参加してはじめての六ヶ月間は、絵本をよんでもかまわないことになっています。人前で声を出すのに慣れれば、ストーリーテリングになります。初回参加以外はかならず実際にやらなければなりません。見学はなしです。

- ⑤ ロコミで呼びかけています。中ダルミをふせぐのが精一杯で、抱負といったものは特にありません。できれば、ずっと続けて中味の濃いものになりたい。東京子ども図書館の出張講義をうけたいなど。

「大阪支部報（図書館問題研究会 大阪支部）一七五号一九八二・十一月」

サークルめぐり オルコット会

文学愛好会としてはめずらしくないでしょうが、私達も英米児童文学を原書で読もうという会です。かれこれ十余年も前に生まれた由緒ある会で、当時は大谷短大の三宅興子先生、池長さん、谷田さん、西沢さんという美人ばかり四人で始めたと聞きます。それがオルコット会の名称のもとだったとも聞いています。そのうち多くの図書館員、教師、保母、学生（三宅さんの生徒）も入会し、短編集と絵本一冊を、毎月のテーマに読んでいっていました。特に絵本はまだ日本に紹介されていないものを取りあげて、先入観なしに意見を述べあうのである意味で自分の目を試す楽しさがありました。センダックの『まよなかのどころ』もその一つでした。人が多くなりすぎたせいでしょうか、絵本をもっとやりたい人と、一冊の本をじっくり読みたい人に分れるようになり、中心である三宅先生ご自身御多忙になり、とうとう現在の三人だけが、ほそぼそオルコット会を続けています。

何回か休憩しながら、丸三年かかって『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』を終えました。語学力の乏しい我々が、のたりのたり進むのも、学校にはなかったリラックスした気分です。アリスがすんで目下休憩中ですが、この十一月から『楽しい川辺』を始めます。The Wind in the Willows ケネス・グレアム著 Methuen 社。今が入会のチャンス！ 場所は現在、豊中駅下車、メンバーの井下宅（独居）歩いて三分。連絡先は吹田市立中央図書館 児童室の沢谷まで（〇六・〇〇〇）

月一回土曜の夜、目下独身女性三人の集まりです。ヨロシク！

沢谷 とし子（吹田市立図書館）

「大阪支部報（図書館問題研究会大阪支部）一七六号 一九八二年十二月」

サークルめぐり あまのじやく

子どもの本の専門店『木馬館』で行っているおはなし（ストーリーテリング）の勉強会です。お店のお客さんに公開することを条件に、無料で場所を借わせていただいているので、参加費は不要。おはなしや絵本の読み聞かせに興味をお持ちの方、一度やってみてほしいの方向、どんな方でも大歓迎。現在のメンバーは、図書館員が中心ですが、（かならずしも児童室

担当者ではありません）なかには企業のデザイナーのお兄さんといった変わり種もいます。最近は男の人も増えつつあり、いささか女の園的な感がなくなかったこの会にも、新たな展開が見えつつあります。

月例の勉強会は、毎月第一火曜日の午後六時三〇分から八時頃まで。お店のお客さんやメンバーたち―これを楽しみに来てくれる子どもたちもいます。―の前に一人ひとり出て、絵本の読み聞かせやおはなしをした後、メンバーだけでの話し合いの時間を持ちます。

以前、小児病棟の看護婦さんが参加していたことがあり、ひよんな事から、長期療養中の子どもたちのためのお誕生会に、絵本とおはなしをひっさげて行って、とても楽しい経験をしたことがあります。それぞれの職場にとらわれないフリーな立場での勉強会であるだけに、今後はこのような活動も時間がゆるす限りやっていきたいと思っています。

会の活動そのものは十年以上続いています。会場が木馬館に移った翌年から始めた事に“新年おはなし大会”があります。木馬館の近くの喫茶店『マリオネット』を借り切つての年に一度のお祭りですが、客演やら人形劇やら、普段とはちがった趣向をこらした楽しいもので、毎年この日だけ顔をお見せになる方もいらっしやいます。来年は一月十一日（火）に行う予定。参加者は、スペースの関係で先着三〇名です。必ずあらかじめご予約ください。

参加費：五〇〇円（飲み物とお菓子代）

連絡先：大阪市立中央図書館児童室 矢野明子

木馬館 〇六 七六八 一五六三

（南区上本町五の二六 チャンピオンビル二階）―地図の記載あり―

（矢野 明子）

「こどもの図書館 三六卷十二号 一九八九年十二月」

ヤング・アダルト・サービス研究会（仮称）ができました

沢谷とし子

大阪にヤング・アダルト・サービス研究会（仮称）が誕生しました。月一回の集まりで、府下の公共図書館の人達や京都府立の高校司書の方なども参加されなかなか盛況です。発起人は、アメリカのYAの本に詳しく、また毎夏ボストンへ行って情報を仕入れてくれる井上靖代さんと、帰国時にYA本を百冊以上仕入れて来たけれど、ムチ打たれないと読みそうもないナマケモノの私とです。

今は、ヤング・コーナーを持っているという図書館の状況や、発行しているというブックリスト等の交換をしています。今後の方向はまだ模索中で、できれば形になるもの、例えば、ヤング・コーナーに置きたい基本図書リストの作成なんかできると良いなあ（夢みたいなお話だけども）とか、公共図書館のこの層への停滞しているサービスを活気つかせるための刺激剤になれば良いとか等の意見がでています。そこで全国の会員にお願いしたいのは、ヤング層へのサービスを行っている図書館の情報をお寄せ頂きたいのです。コーナーの展示の良い館とか、ブ

ックリストとか、もちろん活動についての情報とかです。こちらからの情報としてはそのうちに会のニュースとか、どの館が何を発行しているのかのリスト、その入手方法などをまとめるなどしてお送りするつもりです。申し込み者にはコピー等の実費と郵送料を請求することになると思いますが、そちらの資料を受け取った時は、お互いの帳消しになるかと思えます。

(以下、資料紹介と連絡先・略)

(さわたに としこ)

* 編集者注

その後も府内に多くの研究グループが発足したが、その内、「子どもの本を読む会」会員の関係したグループは以下のふたつである。

新金岡子どもの本を読む会 一九九一年五月二一日発足

大阪府立図書館での「子どもの本を読む会」の意義を感じた一会員が、地元堺市立新金岡図書館Ⅱ現北図書館を拠点に始めた。児童書担当職員の協力を得て、定評のある名作を読み進める。今もYさんを中心に続けられている。

MMの会 一九九三年九月十七日発足

「子どもの本を読む会」が休止状態の時、同会会員有志の呼びかけで開始。呼びかけ人の頭文字をとって「MMの会」とする。メンバーは大阪府立・大阪府立・堺市立・府立高校図書館員、主婦など。第一回は『ナルニア国ものがたり』をとりあげ、『C・S・ルイスの秘密の部屋』アン・マーノット著、『ようこそナルニア国へ』ブライアン・シスリー著を参考にした。現在も隔月に開催。

中之島図書館所蔵 一枚摺仮目録

大阪府立中央図書館 閲覧第二課 人文系資料室 佐藤敏江

中之島図書館で所蔵している近世資料の中に一枚摺がある。一部はカード目録を作成(枚記号)し閲覧に供しているが、中には貼交ぜの冊子として目録をとり、内容細目が作成されていないものもある。今回紹介する保古帖もそうした資料の一つであるが、その全容はほとんど知られていない。保古帖の存在をご存知の方々からは、「興味深い資料」、「いつか時間ができればじっくりと見たい」という声を頂いてきた事もあり、以前から目録の有効性を認識しつつも、内容が多岐にわたる事、出版物の一部分だけの資料が多く、資料の同定には膨大な知識と時間を要する事等により、目録作成には至っていない。今のままでは死蔵となってしまう事もあり、あえて目録作成を試みた。取り敢えず内容の推測できるものからとりかかり、今後これらの資料を利用される方々への手がかかり、更には、正式な目録を作成するための仮目録としてまとめることとした。とはいえ圧倒的な知識不足、更には時間的な制約の中で大量の資料群を処理した事もあり、調査が不十分である事はお許し願いたい。

今回は全 20 冊(約 1800p)の中から、日本十進分類法でいうところの芸術部門に関する資料を、歌舞伎・浄瑠璃(番付、役者絵、周辺資料)、見世

物引札、書画・展覧、その他の娯楽に分類、一覧表を作成した。こうした資料の常であるが、資料の摺りの状態や保存状態がよくない事等により、判読不可能なものがある点、また資料の部分のみが残されていて元の資料の特定ができないものもある点お断りしておく。

保古帖(甲雑-58)は、大阪の古書店鹿田松雲堂の旧蔵資料で、資料の痛みが甚だしいこともあり、保存を考えて白黒の写真版(030-160)での閲覧となっている。前述した様に、折本にいわゆるよみうり等の一枚ものを張り込んで簿冊にした、今日でいうところのスクラップブックで、張り込まれている資料は、ちらし・絵びら、各種番付、当時の噂話・流行ものに関する摺物、外国船の到来による騒動や、火事・地震等の災害の被害やお救い小屋の場所等の状況を記した報道的なもの、名所や寺院を描いた絵画、絵図類等々、内容は多岐にわたる。

全 20 冊の構成となっているが、各冊ごとに、内容或は時代にまとまりをもたせようとしたあとが窺える。気がついた特徴は以下の通り。

- 3巻 詩文類
- 4巻 引札・絵びら(人形からくりを含む)
- 5巻 時事(オロシア船) 噂・流行もの
- 6巻 引札 八代目団十郎死絵
- 7巻 全冊役者絵(中村歌右衛門・嵐璃寛／橘三郎 半数以上)

8巻 [文政十三年]お蔭参り (約半数)

9巻 絵図(寺社等)

14巻 見世物引札(六点)

15巻 長者番付／引札・切手

16巻 歳旦・詩文等／歌舞伎関係資料

17巻 全冊芝居番付

19、19／20巻 各種番付

凡例

題名のないものに関しては、[]を付して記載した。

刊記のない場合は、資料中の参考となる年月日を記載した。

例)行事の開催日・でき事の等の起こった年月日を記載等

6巻49 森祖先翁猿之書画展観 閏三九日十日

6巻196 八代目市川団十郎白猿 嘉永七寅年八月六日往生

出版年が不明であるが年代が推定できる資料は、[]を付して参考となる年月日を補記した。

例)歌舞伎の番付に関しては上演年月日を補記等

19巻32 中村座「興九重弥生花道」〔天保四年三月〕三日より

先人による年代の書込みの内、妥当と思われるものは[]で補記した。

原則として旧字体はそのまま表記した。

歌舞伎の外題等、一部活字のない漢字は平仮名で表記した。

角書等は活字を小さくし、一行書とした。

不鮮明な摺り、汚損・破損等により、判読できない文字は「□」で表記した。

一部資料には、「縦×横」(0.5cm 毎の切上げ)でサイズを付した。

各冊の巻数・頁付けは写真版によった。

全20巻の内19／20巻は、便宜上20巻で表記した。

現物にあり、写真版に欠けているものは、現物の巻数を付して表記した。

刊本の一部分と思われるものの、資料名の特定できない資料は、収載されている資料の題名を()で補記した。

例)12巻60～82〔簿冊部分〕(寛永九年申十二月重開板江戸絵図跋言／江戸絵図／明暦江戸絵図跋・・・)

参考文献

かわら版物語 小野秀雄著 雄山閣刊 (070/297)

かわら版新聞江戸明治三百年 全4巻 平凡社刊 (070.2/6)

歌舞伎年表 全8巻 伊原敏郎著 岩波書店刊 (774/4)

錦絵のちから 富澤達三著 文生書院刊 (721.8/210N)

かわら版新聞江戸明治三百年 全4巻 平凡社刊 (070/687)

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
16-36	道頓堀 中の芝居	顔見世役者極り附	[文政三年]霜月吉日より巳	座本: 浅尾与三郎 内茶屋板	絵入
5-63	道頓堀 中の芝居	二の替り「けいせい曾我鎌倉集」	[嘉永元年]申正月吉日より	座本: 中村駒之助 ヒイキヨリ	46×34 絵入
16-39	道頓堀 中の芝居	顔見世極り役者付	[天保二年カ]霜月吉日より辰年	座本: 中村鶴三郎 内茶屋板 和多正筆	文字
16	道頓堀 中の芝居	顔見世極り役者付	[天保三年]巳年霜月吉日より巳年	座本: 嵐竹治郎 和多正筆 内茶屋板 道頓堀大西芝居前: 藤川屋印	文字版
19-49	道頓堀 中の芝居	二の替り「けいせい染分總」	[天保五年正月十六日]	座本: 嵐三津橋 ヒイキヨリ	絵入
16-42	道頓堀 中の芝居	顔見世極り役者付	[天保六年]霜月吉日より申	座本: 嵐橋蔵 わた正筆 内茶屋板 道頓堀大西芝居前: 藤川屋印	
11-5	道頓堀 中の芝居	「けいせい遊山桜」	亥の正月十一日より	座本: 嵐吉之助 内茶屋板	24×34 文字版
4-80	道頓堀 中の芝居	大芝居歌舞伎/ 続狂言根元新役者付	[亥の霜月吉日より]	内茶屋板	絵入
4-74	[道頓堀 角之芝居]	「千集萬勢知筥賜」	[安永八年十一月二日より]	座本: 芳沢いろは	25×34.5
19-18 ~20	道頓堀 角之芝居	「通傾城花大矢数」「湖水の花筏」 湖水の花筏文付 二の替り	[文政七年正月14カ]	けいせい花鳥: 沢村国太郎 ゆきへ之助: 市川団蔵	23×32 3枚
11-4	道頓堀 角之芝居	「けいせい遊山桜」「春陽三獅頭」	[文政十年]正月吉日(11)	座本: 中村以上 内茶屋板	22×34
6-27	道頓堀 角之芝居	[顔見世番付]「加賀見山廓写本」「玉うん宝蔵入」	[文政十一年十一月十五日]丑歳顔見世	綿新印 座元: 片岡嶋丸	35.5×49 絵入
16-40	道頓堀 角之芝居	顔見世極り役者付	[天保三]閏霜月吉日巳	座本: 中村梅松 内茶屋板 和多正筆	絵入
16	道頓堀 角之芝居	新極り役者附	[天保九年]霜月吉日より亥年	座本: 中村福蔵 和多正筆 内茶屋版	

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
6-98	道頓堀 角之芝居	尾上多見蔵口上書「菅原傳授手習鑑」(一世一代) 「ひらかな盛衰記」	[嘉永三年]戌年霜月十五日より	座本:市川亀太郎 ヒイキヨリ	46.5×33.5 絵入
16-38	道頓堀 角之芝居	新役者極り附 絵入	霜月吉日より	内茶屋板	絵入
19-51	道頓堀 角之芝居	顔見極り役者番付	霜月より巳歳	座本:中村梅松 内茶屋板	絵入
15-91	道頓堀 角之芝居	「彦山権現誓助釵」「菅原傳授手習鑑」「双蝶々曲輪 日記」	申9月	座本:市川猿松 ヒイキヨリ	44×31.5 絵入
16-41	道頓堀 筑後芝居	顔見世極り役者付	[天保四年]霜月吉日より午歳	和多正筆 内茶屋板 道頓堀大西芝 居前:藤川屋印	絵入
6-23	道頓堀 筑後芝居	初櫓豊歳三番叟	子八月	座本:片岡政次郎 嵐離ぎよく浪花 本清板 中村屋印あり	34×24 絵入
6-68	道頓堀 筑後芝居	顔見世極り役者附「座付狂言おかげまいり伊勢物語」 絵 入双六風	卯之歳見霜月吉日	座本:浅尾口之助	35.5×48.5 絵入
16-62	道頓堀 [角カ]	顔見世極り役者付	丑歳霜月吉日より寅歳	座本:中村玉蔵 内茶屋板	絵入
19-50	北堀江市 の側	「近江源氏先陣館」「金門五三桐」「ひらかな盛衰記」	霜月廿一・廿二日	座本:市川龍蔵 あみだ池裏西:末吉 板	絵入
16	若太夫芝 居	顔見世極り役者附	[文政三年]霜月吉日より巳	座本:中村福之助	
5-107		「花競争名所二樹」酉の年盆替新狂言	書 酉年盆	※暁鐘成翁風詞の当時自書画の筆 書有	34×24 絵入
16-37	道頓堀角 の芝居	顔見世極り役者附	文政六年霜月より申	座本:中村かづま 内茶屋板	文字版
19-8	堺北の芝 居	「刈萱桑門筑紫いえづと」「染模様妹背門松」「男作五 鷹金」「千里の竹田□□」座付引合せの段	[嘉永六年]丑十一月廿三日より		絵入

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
4-5	四條大和 大和屋大芝居	かわり狂言番付「甲陽軍記今様姿」	[享保元申九月]	大和屋甚兵衛・沢村権十郎 いずみや又兵衛	14.5×52
1-31	四條通北 側西角	大芝居根本極 未之年役者附「不老門珠階」	元文三	名代:蛭子屋吉郎兵衛 座本:姉川東十郎	16×51.5
1-18上	四條通北 側東角大 芝居	「けいせい歌仙桜」「初午繁昌肆」	[延宝年中]	座本:嵐三右衛門倅嵐松之丞	15×47
1-18下	四條通北 側東角大 芝居	「けいせい歌仙桜」	[延宝年中]	座本:嵐三右衛門倅嵐松之丞	15×47
17-13	市村座	江戸大芝居始元祖新役者附	文政十二年霜月朔日より	絵師:鳥居清満筆 板元:福地茂兵衛 売出所:山本重五郎板 座元:市村羽 左衛門	絵入
17-6	市村座 ふきや町	「曾我評判比翼男」「爰奥野記殿狩衣」「色直肩毛氈」 「雅栄花大臣」	[天保元年正月]十三日より	福地茂兵衛	
19-22	市村座 ふきや町	「仮名手本忠臣蔵」「旅路の嫁入」	[天保元年四月]九日より	座元:市村羽左衛門 板元:福地茂兵衛	絵入
20-74	市村座 ふきや町	「隅田川花御所染」「助六由縁江戸櫻」	[天保三年三月]十二日より	座元:市村羽左衛門 板元:山本重太 郎・福地茂兵衛	絵入
19-43	市村座 ふきや町	「増補筑紫いへづと」「ひらかな盛衰記 むげんの鐘のだ ん」	[天保三年八月]朔日より	板元:福地茂兵衛	絵入
19-30	市村座 ふきや町	「姿花後雛形」(信田館貢物船諷第二番目大切)	[天保三年九月]十五日より	板元 福地茂兵衛	絵入
19-33	市村座 ふきや町	「信田館貢物船諷」	[天保三年九月]十五日より	板元:山本重五郎・福地茂兵衛	絵入

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
19-28	市村座 ふきや町	「妹背山婦女庭訓」「五大力恋緘」「兜軍記」	[天保四年三月]九日より		絵入
16-43	市村座	「月雪花歌再夕市(所作事)」「壽亀荒木新舞臺」	[天保十三年九月ヵ]十七日より	座元:市村羽左衛門 板元:福地茂兵衛	絵入
16	市村座	「壽亀荒木新舞臺」	[天保十三年九月ヵ]十七日より	板元:福地茂兵衛 □□□□□	絵入
20-66	市村座 ふきや町	[芝居番付部分]	二日より	板元:山本重太郎	
17-37	市村座 猿若町	「花和讃新羅伝記」「三羽鶴中吉田屋」	[嘉永五年十月]霜月廿六日より	村山源兵衛正・山本重五郎	絵入
17-15	市村座 猿若町	「意東絵懸額」「名己菊初音道行」	[嘉永六年五月]廿一日より	福地茂兵衛・山本重五郎座元:市村羽左衛門	絵入
17-19	市村座	「仮名きょうだい(口姉)娘復讐」「小栗判官車街道」 「戀中富室楓」	[嘉永六年九月]十五日より	福地茂兵衛	絵入
17-8	市村座 猿若町	「御所桜堀河夜討」	[嘉永六年十一月]七日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17	市村座 猿若町	「女達出入港」	[嘉永六年十一月]十二日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17-17	市村座 猿若町	一世一代二中村富十郎相つとめ申候 「仮名手本忠臣蔵等」「恋女房染分手綱」「梅濡驛花婿」	[安政元年五月]十三日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
20-75	市村座 申若町	「一谷嫩軍記」「六歌仙體綵」	[安政元年五月]十三日より	座元:市村羽左衛門 板元:山本重太郎・福地茂兵衛	絵入
17	市村座 猿若町	「六歌仙體綵」「一谷嫩軍記(仮名手本忠臣蔵)」 中村歌右衛門三周忌追善狂言	[安政元年五月]十三日より	福地茂兵衛・山本重五郎 座元:市村羽左衛門	
17-18	市村座	「絵本更科譚」「双蝶々曲輪日記」「歌俳菜名所繪合」	安政元年閏七月十五日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
17-3	市村座猿若町	「青砥稿」「潤色口りすで源氏」「邯鄲」「拙詫菘種蒔」	[安政元年十月]六日より	福地茂兵衛・山本重五郎 座元:市村羽左衛門	
17-42	市村座猿若町	「八陣守護城」「奥州安達原」「妹背山婦女庭訓」「拙宅菘種蒔」	[安政元年十一月]五日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17-34	[市村座]	「五人男誦膳たて侠」「伊勢音頭戀寝刃」	[安政二年五月]三日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17-2	市村座猿若町	「三幅対戯場彩色一所作事番組寛活鞘當/宮之鋼打/執着鴛鴦」	[安政二年五月]三日より		
17-26	市村座猿若町	「木下陰硯伊達染」「菊競艶相肩」	[安政二年九月]五日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17-27	市村座猿若町	「鶴松扇曾我」「姿替霞假宅」「夢結蝶鳥追」「梅柳戀道連」	[安政三年]三月三日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17-30	市村座猿若町	「義経千本桜等」「花市座初音の旅」	[安政三年七月]十四日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17-29	市村座猿若町	「蔦紅葉宇津谷峠」「芦屋道満大内鑑」「心中玉露白小出」	[安政三年九月]十七日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17-31	市村座猿若町	「倡女誠長田忠孝」「恩愛蹟関守」「松竹梅雪曙」「封文戀書置」	[安政三年十一月]七日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17-43	市村座猿若町	「鼠小紋東君新形」「修諺緑笑遠山」	[安政四年正月]十一日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
17-32	市村座猿若町	「敵討噂古市」「時鳥酒杉本」	[安政四年五月]九日より	福地茂兵衛・山本重五郎	絵入
16-45/47	市村座	「正写加賀観姿画根本」表紙/二立目		板元: 福地茂兵衛 正名: 山本重五郎	17.5×20.5 2枚
16-46/48	市村座	「浄瑠璃仇桜夢夜あらし根本」序幕目返し～四幕目			17.5×20.5 2枚

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
17-7	河原崎座 猿若・木挽	「義経千本桜」「道行初音旅」	[天保元年二月]廿日より	小川半助	絵入
19-41	河原崎座 こびき町	「小野道風青柳碇」	[天保三年正月]七日より	板元:小川半助	絵入
20-71	河原崎座 こびき町	「道行丸い字」「京鹿子娘道城寺(子)」	[天保三年正月]七日より	板元:村山源兵衛正	絵入
19-34	河原崎座 こびき町	「伊達競阿国歌舞伎」「隅田堤恋衣からげ」	[天保三年三月]十一(3)日より	座元:河原崎権之助	絵入
19-42	河原崎座 こびき町	「昔語黄鳥墳」「染幟菖蒲の彩色」	[天保三年五月]七日より	座元:市村羽左衛門 板元:小川半助	絵入
20-66	河原崎座 こびき町	「天竺徳兵衛韓噺」	[天保三年八月]二日より	坂東三津五郎 岩井 板元:小川半助正	絵入
19-37	河原崎座 こびき町	「仮名手本忠臣蔵」「旅路の花婿」	[天保四年三月]五日より	板元:小川半助	絵入
8-106~110	河原崎座 木挽町	菅原伝授手習鑑絵入根本 五丁		16×23 5枚	
17-9	河原崎座 猿若町	「柳糸(絲)引御撰」「霞色連一群」	[嘉永六年二月]1七日より	小川半助正 座元:河原崎権之助	絵入
17-22	河原崎座 猿若町	「しらぬひ譚」「樹闇恋曲者?」	[嘉永六年二月]廿日より	小川半助	絵入
17-21	河原崎座 猿若町	「怪談木幡小平次」「碁石太平記白石噺」「乱菊枕慈童」	[嘉永六年九月]十六日より		絵入
19-27	河原崎座 猿若町	「碁石太平記白石噺」「怪談木幡小平治」「乱菊枕慈童」	[嘉永六年九月]十六日より	板元:小川半助	絵入
17-14	河原崎座 猿若町	「容競出入湊」「鬼一法眼三略巻」「姫小松子日の遊」	[嘉永六年十一月]七日より	小川半助正 座元:河原崎権之助	絵入

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
17-11	河原崎座 猿若町	「会稽殿下茶屋聚」「雲艶女鳴神」	[安政元年六月]十日より	小川半助正 座元:河原崎権之助	絵入
19-46	河原崎座 こびき町	「仮名手本忠臣蔵」	[安政元年霜月朔?]五日より	座元:河原崎権之助	24.5×33 絵入
17	河原崎座 猿若町	「鏡模様比翼花鳥」「逢見愛井子カ」	[安政二年二月]廿八日より	小川半助	絵入
17-46	河原崎座 猿若町	「児雷也後日譚話」「真似三舛姿八景」	[安政二年]五月二日より	小川半助正 座元:河原崎権之助	絵入
17-47	河原崎座 猿若町	「蝶もやう亀山染」「袖浦故郷錦」	[安政二年七月]廿日より	小川半助正	絵入
17-20	河原崎座 猿若町	御祭礼	二十六日より	小川半助	絵入
17-45	河原崎座 猿若町	「仮名手本忠臣蔵」	霜月朔日より	小川半助正	絵入
19-29	中村座 さかい町	「桜々清水清玄」	十五日より	板元:村山源兵衛正	絵入
20-148		□□□の賀 新役者附	文政酉	座元:中村勘三郎 板元:村山源兵衛 絵師:鳥居清満	絵入
17-5	中村座 さかい町	「虎石想曾我」「通俗妓容三國志」	[天保元年正月]廿七日より	村山源兵衛正	
19-23	中村座 さかい町	「桜々(時)清水清玄」	[天保元年三月]九日より		絵入
19-24	中村座□ □□	「第二番目九変化」 二編	[天保元年三月]九日より	板元:村山源兵衛正	絵入
19-29	中村座 さかい町	「真寫いろは日記」	[天保元年五月]十五日より	座元:中村勘三郎 板元:村山源兵衛 正	絵入

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
19-40	中村座 さかい町	「花鳥魁曾我」朝日影霞の隈取」「隠裏紅絹晒」	[天保三年正月]廿五日より	板元: 村山源兵衛正	絵入
19-39	中村座 さかい町	「櫻時女行列」「彌生(花)浅草祭」	[天保三年三月]七(8)日より	座元: 中村勘三郎 板元: 村山源兵衛	絵入
20-73	中村座 さかい町	「菅原傳授手習鑑」	[天保三年五月9カ]日より	板元: [村山源兵衛正]	絵入
20-67	中村座 さかい町	近江源氏先陣館	[天保三年八月]十六日より	[座元:] 中村勘三郎 板元: 村山源兵衛	絵入
19-36	中村座 さかい町	「源平布引瀧」「廓文章」「関取二代勝負附」	[天保三年九月]十二(5)日より	座元: 中村勘三郎 板元: 村山源兵衛正	絵入
19-32	中村座 さかい町	「興九重彌生花道」	[天保四年三月]三日より	座元: 中村勘三郎 板元: 村山源兵衛正	絵入
20-69	中村座 さかい町	「櫻時花吉原」	[天保四年三月]三日より	板元: 村山源兵衛正	
19-31	中村座 さかい町	「ひらかな盛衰記」「三銀杏御存知地染」	[天保四年五月]十五日より	座元: 中村勘三郎 板元: 村山源兵衛正	絵入
17-23	中村座 猿若町	「花みます宿初役」「与話情浮名の横ぐし」「嶋廻色為朝」	[嘉永六年三月]九日より	村山源兵衛正	絵入
17-12	中村座 猿若町	「与話情浮名横櫛」「嶋廻色為朝」	[嘉永六年カ]五月朔(3)日より	村山源兵衛正	絵入
17-25	中村座 猿若町	「花野嵯峨猫魔稿」「胡蝶夢栄華玉枕」「色美語」	[嘉永六年九月]十五日より	村山源兵衛正	絵入
17-4	中村座 猿若町	「意舛手向花川戸」「魁源平躑躅」「積戀雪関戸」 六代目松本錦舛追善	[嘉永六年十一月]四日より	村山源兵衛正	
17-1	中村座 猿若町	「仮名手本忠臣蔵」「廓文章」	[安政元年]五月朔日より	村山源兵衛正	

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
17-10	中村座 猿若町	「旅雀相宿(好)嘶」「連方便茲大津画(繪)」	[安政元年]七月朔日より	村山源兵衛正	絵入
17-24	中村座 猿若町	「初紅葉小倉色紙」「戀飛脚大和往来」「道行故郷の初雪」	[安政元年八月]廿日より	村山源兵衛正	絵入
17-44	中村座 猿若町	「花舞臺團若曾我」「邯鄲枕物狂」「松櫻隅田兼言」	[安政二年三月]廿八日より	村山源兵衛正?	絵入
17-35	中村座 猿若町	「名高手毬諷実録」	[安政二年七月]七日より	村山源兵衛正	絵入
17-38	中村座 猿若町	「報讐自来也説話」「繪本太功記」「造物煤咲分」	[安政二年九月]十七日より	村山源兵衛正	絵入
17-33	中村座 猿若町	「一曲奏子寶曾我」「藪椿誰轉寝」「浅緑露玉川」	[安政三年四月]十四日より	村山源兵衛正	絵入
17-36	中村座 猿若町	「猿廻門出の一諷」「増補鈴鹿合戦」「三世相縁の緒車」「仇結他夕月」	[安政三年八月]十三日より	村山源兵衛正	絵入
17-28	中村座	「初雪三舛蔵景清」「伊勢名所業土産」	[安政三年九月]五日より	村山源兵衛正	絵入
17-41	中村座 猿若町	「歳徳曾我松島臺」「浮拍子五町明映」	[安政四年正月]九日より	村山源兵衛正	絵入
17-39	中村座 猿若町	「富賀岡戀山開」「金龍山千本初花」「助六姿裏梅」	[安政四年三月]三日より	村山源兵衛正	絵入
16-44	中村座 さかい町	「義経腰越状」「姫小松子の日遊等」	四日より	座元: 中村勘三郎 板元: 村山源兵衛正	絵入
17-16	中村座	江戸大芝居始元祖新役者附	霜月朔日より	絵師: 鳥居清満筆 板元: 村山源兵衛 売出所: 山本重五郎 座元: 中村勘三郎	絵入
17-40	森田座 猿若町	「初時雨浮名讐弾」「還結柏政武飾駒」「今様望月」	[辰十月]十三日より	小川半助正	絵入

芝居番付(芝居小屋別/年代順)

巻一頁	劇場/場所	狂言演目	上演年月日	絵師・座元(本)・版元等	大きさ
8-43	勢州中の 地蔵町常 芝居	極り役者附	寅三月中旬より	名代:豆腐屋源蔵 太夫本:播磨屋亦 兵衛 座本:嵐寛之助	34×43
19-47		[七月定日興行役者番付]	七月十二・十六・十八・二〇日	歌右衛門・歌六・歌七・芝蔵	12×42.5
19-44		芝居番付 [部分]		付)梅玉俳諧 「汲みてしれ・・・」	17×24 絵入
4-75	浄瑠璃 北新地西	「世話言漢楚軍団」「大切邯鄲四季寿」「時代世話新う すゆき物語」	[文久三年]戌十二月二十八日 より	座本:竹田萬治郎 太夫:竹本染太 夫 桐竹門三・吉田文五郎	23×31.5

巻-頁	分類	歌舞伎 / 浄瑠璃 関係 資料名	出版年月日	発行所等備考	大きさ
16-65/66	給金付	三都役者一年中当り芸給金附位定并ニ家号俳句	安政五年午之正月改正大新版	大坂心齋橋通り塩町角:綿屋喜兵衛板	31×56
19-6/7	給金付	三ヶ津大芝居・浜芝居・子供芝居役者相場定并ニ	嘉永三戌ノ正月改正大新版		35×60
20-96	給金付	三都大芝居/濱芝居/子供芝居役者雪月花給金附	安政五年午年正月大新版	浪花〔西田〕益猛作 大坂板元:河直改尾張屋松五郎	38.5×52
4-108/109	位付	[歌舞伎狂言位付 東方/東方]	天明六年午八月	於)道頓堀西芝居 勸進座元:嵐市松 狂言撰者:西方近松徳叟 東方:並木五瓶 板元:正本屋清兵衛	16×62.5 2枚
4-7~12	評判	[役者評判記部分カ] (十二調子恵子宝柳山座三番続〔舞台図〕京三芝居役者目録)		京三芝居役者目録 万太夫座 惣巻軸 柳山四郎十郎 座本:沢村長十郎 (版心の書名:京若カ)	14×21
1-26	評判	[役者評判記] 2丁	[延宝]	立役之部:上上吉 姉川鮒四郎・市山助五郎・中村十蔵・中山新九郎 岩井半四郎 嵐三十郎 女形 大上上吉吉沢あやめ 上上吉嵐小六 実悪 上上吉 嵐七五郎 藤川半三郎 敵役 上上吉 三舛大五郎	30×36
20-104	評判	役者あたり狂言銘々出世魁 初編	嘉永五子年二月台新版		38×49
20-105	評判	役者あたり狂言銘々出世魁 弐篇	嘉永五子年二月台新版		38×49
20-138	評判	中芝居忠臣蔵并評判附 かつまけ評判記		座本:中村駒二郎 中村□□門一周忌追善二人道成寺...	18×37
20-141	評判	角芝居忠臣蔵并評判附 かつまけ評判記		座本:中村玉三郎	18×48
20-90	評判	名代役者/評判記蝶花形ハッ首抜文句	子五月大新版		36×23
4	評判	[評判記部分カ] 役者図		中村勘三郎・中村傳九郎・大和屋甚兵衛・森田勘弥・都傳内・森田勘弥等	14×21.5
6-101	評判	五拾三駅宿々見立役者評判記	嘉永五子歳代新版	柳おとけ作	35.5×49
10-40	見立	中角若太夫三社文句見立	[文化十一年戌正月]	株元:河内や太助 綿屋喜兵衛 はりまや□兵衛 安田□□□ 李冠阿曾二郎:こへすみよしの/李冠みている女中:よろこびありや 芝翫茶ののふれん:あま川小屋ねに 芝翫の娘道成寺:ひやうしそろへておもしろや	34×46.5
16-59/60	見立	三都大芝居浜芝居子供芝居惣役者大見立	安政五年午之正月極々細吟大新版	大坂板元:八文舎森文淵 弘所:尾張屋松五郎	34×60

		歌舞伎 / 浄瑠璃 関係			
巻-頁	分類	資料名	出版年月日	発行所等備考	大きさ
19-5	見立	三ヶ津役者浪花繁栄名物見立	弘化五申年二月大新版	ごこば魚市:中村歌右衛門 住吉蛤:嵐吉三郎	35×46.5
20-102	見立	素人の看巧者ハ浄波璃鏡青田の画餅口ハ見眼鼻 いろは譬阨陌噂 前編 四十八番続		富士屋菊治郎板	37×51 彩色
20-103	見立	大新板役者見立とりづくし 上・下		中村歌右衛門・嵐吉三郎・嵐離寛・中村富十郎等	21×27 21×15(2 枚) 計3枚
20-87	見立	信仰/神佛三都役者名人集		伊勢:海老蔵 住吉:嵐離寛 春日:中村歌六	40.5×50.5
20-87	見立	信仰神佛三都役者名人集		後編予告	38×49
20-92・93	見立	三都大芝居/濱芝居/子供芝居役者見立大 相撲	天保七申の年改正新版	板元:浪華河内屋直〔助〕 同北堀江市場綿屋喜兵衛 播磨屋五兵衛	37.5×60
20-94/95	見立	三都大芝居/濱芝居/子供芝居役者大見 立	安政五年之正月極細吟 大新 版	和田正兵筆 大坂心齋橋通り塩町角綿屋喜兵衛	37×61
6-45	見立	三都大芝居浜芝居子供芝居役者見立水滸伝		勸進元:片岡仁左衛門 頭取:松本幸四郎	45×33
8-40	見立	三ヶ津大芝居役者見立おかげ参りのあなもんく	文政十三年寅年大新版	株元:はり五 わた喜板	33.5×47.5
6-221	紋尽くし	市村羽左衛門〔等役者紋尽くし〕		板元正銘 福地茂兵衛 山本九郎	20×24
16-50	役者	大当り狂言尽役者家形手引草 彩色		中山文七 片岡我童 尾上多見蔵等	34.5×48
20-16	役者	大新板絵本太功記十段目抜文句見立		あっぱれ高名手がらして芝翫ヒイキノれん中/さすがの 武智もぎょうてんし 芝翫のりこみくんじゅ	35.5×46.5
5-70	役者	[成田や仏事案内]		八月六日 於一心寺	18.5×25
20-162	役者	江戸みやげ嵐璃寛不知火	辰の年二の替り角の芝居	玉村芝楽述 中村新三郎調 嶺琴八十助作者	18×23
20-163	役者	成駒屋丈江 当狂言中村歌右衛門		浪花町中ヒイキより	19.5×26.5
20-18	役者	當時流行忠臣蔵九段目見立	文政八年西六月大新版	※芝翫一世一代 嵐橋三郎 をかじまやのかげを・・・	36×48
20-18	役者	當時流行忠臣蔵九段目見立	文政八年西六月大新版	芝翫一世一代 嵐橋三郎 をかじまやのかげを・・・	36×48.5
4-41	役者	(五代目市川団十郎白猿が事)口演	文政十一年子四月下旬	南瓦屋町百足屋三郎兵衛より金木先々あて	17.5×34.5
4-43	役者	市川白猿中村座にて口上		国政画 生年五十八歳	36.5×25.5 彩色

		歌舞伎 / 浄瑠璃 関係			
巻-頁	分類	資料名	出版年月日	発行所等備考	大きさ
13-12	役者	江戸成田やさん見物が不動妙応ナリ開帳宝納目録	丑五月ヨリ	於)大阪中之芝居 浪花ヒイキ:三筋廻屋蔵板	32.5×46
20-88	役者	银杏靄二葉首引		廣貞画 (我当・延若)	35.5×47
20-89	役者	[我童・延三郎すもう図]		菊詠作	35.5×25.5
6-24/25	役者	三都大芝居浜芝居子供芝居役者師弟系図	文政十年改正大新版	大坂北ほりへ市場:和多屋嘉兵衛板 浪花 文金堂株元 筆者:綿正書	34.5×63.5
13-22	役者	江戸のぼり尾上菊五郎のりこみむかひの次第	[文政八年酉十一月七日]	北新地 綿徳	30.5×36
14-1	役者芝翫	中村芝翫丈江餞別目録(卯十月十七日江戸出立の節)	卯十月十七日	芝神明前 蔦屋忠五郎板元	31×44
20-6	役者芝翫	芝翫たな紫桜		金房麿戯作 大阪:河内屋太助板	31×42
20-27	役者芝翫	芝翫大名一人一生一代名残木像 略縁起		利新印	35×46.5
6-57/58	役者芝翫	轟貞重宝芝翫年代記大成	文政三庚辰歳早春大新版	浪華 文金堂刊	34×64
6-59	役者芝翫	芝翫だな紫櫻		大阪:河内屋太助板	34×44
6-60	役者芝翫	芝翫ひいき道中記		刊	45×34 彩色
13-11	追悼摺物	嵐璃寛さいご物語	天保八酉年六月十三日往生	辞世付 靱常源寺	23.5×30.5
16-49	追悼摺物	歌成院翫雀日光信士 [追悼摺物]	子年二月十七日	辞世:ねはん会や浪花をあとに西のそら 歌右衛門	33.5×48 彩色
19-12	追悼摺物	さいご物がたり 稲華院園夏日慈信士(俗名:三柘稲丸)	安政五午年四月廿七日命終		26×37 彩色
5-25	追悼摺物	[浅草に八代三柘の再生猫図]		いたきあけよく似た猫とながむれはにやふとなくもおまれかわりか チトセ	24×37.5 彩色
19-9/10	追悼摺物	さいご物がたり		市川小団次我童事・片岡仁左衛門・市川団蔵	48×32.5
20-168	追悼摺物	中村芝翫辞世	未霜月二日	妙法をあけくせいの舟に乗蓮華座付くいそく霜月中寺町:正法寺	18×15
19-13~15	追悼摺物	追善口上せりふ(五代目松本幸四郎)	嘉永三年三月狂言	一陽斎豊国画 板元:小川半助正	26×98 彩色
20-124	追悼摺物	本てうし 八代目 [市川団十郎]	[嘉永七寅年八月六日往生]	作:登加く 調:坂東定次郎なま中にちよと三舛の柿若衆まつたしばらくとめる間もなく音をつぐる夕がらすかわいかわいのこゑごゑに西ゆく雲ともろともにくせいの母のりこえハなんのこったつがもねへ	18.5×2.5

		歌 舞 伎 / 浄 瑠 璃 関 係			
巻-頁	分 類	資 料 名	出 版 年 月 日	発 行 所 等 備 考	大 き さ
6-188	追悼摺物	八代目市川団十郎事市川白猿死絵	嘉永七甲寅八月六日		24.5×33
6-190	追悼摺物	八代目〔市川団十郎死絵〕	嘉永七甲寅八月六日	国晴画 北豊印 児雷也姿	26×19.5 彩色
6-192	追悼摺物	江戸八代目市川団十郎事市川白猿〔死絵〕	嘉永七甲寅八月六日	辞世付	35×48
6-193	追悼摺物	八代目団十郎名残太功記十段目ぬき文句見立	〔嘉永七寅年八月六日往生〕		35×41
6-194	追悼摺物	義士銘々伝	〔嘉永七寅年八月六日往生〕		19×26 彩色
6-196	追悼摺物	八代目市川団十郎白猿	嘉永七寅年八月六日往生		23×18.5
6-197	追悼摺物	八代目白猿死出嚙太功記十日目口合文句	〔嘉永七寅年八月六日往生〕		18×24.5
6-198/201	追悼摺物	書のこしの事	〔嘉永七寅年八月六日往生〕	辞世付八月六日 御旦那様宛	16×82.5
6-199	追悼摺物	猿白院成清日田信士	嘉永七甲寅年八月六日往生		26×18.5 彩色
6-20	追悼摺物	嵐橋三郎置みやげ狂言附	〔文政四年五月以降〕	心齋橋筋南:加賀屋宇兵衛板	34.5×48
6-200	追悼摺物	八代目市川団十郎事市川白猿行年三十二歳乗込図	〔嘉永七寅年八月六日往生〕		24×19.5 彩色
6-203	追悼摺物	忠臣蔵四段目抜文句 市川白猿さいごものがたり	嘉永七寅年八月		35×48
6-21	追悼摺物	嵐橋三郎置五十日献立	〔文政四年五月以降〕		34.5×48
20-168	追悼摺物	中村芝翫未霜月二日めいどの旅へ乗込の辞世	梅龍院玩玉日輝信士 行年三十九才 中寺町:正法寺	妙法(帆)をあげしくせいの舟に乗蓮華座付くいそく霜月	
4-59	文書	行かれぬ月	書	芝居のやけのうらめしや…大西…	17.5×46
4-19/20	文書	乍恐口上(三勝半七相对死届)	元禄八年亥十二月七日	下難波村領墓所□□庄兵衛千兵衛より辻弥□右衛門宛	22×63.5
1-82	文書	御町内様江御願申上候口上 不景気に付き座敷代銀前借の上顔見世元手に仕度…		四条北川芝居名代:布袋屋梅之丞 世話人:西石垣町 丁子屋新四郎より御年寄様	15×89
20-164/5	文書	片岡我童書状之写	十一月十一日	御旦那様宛 当二日夜地震・七日ゆりかえし時の知合いの近況報告・吉原焼失	19×93
8-85/86	文書	翫雀大名人所作王の御事			16×84
8-85/86	文書	翫雀大名人所作王の御事			16×48 16×36

		歌舞伎 / 浄瑠璃 関係			
巻-頁	分類	資料名	出版年月日	発行所等備考	大きさ
8-122	その他	[能登守教経・曾我五郎時教・佐藤四郎兵衛忠信・和田息女舞鶴図]			11.5×10.5 4枚 彩色
8-68	その他	権太妹お里 [絵]			11.5×10.5 彩色
4-35	その他	竹田大からくり芝居 [絵びら]		木札十文 棧敷一間貳百廿文	21.5×32.5
12-60~82	その他	[簿冊部分]1 (寛永九年申十二月重開板江戸絵図跋言/江戸絵図/明暦江戸絵図跋/延宝九辛酉年堺町・葺屋町之図/延宝天和の頃操座小芝居名代看板/ 19丁同頃さかい町さるわか勘三郎座役者附 ふきや町市村竹之丞座役者附/寛永江戸絵図・明暦江戸絵図・宮古路豊後の名古屋心中等説明文/市村座七種磬曾我/曾根崎心中付り観音巡り/名古屋心中下之巻/延宝三年吉原細見の内/享保十三年出板役者芸評の写/26丁初曆商曾我・樺根元曾我/子路負米曾我五郎せりふ/夕霧文章額之図並外箱/同襖模様之図/延宝三年出版の年代記の写)	[文政十三年]	簿冊の1□丁~3□丁と推測される	23×32.5
1-33	その他	[手妻人形通札] 松本治太夫		手妻人形:大蔵善左衛門	8.5×7
1-80	その他	[延宝京芝居通札]		立役:大和屋甚兵衛 作者:富永平兵衛 村山平右衛門	8×6
4-13/14	その他	[天保九年御評判の心中番付(部分)並びに墓碑建立の由緒書]	子正月 文政十一戊子年三月	座本:岩井半四郎 浪華 黄葉園主人[野里梅園なり]誌	23.5×30
4-16/17	その他	[赤根や(半七)豆腐看板裏表写]			39×21
16-48	浄瑠璃	仇桜夢夜あらし根本(浄瑠璃) 序幕~四幕目			17.5×20.5 2枚
10-15	浄瑠璃	三都太夫三味線人形改名附録	天保十二丑之歳九月改正大新板	竹本津太夫・竹本綱太夫・鶴沢寛次・鶴沢燕三等	34×46
10-27	浄瑠璃	浪花素人浄瑠璃一本語	天保十一年子之六月大新板	わた正筆	34.5×47

		歌 舞 伎 / 浄 瑠 璃 関 係			
巻-頁	分 類	資 料 名	出 版 年 月 日	発 行 所 等 備 考	大 き さ
4-61	浄瑠璃	より正あふぎの芝〔部分〕		太夫:豊竹上野小掾	23×33
10-23	浄瑠璃	浪花素人浄瑠璃評判記	天保十一年子之五月改正新板	浪花:わた正筆	45×34.5
4-24/25	浄瑠璃	村山平十郎さいご物がたり名残玉子酒〔部分〕	元文三初演(歌舞伎年表による)	大坂順慶町心齋橋筋:河内屋権右衛門板(宮古路豊後正本) 一等蓮舟元文三年午八月廿九日	21×57
19-20/21	浄瑠璃	浄瑠璃五行抜本目録	天保四巳年	大坂西横堀船町:加嶋屋清助板	27.5×40 27×33.5 2枚

見世物引札・絵びら

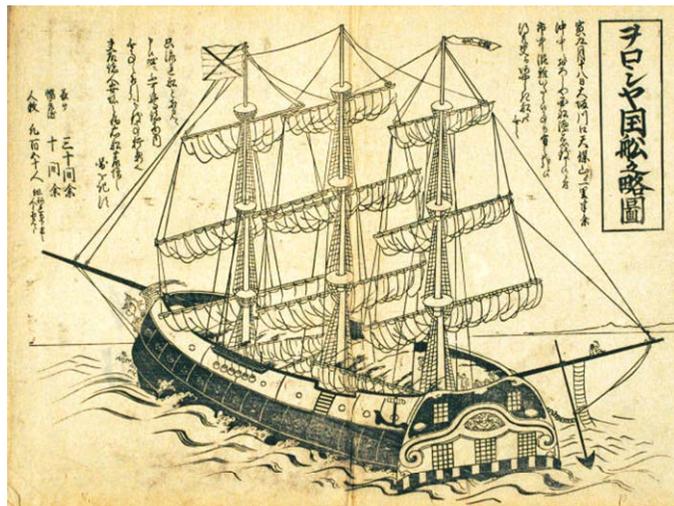
巻一頁	分類	資料名	開催年月日	発行所等備考	大きさ
19-67	曲芸	[見世物]	嘉永六年丑三月	太夫: 早竹寅吉 一瀬亭芳倍画 於)堺新地	36×47
15-6	曲芸	[軽業等興行]	申正月吉日	太夫元: 桜綱幸吉 □鶴 於)難波新地能場	34×48
20-156	曲芸	[太夫早竹虎吉軽業・極駒] 付)いよぶしかゑうた			23.5×16
20-29	曲芸	[早竹虎吉]	[安政五年六月]	□川国□画 於)なんば新地興業	27×39
20-31・32	曲芸	早竹虎吉			25×34
20-153/154	曲芸	[太夫早竹虎吉] 付)く)るさめかゑうた			23.5×16
20-135	曲芸	太夫早竹虎吉[軽業等]		一□亭芳□画 順慶町 山中 於)難波新地野側	36×47
15-10	曲芸	[軽業曲独楽曲手鞠興行]		太夫元: 山本□□□ 増鏡小仙 廣貞門人廣国画 於)難波新地松尾南山	33.5×42
4-22	曲芸	馬士団重郎		馬をうでにてたもちうへにてハ大の男さままのきよく事	29.5×21
10-49	曲芸	舞子大曲馬		於)道頓堀中の芝居隣り 太夫本: 渡辺勝治 女騎方・女出囃子	19.5×28
4-38	曲芸	江戸のぼり女太夫曲持曲ざし		於: なんば新地 太夫元: 北浜伊三郎 女太夫: 東つな菊・東つなよ	34×24
10-50	曲芸	大力曲持 新工夫	丑之五月上旬ヨリ	於)難波新地野側 太夫本: 石割伊之助 いづ卯板	22×33
10-51	曲芸	浪花子供力曲持	卯之正月九日	於)道頓堀法善寺境内 太夫本: 明ぼの吉右衛門	22×34
10-48	曲芸	新登り江戸力持	戌の三月中旬より	於)難波新地野側	20.5×30
14-48	曲芸	[一世一代御名残興行]		鉄割弥吉 鉄割音吉 於)難波新地野側 音吉二代目弥吉と改名	46×31.5
4-81	からくり	[人形放業等からくり細工]乍恐御披露	丑正月吉日より	筑後産京都住田中近江大掾源久重倅弥三郎 人形師: 飯田甚作 大工: 後藤恵七 於)なんば新地	35.5×48.5
19-11	からくり	江戸登り新工夫水大がらくり(破損)	五月五日より	於)西横ほり	24×33
8-119	からくり	[からくりについて]乍恐口上	仁徳天皇10年午八月	太平元: 美世蔵	24.5×26.5

見世物引札・絵びら

巻一頁	分類	資料名	開催年月日	発行所等備考	大きさ
8-120	文書	[大乱多細工エキレイスについて]	午八月		21×7.5
8-129	文書	[穗喜星のからくりについて]	菊月吉日	太平元:見世蔵	24.5×26
4-82	細工物	[細工物]	丑正月吉日より	桜綱駒司 桜綱幸吉 安堂寺町南へ入:越田摺 於なんば新地松の尾南山	36×48.5
4-97	細工物	[府中細工発売] 口上		浪速堂嶋さくらばし: 蝙蝠堂廓	17×23
5-67	細工物	[見世物引札]		孝信?楼:英左画 摺物師 安堂寺町:越田 於四天王寺細工人:大江忠兵衛 道具:大津市兵衛 竹田亀吉	49×34.5
10-21	細工物	[菊人形]		浪花:泉宇板 菊細工人:植木屋巳之助 竹東軒寿楽 於:難波新地野側	34×44.5
10-4	細工物	倭国名所七瀧の涼景	六月上旬	細工人:谷川金蔵 於) 難波新地野側	31×43
10-45	細工物	大鯨	未二月六日より	於) 難波新地野側 浪花:いづ宇[版](昨年極月中旬平戸云々)	34×44
15-5	細工物	[鯨細工見世物興行]	正月吉日より	細工人:大江忠兵衛 鯨細工人:市田口定 道具細工人:竹田亀吉 一口亭芳倍画 博労町三休橋 板木摺物師中沢直七 於) 難波新地能場 昨年天王寺開帳時大象・・	34×48
19-63/64	細工物	六代目松本錦舛追善 [聖徳太子御年忌御開帳に付追善]	酉二月拾二日より	細工人:大江忠兵衛 孝伝楼:英佐画 於) 四天王寺 摺物師 安堂寺町さのや橋南へ入:越田	45×35
14-47	細工物	[聖徳皇太子御年忌開帳見世物]		細工人:大江忠兵衛 孝信(伝)楼英左画	43×31.5
15-9	細工物	ギヤマンビイトロ細工七福神宝の入船	戌正月二日より	人形細工人:柳文三 太夫元:増多伊三郎 孝口楼英イ左画 於) 難波新地野側	33×48
15-48	細工物	丸竹大細工		太夫元 播州姫路船場:玉川藤兵衛 於) 難波新地松の尾南山	34×48
15-98	細工物	植木・焼物細工	二月吉日より	植木細工:金井作平 人形細工人:都文亭 太夫元:天野久富 孝葉英イ左画 末吉板 於) 難波新地松尾北山	33.5×46
19-3	細工物	硝子細工	酉二月吉日	太夫本:春の谷市水 細工人:大江和助 於) 四天王寺石之鳥居前	33×44.5

見世物引札・絵びら

巻一頁	分類	資料名	開催年月日	発行所等備考	大きさ
10-11	細工物	かいさいく	当三月上旬より	於)難波新地□□ 細工人:大塚看造 京都スケ:花生軒 浪花人形師:大江和助	34×46
4-70	細工物	[寅・唐人等]籠細工		細工人:浪花 一田庄七郎 応需:五渡亭	32×25彩色
6-97	細工物	乍恐口上		細工人:大江忠兵衛 麦藁細工人:保川春貞 太夫本:武田亀之助 難波新地 於:松の尾南山	33.5×48
20-167	異国趣味	天王寺象のみせもの		付)伊予ぶしかへうた 生瀬戯作	18×24.5
14-45	異国趣味	[天王寺象の見世物]象図付	嘉永二酉二月より	生瀬戯作	18×27
14-3	異国趣味	紅毛来船ハルシヤ国産駱駝	未年六月下旬	於)難波新地野側 伏見町:順意堂・玉屋口兵衛刊	31.5×45
14-4	異国趣味	剛猪山嵐 蘭名ステーケルハルケンといふ	[天保三年六月]		31.5×44.5
4-131	異国趣味	唐土・天竺・紅毛珍物目録	天保六未四月より	於:浪花とかく座しき	25.5×35.5
20-167	その他	[興行案内]		前講:由井とろう車 後評:鎌倉大問答	18×24.5



<保古帖5巻 フロシヤ国船之略図>



<保古帖14巻 紅毛来船ハルシヤ国産 駱駝[見世物引札]>

書画関係

巻一頁		資料名	発行年等	発行所等備考	大きさ等
4-45	絵	[新年若殿参賀図]		あらたまのはるたちかえるとしの御みとく・・・	10×16
4-151	絵	釋瑞浄 [追悼画]	安政五年午九月二日	行年五十三才 国員画 辞世:わくらばにとふひとあらはかの国の池の蓮の露とこたえむ	38×25.5 彩色
4-73	絵	[肥後熊本御手船一力丸大新艘図]	八月十九日～九月中旬	江の子嶋東町にて作りおろし、木津川停泊	24×34.5
4-79	絵	忠臣蔵見立人形		橘蝶樓貞房戯画 句) さなきだにおもきかうへの小夜衣わがつまならでつまなかさねそ	37×26 彩色
4-95	絵	清人画		棠湖	18.5×33 彩色
5-107	絵	花競争名所二樹 西の年盆替新狂言	書	※暁鐘成翁風詞の当時自書画の筆書有	34×24 彩色
20-28	絵	新吉原地震并出火之図	安政二卯年十月二日夜四ッ時		38×52 彩色
4-159	絵	貞信団扇図		蓮/蛙	21.5×22
5-11	絵	月瀬尾山梅溪道の栞		浪華:前鐘成晚晴翁作 松川半山画 井上治兵衛彫	35×48.5 彩色
5-114	絵	[太古将帥並ニ太古婦人図]	刊		32.5×47.5
5-12	絵	月瀬尾山梅溪真景之図		浪花:松川半山(霞居)書 井上治兵衛彫 浪花:積玉圃・松雲堂刊	36×48.5 彩色
5-62	絵	ストーンボート之図		写真之梓新奇発行	32×46 彩色
10-63	絵	和州生駒山宝山寺境内絵図		東都顕真齋一純写 一荷堂半水誌 田中忠治謹刻 宝山寺蔵板	34×46 彩色
11-36	絵	[Vicemde groote Schip図]			44.5×32 彩色
1-38	絵	[職人尽絵断片 足袋職人之図], 銅版画等			7.5×5
1-38	絵	KEK (R) EIFD			5×8
1-38	絵	[銅板人物図] 2枚			9×4 5.5×8.5

書画関係

巻一頁		資料名	発行年等	発行所等備考	大きさ等
1-40	絵	[肉筆 風俗画]			22.5×32.5 彩色
1-84	絵	[奈良絵本 一部]			20×18 彩色
2-7	絵	[元禄板刑罰獄門図]		しんせいがかくび	22×16.5 彩色
3-20	絵	[紫銅皿図]			13×21.5
3-65	絵	[画像]			27.5×38.5
3-67	絵	[西洋人嬉遊之図]			38×58.5 彩色
3-81	絵	[帆掛け舟之図]			28×39.5
3-40/41	絵	[軍配図]		道勝敵至善為兵温然一挙望風咸平	82×30
4-76~78	絵	源頼光公館土蜘蛛作妖怪図 三枚組		一勇當(か)国芳画	37×25.5 彩色
6-148	絵	奈良絵			16.5×24 彩色
6-22	絵	[仙獣]白鹿之図			27×34.5
6-71	絵	鬻鯨之図	文政十亥年春より	浪華の浦	35×49.5
5-106	絵	[畝日山東北陵図] 付解説			20×21 12.5×9
9-16	絵	大坂下寺町孔雀茶屋図		丹羽桃溪画	36×48
15	画家	浪華画工佳室標(画人名/住宅の方角)	嘉永元年	竹亭散人誌 活版	16.5×22
15-71	画家	完瑛翁七回忌法要案内状	[明治三十六年]十二月十二日	祭主: 武部秋畦・武部白鳳 於) 博物場衆楽殿	18.5×21.5
15-72/73	画家	[竹田煎餅引札]		北区此花町貳町目第十一番地屋敷: 直入堂御門製 活版	14×23
6-129	画家	半山奥復旧姓披露	安政二乙卯年暮	鶏鳴舎(暁晴翁)・節堂等誌	19.5×52.5
6-137	画家	先師遺業雪操後嗣 千里謹白			14×5

書画関係

巻一頁		資料名	発行年等	発行所等備考	大きさ等
6-18	画家	浪花画家名流	弘化二年夏	晴華嶋藍水 上田耕沖	33.5×47
6-226	画家	直入山下人田癡撰併書 小虎 青湾茶	文久二年任戌春日		14×11.5
6-26	画家	浪華画人組合三幅対	卯の年改大新板	勸進元:蘭阜斎是信 差添人:法眼周峯	34.5×48.5
6-67	画家	帝京画家給銀住定	嘉永新板	勢州山田 雲根流虹誌作 版元:浪華	36.5×48.5
1-46	書画家	[海内書画人名録之内 撰津・武蔵]		篠崎長左衛門・大塩平八郎・森文平・岡田彦兵衛／谷文晁・市川米庵 有	
6-138	書	墨林春秋(黄坡印)	庚申新曆	松宇山人赤石必刀	36×14
3-21	書	[佩文並書画譜卷四十四・書家伝二十三明五抜粹]		戴笠子曼公の項	16×14
3-79	書	[資料部分カ] (奉模弘法大師真蹟) 般若波羅蜜多心教)	明治十六年二月	鳩居堂熊谷直行謹識	18×59.5
3-82	書	[資料部分カ] (御幸宮 文禄元年三月十一日秀吉)		[伏水一古寺所伝襲模刻豊臣太閤真蹟]	36×49
3-84	書	[資料部分カ] (源二位頼政真蹟 平等院切)	明治十二年六月追福	古筆了仲模	31.5×19
3-90	書	[資料部分カ] (慶滋保胤真蹟)		平安 宝古堂珍藏 井蛙堂模刻	34.5×68
2-55	肖像	キハダンスアナン之像		欽差大臣国王副使海軍統帥右督	27.5×21彩色
2-56	肖像	大合衆国人上官[アダムス]肖像之写 彩色	嘉永七寅孟春	[アダムス肖像] 神風館紀於呂香図	27.5×20.5
3-66	肖像	[奥善院法印良勝筆宗祇画像]	元禄十一寅歳七月二十九日	宗祇公為二百年忌追福令千句連歌興行・・・能順	28×38
8-111	肖像	人物像		関月写(南岳悦山書十萬堂額図有)	22×16.5
6-16	書家	本朝今人書合		行司:頼山陽 貫名海屋 頼杏坪 篠崎松竹 岡敬安 小田百谷 北小路竹窓	37×28
3-	拓本	[双龍図]		大阪生駒氏蔵	17.5×15.5
6-131	拓本	[御太刀甲冑刀劍修復図]	安政五	山田屋安右衛門印	12.5×12.5

書画関係

巻一頁		資料名	発行年等	発行所等備考	大きさ等
6-143	拓本	[安政第五戊午年歴作古鏝之図]		司天官中 浪華 福田氏蔵	19×9.5
5-76	展観	先考公長七周忌追薦諸先生新書画帖展観		会主: 上田公圭(公長兄) 補助: 社仲 集所: 文麗堂・松月堂・玉芝堂	18×25
13-37	展観	唐土天竺紅毛珍物目録	天保六未四月より	於) 浪花 とかく座しき	24.5×34
15-99	展観	勤皇志士遺墨拝覧券	七月十二日～十六日	高倉通錦小路: 尊鶴堂	10.5×6.5 活版
15-64	展観	風俗史料翫物会[入場券]	明治廿七年六月廿四日	会主: 生田百斎 於) 東上之宮神社生田百斎片	14.5×7.5 活版
15-68	展観	集古会出品課題	明治三十六年三月一日	東京麴町区四番町十三番地林方: 集古会事務所	14×22 活版
15-75	展観	浮世絵展覧会案内	明治廿五年十一月六日	浅草駒形町小林文七より鹿田清七宛 於) 上野三橋松源楼	19×24
15-95	展観	書画展観并席上揮毫[案内状]	四月十四日	会主: 魚住荊石 書画集所: 文麗堂 松月堂 森川 玉芝堂 於) 登加久	22×14.5
3-78	展観	珠玉奇石并古雅物類集会 2枚	戊二月	会世話人: 菊居事次吉楼社中	14.5×39
6-113	展観	蒹葭堂遺物會廣告	十月十五日至卅一日	於: 大阪博物場 同志幹事 鹿田松雲堂等4名	17×25.5
6-136	展観	先師雪操翁追福新書画遺墨展観	四月廿日	祭主: 但馬千里等六名 幹事: 魚住荊石・田能村小虎等四名	18.5×21
6-15	展観	洛陽本能寺什物目録			36×49
6-77	展観	先考菅松峰翁追薦書画展観会引札	安政戊午四月十五日	幹事 松川半山安信 於) 浮無瀬	20×26
6-79	展観	淡島榎並賢光精舎展観書画大会	三月四日	執事 浪華書林 松雲堂 文鹿堂 玉芝堂 会主: 藤河亭 潮桑孤 三都並阿賛播	17×21
6-91	展観	森祖仙翁猿之書画展観	閏三九日十日	森末弟: 梅民清水口幾 於) 下寺町孔雀茶屋店 南向 光明寺	15.5×11.5

諸 芸 ・ 娯 楽

巻 一 頁	分 類	資 料 名	刊行年等	発 行 所 等 備 考	大 き さ
20-158	音曲	いよぶし	寅ノ春	豊竹津磨太夫作	16×23
8-97~99	音曲	はうた尽し			16×44 6枚
6-140	音曲	よしこの 梅笑等十二首八名	辛亥初春	稲雲社 欣雀	13×35.5
6-142	音曲	安政四丁巳年口まくらよしこの五色のし			21×8
15-96	音曲	嘉永二巳酉とし大小よしこの	嘉永二年	花山人/桃人/桃枝等	29×16
20-159	音曲	新板大津恵ぶし「きられ与三郎お富妾宅場」		松福亭松鶴作	18×25
6-189	音曲	大津絵ぶし		暁晴翁	8.5×19
20-161	音曲	大津恵ふし 下の巻	卯の年	慶枝改四代目桂文治作	18.5×22.5
20-157/160	音曲	十二月大津恵ふし 上の巻	[安政二]卯年[二月五日]	慶枝改四代目桂文治作	18.5×24.5
6-70	音曲	音曲語様口授秘傳改正両節弁		大坂天満市の側:麩屋源右衛門板	34×48
20-42・43	音曲	江戸唄三味鳴物見立角力			48×31
20-133	音曲	改/正浪花素人哥三味線見立相撲番附		集者:猪飼呉工樓 大坂口筋かゝら町 和泉屋卯作板	35×48
5- 57	音曲	一札之事 [乱曲伝授之事]	明治二年四月	福井松太郎義知より観世三十郎後見大西寸松宛	33.5×24
5-23	狂言	[狂言流行番付]	嘉永四年大新刻		34.5×48.5
16-57	狂言	狂言組	三月七日	於) 鮒卯宅	18×44
16-57	狂言	狂言組	三月廿六日	於) 登加久	16.5×42
20-44・45	狂言	今様の狂言 絵入	安政五年午正月吉日	太夫元:林寿三郎 濱田屋印 於:新地玉沢小家	50.5×36.5
5-22	能	[謡番付]	嘉永元年開板	日吉蔵版	34.5×48

諸 芸 ・ 娯 楽

巻 一 頁	分 類	資 料 名	刊行年等	発 行 所 等 備 考	大 き さ
15- 4	能	[謡曲番付]	嘉永元戊申歳開板	日吉蔵版 於)大近亭	34×46
5- 52	能	願成就日吉幸能		願主林馬	23.5×11
5-78	能	勸進能場之図	刊		25×34
6-7	能	勸進能興業場所全図	弘化五申年二月従	開板所 瀬戸物町:文花堂 宝生蔵板 於)筋違橋御門外	38.5×51.5
6-40	能	[鷲源右衛門追善能伏栗興行案内状]	刊		16.5×18.5
6-120	能	[能興行]口演		[別紙欠]	17×21
16-58	能	能組	四月五日	於:猶村常舞台	16.5×48
16-58	能	能組	四月六日		18×48
6-6	神楽	御神楽略番組・御神楽略縁起・御神楽御参詣御年印		緒方末流大神惟正勤誌	18×48 16.5×47.5
15-76/77	舞踊	浪花をとり 題:行幸の賑ひ		蟹乃屋左文作 北新地歌舞練場	19×42 活版
19-45	舞踊	[踊図]			15×26.5 彩色
20-152	引札	[昔語り興行]口上		語り:竹本津賀太夫 竹本大和太夫 三味線:野沢吉兵衛 席元:野沢吉太郎	16.5×25
10-34	娯楽	浪華素人はなし見立角力	文政元寅十一月改大新版	行司:二代目桂紋治	45×34.5
10-26	蹴鞠	浪花打鞠駈くらべ	文政十年正月大新版	天喜板	46×34
2-33	相撲	[勸進大相撲番付]	申五月	勸進元:鏡山佐兵衛 行司:木村森之助 於)難波新地境 [板元万五郎]	17×30 17×21.5
2-39	相撲	相撲番付		勸進元:楠岩五郎 行司:岩井左右間	18×34
1-13	相撲	[雷電為右衛門手形]			25×20
1-14	相撲	[谷風梶之助掌形]			23.5×22

諸 芸 ・ 娯 楽

巻 一 頁	分 類	資 料 名	刊行年等	発 行 所 等 備 考	大 き さ
1-15	相撲	[小野川喜太郎手形]			23×20
1-16	相撲	[九紋竜清太夫手形]			25×22
1-43/44	相撲	[相撲番附]	[安永三年午六月]嘉永四年	北久太郎町:板元万兵衛 勸進元:陣幕長兵衛 行事:岩井又七・新七等	15.5×61
1-43/44	相撲	[相撲番附]		北久太郎町一丁目西へ入 板元万兵衛 行事: 岩井弁蔵・亀之助等	15.5×53
13-15	相撲	三ヶ津大相撲故實由来書		京都:叶屋喜太郎 大坂:麩屋源右衛門	32.5×46
13-16	相撲	三ヶ津大相撲古今大男集	文化十二亥九月改	京都:叶屋喜太郎 大坂:麩屋源右衛門	32.5×46
13-13	相撲	[相撲番付東方]		於)難波新地 行司:木村平之助 大関:谷風梶 之助 関脇:雷電為右衛門	30.5×44
13-14	相撲	[相撲番付西方]	寛政五癸丑年六月吉祥日	大坂北久太郎町梅檀の木筋西へ二軒目北側: 板元万右衛門	30.5×44
20-147	相撲	戊子/納会大すもう	文政十一年十二月六日	行事:柏樹園 車堂 聴風軒 於9大近亭 和合 連	39×28
3-83	茶道	[茶道許状]		灘屋弥七郎宛 右長板袋棚之習法不残伝授畢	34.5×34
4-132	茶道	急焼 (又名宜興罐キイヘンクワン)図	丙子冬十月	高芙蓉検出 大雅堂印施) 梅園記	14.5×17.5
14-46	茶道	高遊外翁所持茶具図 [表書]		浪速兼葭堂蔵梓	20×13.5
6-226	茶道	直入山下人田癡撰併書 小虎 青湾茶	文久二年任戌春日		14×11.5
4-132	茶道	急焼 (又名宜興罐キイヘンクワン)図	丙子冬十月	高芙蓉検出 大雅堂印施) 梅園記	14.5×17.5
4-107	娯楽	ほたるがり[案内]		難波新地:住之江 土鳥画	17.5×24
10-43	娯楽	つり天狗	文政八の年大新板	大坂日本橋南詰一丁東:本屋安兵衛板	34×45
4-104	娯楽	揚弓御稽古所 [引札]		平野町神明宮御社内:湖月 志保山印有	19×26

諸 芸 ・ 娯 楽

巻 一 頁	分 類	資 料 名	刊行年等	発 行 所 等 備 考	大 き さ
4-117	娯楽	揚弓御稽古所再建披露		京町堀一丁目新中橋南詰東へ入ル南側: 永寿堂一箕	33.5×50
20-46・47	娯楽	界府拳相撲	嘉永元年申八月改	勸進元: 鳳鶴軒 桐亀印	53×38
20-48・49	娯楽	界府拳相撲	嘉永三戌七月改正	勸進元: 鳳鶴軒 桐亀印	48×36
20-50・51	娯楽	界府拳相撲	嘉永四亥歳九月改刻	勸進元: 若組 桐亀印	53.5×36
4-115	娯楽	講釈場新設披露	来ル三日より	安堂寺町ほねや町角 燕林「夜太平記」	17×24
20-52	娯楽	左海将棋鑑	天保九戌九月改正	勸進元: 柳雪	48×33
4-96	娯楽	扇角力大会興行引札	文化十四年丁丑七月	角力場: 難波新地四季茶屋	15×16
6-17	娯楽	双六			34.5×24.5
19-68	娯楽	大坂町づくし絵かんがへ		よみうりでんじゅ別にあり	36×46

役 者 絵 (36×24cm)

巻-頁	役 者 名 : 役 名	画 家 名	発 行 所 等
7-1	梅玉:浅間左衛門 市紅:富士太郎 常磐:なみ路 □□:富士右門	春好斎北州画	
7-2	誠忠義士伝 (富守祐右衛門正固) 一筆口誌	一勇斎国芳画	堀江町:海老林
7-3	誠忠義士伝 (角野重平次次房) 一筆口誌	一勇斎国芳画	堀江町:海老林
7-4	京四條北側於芝居大當 二枚続 中村歌右衛門:宇治常悦	柳斎重春画	心斎橋通菊屋町:天喜
7-4	嵐璃寛:登井谷五郎	国廣画	心斎橋通菊屋町:天喜
7-5	中村歌右衛門:石川五右衛門 玉と呼ぶ声や石川の濱ちとり 四海	春好斎北州画	
7-5	浅尾勇治郎:岩木當馬 こからしの岩木にあたる音たかし 二俵	春好斎北州画	
7-6/7	中村歌右衛門:捨若丸	春江斎北英画	綿喜
7-6/7	尾上多見蔵:三浦常陸	春江斎北英画	綿喜
7-6/7	松江改中村富十郎:きをん於かじ	春江斎北英画	綿喜
7-6/7	板東□□郎:斉藤蔵之助	春江斎北英画	綿喜
7-8	嵐璃寛:小栗判官兼氏	玉柳亭貞秀画	天喜
7-8	岩井紫若:天照の姫	柳斎重春画	天喜
7-9	中村歌右衛門:狩野四郎次郎 よしyしぶし:梅玉調	国廣画	天喜
7-10	嵐璃光:岩城屋お見津	国廣画	天喜
7-11	松江改中村富十郎:小ゆき	国廣画	天喜
7-12	浅尾国五郎:番頭庄八/関三十郎:道具屋甚三	春曙斎北須画	本清
7-12	中村歌右衛門:法界坊/小川吉太郎:手代要介実ハ吉田とのい之介助	春曙斎北須画	本清
7-13	岩井紫若:仲居おみや	春江斎北英画	本清

役 者 絵 (36×24cm)

巻-頁	役 者 名 : 役 名	画 家 名	発 行 所 等
7-14	板東寿太郎:不破伴左衛門	春江斎北英画	本清
7-15	中村松江:かつらき太夫	春江斎北英画	本清
7-16	嵐橋三郎:ふか草ノ茂助	戯画堂芦ゆき画	綿喜
7-17	市川鰻十郎:ぞろの八八	戯画堂芦ゆき画	綿喜
7-18	嵐璃寛:口浪七画	春江斎北英画	本清
7-19	岩井紫若:女房ふじ	春江斎北英画	本清
7-20	市川白猿:七役之内 道てつ・かつえ・より兼	春江斎北英画	天キ 傳印
7-21	市川白猿:七役之内 荒獅子勇之助・仁木たん正 縁側に男之助やてつせん花/其日其日出来不出来あり旅日記	春江斎北英画	天キ 傳印
7-22	市川白猿:七役之内 八しを 絹川谷蔵	春江斎北英画	天キ 傳印
7-23	嵐璃寛:宮本無三四	春江斎北英画	本清
7-23	浅尾與六:国倉傳五右衛門内匠事	春江斎北英画	本清
7-24	市川鰻十郎:児福丸 付)三下り:芝翫・新舛	春好斎北州画	利新
7-24	中村歌右衛門:児雷丸 付)三下り:新舛・芝翫	春好斎北州画	利新
7-25	中村歌右衛門:浅間左馬衛門照連	玉柳亭重春画	
7-25	浅尾額十郎:富士右門	玉柳亭重春画	天喜
7-55	坂東彦三郎:村上新衛門/中村歌十郎:最上林平	春松斎北寿画	唐伊:本清
7-55	浅尾奥治郎:船頭徳蔵/嵐吉三郎:尼子房丸	春江斎北英画	本清
7-26	嵐徳三郎:三国小女郎	春江斎北英画	本清
7-26	中村鶴助:吉川橋之助/市川白蔵:長崎四郎左衛門	春松斎北寿画	本清

役 者 絵 (36×24cm)

巻-頁	役 者 名 : 役 名	画 家 名	発 行 所 等
7-27	市川森之助:宮本無三四	春好齋北州画	河治
7-28	中村千之助:娘 糸はき	春江齋北英画	
7-29	嵐璃寛:団七九郎兵衛	玉柳亭重春画 柳齋印	
7-29	岩井紫若:おたつ	玉柳亭重春画 柳齋印	
7-30	尾上多見蔵:五化ノ内 子もり 付)松朝句	春江齋北英画	
7-31	尾上多見蔵:五化ノ内 石橋	春江齋北英画	
7-32	尾上多見蔵:五化ノ内 唐人	春江齋北英画	
7-33	尾上多見蔵:五化ノ内 あづま男権立	春江齋北英画 堀工:加助	本清
7-34	嵐橋三郎:佐々木丹右衛門	国廣画	天喜
7-35	嵐璃寛:人形屋幸右衛門/市川助十郎:手代久七	春江齋北英画	本清
7-36	中村歌右衛門:矢口ノ渡鳥頓兵衛	春梅齋北英画	本清
7-37	尾上梅幸:菅相々	哲齋信勝画	天喜
7-38	嵐璃寛:宮本無三四	春好齋北洲画 彫:加助	本清・河治
7-38	嵐璃寛:宮本無三四/中村友三:坊主岩松	春江齋北英画	本清
7-40	嵐璃寛:小野伝内	春江齋北英画	本清
7-41	尾上多見蔵:まむし治郎吉	春江齋北英画	本清
7-42	あらし璃寛:娘おそめ	玉柳亭重春画	天喜
7-43	嵐橋三郎:斉藤太郎左衛門	柳齋重春画	ハタキ

役 者 絵 (36×24cm)

巻-頁	役 者 名 : 役 名	画 家 名	発 行 所 等
7-44	中村歌右衛門:座頭城住実ハ美濃の庄九郎	春好齋北洲画	
7-45	中村歌右衛門:柿ノ木金助/中村東蔵:摺針の岩	春江齋北英画	天喜
7-46	市川市紅 :自来也	京ノ長秀門人:浪花 長国画	綿喜板
7-47	関口堂の芝翫? 二月之内 しはす月 付)芝翫の匂	国廣画	草紙屋(貝図)水
7-48	中村歌右衛門:狐忠信	玉柳亭重春画	本清
7-49	尾上菊五郎:静御前	玉柳亭重春画	本清
7-50	[団扇当世競][中村歌右衛門]	春好齋北州画	
7-51	[団扇当世競]市川蝦十郎:一寸徳兵衛	春好齋北州画 カスケ口印	
7-52	浅尾鬼丸:渋川藤馬	国平画	天喜
7-53	岡嶋屋:姜平	国廣画	天喜
7-54	嵐吉三郎:惟喬親王/ 中村歌右衛門: 加藤正清	春好齋北州画	

翻刻 「畿内巡り歌日記」

大阪府立中之島図書館	大阪資料・古典籍課	大北智子
	ビジネス支援課	高萩綾子
	企画情報課	山田瑞穂
大阪府立中央図書館	第二閲覧課	小笠原弘之
	人文系資料室	佐藤敏江

はじめに

底本は大阪府立中之島図書館蔵(二二三・六/一四六)一冊(二六・五×十九・五cm)台簽の書名「大和めぐり 吉野 高野山 和哥の浦 和泉路から大坂と八幡 京都迄」表・裏表紙各一、本文十六丁、更に、「松葉氏女 松雪集 右(破損) 廻行 (破損) 嘉永迄」と書かれた台簽が貼付され、その裏には十二支の一覧のメモ書きのある表紙が付されている。文政七年(一八二四) 足代(権太夫) 弘訓写

「松葉氏女 松雪集」とあるのは、伊勢度会氏の一族である商家松葉小兵衛の娘、松葉いぬ(法号松雪、延宝四年〜元禄三年、)と、その著作物「松雪和歌集(大日本歌書綜覧等による)」をさすと思われる。

足代弘訓(号寛居)は天明四年(一七八四)生まれ、伊勢の度会氏の一族で伊勢外宮の権禰宜、荒木田久老、後芝山持豊、本居大平、本居春庭に学び、本居学派の中心的存在でもあった、

本書は、書者が足代権太夫弘訓である事、本書と共に綴じられていたと思われる「松雪集」が一族である松葉いぬの著作である事等から、伊勢山田の度会一族の先人(安永頃)の作品を、後代の足代弘訓が書き写したものと思われる。

凡例

本文は底本の忠実な翻刻を原則としたが、通読の便を考慮して返り点、句読点を施した。旧漢字は新字体に改めた。

反復記号「ヽ」「ヾ」「ヾ」は底本のままで表記した。

〔畿内めぐり歌日記〕

弘訓先生

大和めぐり 吉野 高野山 和哥の浦 和泉路から大坂右八幡 京都迄

安永きのと末のとし四月二日、山田原を立出て宮川を打渡る時人々にわかれ行。名残つきせされは、しばらく流を手にむすひて内外の神垣をふし拝む程に、夜もやう／＼明わたりぬ。夫より急きて、午ノ刻とおぼしき時松坂を過、大和の道におもむけは、卯月のはしめにて春のおもかけまだ残る野山のけしき面白く過行程に、日もやう／＼かたふき侍れば、田尻といふ所に泊り侍る。此宿りより見渡せば、未に山かさなりて、見なれし古郷の朝熊山もこひしければ

朝熊の高根も遠く成まゝに見なれぬ山のちかくなりぬる

三日 田尻の宿を立出て急行は、阿保山といふ山有。峯のあらし谷の水音すさましく思ひて過ゆけは、道の程三里といへともすゑとをく覚ゆ。此山に杉の林有、其中に石地藏まします。此地蔵は弘法大師の御作のよし、其里の者に聞てふし拝み行は、むかふ高根の青葉の中に一木の遅桜さかりなるを見て

心してあらしな吹そ山桜あとよりこゆる人もあるらし

かくなん口すさみて急ぐ程に、伊賀伊勢の境有。是よりすゑは伊賀の国になんなり侍ると人の言ければ

急つゝ伊勢路もよそに分過て猶遠さかる古郷の空

折ふし雨降たれば、くらき木の下道を行程に阿保といふ宿につきて泊り侍る。

四日 阿保を立て行程に、此道に山川多く岩こす浪のをと岸の松風いと面白く、旅のうさをしばしわすれて急ぐ程に、初瀬の山にさしかゝれば、正木のかつら永き日もくるゝ比に成ぬ、やう／＼山を越て初瀬の町を見おろせば、立ならひたる家／＼のけしきたぐひなく、わすれかたかりき。頓て初瀬の町に着しかは、折ふし観音開帳と聞てもふで侍るに、入相の鐘しつかにひゝきていとかしこくぞ覚へ侍る。其夜初瀬の町に宿りしかは、山おろしはけしく吹て夢もむすはさりき。

五日 朝又々観世音にもふでゝ和歌一首奉納し侍る。

尋来てあふくもけふを初瀬寺聞しより猶いともかしこき

夫より三輪の明神にもふて侍るに、木立ものふりて神さびたるけしきとふとく覚て拝みめくれは、瑞垣ちかき辺に根は壺ツ、末は式つにわかれたる杉有。されど壺本はたふれ壺本は其まゝ也。所の人に尋ければ、是なんふたもとの杉成よし聞て

三輪の山神のめくみは杉の葉のみとりつきせぬいくよろつとし

あたりの茶店にしはらくやすらひ、在原寺にいたる。此寺は在五中將の旧跡成よし、堂のうしろにむかしの井筒の水とて苔むしたる井あり。

むかし思ふ井筒の水はそれなからむすひし人の面影もなし

此寺にて様／＼宝物を拝み、夫より帯解寺の地藏にもふて、其ほとりの茶店にしはらくやすらへは、是より程ちかき寺に開帳あるよし言ければ、則もふて侍るにいと賑はしき事なりき。かくて日もく

れかゝる比奈良につきて、先元興寺にもふて待るに、堂など焼失のよし、塔のみぞ見えし。はや日もくれたれば、春日の宮にも参候て奈良の町に泊る。

六日 朝春日宮にもふて待るに、古郷に見なれぬ鹿のむらかりあるか(一)そ、秋はいかならんと覺ゆ。所々拝みめぐりて若宮八幡宮にいたる。此所の山は②菅家のぬさも取あへず手向山とよまれし手向山なりと聞侍れと、さしたる言の葉もなければ神に手向をもせざりき。夫より過行程に三笠山のふもとにいたる。聞しよりもうるはしき山なれば春秋のながめいかならんとゆかしく思ひぬ。

旅衣つゆにもぬれぬ三笠山さして祈し神の恵に

折ふし高根にさす朝日を見るにも、秋の月影見まほしく思ひて過行程に大仏にいたる。夫より二月堂、興福寺にいたる。此興福寺はいにしへ大伽藍の地なれども、焼し後其おもかげもなきよし聞て、かゝる寺のかわりはてしは、飛鳥川の洲瀬にはかぎりざりけりと覺ゆ。夫より猿沢の池にいたる。③わきもこるぬくたれかみを猿沢のとよみし哥を思ひ出られて、あたりの茶店にしはらくやすらはは、其辺にむかしの八重桜なりとて垣ゆひまわしたる一木の桜有。

八重桜にほひも嘸といにしへの都の春そこひしき

此ほとりに様々名所旧跡ありと聞しかと、未遠き旅なれば尋ゆかて法花寺、西大寺、招提寺、薬師寺などにもふて、過行程に、菅原といふ村有。其所に天神の社有。此所はかの菅原の伏見の里になん侍ると聞て

すがはらや伏見の里にかりねしてしはし結はん古郷の夢

日も西にかたふきたれば、郡山といふ所に泊る。

七日 郡山のさきに小いづみといふ所有、其所に庚申の開帳ありと聞てもふて、夫より法隆寺、龍田の宮にいたる。此龍田宮はいにしへの龍田ノ宮にあらず。是より壺里計山にむかしの宮の跡わつかにましますよし聞侍れと、程遠ければはるかに拝みて片岡山の達磨寺にいたる。かの飢人の

④いかるかや富の小川のたえはこそと返歌せし所とふし拝み、夫より中将姫蓮の糸染給ひし所とて染寺という寺有。染井水、糸掛桜などを見て当磨寺にいたる。僧に案内を頼て、所々ふるき跡を拝みめぐり、夫より程ちかきこせとなんいふ所に泊る。

八日 こせを立て壺坂、南法花寺にもふて待るに、此比打つゝき空晴たれば、日影あつく覺て、山のぼれはしげる木陰に蟬の声ひゞくにも、古郷はいかならんと思ひて急ぐ程に、頓て本堂にいたりぬ。此寺にて法の声とふとく聞えて、かゝる天気よろしき折しももふて待るは、いかなる契りにやとどふとく拝みて

をのつから涙こぼるゝ夏衣心すゝしき法の御声に

夫より橋寺にいたる。こゝはいにしへ九重の地成よし、右近橋左近の桜有。其外さま々旧跡を見るにもいとゝむかしこひしく思ひ侍る。夫より土佐となんいふ所にやすらひ、程ちかき龍蓋寺にもふて、夫より多武峯にのぼる。此山の麓に石つみかさねし塚有。里の者にとへは、推古天皇の陵成

よしいふ。此辺に崇峻天皇の陵有よし聞侍るか是にてや有らん、おぼつかなし。やうく多武峯にのほりて見れば、いづれもさいしきにして、其うるわしき事筆にもつくしかたし。かなたこなた拜み廻りて寺内を出れば、はや日も西にかたふきぬ。夫より七八町過て冬野といへる所に泊る。此所山の高根なれば夜半のあらしはげしくて夢もむすはさりき。

⑤九日 冬野より山をくだるに朝日影さしのぼりて、高取の城にうつろふけしき面白く、又谷を見れば山吹きかりにて、此けしきいわんかたなし。夫より吉野にいたる。吉野山をのほりて見れども花は散はて、青葉のみ也。此花を見まほしく思ひしに、其比にもあわさりけるか(こ)そ、いと本意なき事に思ひて、かの新古今集に ⑥ちる花のわすれかたみの峯の雲そをたに残せ春の山風といふ哥思ひ出られて

麓まで青葉に成りぬよしの山花の形見の雲も残らて

夫より蔵王権現にもふて、吉水院にもふて侍るに、折ふし大峯へ参詣の人多ければ、人々大峯へものぼらんといふにつけて、いまた未ノ刻ながら吉野のしるべの方に泊り、此宿のあるし伴て竹林院にもふてさまく宝物を拜み侍る。、此宿のうしろの方に如意輪寺といふわづかの庵あるよしあるじに聞にも、むかし後醍醐天皇と聞ゆるみかど世のみだれに此如意輪寺にてむなしく成給ひよし聞侍るか、陵も此辺に有らんと思ひて袖ぬるはかりなりき。此宿の辺の谷を見渡して

かの ⑦よし野の里にふれる白雪といふ哥思ひ出られて、此山々の雪の詠いかならんといとうらやましくそ覚ゆ。

十日 横雲棚引比より吉野の宿を出て、先鷲尾大明神にもふて侍るに、其辺に古き鐘あり。そこを過て金精大明神といふ社有。此社を拜みて蹴抜の塔にいたり、夫より安禪寺の奥ノ院にいたる。此所よりちかき山の麓に苔清水とて西行の旧跡有よし聞侍れと、大峯の未遠ければ尋もせて山にさしかれば、聞しよりさがしき事限なし。花はあれとこ、かしの谷の桜今さかりなれば、前大僧正行尊の ⑧諸ともに哀と思へ山桜とよまれしは、かゝる所にやと打詠ゆけは、猶く道けわしく雲ふかし、所々にやすらひ、やうく雲をしのぎて本堂にいたれば、岩の上に聊なれとまた雲残るを見るに、いと深き山と覚ゆ。本堂のほとりの寺にやすらひ、夫より山をくたれば日も西にかたふきぬ。此大峯に坐窟、三重瀧などいふ所あれと、其所いつくといふ事を知らず。たくれの比洞川ドロといふ所に下りてこゝに泊る。

十一日 洞川に龍泉寺といふ寺有。此寺にもふて、吉野の宿りにいたりてはらくやすらひ、夫より一ノ蔵王堂ノ前を過て吉野山をくたり、六田ムツといふ里にいたる。此所に川有、六田の淀といへるは此所にや。川を越て過行は岩多き川有。面白きけしきなればはらくやすらひ、流を手をむすひて過行は、鵜野となんいふ里有。はや日もくれたればこゝになん泊り侍る、

十二日 鵜野を立て行はいみしき家居有。里の名をとへは五條となんいふよし、そこを過て三軒茶屋といへる所にてはらくやすらひ、未ノ刻とおぼしき時高野山のふもと紙谷にいたる。高野山を

見れば、夏木立の折ふしにけふは時々雨そゞぎたれば、木々の葉のみどり猶ふかし。今やほとゞぎすの初音を聞つらんと思へど、一声もなければ急て高野山にさしかゝる。はじめにのぼる坂を不動坂といふよし、則不動堂あり。此坂をこゆれば雨も少しやみてのぼりやすければ、程なく峯にいたりぬ。五明院といへる寺に立よる事あれば、此寺に泊り侍るに、入相の鐘こゝかしこにきこへければ、

ゆふくれは哀もそひて高野山嶺のあらしに鐘ひゞく也

十三日 夜あけ侍れば弘法大師の御廟所にもふて侍るに、道の程聞しよりも遠し、様々靈仏を拝みて宿りし寺にいとまをこひ、夫より花坂に下りて旧跡を見、夫より天野といふ所にくだりて天野宮に参り、夫より又山にのほれば吉野川のなかれ見えて、此ながめよろし。山をくたりて過行はいみじき寺有。里の人にとへは龍利寺といへる寺成よし、こゝを過て慈尊院といへる寺にいたる。こゝは弘法大師の母公の御影ましますよし、堂のうしろにはゞきみの御廟あり。又堂のむかひに七社大明神といへる社もまします。いづれも拝みて其ほとりの家に宿り侍る。

十四日 是より和歌の浦へ程近しときけは、此慈尊院より河船に打乗和歌山さしてゆけは、此比の山路にかわりて川のけしき面白く、心もはれて打ながめゆけは左の市に面白き山有。此船のうちに和歌山の人も乗侍れば尋しに船岡山といふよし、此所左右に山ありて中を船よく過行侍るに、下り船なれば水にしたがひて其行事はやし。此船のうちに輕舟已二過ク万重ノ山と詩をなん吟する人有。まことにかゝる所をやいふ成へし。又左のかたにいと面白き家居有。人に尋侍れば紀伊の国主につかふる人の別業成といふ、内ぞゆかしく思ひて過行は岩出といへる所に船をこぎよせて、こゝにしはらくやすらひ給へと船人いふ。此岩出といへる所にて皆々食事なとして又船に打乗ゆけは、未ノ刻とおぼしき時和歌山につきぬ。いみじき家居ならびたればはや都につきたる心地して、こゝを打過頓て和歌の浦にいたりぬれど、早日もくれたれば、玉津嶋には翌日こそもふてんとて和歌の浦の町に宿る。

十五日 朝和歌の浦権現にもふて、其辺を見るに、芦の村立に驚なと立たるにも、あしへをさしてたつ啼わたるとよみしは此あたりの事を言つらんと覚ゆ。夫より西のかたを見れば海の面はれて沖の嶋山帆をあけし船なともみえたり。予敷嶋の道にあそひぬれど此和歌ノ浦には今はしめてぞもふて侍る。

言の葉に聞し木陰を尋来て今立なる、和歌の浦雲

夫より玉津嶋にもふて侍るに、瑞垣なと神さひたるけしき也。予とし比此玉津嶋にもふてん事を望侍るに、ことしはしめて思ワすもこゝにいたりぬるをとふとく覚て、露はかりの手向をなんし侍る

国の風たえせぬ御世はいくとせも立帰り見んワかのうら浪

こゝを過ていもせの明神にいたる。此道のほとりの山、又海の面のけしきたくひなし。

此所より紀見井寺への渡し船あり。打乗て紀三井寺にもふて、和歌の浦を見おろせ、浜辺に塩屋のけふり見えて、難波わたりの春のけしきならねと、心あらん人に見せばやと思ひ侍りき。夫より山口といふ所にしはらくやすらひて信達といふ所に宿り侍るに、折しも十五夜の月すみのぼりたれば皆く庭ちかく出てねもやらず、あたりさやかなる月なればかくなん。

うき旅の心もはれて草枕むすふもおしき夜はの月影

十六日 信達を出てかいづかといふ所へ行道に木ふかき宮あり。蟻通ノ明神成よし聞てもふて侍るに、むかし貫之此所に而 あま雲の立かさなれる夜半なれはとよみしには引かへて空もくもりぬ。朝日影にあけの玉垣いとふとく覚ゆ。

神垣の恵すくなるみしめなわななき旅路のうきを祈らん

かいづかにてやすらひ、急きゆけは程なく境の町にいたる。妙国寺といふ寺によのつねにかわりたる蘇鉄ありと聞て是を見、又其辺の家に⑨面白き松あるよし聞て立寄、夫より住吉にもふて侍るに、木立神さひて岸の松風浪の音いつれも殊勝なりき。此神も敷嶋の道を守給ふときけはとふとく思ひて

住吉のきしの姫松とことハに守つきせぬ敷嶋の道

日もくれ侍れば急き行に、頓て大坂につきぬ。しはらくとゞまりてこゝかしこを見んと、其夜しるべの家を尋て大坂になんとゞまり侍る。

十七日 先故郷への文なとしたゝめて後、天王寺にもふて侍るに、五重塔すくれていみしく見えたり。あたりなる亀井の水にて

幾よろつ汲とも尽し名にしあふ亀井の水のはてしなけれは

こゝを過て一心寺よりこゝかしこの開帳にもふてゝ、さま／＼の宝物を拝て生玉明神にいたれば、はや日もかたふきたれば宿に帰る。

十八日 きのふにかわりて空かきくもり雨しきりに降けるゆへ、いづくをも見すしていたつらに日をくらし侍る。

十九日 猶く空晴やらされは、けふもいたつらに日をくらし侍る。

廿日 十九日に同じ。

廿一日 けふしもまた空晴やらされとも、いつまていたつらに日を送るへきやはとて、御城の辺より天満宮、南本願寺などいへる所少し見廻りて宿に帰り侍る

廿二日 いまた空晴やらされとも、いつか晴るとも知れかたければ、大坂の宿りを立出なから、伏見の川船も此比の大水にて出されは陸を行侍るに、道のあしき事甚し。

やうく日のくれかたに橋本といへる所につきて宿る。されとも雨晴やらす。是より外に旅のうきはあらしと思ふにも、故郷のかた恋しくなりぬ。

けふもまた雨にしほれし旅衣かたしく夜半をいかにあかさん

廿三日 橋本を出て男山八幡宮にもふて、夫より山をくたり、伏見の 稻荷社にいたりて稻荷の瀧も見まほしけれと、其所を知らされはむなしく過て東福寺にいたり、夫より大仏三十三間堂などにもふて、日もかたふきたれば、しるべの家を尋てしはらく都にとまりぬ。

廿四日 因幡堂より誓願寺にいたりて夫より清水寺にもふて待るに、南都興福寺の開帳此所にてあれはわきて賑ふ事甚し。是より東山の方残りなく拝み待るに、いつれも心の残らぬ所はなし。南禅寺、真如堂、黒谷などはわきて殊勝に覚ゆ。

廿五日 仏光寺より東西の本願寺にいたり、夫より東寺にもふて、北野のかたにいたり待るに、けふは天満宮の御縁日とて参詣の人甚し。天満宮にもふて待るにいとふとく思ひて

かしこしな北野の道の末遠く神の恵のかきりなければ

夫より平野社にいたる。神さひたる木立にて、瑞垣などの朽たるを見るにも、むかしはいみしき社になん待るとききは、かゝる社の末を思ひて、伏見の里ならねとあれましくおしく覚ゆ。こゝを過て金閣寺にいたり、夫より等持院のあたりを見廻りて、日もかたふきぬれば宿りに帰る。

廿六日 雨しけく降けれども、嵯峨の方ゆかしければ、梅宮より松尾社にもふて、過行に川あり。いかなる川そと尋侍れば大井川と答ふ。経信の哥に ちりかゝる紅葉なかれぬ大井河いつれ井せきの水のしからみとあれは、秋のけしきゆかしく思ひて過ゆけは、野々宮にいたる。さびたる黒木の鳥居、こしば垣、むかしのしるしはかりなるは、いとあはれにむかしこひしく成ぬ。こゝを過て天龍寺より清涼寺にいたりて、其ほとりにてしはらくやすらひ、二尊院にいたる。此うしろの山は小倉山なるよし、定家の山荘の跡ありと聞て立寄見れば、露しげき夏木立の中にむかしの山荘のしるしはかりなる庵あり。此所より見れば都の外迄見おろし、又あらし山も程ちかくしてそのけしきよろしければ、むかしの家居いかならんとなつかしく思ひて

小倉山むかしをしのふ我袖のなみに木々の露もまさらし

此ほとりに妓王寺といへる尼寺あり。是はむかし妓王、妓女、仏御前と聞えきし人々の、世をのがれてこゝに住給ふ所成よし。さびたるけしきいとあはれに覚ゆ。こゝを過て愛宕山にのほる道の程けわしく思ひ侍れと、やう／＼のぼりて日のくれかた清瀧といふ所にくだりぬ。此清瀧といへる所に宿り待るに、うしろに清瀧川ながれて岸の山たかし。しげる木々の葉のみどり水にうつろひてきよく、岩にせかるゝ水の音たぐひなく思はれて

手にむすぶ影も濁らて名にしあふ清瀧川の瀬々の白波

殊に此宿りのあるじの女情ある人にて、誰々も此宿りを立出んかたもなきこゝちぞせし。

廿七日 清瀧の宿りを立出て廣沢の池にいたる。廣沢の池の鴛とりとは聞しかと、似たる鳥も見えず。池のほとりにしはらくやすらひ、仁和寺より妙心寺、大徳寺にいたり、こゝを過て加茂ノ社にもふて待るに、五月ちかき比なれともかみ山のほとゝきす一声もなし。此社も神さひたるけしきいと殊勝なりき。是よりしゝか谷、法然院にもふてんといふ人あれば、又東山の方におもむき法然院にいたるに、しつかにひゝく鉦のをとのみして人音まれなれば、をのつから心すみて、世をのがれ住へきはかゝる所にこそと思ひ侍る。

廿八日 故郷へ送る物あればいとまなふして、六角堂へもふでしはかりにて日はくれ。

廿九日 宇治の方も見まほしけれと、故郷の方に急ぐ事あれば、都の宿りを立出て先香堂の辺より貴布称の明神にもふて待るに、物さびたる瑞垣などとふとくそ見えし。

きふね川幾世にこらて行水のふかき恵を聞も頼もし

山を越て鞍馬山にいたる。先僧正谷にいたりて見るに社有。いかなる神そとへは、大天狗ノ宮と答ふ。此所に牛若丸のかくれ石、学問石、月侍石といふ石有。奥之院不動堂にいたりてしはらくやすらひ、夫より本堂にいたる道に、牛若丸せくらべ石といふ石あり。扱本堂にいたればはや日もかたふきぬ。是より比叡山へ程遠しときけは、宝物など拝みて鞍馬山の麓の町に宿り侍るに、此宿の前に高き山見えたり。翌日なん此山をこゆると聞て、かの家隆の 明はまたこゆへき山の峯なれや空行月の末のしら雲とよまれし言の葉は、かゝる所の事にてやあるらんとぞ覚ゆ。

月日のめくる事夢のことくにして、早五月朔日に成ぬ。けふも空晴たれば比叡山にのほらんと、朝またきに宿りを立出て行に、高き山ならびたり。此山道けわしく暗ふして、谷水道に流れたれば、のぼりかたくくだりかたし。やうゝ越はてゝやせの村にしはらくやすらひ、夫より比叡山にのぼる。やうゝにのぼりて寺あり。黒谷青龍寺といふ、いと殊勝に見えたれば、こゝにもふてゝ過行に、伝教大師の廟あり。こゝを過て根本中堂の方をさしてのほるに、折ふし村雨降来り。又もや空のけしきかわるらんと思ふ比ほとゝきす啼わたりぬ。さつきなれとも旅立しより今をはしめなれば

待わひし山ほとゝきす一声にぬれてかひある村雨のそら

大講堂より根本中堂にいたりて山をすこしくたれば、鳩の海ちかく見えて、辛崎の辺より船こぎ出すけしき面白し。此坂をくたりて山王権現にもふて、辛崎の松も見まほしければ、立寄て木陰にしはらくやすらふに、酒などを売者あれば求て各ゝゑひを

すゝめ侍る。

さゝ波の汀の風もなつの日に木陰すゝしき志賀の浦雲

かくなん口すさみてやすらふ程に、三井寺への便船ありと聞て打乗大津にいたるに、折ふし三井寺の観音開帳なれば、もふて膳所にしはらくやすらひ、瀬田の宿に泊る。

二日 瀬田の宿を出て草津に而しはらくやすらひ、土山の宿に泊る。

三日 土山の宿を立て鈴鹿川を越て鈴鹿の関にさしかゝれば、此比雨すさましく降しと覺て谷の水音高し。峯にのほれはやうく雲はれて

五月雨の降し鈴鹿の峯はれて木ふかく見ゆる伊勢の神垣

越はてゝ関の宿にいたれば、雨しきりに降来りて旅衣ほす隙もなし。此関の宿にむかし蝦夷人桜を枝にし来て、此所にさし侍りければ根つきぬ。是をゑぞさくらといふよし、関ノ地藏堂のうしろ西の方にありと或書に見えたれば、尋侍るに桜の木はあれともむかしの桜は枯たるにや、古き桜の木は見えざりき。こゝを過て関川をわたれば、はや故郷に帰りたるこゝちして急ぐ程に、津の町につきぬ。日もくれかゝる比なればこゝになん宿り侍る。

四日 空はまだ曇たれとも津の宿りを立出ぬ。三日の夜雨しきりに降りしかは、雲津川の水多くして渡し船もなしと聞しかと、河の辺までいたるに渡し船ありときゝて其嬉しさかぎりなし。此河をやうく渡りて松坂の辺にてしばらくやすらひ、夕ぐれの比宮川につきぬ。水多く見えたれともさはりなく渡りたるそうれしき。此旅路に誰々もさはりなく帰り侍るは偏に内外の神の恵ととふとく思ひて

榊葉のみとりかはらぬ世々かけて恵もふかき伊勢の神垣

文政七年仲夏

足代権太夫弘訓

注記

① 表紙裏に貼紙

十千 十二枝 同異名付 以下略

甲 闊アツ逢ハウ 乙 □ セン蒙モウ 丙 柔ジウ兆テウ 丁 強キ □ アウイ 戊 著チヨ雍ヤウ 巳 屠ド維イ

庚 上ジャウ敦トン 辛 重ヂウ光カウ 壬 玄ケン □ ヨリ 癸 昭セウ陽ドウ 子 困敦コントン夜半九ツ事

丑 赤 □ 若セキフンシヤク 寅 撰提格セツテイカク平且七ツ 卯 単関日出六ツ 辰 執徐シツチヨ

巳 大荒落クワウラク 禺 中四ツ 午 敦 □ ソンヤウ 未 協映ケンソウ日映八ツ 申 □ □ クンダン

□ 時七ツ 酉 作 □ サクカイ日入六ツ 戌 エンボウ 黄昏五ツ 亥 天 □ 献 エンケン 人定四ツ

○ 高遠白衣に成て病氣は何とかわたらせ給ふと念比に尋られし時そしりたる人々道をはかくこそとふへき儀なれと又かんじあへりと云々

- ② このたびは幣もとりあへず手向山もみじの錦神のまにまに／菅原道真「古今和歌集 羈旅」 小倉百人一首
- ③ わきもこかぬくたれかみを猿沢の池の玉藻とみるぞかなしき／柿本人麻呂「拾遺和歌集 哀傷」 『大和物語』に關係の話あり。
- ④ いかるかや富の小川のたえばこそわが大君の御名をわすれめ／拾遺和歌集 哀傷「日本靈異記 上」「和漢朗詠集 卷下 雜 親王」 上宮聖徳法王帝説 片岡岡説話
- ⑤ 付箋あり

反古の内二

千本桜弥助すし珍ら敷御送り請ふて千本桜すしの風味はよしの山名にそ昔しの花そ残らん名も高き風味よし野々弥助鮎花のお里か残る名物

- ⑥ ちる花のわすれがたみの峯の雲そをだに残せ春の山風／藤原雅経「新古今和歌集 春」
- ⑦ あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪 坂上是則「古今和歌集 冬」 小倉百人一首

⑧ もろともに哀れと思へ山桜花より外に知る人もなし／前大僧正行尊「金葉集 雜上」 小倉百人一首

⑨ 住吉名物 難波やの松（傘松）をさすか

⑩ 若の浦に潮満ち来れば瀉をなみ岸部をさして鶴鳴き渡る／山部赤人「万葉集 卷六」

⑪ 雨雲の立ち重なる夜半なればありとほしとも思ふべきかは 紀貫之

⑫ ちりかかる紅葉なかれぬ大井河いつれ井せきの水のしからみ／大納言経信「新古今和歌集 冬」

⑬ 廣沢の池の鴛とり

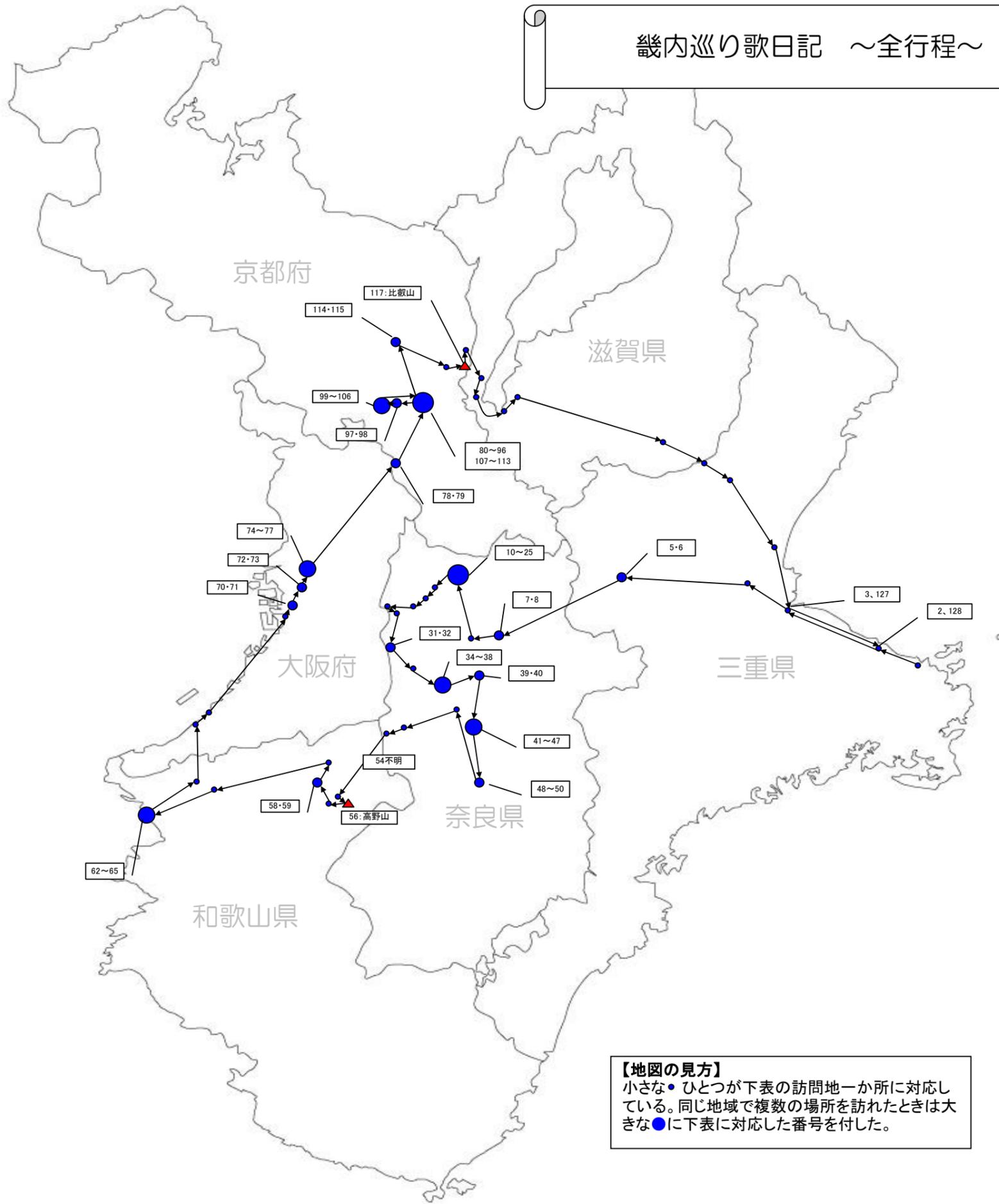
⑭ 明ばまたこゆべき山の峯なれや空行月の末のしら雲／藤原家隆「新古今和歌集 羈旅」

おわりに

大阪府立図書館では中之島図書館が古典籍を所蔵している事もあり、長年にわたり様々なかたちで休み時間等を利用して職員有志間で近世の資料に親しみ、所蔵資料への理解を深めるために勉強会を実施している。今回は勉強会の成果を公表することで、勉強の励みになると共に、広く図書館の所蔵資料を紹介する機会になればと思いい有志で翻刻に臨んだ。

今後とも様々な機会を捕えて府立図書館の資料が紹介されることを期待したい。

畿内巡り歌日記 ～全行程～



【地図の見方】
 小さな●ひとつが下表の訪問地一か所に対応している。同じ地域で複数の場所を訪れたときは大きな●に下表に対応した番号を付した。

【表の見方】左から訪れた日にち、番号、訪問地をあらわす。文政七年(1824)出発。

4/2	1	山田原	4/6	21	猿沢池	4/9	41	吉野山	4/14	61	岩出	4/23	81	東福寺	4/26	101	清涼寺	5/1	121	瀬田	
	2	宮川		22	法花寺		42	蔵王権現		62	和歌の浦権現		82	大仏		102	二尊院		5/2	122	草津
	3	松坂		23	招提寺		43	吉水院		63	玉津島		83	三十三間堂		103	小倉山			123	土山
	4	田尻		24	薬師寺		44	竹林院		64	妹背明神		84	因幡堂		104	妓王寺		5/3	124	鈴鹿の関
4/3	5	阿呆山	25	菅原寺	45	鷲尾大明神	65	紀三井寺	85	誓願寺	105	清滝	125	関							
	6	阿呆	26	郡山	46	金精大明神	66	山口	86	清水寺	106	広沢の池	126	津							
4/4	7	初瀬山	4/7	27	小泉庚申	4/10	47	安禅寺	4/15	67	信達	4/24	87	南禅寺	4/27	107	仁和寺	5/4	127	松坂	
	8	初瀬		28	法隆寺		48	大峯		68	貝塚・蟻通明神		88	真如堂		108	妙心寺		128	宮川	
4/5	9	三輪明神		29	龍田宮		49	洞川		69	堺・妙国寺		89	黒谷		109	大徳寺				
	10	在原寺		30	達磨寺		50	龍泉寺		70	難波屋の笠松		90	仏光寺		110	加茂社				
	11	帯解寺	31	染寺	51	六田	71	住吉	91	本願寺	111	法然院									
4/6	12	元興寺	32	当麻寺	52	鶴野	72	天王寺	92	東寺	112	六角堂	4/28	112	六角堂						
	13	春日宮	33	御所	53	五條	73	一心寺	93	北野天満宮	113	香堂		4/29	113	香堂					
	14	奈良	34	壺坂寺	54	三軒茶屋	74	生玉明神	94	平野社	114	貴船			114	貴船					
	15	春日宮	35	南法花寺	55	紙谷	75	大阪城	95	金閣寺	115	鞍馬山		115	鞍馬山						
4/6	16	若宮八幡宮	4/8	36	橘寺	4/12	56	五明院(高野山)	4/21	76	天満宮	4/25	96	等持院	5/1	116	八瀬村				
	17	三笠山		37	土佐		57	花坂		77	南本願寺		97	梅宮		117	比叡山				
	18	大仏		38	龍蓋寺		58	天野		78	橋本		98	松尾社		118	黒谷青龍寺				
	19	二月堂		39	他武峯		59	天野宮		79	男山八幡宮		99	野々宮		119	山王権現・辛崎				
	20	興福寺		40	冬野		60	慈尊院		80	伏見稻荷		100	天竜寺		120	三井寺				

翻刻『浪華奇談』怪異之部

田野 登

1 解題

1 『浪華奇談』の別本

本稿の標題に「浪華奇談」を当てるのは、テキストとする大阪府立中之島図書館所蔵二冊本の外題が「浪華奇談」だからである。この書物の別本の標題には、「浪速奇談」「浪花奇談」「難波奇談」が当てられているが、本稿においては、原則として「浪華奇談」に統一する。「浪華奇談」には、二冊本・四冊本・八冊本が現在、確認されている。いずれも写本であり、版本あるいは活字本として刊行されてはいない。テキストとした二冊本「浪華奇談」の他、四冊本は大阪府立中之島図書館に所蔵するもので、これの外題には「浪花奇談」と記されている。(以下、「四冊本」と表記する。)八冊本は大阪市立中央図書館に所蔵するもので、これの外題には「浪速奇談」と記されている。(以下、「四冊本」と表記する。)

これらの別本は、二冊本が六卷七三話、四冊本が一・二卷一三六話、八冊本が二・四卷二六一話からなり、本文および巻頭目録の異同があるものの、(3 解説)の項の付表(浪華奇談怪異之部目録)にもみられるように、これらの別本の記事内容は、ほぼ対応がみられる。以下、八冊本に所載する話の順番に従って各話に番号を振る。

2 別本の成立過程

これらの別本のうち、テキストとする二冊本と四冊本の関係は、二冊本に所載する話(六九話〜一三六話)は四冊本(一話〜一三六話)に全て含まれ、二冊本は四冊本の後半分に当たり、当初は、前半分も存在していたと考えられる(注1)。

二冊本と四冊本および八冊本の関係について考えるのに、これらの別本本文における異同のうち、殊に重要と考えるのは、本文の途中に「敬典再考」からはじまる記事が四冊本にだけ見られない点である。この点からは、四冊本が二冊本および八

冊本に対し、先行して記されたものであって、最初の写本であったと考えられる。さらに四冊本に所載する話は、一組の入れ替えを除いて八冊本にも含まれ(注2)、四冊本(一話く一三六話)は八冊本(一話く二六一話)の前半分に当たる。

これらの別本の成立過程を考える場合、手がかりになるのは、四冊本の三冊目である「浪花奇談上 一二三統編」の巻頭に序文としての「題難波奇談後」を「天保六年初夏 笠嶠」として載せ、「六卷名曰難波奇談」とある点である(注3)。この序文は八冊本の一冊目である『浪速奇談一 前編上』にも載せている。このことからすれば「浪華奇談」は、天保六(一八三五)年には正編六巻で成立していたと考えられる。このことは、八冊本第一冊目「永久年中石碑」に「年曆を考ゆるに当天保五年迄七百廿年の古碑也」と「当天保五年」が見えることと付合する(注4)。

ところが、八冊本の記述には、「京橋のぎほう珠の銘に日元和九年癸亥四月吉日天保十三年迄二百二十年に及ぶ」(注5)、「然るに今年天保十三年甚だ凶年なるに」(注6)など「天保十三年」が見え、さらに天保一三年の記事の後に「…三年の後に病死す」ともあり(注7)、弘化二(一八四五)年に及ぶまで書き続けられていたと考えられる。したがって「浪華奇談」は、天保六(一八三五)年には正編六巻が成立し、その後、続編六巻が書き足されて一二巻四冊本となり、本稿テキストとする二冊本は、そのうちの続編に位置する第七巻から第一二巻に「敬典再考」などが加筆されたものである。それに対し八冊本は、弘化二(一八四五)年頃までの一〇年間に増補し、四冊本の二倍の分量の話を所載するに至ったものである。この八冊本には異なる筆跡が認められるが、本文の記述内容からして「敬典」が直接関与していると考えられ、別人の意向がはたらいて書き継いだとはみなされない。書誌目録に記載される浪華奇談は、「八巻、写本」(注8)、「写本八冊」(注9)とあって、八冊本は未刊行の写本であるものの、通行本とみなされ、二冊本、四冊本は八冊本以前に書写されたもので、これら二点は通行本である八冊本に対する別本とするのが正しい位置づけである。

3 翻刻箇所 書誌的位置

これらの別本は、いずれも部立てとしての「旧跡之部」「人物之部」「怪異之部」が目録の前に付されていて、本稿において翻刻の対象とするのは、テキストとする二冊本『浪華奇談』所載の「怪異之部」である。話数にして一七話であり、八冊本『浪速奇談』所載の全ての話が二六一話からすれば、わずかな部分である。

以上が本稿において翻刻の対象とした箇所に関する浪華奇談における書誌的位
置であるが、「浪華奇談」の書誌的価値を如実に示す部分であると考える。これに
ついては、〈3 解説〉の項に詳しく論じる。

解題注

(注1)二冊本目録の前丁に「未新改ながら式百拾五ばん改四冊全部四冊」の書込
がある。

(注2)『浪花奇談』(四冊本)第一冊にある「東成の堺」と『浪速奇談』(八冊本)第
一冊にある「居酒屋を売る酒肆」が差し替えられている。

(注3)『浪花奇談』(四冊本)三冊目『浪花奇談上 一二三続編』の巻頭に序文の
「題難波奇談後」に「小倉敬典君者以博覧宏才陸 沈于士間嘗輯此地事蹟以六卷
名曰難波奇談：」と記し、当初六巻であったと伺われる。

(注4)『浪華奇談』(二冊本)第二冊の「下福寫の碑」には「当天保六年まで三百四
歳を歴し古物也」(5ウ)とある。

(注5)『浪速奇談』七の二オ。

(注6) (注5)八の8オ。

(注7) (注5)八の9ウ。

(注8)二〇〇二年『大阪市史史料第五十九輯』(大阪市史編纂所)七三頁。同書の
原名は「大阪市史引用書解題」で幸田成友が明治三四(一九〇一)年から四二(一
九〇九)年頃まで筆写作業を行ったとされるが、未刊行に終わっている。…同書一
二〇一―一五頁

(注9)高木利太 一九三〇年『家蔵日本地誌目録』続編 一二九頁

2 翻刻

続五(以下「オオ」)

怪談槩論

世人論語に子不語怪力乱神と見へたる拠として怪談するを大ひに捐斥す。是一
辺に抱滞して事物に通ぜざる見識也。論語の言は孔夫子門人に對してハ詩書を講

じ、礼をのべ、扱は六芸の話に及び玉ふが常なるゆへ、我輩らの見聞の見聞せざるをもつて推量を用ひて子不語怪力乱神といひたる迄にて、実に聖人自ら我語怪力乱神とハのたまわず、子の云玉わざる所なり。あるひハ怪異なりとて廢せバ易经なども第一に廢すべきや。夫にてハ聖人の心にそむくにもいたらん（以下「ウ」）か。詩書礼樂のミ訓導し玉ふハさしあたつて、今日の世務に資益多きを以ての義なり。此所をよく貼翫味すべき也。されハ孔子に怪を問し條々すくなからず。土の怪ハ・羊防風氏の骨一疋鳥の鼓舞、江中の萍実、木石の怪ハ・魍魎水の怪ハ龍罔象肅慎の石碻などいワ迪いづれも怪にあらざといふ事なし。然れどもいつにてもたまわず。早速問に答へ玉ふ。聖人ハ博くハ此外にも御心中に記せられし奇怪の品々もあるべし。まして書経詩経易経左氏伝など怪など怪にかゝるの語なしといふべからず。よつて怪をかたるも窮理の其一ツと思ふ也。されハ野狐の人物（以下「オ」）に變じたるハ手腕を握つて知り、老狸の人に化したるハ衣装の文彩をもつて是を知る。龍の人に迫る時ハ頭髮をたきて去らしめ、或ひハ食物の空をとぶハ蝦蟇の所存也と。斯のごとき理を究めハ時に臨んで惑す怖れず。よつて奇怪の談を記憶するも実ハ心得とも成べき事どもなり。是予が一家の怪談の総論なり。右件の狐狸龍墓の弁ハ後の條下につまびらかなり。

医生野狐を呵る

曾根崎村に予が相識の医生卜居せられしが、文化年間予かの人の許へいたりしに夜陰におよんで外より（以下「ウ」）柴の扉をたゞく者あり。内よりいづかたよりぞと問ハ、大仁村庄屋方より来れり。内室急病に候あいだ御見舞下されよといふ。亭主さつそく戸をひらくと見へしが、卒然とがめ使を叱して、にくき野狐のしわざかな。今宵ハゆるすとも再度来らハやわか無事に帰しハせまじと立蹴にけたおし、戸を閉て座に即れけるにぞ。予一円合点行す、今の在様は何事にやと尋れハ、あるじ曰只今来りたるハ人にはあらで狐の我をあざむく也。凡村邑の医者ハ是を覺悟せざれハ、しば貼彼に魅惑せらるゝ也。されバ夜に入て人の入来する時ハはやく其者の手腕を握りて見るに、掌中にたとへバ（以下「オ」）竹の筒を握るが如く丸く覺ゆれハこれまさしく狐狸の變化にてあれバ大ひに精力をばげまして今のごとくふるまふ也。さすれば再び来らざる也と申されし。

小坊主

予が第三の男子膝行松の辺りに於て夜中小児一人たたずむを見る。傍近くすゝみて見れハ知れる者の子也。此方より詞をかくれどもかの童へ返答もなさでた迪笑ふてばかり居る。然るに其衣服の嶋筋鮮明にあたかも白昼のごとく見ゆるにぞ。是父が平生告る所の狸の怪なるべしと七首を抜うちに斬つけけるに、(以下16ウ)少し hands たへもせしかども忽ち狸の本相を顕して堵墻に搔のぼり逃亡しけるとなり。予謂らく白虹鞘を拔事今少しおそくバ大白眼を見るべし。

龍巻

去し文化十一年八月、予難波を西の方へ出船す。ふと北の方を見るに黒雲一群予が乗れる船方へ降り来るを見る。船頭あわた迪しく下知して、すハ龍巻なり。用意の物を火中せよと罵る程してあれ、水主共一物を取出し火中に投げけるが、其悪臭はなはだしく然るに、かの雲気今や船に迫ると見へしに忽ち翻転として東方へ奔走して初めて(以下17ウ)安穩になりき。乗合の旅人船頭に様子を尋ねけるに、船頭いふやう只今の黒雲ハ龍巻となづけて龍の海上を往来をせるにて、もし此船のあたりへ近づくとときはいかなる大船にても空中に釣揚る事まゝあり。それゆへ人の毛髪を薫ふれバ龍ハ神物にてこの臭気をいミて避去もの也とかたりし。

蝦蟇

玉造り伊勢町武家の縁側に盆中に乾菓子を盛置けるが、風もなきに自然と前裁の方へ飛びけり。家内の人を見えてあやしミひそかに菓子を行末を見るに、庭上に大ひなる蝦蟇ありて居ながら口を(以下18ウ)ひらき是を喰ふにてぞありける。これハ煉気の術にて蟄ばかりにもあらず、蟒蛇など居ながら獣を挽寄のむも同じ。あるひハ鴨居の上を行鼠を下纏猫の白眼で落とし取るも似たる事也。

狐和歌を感す

大坂に近き同国平野の郷に道具屋藤八といふ翁あり。家業のいとまにハ折々和歌

を詠してたのしみとす。齋号を好古齋といふ。嘗て和州へよぎつて狐火を見て

きつね火ハ夜ばかりなりはかなしや／人のほのふは昼ももへけり

かく詠じつつ其後平野へ帰宅しけるに、ある日（以下「〇〇才」）尼老人入来りて好古に
対面し頃日の狐火の歌御染筆頼ミまいらすといふにぞ。藤八即座に書付てあたへけ
れハ、かたじけなしと厚く礼謝して戸外へ出て、又引返し犬のいたく吼付候間、追退
て玉わり候へといふ。さつそく犬を追て遣しけれハ足早に帰ると見へしが、忽ち姿ハ
見へずなりにけり。

唐橋屋九郎兵衛

正徳の頃、東堀に唐橋屋九郎兵衛といへる鉄屋あり、富家にして下人もあまた召仕
ひけり。其家白き犬を養ひけるが、九郎兵衛甚だ愛して犬の好める食を飼ける。
然るに此犬率爾に疾て死せり。九郎兵衛（以下「〇〇ウ」）大ひに残念におもひけるが、
いくほどもなく九郎兵衛も大病にくるしみしが、さま転医療をつくすといへども更
に其しるしなく朝の露と消失けるに、ふしぎ成ハ其死骸あたたかにして生たる人の
ごとくなれば葬もせず、家人昼夜守護して居たりけり。扱も九郎兵衛は夢現の
さかひもわかたず、た迪徐々と歩行
しが、見渡せば河原のごとき地に至り、草木もなく茫然としてみしが、はるか向ふ
に人声の聞ゆるにぞ其方へたどり行に、広き川にいたる所に人ごハ川向ひの方に聞
ゆ。よつて川をわたるに水もつとも浅くして安々と向ふの岸につく。其所に人数五
六人横さまに臥て（以下「〇〇才」）居たり。九郎兵衛彼ものに申ハ此所ハ帰路をおしへ下
されよと頼メば、かの者どもこたへて我々が在所へ来り休足せられよ。其後帰る道
を案内して進ずべしといふ。九郎兵衛うれしくとも斯もよろしく世話頼ミ入るとい
ふて同道し、五六丁行にあやしき草庵あまたあり。彼ものども此家の内に伴ひつ
ゝ食事あたゆべし。是にて暫く休息せられよといひすて、勝手の方へ入にける。その
跡を詠るに庭より犬一疋尾をふりて来る。九郎兵衛よく見れハわが寵愛せし前に
死したる犬也。いかに汝ハ死したるにあらずや、いまだ堅固にてあるかと申けれハ、
犬人のごとく言語をなして君ハ（以下「〇〇ウ」）しらずや、すでに死し玉ひぬる也。又此
所は人間界にはあらざるなり。九郎兵衛驚き我死したるや、又此所はいづくなる
や。犬答へて此家の勝手をのぞけハ、今迄人と見へたるハミな兎猿狐狸の類にて
眼をいからし牙をかみて物がたりする有さまはいとおそろし。九郎兵衛驚歎し、扱

ハ此所ハ畜生道なるか。早く立去んといふを犬九郎兵衛の袂をくわへてと迪め逃玉ふとも彼者どもやわか逃しハセじ。暫く待て食事をなし休息あれ。われらよき時分案内し帰らせ参らせん。去ながら膳に向ひ玉ふとも青き物を喰ひ玉ふべからず。是を食すれハ忽ち獸類と変す。九郎兵衛心得戦慄して着座し（以下20才）けれハ犬は出行ける。しばらく有て勝手より食膳を持来り九郎兵衛にすゝむ。九郎兵衛犬のおしへしごとく青き物ハ残して食し夫より休足する。かの畜るいどもは次の間に入て物がたりして居たり。此間に白犬来りて、今の中に走り玉へといふ。九郎兵衛足に任せて逃しけるに、猴牛馬の類大勢追懸来りて残念なり貼と追かけミな貼川岸に来るころ、九郎兵衛ハかの川を半渡りはしりけれハ、獸とも怒てぜひもなしといふて石を掴んで九郎兵衛に向つて手々に擲ち帰りけるが、此川をかの者ども渡り得ざるこそふしぎ也と思へバ、夢の覚たるごとくに蘇生せり。（以下20ウ）よつて人々に此ものがたりをなしけるが馬の打たる礫の跡を見れば、白き毛を生じたるこそあやしけれ。夫より九郎兵衛まつたくかやうの界にいたるもわが不徳ゆへと夫より神儒仏の三道を学び聖人と成けり。

愚老按ずるにいにしへより犬の主を援る例し和漢まゝ多し。必ず失ありとてむざと答をくわふべからず。人すら大科を犯すいわんや畜類おや。されバ本朝のむかし王代のころ、馬牛鶏犬のたぐひハ人家に益ある生類なれば其肉を喰ふべからず。又兎猴ハ人によく似たる獸なれば六畜の外たりといへとも、是を殺害（以下21才）すべからずと告諭せられし古法あり。西土などゝはちがひて君子国の風俗仰き尊むべきにあらずや。

天狗清兵衛

安永の頃、浪花に天狗の清兵衛といふ者あり。天狗に仕へし故しか名付たり。此も傘張を業として予が父天狗の説をこま転と問しに、清兵衛いふ初め誘引せられし時虚空を飛行して大ひなる高堂の薨の上に我を置り。此所ハいづくなるぞと問へバ京都の大仏のやね也と答ふ。次に住所へ伴ひて俗身を改易て我を飛行夜に神と成り、所々へ使者に仕わりし事也。夫故大坂の我家のやねへも時々来れり。我家を出て（以下21ウ）百日目にハ百ヶ日の仏事を家内にて勤行するを屋上纏くわしく見聞せり。さしたり扱三年歴ていとま遣ず間、家へ帰るべしと有りて、金比羅の木像を玉わり又眼病の灸穴を教受せり。其後明和卯年お影参り流行の節、天満橋北詰

にて以前の天狗主人に逢しに、いかに清兵衛伊勢參宮の望みハなきやといふ。いかにも参り度と答へ、然らハ是よりすぐさま連行べしとて往還ともミナ貼我を馬にのセあるひハ駕籠にのせて我に錢を渡し此錢を施すべしと云付るゆへ、おしげもなくほどこして最はや尽たりとおもふ時分にハ又々錢を持来りてさづくるゆへ（以下二二才）、鳥目の員数も覚へざるほど参宮人に喜捨したり。扱下向にハ元の天満橋まで送られしと語る。予が先考ついでにかの天狗の住所聞たしといふ。清兵衛いふやう此義ハかたりがたし。もし口外するものならば今にても我ハ引さかるべしと舌をふるわして恐怖せり。此清兵衛は正直一途のものにてありし也。

瑞夢

文化年中、予ある夜の夢に勝手にて酒をたべ居たるに、ふと表の方纏案内もなきで京屋吉右衛門といふ書林来れり。予即座に酒を酌み又魚肉をすむ時に吉右衛門いふ様、われら精進日にて御まゝ何成とも（以下二二ウ）野菜のるいを下さるべしといふ。即座右の器を見るに、こと転く魚肉にて野菜絶てなし。向ふの板間を見るに一箇の菜冽ありけるを手早くきざみて醬油をかけ是成ともといふて出すと思へば、夢ハ覚けり。然るに翌日いづみや孫兵衛と申書肆方纏今晩ハ新宅移徙にて書画交易会もよふし候間御出会と申により翌晩彼方へいたりしに、存の外佳麗の家にて二階座敷へ請侍して程なく宴を初む。その料理甚だ美をつくし珍肴を敷叙す。彼是するうち人々あまた来れり。予ひそかにおもへらく昨夜の夢に似たる形勢かなと見る所に、（以下二三才）ある人吉右衛門にさかなを進めしに、同人いふ我等は精進日にて候まゝ青物のるい玉わるべしといふ。予心にいよ貼前夜の夢にたがわずと脇目もせず守り居る。肴をはさめる人座側をさま転と尋ねもとむれども野菜のたぐひ一切見へず、詮方なくて楼上より下りて台所にてやう貼に煮菜の盛たる鉢を取来りて是成ともといふてあたへけるぞ。誠にふしぎの次第なり。正夢もある事と覚ゆ。

続六（以下二五才）

石仏言を發す

阿波座堀奈良屋町浜より少し南へ入込たる町家の軒下に壱尺あまりの座像の石仏

地藏尊を安置せり。文化五辰年五月十八日の夜ある軽忽なるもの風雨のまぎれに
来りて、此像を我宿へ持帰りて崇敬供養しけるに、其夜よりこの菩薩阿波座へ帰ふ
貼とよすがら声ありてやまず。これによつてこのもの怖恐てもとの小堂へ輪け
る。此石像今に此地にあり。

河内の国守口の隣村世木村百姓の家の軒下に石像の地藏ぼさつあり。然るに此
家は一向宗たるが故に此菩薩を（以下25ウ）嫌忌して氏神の境内へ移しけるに、是
も夜陰に及ぶと旧地へ帰ふ貼と聞へけるゆへ、再度もとの地へ持帰り。此石仏ハ甚
だ龜末に彫て眼耳鼻口なども見へず、阿波座の像ハ鑽割叮嚀なり。

猫のあやしミ

高麗橋三丁目に近江屋何某といへる家ありしが、いづかたよりともしらず黒き雄ね
この来りけるをそのまゝ畜ひけるが、何とやらあやしきことども多くさびしき所
にて八人のごとく立て歩行あるひハ人語をなしなどしけるにぞ、亭主も是をうとん
じて四五丁もへだてし（以下26オ）地へ追放しけるに、半日程の間に帰りけるにぞ。
此度ハこの猫を器に閉籠せんだんの木橋を北へわたり中の嶋より大江橋を北へ越て
難波小橋を東へ行、もはや此所に捨置なばよも帰りもすまじと放ちけるが、夫より
二日といふにまた貼かの猫家に帰りけるにぞ。人々大ひに仰天し其まゝ打擲して
追出しけるが、是よりうちへハ入らずといへども隣家をさらずしてありけるが、程な
く此家に外方纏あらたに児猫をもらひたりしに、かの古猫人なき隙をうか迪ひ家
内へ入来りて子猫を大に獵けるにぞ。人々またこそ妖猫の来りけるとて追出しける
が、夫よりいづ地へ行けんふたゝび見へず。むかしより（以下26ウ）猫の怪をなす事
めづらしからず。かゝる妖物を家にやしなわずともよかるべき也。

奇夢

予が先妣の話に、わがおさなき頃毎朝夢中に祠堂の前に座して小豆餅を喰ける常
の事也。夫ゆへ目さめて後も満腹にて朝飯ハ膳に向ふたる迄にて人並に喰得ざりし
なり。然るに傘を造る業なれハ糊に入用により毎度水取の餅を買もとめに行け
るが、或日近町になかりしゆへ、十歳の時嶋町よりおはらい筋農人橋北へ入西側ま
でもとめに行けるが、其家のうちに老女あるを見る。「此夢に餅たへける姿ハ四才ぐ

らひに在しと也」家内を見わたせば、かの（以下「オ」朝ごとにもちを喰ける家ハ此所也と思ふ。されどもされども幼少たるがゆへ、右の夢物がたりをして様子を諮問する事もせざりし也。成長のちハ其家もなく成けるゆへ、重ねてとはんたつきもなし。其後つく貼思ふやう、我ハかの餅屋の亡児の再生したるにて定めて右老女の愛子にてこそありつらめ。夫ゆへ毎朝もちを持仏堂へ備へたるなるべし。拾参歳のとし河州大ケ塚村に逗留の時餅喰る夢を見てより再び夢みる事なかりしハ老女物語として餅を手向る人もなかりしにやと折節ハもふされけり。

予が親族河州おにすみ村延命寺蓮諦比丘（以下「ウ」礦石集并に続集をあらわす。書中に亡者を祭る飲食の類こと転く其鬼神に徹するのよしくわしく述べられたり。これ神儒仏ともに異論なきものなり。

積蓮諦

右蓮諦比丘ハ將軍家宣公御帰依僧の覚彦比丘の弟子にして、宿命智通を得たり。予が母方祖母予が母を娠して十月満ても産せず、十一月に満ても出産せず。十二月の末に及びて蓮諦師に生産の期を問ふ。蓮諦曰来る五月六日の薄暮女子をうむべし。もつとも母子ともに恙なからん。此秘符を水（以下「オ」もて妊婦に与ゆべし。女子なれば必ず右の手に握りて安産すべしと教示せらる。果して期を失せず右の符を手にもつて生る。「実に延享二丑年五月六日夕暮なり」奇特の事どもなり。宿命通を具したる僧多くはなし。天竺にてハ釈尊西土にてハ安世高などその人なり。

附て曰予時々仏理を説く。儒を学ぶ人甚だ猜忌す。予が曰和朝の天子はいか迪し玉ふぞや。宗廟なれハ神道を尊み玉ひまた儒を尊み玉ひ勿論仏道を尊み玉ふ。且また將軍家もしかり。其余沢を蒙る我ともがらいかんど。是に狼戾せんと答ふ。難ずる者唯々として退く。和漢ともに儒を学ぶ人ハ仏法を（以下「ウ」仇敵のごとく見るといへども、今五人十人仏道を誹謗すとも仏法あに滅亡にいたらんや。入らざる圭怒に精力を費す事君子の所為にあらず、仏道も勸善懲惡の教導なり。世教に益あり。予常に人に謂ていわく我は天子將軍家に依從して神儒仏を尊敬すといふ。又儒をにくむ人あれハ予が曰く天子將軍ハいかがし玉ふぞや。天子ハ儒道を尊み玉ひ年の始の読書はじめにも孝経をよみ玉ふにあらずや。將軍家には林家に命じて十三経を講ぜしめ群臣に示し、専ら聖人の道を尊み玉

ふ。其下流に居るものいかなぞ是とあらそわれん（以下30オ）や。予ハた迪こうぎ公儀に依したがひ依したがひ見て儒を学ぶといふ。此時かの儒を忌嫌いみきらふもの唯々いとして退しりぞく。

縮地の術しゆくちのじゆつ

瓦町かわらまちに炭屋儀助すみやといふもの山小橋寺町おぼせ心眼寺しんがんじへ灸治きうじに行て帰路きろ酉とりの刻く、堺さかいすじ八幡はちまんすしに於て水道すいどうの泥つみを積つみたる上を飛越とびこへる拍子ひやうしに忽然こつぜんとして御城しよの南みなみの方法ほうげんざか眼坂がんざかの麓ふもと算用曲輪さんよくるわの大溝みぞの中へ飛とびこみたり。はつと驚おどろき東西とうざいをだにわきまへず夜発やはつの女たがすのイミ居けるに道筋みちすぢを問しかどもた迪何たひとなく恍惚こうこつとして歩行あゆみしが、東町奉行とうちやうばやう御屋敷ごやしきのまへとおぼしき所にて道行人みちゆき人に堺さかいすじを尋ねて帰るとおもへず。（以下29ウ）こはいかに又倏忽しゆくこつに大門前だいもんぜんにいたる門前に百度ひやくど詣よでなどありていと賑にぎわし。よく見てあれバ天満天神てんまんてんじんの門なり。再さい応おう驚おどろきたる時や、正氣しやうきに復ふくす。それより十丁目じゆうちやうの小山屋こやまといふ砂糖さとうをうる家知人しよなれハしばらく休やすミて後ハ無事に帰宅きたくせり。

是縮地しゆくちの術じゆつといふて狸たぬきの所為しよゐ也。此方の物を一里いちりも彼方かなたへうつすに自由じゆゆを得たり。或もあるの京三条室町きやうさんじやうむろを深更しんこうにおよんであゆみに、六七歳斗さいなる小児せうにのた迪たひ老らう人立ひとたたるを見て近く寄よつていづれの家の子こぞ、何ゆへ此所こゝにあるぞと詞ことばをかくるに、かの小児せうに一切いっけつものいふ事ことハなくてうつむきたる。面かほをあげ大おほの眼まなこを（以下30オ）くりつと見みひらきたるにぞ、此男こゝおもひがけのなけれバそのまゝ氣絶きせつして卒倒そつていしたり。しばしありて夜露よるうなどの面体めんたいをうるほしけるによりて正氣しやうきつきてあたりを見てあれ巴壬みぶの生野なみのにふし居けると也。これらも老狸らうたぬきの縮地しゆくちの術也。

遊魂ゆふこんあだをむくふ

中古土佐堀ちゆうことさぼりに名高き淀屋源右衛門よどやげんゑもんは公儀こうぎより御取立ごとりだてもあるべき御さた有しに、源右衛門げんゑもん願ねがひにて諸侯方しよあうかたの米穀べいこくを引受ひきう浜先はまのにて商あひいたし、御朱印頂戴ごしゆいんてうだいたし二代目故庵こあん三代目辰五郎たつごろうと相續さうぞくしけり。そも貼はり淀屋よどやが世盛よざかりの時代じだいわが居宅いたくの浜はまに橋はしをかけたなり。今に淀屋橋よどやばし（以下30ウ）とて其名残なごれり。宅たくのうしろの街路まちすぢを淀屋小路よどやこうじと称して今いまにあり。然るに此家代々こゝ法ほう花宗けしゆなれハ一族いっさく奴僕ぬぼくの者どもも伊勢いせ参宮さんぐうを禁きんじぬるを家風けふとせり。二代目故庵こあんの代よにあたつて大和当麻たはまより十歳斗じゆしやうりの幼童ようどうを年季勤ねんききんに召めし抱かかへし事こと有ありしが、此童こゝ或時あるとき行方ゆきかたしれずいづちへ身みを隠かくしけるにやといぶかり思おもふの所、十日程過すぎて立帰たてかへれり。何方いたに至いたると尋たづねけるに、されば

とよ此ごろ近隣のともがら伊勢参宮なすに我も頻に羨しく候へども奉公の身なれハ此事願ふたりとも御聞濟あるまじと告奉らでひそかに抜参宮なし今歸れり。罪をゆるし玉はれと詫けるに、主人きよて甚だ怒りにくきふるまひかな。我(以下「オ」)家代々参宮を赦さず、家禁となしたるは聞ざる事もあるまじ。掟にそむく罪人向後の見ごらしにと一間へ引立行さん転に打擲せしが、急所にやあたりけん一声叫んで息絶けるハふびんなるありさまなり。驚きさわぎ治療をほどこすといへども其験なし。家内こぞつて後難を恐れいか迪ハせんと評議区々にて一決せざりしが、老分の手代思慮あるものゆへにかやう貼にせバ事濟なん。外ハ病死と披露せよと家内の口をと迪め、当麻の彼が親を呼寄、唯事昨日の暮頃より腹痛しきりにして医療をつくすといへども相叶わず、今朝絶命せり。みな貼残念に思ふなり。足下にも一子の急亡さこそ愁傷ならめ、日頃私なく(以下「ウ」)つとめたりし者なれば主人も殊の外に惜み玉へり。なき跡の追善とせられよと金五拾両をあたへけるに、父は大に歎き悔みけるといへども流石に人の思わん所に恥ていふやう、命数定めあれまいかんとしてかのがれ侍らん。医業のかぎり治を施し玉わりたる事宿元にて及ばざる事也。其上過分の金子恵ミ下さる事札の申様もなしと謝して、一子の亡骸を故郷に引取ける。此謀計にて事なく内濟せしを悦びける。されども悪事千里をはしるの諺誰いふとなく、此一事件隠すとハすれども世上の人々是をひそ貼かたり合てぞにくみける。「敬典追加に日同事再応の道理あり。寛政年間此一丁南にて加嶋屋九蔵召仕の小童を害し御とがめにあひ撰蝶へうつりける。(以下「オ」)寛政中かあや町にて父を弑しける者ありしが、又もや文化年中同丁にて父を弑しける者あり。是仏法にいふ因縁といふもの也。然ハ仮初にあしきたねハまくまじき也」斯て年月を送る所に故庵病死して嫡子辰五郎家名を継でます貼はんじやうしけるに、其頃又畿内に強盗起り所々にへ押入金銀をうばひ取事多かりしが、或夜淀屋が宝蔵に盗賊あまた入しと見へ数万両の金子行方なく庫中空虚となれり。あやしきかな。蔵の鍵ハひそかなる所に厳重に隠しあるに、其鍵をもつて戸口をひらきあまたの金銀をはこび出せしと見へたり。此事を訴へ吟味を願ひけるににぞきびしく詮義あるといへども、其盗賊こそしれざりき。淀屋が分限三分一ハ此時に滅じける。かゝる損亡にあひなば其身を慎むべき(以下「ウ」)に、若輩の辰五郎放蕩にして日夜遊興にふけり。剩へ高貴のまなびをなし町人のあるまじき潜上をふるまひしが、分に過たる彼が驕奢の有さまなりとて家内欠所となり、其身ハ追放になり、数代たくわへし和漢の名物珍器此時に散乱して其家名断絶しけるハひ

とへに辰五郎が不行跡ゆへなり。かゝりし後ハよる方もなく八幡にゆかり有しまゝ其縁によりて辰五郎ハ此所にひそまり神官の養子となりて、其家をつぎ子孫やわたにありとかや。淀屋家亡びて後淀屋が金銀を奪ひ取し賊の党とらわれと成拷問のうへ白状に及びしかバ、いかなる手引にて淀屋が財ハ盗ミ（以下33オ）出したるやと有しに、彼賊いへるやう家ともがら数十人淀屋の宝庫に近付しが堅固にして忍び入るべきやうもなく手々に其用意をなす所、爰にふしぎなるはいづかたよりも知らず十歳斗の童来つて我徒に向ひて我ら手引せん。此方へ来れよと宝蔵の戸前にもなひ是を用ひて爰をひらけよと鍵をあたへしまゝ何の勞する事もなく内へ入てもふまゝ盗み出しぬ。跡にて童が行方しれず。今にふしんなり。奪ひ取し大金各割賦して日々に費しつくりたりと答へける。此賊が詞をもつて考ふるに、むざんに死せし幼童がうらみ散せずして幽魂仇を報じ終にハ其家を亡し（以下33ウ）ける事必せりとかたりつたへける。

小兒水に化す

今橋の西の方山中氏なる人の男子寛政年間三歳にして早世す。壺におさめ葬埋せしに、其後七年斗も経て改葬しける時蓋をひらき見れハ、た迪壺の中に清水と毛髪あるのみ外に毫釐も物なし。昔より七歳未満の児ハ骨肉ともに水に化するよしかたり伝へたるが空言にハあらざりし也。

因に云往年河州生駒山の麓に於て百性山の徂をほりしに、ちいさき瓶あらわれたりしに、是も瓶中に同く清水ありし。然るに折節其村に難（以下33オ）産の婦人あり、かの百性右産婦に此水を一盞服せしめけるに忽ちに出産したり。夫より安産の薬水也といひふらしける程に、所々より求めに応じてあたへたるに、いづれも功有しとぞ。愚が所見に必定、是も亡児の水に化せしなるべしと覚ゆる。

鬼僧

天明中讃州高松金松屋善兵衛所用ありて萬年町へ往て歸りに、谷町農人橋にて裾のなきさも憔悴て髪なのびたる僧破れ衣を着て向ふへ行たるがふり歸り見て善兵衛が背にいだきつき我を負ふてくれよといふ。その重き事いふべからず、善兵衛こわ叶わぬと南無大師遍照（以下33ウ）金剛と唱ゆれば、かのもの此奴ハは四国のものな

り、南無三宝といふて向ふへ飛下りて善兵衛の右の頬を三ツたゝきて行過ぬ。其あと大ひにいたみまたにわかさむけに悪寒立てやう貼大川丁の宿へやど帰りて五七日もわづらひ本復したり。

3 解説

1 編輯者

浪華奇談の編輯者については、へ1 解題へに示したいずれの写本にも「小倉敬典編輯」とあり、編輯者に異論はない。ただ「小倉敬典」については、全く知られていない。ちなみに一九九三年増補改訂の『国書人名辞典』の「小倉敬典」の項目を全文記すと「おぐらたかのり 郷土史家「生没」生没年未詳。江戸時代後期の人。「名号」名、敬典。「経歴」大阪の人。「著作」浪華奇談編へ天保六へ「参考」大阪人物誌正編である(注1)。「郷土史家」とあるが、それを稼業としていた訳ではない。八冊本の「秧鶏鳴」に「予の竹庵は玉造の地なれば：」とある(注2)。玉造に開業する医者なのである。ただし、当時流行った医師番付に載るほどの医師ではなかったことだけは確かである(注3)。

生年は安永三(一七七四)年である。八冊本六の「未来記」に次の記述がある。「予が十五歳の時関東纏来りし関とり*九紋龍清太夫ハ七尺六寸ありしが：」とあり、頭注に「九文龍は寛政元年来ル」ともある(注4)。寛政元(一七八九)年に一五歳であることから生年が割り出される。同様に八冊本七の「忠臣善太郎」に爐屋太右衛門召使善太郎が御褒美を戴いた「寛政七乙卯年」を「予が廿二歳のとき」と記している(注5)。この記事からも生年が安永三(一七七四)年であることがわかる。

小倉敬典の幼少期については、テキスト「奇夢」に手がかりとなる記事がある。母の実体験を記すところで、「傘を造る業なれば糊に入用により毎度水取の餅を買もとめに行けるが或日近町になかりしゆへ十歳の時嶋町よりおはらい筋農人橋北へ入西側までもとめに行けるが」(注6)とある。このことから母方の父の家業は唐笠屋で、嶋町にあったことがわかる。嶋町に唐笠屋がかつて一軒あったことは、確かである。元禄九(一六九六)年四月刊行の『難波丸』に「唐笠屋并桃燈 嶋や町 大黒や

八郎右衛門 ▲平野町 ▲御堂之前 ▲道頓堀 ▲長町（注7）とある。ところがこの「大黒や八郎右衛門」以降、買物手引書などの笠屋の項に「嶋町」が見えず、「傘を造る業」が確かめられていない。笠屋が集中する地区でもなかったのも、この業があっても記載されなかったと考える。

彼の父は、幼い彼に少なからず怪異への興味を抱かせたと考えられる。父からの伝聞としてテキスト「天狗清兵衛」を記している。父は同じく「傘張を業」とする清兵衛から「天狗の説をこまごまと問しに：」とあり、最後に父は「天狗の住所」を所望したりもして（注8）、日頃からそのような怪異譚を親子の会話にあっても話していたと想像される。彼の家庭では怪異を感じさせる事象が随所にみられた。テキスト「釈蓮諦」には、母の出産に際しての真言宗僧侶「釈蓮諦」による呪術の不思議を記している（注9）。

このような家庭環境に育った彼は、自ら八冊本「見聞実記」に「予若年より怪談の書を好みて広く読みけるなり」と記した上で、和漢の怪談書である、古今著聞集・宇治拾遺物語・今昔物語、神畧記・西京雜記・西陽雜俎などを読み耽ったことを記している（注10）。このような若年の体験が長じて医師となりながら、大阪における奇怪な伝聞を「浪華奇談」を書き残したものと考えられる。

3 テキスト概観

テキスト概観を論じるに当たって付表へ浪華奇談怪異之部目録を作成した。この表は、三点ある別本の「怪異之部」目録に掲げられた標題の全てを抽出し整理したものである。これによりテキストである二冊本「怪異之部」の記事の位置づけを図るとともに「浪華奇談」における怪異伝聞の全体を探る端緒を得たい。

怪異の対象とされたものを見るに、さまざまな動物、鬼・天狗などの異類から呪物にまで及ぶ。動物では、狐狸はもとより、犬・猫から鼠といった都市の暮らしにあつては身近に棲むものによる怪異を取り上げている。狐狸は市中およびその周辺農村に出没しては、さまざまな怪異を引き起こす妖怪変化として語られている。蝦蟇・蛭蛇などもまた怪異の対象とされている。その他の異類では、前述の天狗の他、河童・鬼女・鬼僧・疫神・幽霊などの怪異譚も記されている。呪物としては、テキスト「釈蓮諦」の祖母が母を出産する時に秘符が記述されているが（注11）、テキスト以外に、神矢・神札の怪異も記されていて、『願懸重宝記』を併せ読むと近世都市における呪物信仰を知る手がかりが得られる（注12）。

怪異の発生する場所については、家・屋敷・社地の他、橋・水道といった水際空間が挙げられる。テキスト「小坊主」は「狸の怪」として撃退されるのであるが、その出現場所は「膝行松の辺り」であり(注13)、御茶湯地蔵の南方の旗本屋敷の松があった所である(注14)。武家屋敷の間に奇怪なモノを幻視するのである。橋場は異界との接点である。テキスト「清兵衛天狗」において天狗との出逢いと別れの場所は「天満橋」であった(注15)。橋場・渡し場が都市における妖怪出現のスポットであることはまちがいない(注16)。八冊本の八の「河童」が出現したのは、十三の渡船場傍らの水上であった(注17)。テキスト「縮地の術」では、商人が「水道の泥を積たる上」を飛び越えようとした拍子に忽然として飛び込んだのは、お城の「曲輪の大溝の中」であった(注18)。これも狸の所為とされていて、大阪市中で有名な「水道(スイド)の狸」の伝承形態の一つである。水際は、近世都市にあって人知の及ばない野生の潜在空間との境界域なのである。いっぽうで狐は近郊の村里に出没して人を誑かすものと見聞されている。テキスト「医生野狐を呵る」において医師宅の柴の戸を叩いた狐が出没したのは「曾根崎村」であった(注19)。今でこそ曾根崎は繁華な街であるが、往時は町家周辺のムラであった。テキスト「狐和歌を感す」で撃退される狐が出没したのは、「大坂に近き同国平野の郷」であった(注20)。これらの狐狸に関する伝聞は、野生と人家の境界域において、そこに出没する動物に男女の姿を幻視したものである。これら狐狸の類は、井上円了のいう「外界に現ずるもの」(注21)のうちでも他愛ないもので、農村的性格を残す妖怪であって、柳田國男『妖怪談義』(注22)にでも出る妖怪である。

真実、恐ろしいと感じられたのは、人間の崇りの方である。テキスト「遊魂怨を報ふ」は、淀屋の逼塞の真因を丁稚を無碍に殺めたこととして取り上げ、幽魂が仇を報い豪商を滅ぼしたとの語り伝えを記している(注23)。その他、「浪華奇談」の怪異伝聞の中でも「大塚氏神罰を請くる」(注24)では、旗本が元和の戦いの時、戦死した大将の塚に放尿して翌朝死んでいる。怨念を怪異の真因とみなしているのである。これらの伝聞は、小松和彦のいう「自然起源の妖怪と人間起源の妖怪たちがその存亡をかけて勢力を競いあっていた時代」にあって(注25)、妖怪史上では近世都市における妖怪譚として位置づけられる見聞である。

3 むすび

浪華奇談の興味深い点は、単に怪異の見聞を記すだけでなく、随所にその正体

を暴こうとしている点にある。テキスト「怪談槩論」における結論は、「理を究めば時に臨んで惑ず、怖れずよつて奇怪の談を記憶するも実は心得とも成べき事どもなり。是予が一家の怪談の総論なり」である(注26)。この「総論」からは近世都市人における怪異現象への解釈の一端を読みとることができる。もともと、このような解釈に基づく対処法は近世都市人の思考の枠組みにとらわれたものであることはいうまでもない(注27)。浪華奇談の世界においては、いくら真相を究明しようとしてもその時代社会に共通する幻視・幻聴にとらわれていて、その正体を見抜くまでには至っていない。それを説明するには、怪異伝聞を解釈する小倉敬典における一連のパラダイムシフトを批判的に検証しなければならない。彼による怪異伝聞の解釈には、近世社会に支配的であった「神儒仏三道」といった伝統的思想が影響していることをも理解しなければならぬ(注28)。

江戸における怪異伝承に関しては、宮田登が夙に取り上げている(注29)。しかし、近世都市大阪についてのそのような実証的研究は寡聞にして知らない(注30)。今回、『浪華奇談』の全部を翻刻し、本稿には怪異之部のみ載せた。解題のために付表(浪華奇談怪異之部目録)を作成する作業の中で、近世都市大阪における怪異伝聞を解明する資料がふんだんにあることを知った。近世都市における怪異伝承研究の分野を沃野とするためには、浪華奇談が有効な資料を提供する文献であることをむすびとして確認しておきたい。

本稿を成すにあたって、八冊本については、大阪市立中央図書館図書館所蔵の貴重本を閲覧した他、大阪市立図書館イメージ情報データベース「浪華奇談」1〜8(注31)を参考にした。また、一連の作業にあたっては、図書館関係者の方々からご協力をいただいた。とりわけ大阪府立中之島図書館の司書でいらっしゃった平野翠さんからは原稿のチェックをしていただき誤りを正していただいたことを謝しておきます。

解説注

(注1)『国書人名辞典』第一巻 岩波書店 一九九三年 三九一頁

(注2)『浪速奇談』一の二ウ

(注3)中野操監修 一九八五年『大坂医師番付集成』(思文閣出版)の文化年間以降の医師番付に「小倉敬典」の名前はみえない。「嶋町式丁目一瀬席(一)庵は流行人にて」(注4)第一冊「星田数右衛門 吉田勝右エ門殿也」の二七ウにある「一瀬席庵」は、文政五年午年改刻「浪花御医師見立力合」等に西前頭三に「上町

一之瀬序庵」と載っている。

(注4)(注2)六の41ウ。九紋龍については、『撰陽年鑑』(船越政一郎編纂校訂 一九二八年『浪速叢書』第五巻 二頁)「寛政元年」の項に「七月 九紋龍始テ登ル」に難波新地での大相撲に登場してきた記事がある。

(注5)(注2)七の36ウ〜42ウ

(注6)『浪華奇談』(二冊本)第二冊の「奇夢」26ウ

(注7)塩村耕 一九九九年『古版大阪案内記集成影印篇』500頁 和泉書院

(注8)(注6)第二冊の「天狗清兵衛」21才〜22才

(注9)(注6)第二冊の「釈蓮諦」27ウ〜28才。「蓮諦比丘」については、一九九三年『国書人名辞典』第一巻(岩波書店)一八 六頁の「惟宝」の項目に「名号」「蓮体」があり、「著作」に「礦石集」「続礦石集」があり、テキストの「釈蓮諦」であろう。しかし、「享保十一年(一七二六)六月二十七日没」としており、テキストにある母の生まれた「延享二丑年(一七四五)五月六日夕暮」には既に鬼籍に入っている。この点についての記述には誤りがある。なお「覚彦比丘」については、一九九五年『国書人名辞典』第二巻(岩波書店)五一六頁の「浄嚴」の項目に「名号」に「覚彦」があり、「経歴」に「河内錦郡鬼住村の人」とある。

(注10)(注2)八の「見聞実記」25才〜25ウ

(注11)(注6)第二冊の「釈蓮諦」27ウ〜28才

(注12)船越政一郎編纂校訂 一九三〇年『浪速叢書』鶏肋所載「神社仏閣願懸重宝記」

(注13)(注6)第二冊の「小坊主」16才

(注14)(注6)第一冊の「松の名木」6才

(注15)(注6)第二冊の「天狗清兵衛」22才

(注16)宮田登 一九八五年『妖怪の民俗学』岩波書店 一一二頁

(注17)(注2)八の「河童」23ウ

(注18)(注6)第二冊の「縮地の術」29才

(注19)(注6)第二冊の「医生野狐を呵る」15才〜15ウ

(注20)(注6)第二冊の「狐和歌を感ず」17ウ〜18才

(注21)井上円了 初版一八八七年『井上円了 妖怪学全集』第1巻(柏書房 一九九九年)八〇〜八一頁

(注22)例えば、「妖怪談義」『柳田國男全集』六(筑摩文庫 一九八九年)二〇三頁には、「シロボウズ」の項に、泉州では夜分路の上での怪異をあげて、狐は藍縷の

着物を着て出ると記している。

(注23)(注6)第二冊の「遊魂怨を報ふ」30才〜33才

(注24)(注2)八の「大塚氏神罰を請くる」13才〜15才

(注25)小松和彦 二〇〇〇年『妖怪学新考』小学館 一三三頁

(注26)(注6)第二冊の「怪談槩論」15才

(注27)例えば、(注25)の箇所直前には龍巻に遭遇して「龍の人に迫る時は頭髮をたきて去らしめ」とある。これなんぞ今日、誰が信じるものか。

(注28)(注6)第二冊の「釈蓮諦」28才〜28才に「和漢ともに儒を学ぶ人は仏法を(以下28才)仇敵のごとく見るといへども、今五人十人仏道を誹謗すとも仏法あに滅亡にいたらんや。入らざる圭怒に精力を費す事君子の所為にあらず、仏道も勸善懲悪の教導なり。世教に益あり」とある。小倉敬典の母からの見聞を交えて記す「奇夢」(同書26才〜27才)などからして、真言密教体験をしている彼には、呪物信仰による世界観の上に、「神儒仏」といった伝統的思想による解釈がなされていると考える。

(注29)(注16)に挙げた宮田登『妖怪の民俗学』

(注30)管見によれば、郷土誌『上方』第三三三号(一九三三年)には、妖怪・怪異・お化けを特集している。

(注31)大阪市立図書館イメージ情報データベース「浪速奇談」1〜8 [http://www.oml.city.osaka.jp/cgi-bin/img_src/ancient_list.cgi]

「編者注」

田野 登氏のプロフィール

1950年大阪市生まれ。現在大阪府立かわち野高校教諭。

博士(文学)。日本民俗学会会員。都市民俗学専攻。

大阪市立大学文学部卒業。

浪華奇談怪異之部目録

凡例

八冊本[天狗山伏:⑥(18-193)]:⑥は6冊目、18は18巻、193は193話。

二冊本(計17話)	四冊本(計34話)	八冊本(計77話)
	竹屋の天怪:②(5-52) 鬼女をみる話:②(5-53) 白昼の化物:②(5-54) 鼠恩を報す:②(5-55) 天満橋の怪:②(5-56) 芋畑:②(5-57)	竹屋の天怪:②(5-52) 鬼女出現:②(5-53) 白昼の化物附狐火:②(5-54) 鼠恩を報ゆ:②(5-55) 天満橋乃怪:②(5-56) 芋畑:②(5-57)
	伊勢太神宮御霊験:②(6-58) 文政御影まいり:②(6-59) 幽霊四国をめぐる②:(6-60) 神口の瑞相:②(6-61) 蘇生の不思議:②(6-62) 男女の形を兼ス:②(6-63) 大火の凶兆:②(6-64) 火災を遁るゝ家:②(6-65) 狸の腹鼓:②(6-66) 大井川坊主:②(6-67) 天狗人命を救:②(6-68)	伊勢太神宮御霊験:②(6-58) 文政御影参り:②(6-59) 幽霊四国をめぐる:②(6-60) 神矢の瑞相:②(6-61) 蘇生のふしき:②(6-62) 男女の形を兼備す:②(6-63) 大火の凶兆:②(6-64) 火災をのかるゝ家:②(6-65) 狸のはら鼓:②(6-66) 大井川の坊主:②(6-67) 天狗人命をすくふ:②(6-68)
怪談樂論:②(5-57) 医生野狐を呵る:②(5-58) 膝行忝の狸:②(5-59) 龍巻:②(5-60)	怪談樂論:④(11-120) 医生野狐を呵る:④(11-121) 膝行松の狸:④(11-122) 龍巻:④(11-123)	怪談樂論:④(11-120) 医生野狐を呵る:④(11-121) 膝行忝の狸:④(11-122) 龍巻:④(11-123)

蝦蟇の妙術:②(5-61) 狐和歌を感す:②(5-62) 唐橋屋九郎兵衛:②(5-63) 天狗清兵衛:②(5-64) 瑞夢:②(5-65)	蝦蟇:④(11-124) 狐和歌を感す:④(11-125) 唐橋屋九郎兵衛:④(11-126) 天狗清兵衛:④(11-127) 瑞夢:④(11-128)	蝦蟇の妙術:④(11-124) 狐和歌を感す:④(11-125) 唐橋屋九郎兵衛:④(11-126) 天狗清兵衛:④(11-127) 瑞夢:④(11-128)
石仏言を發す:②(6-66) 猫のあやしみ:②(6-67) 奇夢:②(6-68) 釋蓮諦:②(6-69) 縮地の術:②(6-70) 遊魂怨を報ふ:②(6-71) 小兒水に化す:②(6-72) 鬼僧:②(6-73)	石仏言を發す:④(12-129) 猫の怪:④(12-130) 奇夢:④(12-131) 釋蓮諦:④(12-132) 縮地の術:④(12-133) 遊魂怨を報:④(12-134) 小兒水に化す:④(12-135) 鬼僧:④(12-136)	石仏言を發す:④(12-129) 猫の怪:④(12-130) 奇夢:④(12-131) 釋蓮諦:④(12-132) 縮地之術:④(12-133) 遊魂怨を報ふ:④(12-134) 小兒水に化す:④(12-135) 鬼僧:④(12-136)
		蟒蛇骨:⑥(17-183) 再溢のにぎハヒ:⑥(17-184) 咒詛の妙:⑥(17-185) 新見秘咒:⑥(17-186) 夜中の社地:⑥(17-187) 疫神:⑥(17-188) 迷し神:⑥(17-189) 猫を退くる鼠:⑥(17-190)
		乞食豆蔵:⑥(18-191) 天狗山伏:⑥(18-192) 仏照寺弥陀尊:⑥(18-193) 土中の奇物:⑥(18-194) 乞食の詩歌:⑥(18-195) 未来記:⑥(18-196) 油をぬく妙術:⑥(18-197)

		勢州村政刀:⑥(18-198) ばけ物やしき:⑥(18-199) 子平大金:⑥(18-200) 諸事前表あり:⑥(18-201) 野狐の先見:⑥(18-202)
		伊勢参宮吉凶:⑧(23-239) 人の夢魂鬼を座す:⑧(23-240) 蟒蛇の毒:⑧(23-241) 観世音の浄土:⑧(23-242) 秋葉山の神札:⑧(23-243) 猫の肉散失す:⑧(23-244) 蚰蜒の所為:⑧(23-245) 大塚氏神罰を請くる:⑧(23-246) 蛇に命を奪はる:⑧(23-247) 雁厂文七の人袖:⑧(23-248) 女扮を好む男子:⑧(23-249) 西国弥惣治:⑧(23-250)
		天無口教人言:⑧(24-251) 河童:⑧(24-252) 小虫大智有:⑧(24-253) 見聞実記:⑧(24-254) 狐財得るを難む:⑧(24-255) 蝦蟇に妙術⑧(24-256) 虎屋饅頭:⑧(24-257) 大火ハ天の命:⑧(24-258) 嘴太鴉大に燕を怖る:⑧(24-259) 反魂丹:⑧(24-260) 災ひを未形に知る:⑧(24-261)

編集後記

「大阪府立図書館紀要」の再刊第2号を発行することができた。「大阪府立図書館紀要」は1964(昭和39)年12月に創刊され、1998(平成10)年の34号発行の後しばらく休刊していたが、昨年3月に8年ぶりに再刊にこぎつけ、今号が再刊第2号である。府立図書館の職員の日頃の研究成果や府立図書館の所蔵資料に関する研究を広く公開し、さらなる研究の進展を図ろうとするものである。

今回もこの「大阪府立図書館紀要」を大阪府立図書館のホームページ上で公開することとし、広くこの紀要を活用していただけるようにした。今後とも継続発行できるよう努力していきたい。

なお、当紀要に掲載された著作物の著作権は執筆者に属し、その著作の使用に関しては大阪府立図書館が著作権者の了解を得ている。

編集委員 (◎は編集長)

中之島図書館 ◎鹿野一美 前田章夫 仙田英一郎 前田香代子 森田俊雄 中島和子
中央図書館 田中秀一 三谷久子 佐藤敏江 藤田章子

大阪府立図書館紀要 第36号

2007年3月31日

編集・発行

大阪府立中之島図書館

〒530-0005 大阪市北区中之島1-2-10

大阪府立中央図書館

〒577-0011 東大阪市荒本5-7-3

<http://www.library.pref.osaka.jp/>

<無断転載を禁ずる>